仙台市文化財調査報告書第128集

富沢・泉崎浦・山口遺跡

――富沢遺跡第36～48次・泉崎浦遺跡第４次・
山口遺跡第５～８次発掘調査報告書――

１９８９年３月

仙台市教育委員会

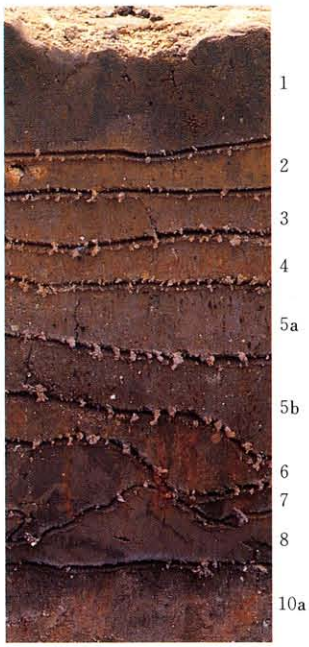
仙台市文化財調査報告書第128集

富沢・泉崎浦・山口遺跡

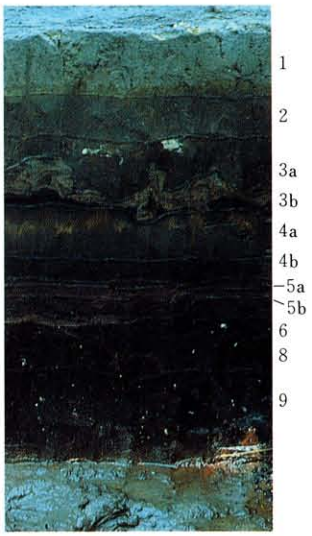
――富沢遺跡第36～48次・泉崎浦遺跡第４次・
山口遺跡第５～８次発掘調査報告書――

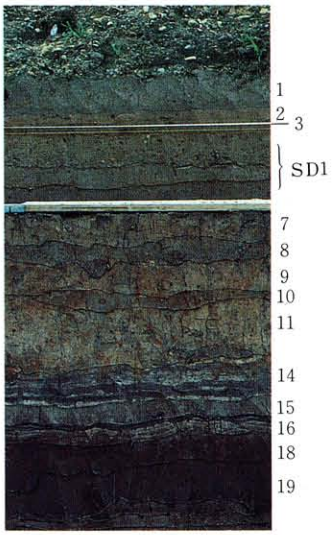
１９８９年３月

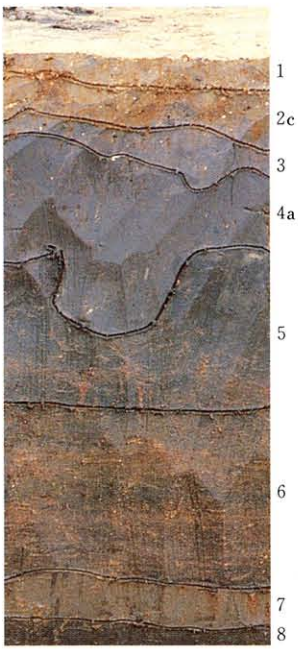
仙台市教育委員会



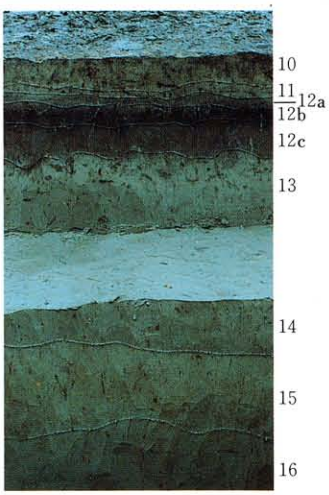
富沢遺跡第36次調査



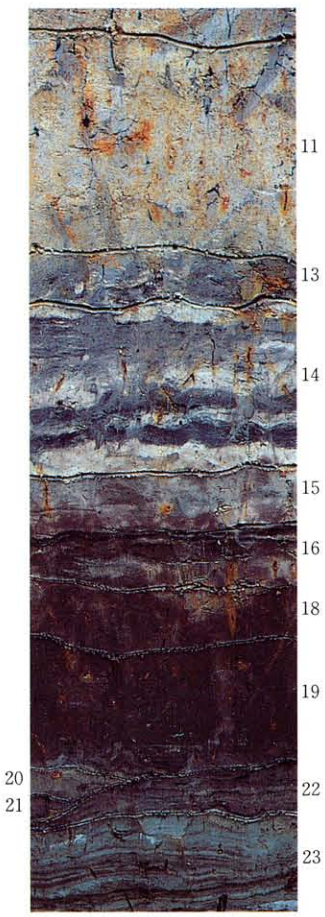




富沢遺跡第37次調査

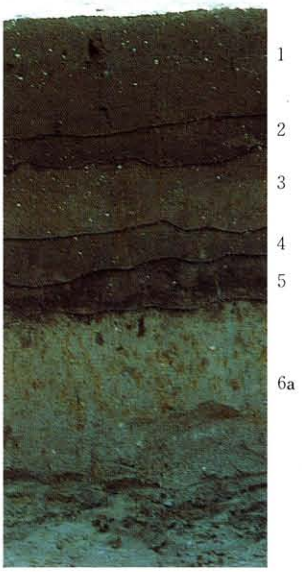


富沢遺跡第39次調査



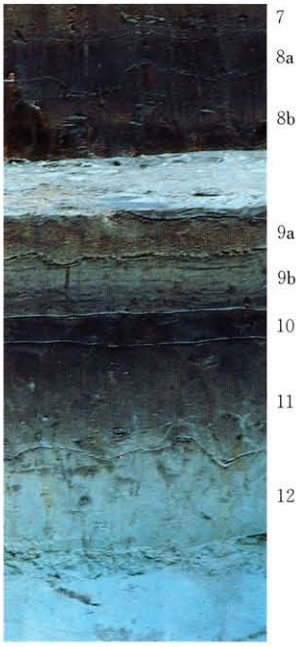
富沢遺跡第40次調査

富沢遺跡第41次調査



富沢遺跡第44次調査

富沢遺跡第43次調査



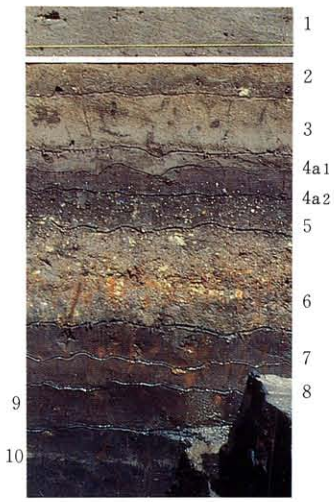
富沢遺跡第42次調査

富沢遺跡第47次調査

富沢遺跡第46次調査

富沢遺跡第48次調査

山口遺跡第 6 次調査



山口遺跡第 5 次調査

山口遺跡第 8 次調査

序　　文

1989年度は、仙台市にとって新しい年となります。旧宮城町、旧泉市、旧秋保町と一体となり、政令指定都市としての歩みが始まります。

この仙台に人間が住みついて数万年を経過していることが、私共の埋蔵文化財の発掘で確認されています。その中でも、特に注目される富沢遺跡30次発掘調査では、23,000年前の最終氷河期の人間の生活の様子や自然環境そのものが生々しい状態で発見されています。富沢地区は昭和50年代の区画整理事業を契機として年毎に開発が進み、とりわけ昭和63年の地下鉄の開業により、一層都市化が進展している所です。

このようなもとで、1988年度（昭和63年度）に、富沢地区に所在します富沢遺跡、泉崎浦遺跡、山口遺跡におきまして、21ヶ所で発掘調査を実施し、その中の18ヶ所について、今回まとめて発表します。この富沢遺跡は、後述のとおり、昭和57年の仙台市体育館および地下鉄南北線の発掘調査により、貴重な成果を得ております。弥生時代から近世までの水田跡が多数検出され、当時の人々の生活様式もしのばれます。

かような貴重な遺跡の保存、活用というのは、市民の皆様の大きな協力がなければ、とても成し得ません。教育委員会としても、文化財の保護につきましては、今後とも、市民の皆様と共に、手をたずさえ、先人の残してくれました遺産を守り育てていきたいと考えておりますので、ご協力の程、お願い申し上げます。

最後になりましたが、調査と整理に参加された皆様と、本書の作成にあたりご助言、ご協力くださいました皆様に心から感謝申し上げます。

平成元年３月

仙台市教育委員会　　教育長 藤井　　黎

例　　言

1．本書は、富沢地区受託事業に係わる富沢遺跡・泉崎浦遺跡・山口遺跡発掘調査報告書であり、すでに公表された広報紙等に優先するものである。

2．報告書刊行のための遺物整理は、文化財課調査係　平間亮輔・中富　洋・太田昭夫・佐藤甲二が担当し、陶器・磁器の鑑定は佐藤洋が行った。

3．本書の編集は平間亮輔が行った。

4．関連科学については、花粉分析を守田益宗氏（東北大学）、樹種の同定を鈴木三男氏（金沢大学）・能城修一氏（大阪市立大学）、プラント・オパール分析を杉山真二氏（古環境研究所）、放射性炭素年代測定を日本大学文理学部地理学教室・年代測定室に依頼した。

5．本文の執筆分担は下記のとおりである。

平間亮輔：第2章第5・9・16節、第4章

中富　洋：第2章第2・4・7・10・12節

佐藤甲二：第1章、第2章第1・3・6・11・14・15・17・18節

太田昭夫：第2章第8節1～4・13節

守田益宗：第2章第8節5（1）

鈴木三男・能城修一：第2章第8節5（2）

杉山真二：第3章

6．石器の材質の鑑定は、仙台市科学館　佐々木隆氏にお願いした。

凡　　例

1．本報告書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。

2．本書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。

3．本文中使用の「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）の降下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている（白鳥：1980）。

4．図中、本文中使用の方位の北（N）は、全て真北である。

5．遺構名の略語として、ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土坑を使用した。

6．土器で中心線が1点鎖線のものは、図上復元実測図である。

7．挿図中の基本層序は、調査区設定図中のＡ地点を基準として、合成したものである。

目　　次

第１章　富沢・泉崎浦・山口遺跡のあらまし……1
第２章　調査結果……9
　第１節　富沢遺跡第36次調査……9
　　１．調査方法　２．基本層序　３．検出遺構と出土遺物
　　４．遺構の所属年代とまとめ
　第２節　富沢遺跡第37次調査……12
　　１．調査方法　２．基本層序　３．検出遺構と出土遺物
　　４．遺構の所属年代とまとめ
　第３節　富沢遺跡第38次調査……20
　　１．調査方法　２．基本層序　３．検出遺構と出土遺物
　　４．遺構の所属年代とまとめ
　第４節　富沢遺跡第39次調査……28
　　１．調査方法　２．基本層序　３．検出遺構と出土遺物
　　４．遺構の所属年代とまとめ
　第５節　富沢遺跡第40次調査……38
　　１．調査方法　２．基本層序　３．検出遺構と出土遺物
　　４．遺構の所属年代とまとめ
　第６節　富沢遺跡第41次調査……50
　　１．調査方法　２．基本層序　３．検出遺構と出土遺物　４．まとめ
　第７節　富沢遺跡第42次調査……54
　　１．調査方法　２．基本層序　３．検出遺構と出土遺物
　　４．遺構の所属年代とまとめ
　第８節　富沢遺跡第43次調査……60
　　１．調査方法　２．基本層序　３．出土遺物　４．まとめ　５．分析・同定
　第９節　富沢遺跡第44次調査……66
　　１．調査方法　２．基本層序　３．検出遺構と出土遺物
　　４．遺構の所属年代とまとめ
　第10節　富沢遺跡第45次調査……69
　　１．調査方法　２．基本層序　３．検出遺構と出土遺物　４．まとめ

第11節　富沢遺跡第46次調査……71
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第12節　富沢遺跡第47次調査……83
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第13節　富沢遺跡第48次調査……90
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第14節　泉崎浦遺跡第4次調査……97
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第15節　山口遺跡第5次調査……102
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物　4．まとめ
第16節　山口遺跡第6次調査……106
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第17節　山口遺跡第7次調査……109
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物　4．まとめ
第18節　山口遺跡第8次調査……112
1．調査方法　2．基本層序　3．検出遺構と出土遺物
4．遺構の所属年代とまとめ
第3章　プラント・オパール分析……117
第4章　まとめ……123

挿図目次

第1図　周辺の遺跡……3・4
第2図　富沢遺跡全体図……5・6
（富沢遺跡第36次調査）
第3図　調査区位置図・設定図……9
第4図　基本層序……10
第5図　7層水田跡平面図……11
第6図　出土遺物……11
（富沢遺跡第37次調査）

第７図　調査区位置図・設定図……12
第８図　基本層序……13
第９図　4a 層水田跡平面図 ……15
第10図　4a 層畦畔断面図 ……16
第11図　畦畔3・SD1 平面・断面図 ……16
第12図　出土遺物（１）……17
第13図　出土遺物（２）……18

（富沢遺跡第38次調査）
第14図　調査区位置図・設定図……20
第15図　基本層序……21
第16図　SD １・２平面・断面図 ……23
第17図　出土遺物（１）……23
第18図　10d 層畦畔断面図……24
第19図　10d 層水田跡平面図……25
第20図　出土遺物（２）……26

（富沢遺跡第39次調査）
第21図　調査区位置図・設定図……28
第22図　基本層序……29
第23図　３層水田跡平面図……30
第24図　３層畦畔・溝・杭断面図……31
第25図　出土遺物（１）……32
第26図　4a 層水田跡平面・断面図……34
第27図　出土遺物（２）……35
第28図　出土遺物（３）……37

（富沢遺跡第40次調査）
第29図　調査区位置図・設定図……38
第30図　基本層序……39
第31図　SD １・２平面、断面図 ……40
第32図　SD ３～５平面、断面図 ……41
第33図　SD ６～９平面、断面図 ……42
第34図　21層水田跡平面・断面図……43
第35図　出土遺物（１）……44
第36図　出土遺物（２）……45
第37図　40次４層、15次3a 層平面図 ……47
第38図　40次５層、15次3b 層平面図 ……48
第39図　40次６層、15次3b 層平面図 ……48
第40図　40次21層、15次13b 層平面図……49

（富沢遺跡第41次調査）
第41図　調査区位置図・設定図……50
第42図　基本層序……50
第43図　出土遺物……52
第44図　杭（３層）平面・SD1　４層平面・断面図…53

（富沢遺跡第42次調査）
第45図　調査区位置図・設定図……54
第46図　基本層序……55
第47図　４層水田跡平面・断面図……56
第48図　SD １・SK １～７平面・断面図 ……57
第49図　SD ２平面・断面図 ……58
第50図　出土遺物……59

（富沢遺跡第43次調査）
第51図　調査区位置図・設定図……60
第52図　基本層序……61
第53図　22層上面樹木出土状況……62

（富沢遺跡第44次調査）
第54図　調査区位置図・設定図……66
第55図　基本層序……67
第56図　SK １平面・断面図 ……68

（富沢遺跡第45次調査）
第57図　調査区位置図・設定図……69
第58図　基本層序……70

（富沢遺跡第46次調査）
第59図　調査区位置図・設定図……71
第60図　基本層序……72
第61図　9a 層水田跡平面・断面図 ……74
第62図　出土遺物（１）……74

第63図　10d 層水田跡平面・断面図……75・76
第64図　11a 層水田跡平面・断面図……79
第65図　出土遺物（２）……80
第66図　出土遺物（３）……81

（富沢遺跡第47次調査）
第67図　調査区位置図・設定図……83
第68図　基本層序……84
第69図　４層水田跡平面・断面図……85
第70図　出土遺物（１）……86
第71図　SD １平面・断面図……87
第72図　出土遺物（２）……88
第73図　47次４層・34次４層平面図……89

（富沢遺跡第48次調査）
第74図　調査区位置図・設定図……90
第75図　基本層序……91
第76図　8a 層・11層水田跡平面図……92
第77図　出土遺物（１）……93
第78図　出土遺物（２）……93
第79図　出土遺物（３）……94
第80図　出土遺物（４）……95

（泉崎浦遺跡第４次調査）
第81図　調査区位置図・設定図……97
第82図　基本層序……98
第83図　ＳＤ２平面図……99
第84図　SD １・２・断面図……100
第85図　SD ３平面図……100
第86図　出土遺物……101

（山口遺跡第５次調査）
第87図　調査区位置図・設定図……102
第88図　基本層序……103
第89図　SD １平面図……104
第90図　4a 層水田跡平面・断面図……104
第91図　５層上面平面図……105
第92図　出土遺物……105

（山口遺跡第６次調査）
第93図　調査区位置図・設定図……106
第94図　基本層序……107
第95図　６層水田跡平面図……108
第96図　出土遺物……108

（山口遺跡第７次調査）
第97図　調査区位置図・設定図……109
第98図　基本層序……109
第99図　4a 層水田跡平面・SD １断面図……110
第100図　出土遺物……111
第101図　山口遺跡５・７次４層水田跡平面図……111

（山口遺跡第８次調査）
第102図　調査区位置図・設定図……112
第103図　基本層序……113
第104図　４層水田跡平面・断面図……114
第105図　出土遺物……115
第106図　５層水田跡平面・断面図……116
第107図　イネのプラント・オパールの
　検出状況（１）……121
第108図　イネのプラント・オパールの
　検出状況（２）……122
第109図　富沢遺跡第28・29・38・46次
　調査区11a 層水田跡……124
第110図　富沢遺跡第28・29・38・46次
　調査区10d 層水田跡……125

表　目　次

第１表　遺跡地名表……2
第２表　泉崎浦・山口遺跡調査次数表……7・8
第３表　昭和63年度富沢・泉崎浦・山口遺跡調査要項……7・8
第４表　富沢・山口・泉崎浦遺跡の各層位における稲作の可能性 ……119
第５表　稲作の可能性が認められた各層における稲籾生産総量および
稲作期間の推定値 ……120
第６表　富沢遺跡第36～38次調査出土遺物集計表 ……127
第７表　富沢遺跡第39～42次調査出土遺物集計表 ……128
第８表　富沢遺跡第43～47次調査出土遺物集計表 ……129
第９表　富沢遺跡第48次・泉崎浦遺跡第５次・山口遺跡第５～７次調査
出土遺物集計表 ……130
第10表　山口遺跡第８次調査出土遺物集計表 ……131

写真図版目次

遺　　構
（富沢遺跡第36次調査）
写真１　７層水田跡 ……134
写真２　７層水田跡畦畔断面（東壁）……134

（富沢遺跡第37次調査）
写真３　4a層水田跡（畦畔１・２）……134
写真４　4a層水田跡（畦畔３・SD1）……135
写真５　4a層水田跡（畦畔４）……135

（富沢遺跡第38次調査）
写真６　10d層水田跡 ……135
写真７　大畦畔中の木片出土状況 ……136
写真８　10d層水田跡大畦畔断面（南壁）……136
写真９　19c層土器出土状況 ……136

（富沢遺跡第39次調査）
写真10　3a層水田跡 ……137
写真11　3a層出土杭（No. 20）……137
写真12　3a層出土杭（No. 13～15）……137
写真13　4a層水田跡 ……138
写真14　4a層水田跡石器出土状況 ……138

（富沢遺跡第40次調査）
写真15　４層上面遺構（SD1. 2）……138
写真16　５層上面遺構（SD3～5）……139
写真17　６層上面遺構（SD6～9）……139

（富沢遺跡第41次調査）
写真18　４層上面遺構（SD1）……139

（富沢遺跡第42次調査）
写真19　４層水田跡 ……140
写真20　6a層上面遺構（SD1. SK1～7）……140
写真21　11層上面石製品出土状況 ……140
写真22　12層上面遺構（SD3）……141

（富沢遺跡第43次調査）
写真23　19～22層断面 ……141
写真24　22層上面樹木出土状況（１） ……141
写真25　22層上面樹木出土状況（２） ……142

（富沢遺跡第44次調査）
写真26　６層上面遺構（SK1） ……142

（富沢遺跡第46次調査）
写真27　10d 層水田跡（１） ……142
写真28　10d 層水田跡（２） ……143
写真29　10d 層水田跡（３） ……143
写真30　10d 層水田跡（４） ……143
写真31　10d 層水田跡大畦畔断面（北壁） ……144
写真32　10d 層水田跡大畦畔断面（西壁） ……144
写真33　10d 層水田跡畦畔断面（西壁） ……144
写真34　11a 層水田跡 ……145
写真35　11a 層水田跡石器出土状況 ……145

（富沢遺跡第47次調査）
写真36　４層水田跡 ……145
写真37　４層水田跡大畦畔上の
灰白色火山灰検出状況 ……146
写真38　４層水田跡土器出土状況 ……146
写真39　８層上面遺構（SD1） ……146
写真40　８層石器出土状況 ……147

（富沢遺跡第48次調査）
写真41　8a 層水田跡擬似畦畔確認状況 ……147
写真42　11層石器出土状況 ……147
写真43　調査区全景 ……148

（泉崎浦遺跡第４次調査）
写真44　10層上面遺構（SD3） ……148
写真45　SD1・2 断面（東壁） ……148

（山口遺跡第５次調査）
写真46　4a 層水田跡・畦畔・SD2 確認状況 ……149
写真47　4a 層水田跡・畦畔・SD2 検出状況 ……149

（山口遺跡第６次調査）
写真48　６層水田跡 ……149

（山口遺跡第７次調査）
写真49　SD2 断面（東壁） ……150

（山口遺跡第８次調査）
写真50　４層水田跡 ……150
写真51　５層水田跡擬似畦畔確認状況 ……150

遺　物
写真52　富沢遺跡第36次調査出土遺物 ……151
写真53　富沢遺跡第37次調査出土遺物 ……151
写真54　富沢遺跡第38次調査出土遺物 ……152
写真55　富沢遺跡第39次調査出土遺物（１） ……152
写真56　富沢遺跡第39次調査出土遺物（２） ……153
写真57　富沢遺跡第40次調査出土遺物 ……154
写真58　富沢遺跡第41次調査出土遺物 ……155
写真59　富沢遺跡第42次調査出土遺物 ……155
写真60　富沢遺跡第46次調査出土遺物 ……156
写真61　富沢遺跡第47次調査出土遺物 ……157
写真62　富沢遺跡第48次調査出土遺物（１） ……158
写真63　富沢遺跡第48次調査出土遺物（２） ……159
写真64　泉崎浦遺跡第４次調査出土遺物 ……160
写真65　山口遺跡第５次調査出土遺物 ……160
写真66　山口遺跡第６次調査出土遺物 ……160
写真67　山口遺跡第７次調査出土遺物 ……160
写真68　山口遺跡第８次調査出土遺物 ……160
写真69　富沢遺跡第43次調査出土樹木
顕微鏡写真 ……161

第１章　富沢・泉崎浦・山口遺跡のあらまし

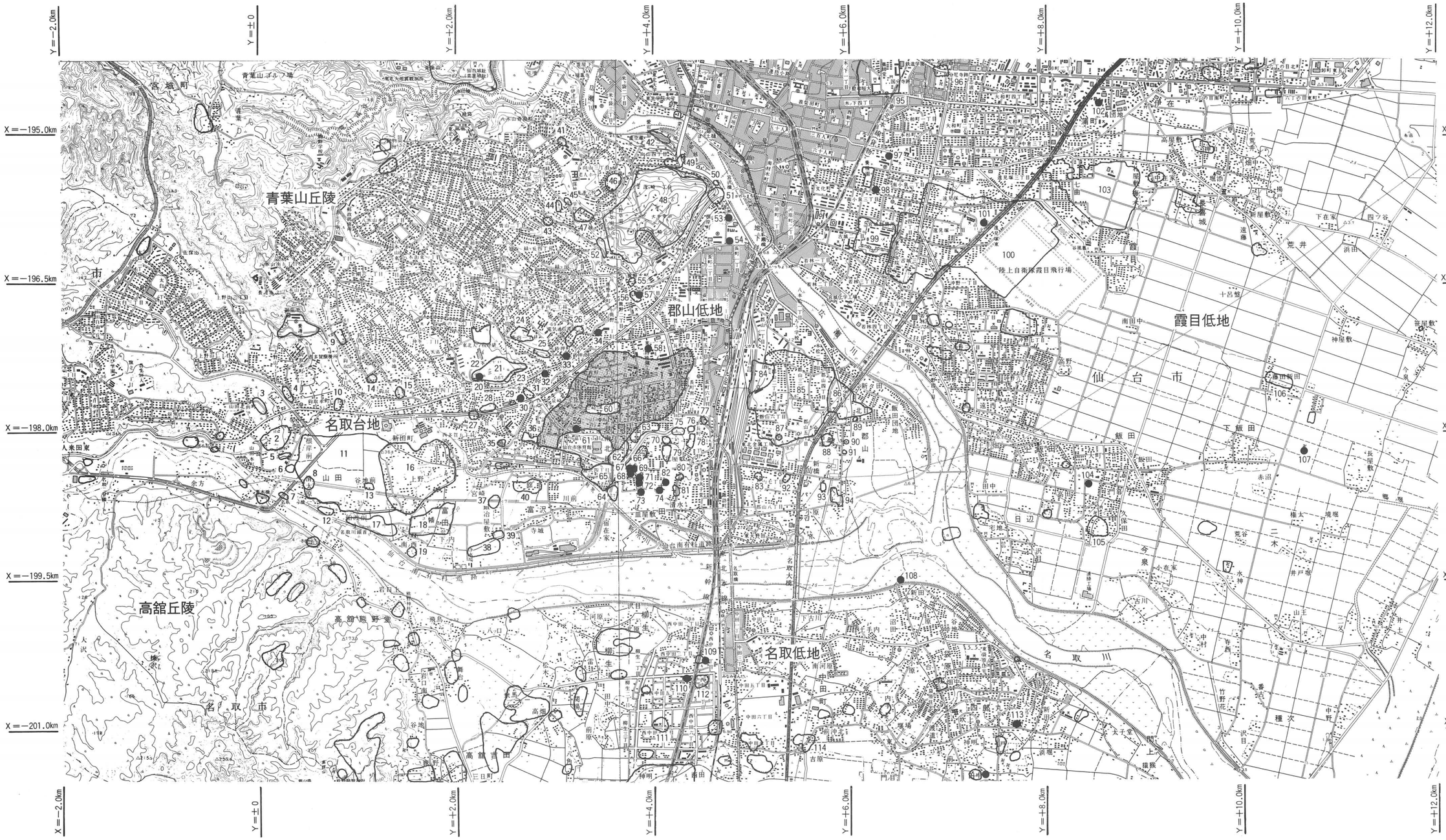
富沢遺跡は仙台市南西部の富沢・泉崎・袋東・長町南等に広がる、総面積約82haに及ぶ水田跡を中心とする遺跡である。この遺跡は、名取川と広瀬川に挟まれた沖積平野―郡山低地（経済企画庁：1967）―の後背湿地を中心としている。昭和57年、仙台市では富沢遺跡の南に隣接する山口遺跡で、初めて水田跡（平安時代）が検出された（田中：1984）。また、同年より開始された、富沢地区の高速鉄道の試掘調査結果においても当地域に広大な水田跡の存在が予測された。昭和58年、仙台市は、これら調査成果に地形的配慮を加え、新たに「富沢水田遺跡」を登録した（昭和62年「富沢遺跡」に改称）。富沢遺跡は昨年度まで、34次に渡る調査が実施されている。その結果、奈良時代を除く弥生時代から近世までの水田跡が重層的に検出されている。この内、弥生時代の水田跡の検出は、東北地方中部における稲作農耕の起源を解明する上での、貴重な資料となった。弥生時代の水田跡のさらに数２～３ｍ下層では、後期旧石器時代（第30次）、縄文時代早・前期（第15・28・30次）の遺物も確認されている。

泉崎浦遺跡は、富沢遺跡内のほぼ中央部の微高地部分を中心とする遺跡である。東西に細長く、遺跡面積は約５ha程である。山口遺跡は、富沢遺跡の南に隣接し、名取川支流、旧笊川の北岸の自然堤防上に位置する。遺跡面積は約15haである。遺跡範囲の北側では、富沢遺跡から続く後背湿地部分をも含む。両遺跡とも集落跡として登録されている遺跡であるが、水田跡も検出されている。ともに最近調査件数が多くなってきたため、今後の調査地点を明確にするために、富沢遺跡同様、調査地区ごとに次数を設けることとした。泉崎浦遺跡は昭和55年の調査区を第１次、山口遺跡は昭和53・54年の富沢土地区画整理に伴う調査区を第１次とした。従って、昨年度までに、泉崎浦遺跡は３次、山口遺跡は４次の調査次数を数える。これらの位置及び調査成果は第１図、第１表に掲載した。

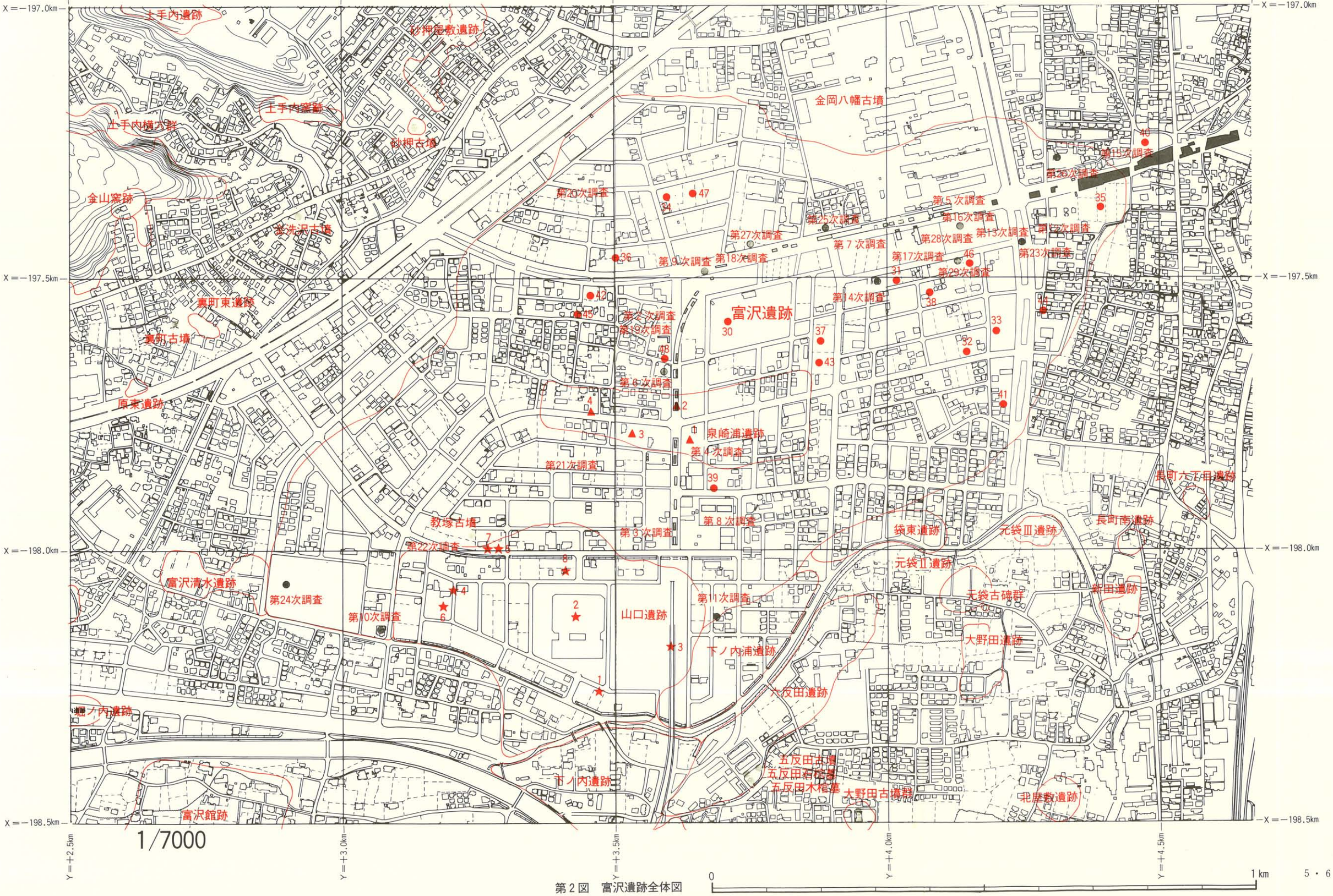
尚、富沢遺跡・泉崎浦遺跡・山口遺跡の歴史的環境及び地形と地質に関しては、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野：1987）・（豊島：1987）・山口遺跡第２次調査報告書（田中：1984）に詳しい記載があるので、これを参照されたい。

第1表　遺跡地名表

No	遺跡名	立地	年代	No	遺跡名	立地	年代
1	富沢遺跡	後背湿地	縄文～近世	58	金岡八幡古墳	後背湿地	古墳
2	山田上ノ台遺跡	段丘	旧石器(前・後)縄文(早・中・後)平安・近世	59	教塚古墳	後背湿地	古墳
3	北前遺跡	段丘	旧石器(前・後)縄文(早・中)古墳・平安	60	泉崎浦遺跡	自然堤防、後背湿地	縄文・古墳・平安・近世
4	上野山遺跡	段丘	縄文	61	山口遺跡	自然堤防、後背湿地	縄文(早～晩)弥生・古墳・奈良・平安・中世
5	汚田通A遺跡	段丘	縄文・平安	62	下ノ内浦遺跡	自然堤防	奈良・平安
6	汚田通B遺跡	段丘	平安	63	袋東遺跡	自然堤防	古墳・平安
7	清田原西遺跡	段丘	縄文・平安	64	伊古田遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
8	竹の内前遺跡	段丘	奈良・平安	65	下ノ内遺跡	自然堤防	縄文(中・後)弥生・平安
9	紙漉山遺跡	段丘	縄文	66	六反田遺跡	自然堤防	縄文(中・後・晩)弥生・古墳・奈良・平安
10	町遺跡	段丘	縄文・古墳・平安	67	五反田石棺墓	自然堤防	古墳
11	山田条里遺跡	段丘	奈良～平安	68	五反田木棺墓	自然堤防	古墳
12	清田原東遺跡	段丘	縄文・平安	69	五反田古墳	自然堤防	古墳
13	谷地前遺跡	段丘	平安	70	元袋Ⅱ遺跡	自然堤防	奈良・平安
14	後田遺跡	段丘	奈良・平安	71	大野田1号墳	自然堤防	古墳
15	八幡西遺跡	段丘	平安	72	大野田2号墳	自然堤防	古墳
16	上野遺跡	段丘	縄文(中)・奈良・平安	73	春日社古墳	自然堤防	古墳
17	般渡前遺跡	段丘	縄文・弥生・奈良・平安	74	鳥居塚古墳	自然堤防	古墳
18	南ノ東遺跡	自然堤防、後背湿地	弥生・奈良・平安(中期)	75	元袋Ⅲ遺跡	自然堤防	奈良・平安
19	富田南西遺跡	自然堤防	奈良・平安	76	長町南遺跡	自然堤防	奈良・平安
20	富沢窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良・平安	77	長町六丁目遺跡	自然堤防	奈良・平安
21	三神峯遺跡	段丘	縄文(早・前)	78	新田遺跡	自然堤防	奈良・平安
22	三神峯古墳群	段丘	古墳	79	大野田遺跡	自然堤防、後背湿地	縄文(後期)弥生
23	金山窯跡	丘陵斜面	古墳	80	北屋敷遺跡	自然堤防、後背湿地	奈良・平安
24	土手内遺跡	丘陵	縄文・奈良・平安	81	長町清水遺跡	自然堤防	古墳？
25	土手内窯跡	丘陵斜面	古墳末～奈良	82	王の壇古墳	自然堤防	古墳
26	砂押屋敷遺跡	段丘	奈良・平安	83	的場遺跡	自然堤防	奈良・平安
27	西台窯跡	段丘	奈良・平安？	84	西台畑遺跡	自然堤防	弥生・古墳
28	原遺跡	段丘	弥生・古墳・平安	85	郡山遺跡	自然堤防、後背湿地	古墳・奈良
29	原東遺跡	段丘	古墳・奈良・平安	86	北目城跡	自然堤防	室町・江戸
30	裏町古墳	段丘	古墳	87	諏訪社古碑群		鎌倉(後期)
31	裏町東遺跡	段丘	平安	88	矢来遺跡	自然堤防、後背湿地	古墳・奈良・平安
32	金洗沢古墳	段丘	古墳	89	宅地古碑群		鎌倉(後期)
33	砂押古墳	段丘	古墳	90	北目古碑群		鎌倉(後期)
34	二塚古墳	後背湿地	古墳	91	穴田東古碑群		鎌倉(後期)
35	富沢上ノ台遺跡	段丘	縄文・平安	92	籠ノ瀬遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
36	富沢清水遺跡	自然堤防	奈良・平安	93	欠ノ上Ⅰ遺跡	自然堤防、後背湿地	古墳・奈良・平安
37	鍛冶屋敷A遺跡	後背湿地	縄文・奈良・平安	94	欠ノ上Ⅱ遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
38	六本松遺跡	自然堤防、後背湿地	奈良・平安	95	陸奥国分寺跡	自然堤防	奈良
39	鍛冶屋敷B遺跡	自然堤防、後背湿地	縄文・奈良・平安	96	陸奥国分尼寺跡	自然堤防	奈良
40	富沢館跡	自然堤防、後背湿地	室町	97	法領塚古墳	自然堤防	古墳(後期)
41	向山高裏遺跡	丘陵	縄文(中期)	98	猫塚古墳	自然堤防	古墳
42	愛宕山横穴群	丘陵斜面	古墳末～奈良	99	若林城跡	自然堤防	中世・江戸
43	青山二丁目遺跡	丘陵	奈良～平安	100	南小泉遺跡	自然堤防、後背湿地	弥生・古墳・奈良・平安・中世
44	二ツ沢遺跡	丘陵	縄文	101	遠見塚古墳	自然堤防	古墳(中期)
45	八木山緑町遺跡	丘陵	縄文・奈良・平安	102	曽利松明神古墳	沖積平野	古墳
46	萩ヶ丘遺跡	丘陵	縄文・奈良・平安	103	仙台東郊条理跡	後背湿地	奈良
47	萩ヶ丘B遺跡	丘陵	縄文	104	梅塚古墳	沖積平野	古墳
48	茂ヶ崎城跡	丘陵頂部及び斜面	南北朝～室町	105	今泉遺跡	自然堤防	弥生・古墳・平安～近世
49	大年寺横穴群	丘陵斜面	古墳末～奈良	106	藤田新田遺跡	浜堤	弥生
50	宗禅寺横穴群	丘陵斜面	古墳・奈良	107	下飯田薬師堂古墳	自然堤防	古墳(後期)
51	根岸遺跡	丘陵斜面	縄文	108	仙台大塚山古墳	自然堤防	古墳
52	二ツ沢横穴群	丘陵	古墳	109	伊豆野権現古墳	自然堤防	古墳
53	兜塚古墳	自然堤防	古墳	110	安久諏訪古墳	自然堤防	古墳
54	小兜塚古墳	自然堤防	古墳	111	栗遺跡	自然堤防	古墳
55	鹿野屋敷遺跡	段丘	古墳？奈良・平安	112	安久東遺跡	自然堤防	弥生～中世
56	鹿野一丁目遺跡	段丘	縄文・弥生？奈良・平安	113	城丸古墳	自然堤防	古墳
57	一塚古墳	後背湿地	古墳	114	後河原遺跡	自然堤防、後背湿地	弥生・平安・中世


Y＝−2.0km
Y＝±0
Y＝+2.0km
Y＝+4.0km
Y＝+6.0km
Y＝+8.0km
Y＝+10.0km
Y＝+12.0km
X＝−195.0km
X＝−196.5km
X＝−198.0km
X＝−199.5km
X＝−201.0km
青葉山丘陵
郡山低地
霞目低地
名取台地
高舘丘陵
名取低地
仙台市
名取市
宮城町
陸上自衛隊霞目飛行場
青葉山ゴルフ場
0
4 km

第1図　周　辺　の　遺　跡


X＝−197.0km
X＝−197.5km
X＝−198.0km
X＝−198.5km
Y＝+2.5km
Y＝+3.0km
Y＝+3.5km
Y＝+4.0km
Y＝+4.5km
土手内遺跡
土手内窯跡
土手内横穴群
金山窯跡
釜洗沢古墳
裏町東遺跡
裏町古墳
原東遺跡
砂押屋敷遺跡
砂押古墳
金岡八幡古墳
富沢遺跡
第20次調査
第25次調査
第27次調査
第9次調査
第18次調査
第7次調査
第5次調査
第16次調査
第28次調査
第13次調査
第17次調査
第29次調査
第23次調査
第14次調査
第15次調査
第26次調査
第2次調査
第19次調査
第6次調査
第21次調査
泉崎浦遺跡
第4次調査
第8次調査
第3次調査
第22次調査
教塚古墳
袋東遺跡
元袋Ⅲ遺跡
長町南遺跡
長町六下田遺跡
元袋Ⅱ遺跡
元袋古碑群
新田遺跡
大野田遺跡
第24次調査
第10次調査
富沢清水遺跡
山口遺跡
第11次調査
下ノ内浦遺跡
六反田遺跡
下ノ内遺跡
五反田古墳
五反田窯跡
五反田木棺墓
大野田古墳群
北屋敷遺跡
富沢館跡
1/7000
0
1km
5・6

第２図　富沢遺跡全体図

第２表　泉崎浦・山口遺跡調査次数表

調査次数	所在地	調査期間	調査面積	立地	担当職員	調査内容	文献
泉崎浦第１次	富沢字泉崎前	昭和55年３月１日～３月５日	61㎡	微高地縁辺	渋谷孝雄、田中則和、高橋彦之	縄文時代後期初頭の土坑・一括遺物	渋谷：1980
泉崎浦第２次	泉崎１丁目	昭和57年９月13日～12月25日	1200㎡	微高地上・後背湿地	吉岡恭平、田中則和	平安時代以前・平安時代の水田跡、古墳時代の住居跡・ピット・溝、近世の墓坑群	吉岡：1983
泉崎浦第３次	泉崎１丁目19－８～10	昭和62年10月26日～11月30日	564㎡	微高地上・後背湿地	主浜光朗	弥生時代の水田跡、古墳時代の遺物包含層・ピット群、平安時代以降の竪穴状遺構・井戸	主浜：1988
山口　第１次	富沢字山口・字下ノ内浦他	昭和53年３月１日～３月31日 昭和54年６月４日～12月10日 昭和54年10月15日～11月30日	180㎡ 800㎡ 444㎡	自然堤防上	結城慎一、工藤哲司、渋谷孝雄 佐藤　洋	縄文時代中期末の埋甕・後期の土坑	佐藤：1981
山口　第２次	富沢１丁目４番	昭和56年４月13日～12月24日 昭和57年３月１日～９月４日	9700㎡	自然堤防上・後背湿地	田中則和、主浜光朗、結城慎一 柳沢みどり、金森安孝、佐藤裕 佐藤甲二、渡部弘美、工藤哲司 成瀬　茂	縄文時代早期末・前期・後期前葉の遺物、晩期の河川跡 弥生時代の遺物包含層・畦畔状遺構、古墳時代の溝跡、 奈良時代の集落跡、平安時代の集落跡・水田跡、中世の 水田跡、近世の河川跡・遺物包含層	田中他：1984
山口　第３次	富沢字中谷地	昭和56年８月25日～12月28日	780㎡	自然堤防上	吉岡恭平、高橋勝也	縄文時代後期の遺物包含層・弥生時代後期の遺物包含層	吉岡：1982
山口　第４次	富沢１丁目10－８	昭和59年６月26日～７月24日	33㎡	後背湿地	田中則和	平安時代・中世の水田跡	田中：1985

第３表　昭和63年度富沢・泉崎浦・山口遺跡調査要項

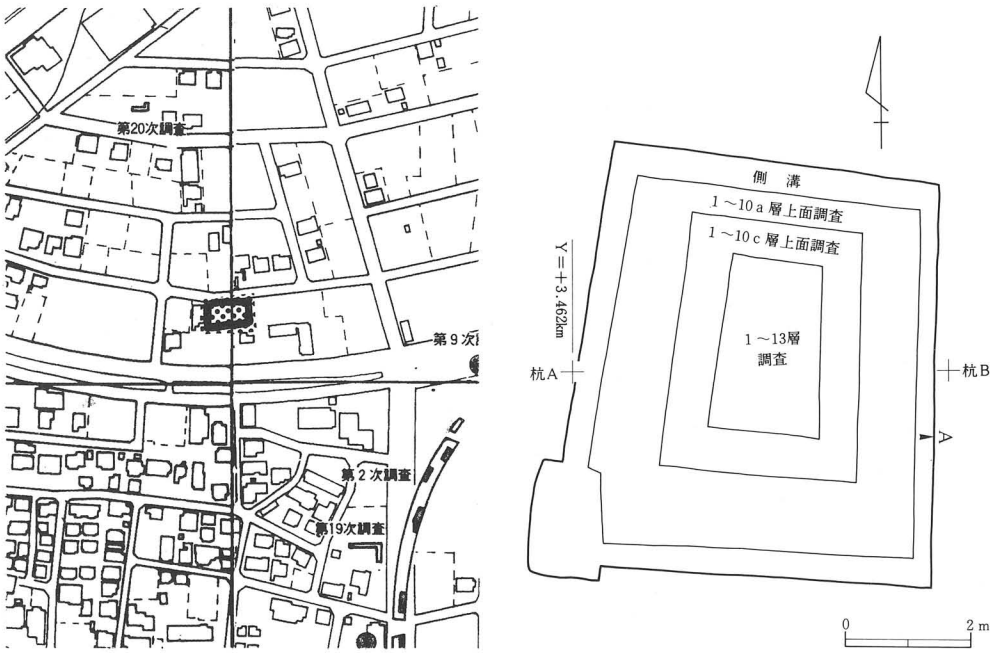
調査次数	所在地	調査期間	調査面積	立地	位置	杭Ａ座標	現況	現標高	旧標高	協力者	担当職員
富沢　第36次	富沢１丁目５－１	昭和63年４月11日～４月20日	約　36㎡	後背湿地	北西部	X＝－197.49700km Y＝＋　3.46200 km	宅地	14.5m	13.4m	㈱日本緑地	主浜　光朗
富沢　第37次	長町南４丁目５	昭和63年４月11日～６月15日	約 200㎡	後背湿地	中央部	X＝－197.631827km Y＝＋　3.868989km	宅地	9.8m	8.6m	嶋田　元松	中富　洋
富沢　第38次	長町南３丁目４	昭和63年５月23日～７月14日	約 153㎡	後背湿地	東部	X＝－197.52418 km Y＝＋　4.07889 km	宅地	10.45m	8.5m	佐竹　栄吉	渡部　弘美
富沢　第39次	長町南４丁目19	昭和63年６月16日～７月30日	約 160㎡	後背湿地	南部	X＝－197.86909 km Y＝＋　3.67622 km	宅地	11.0m	9.55m	志賀　信夫	中富　洋
富沢　第40次	長町７丁目	昭和63年７月18日～９月30日	約 360㎡	後背湿地	東端隣接地	X＝－197.26584 km Y＝＋　4.48371 km	宅地	11.0m	10.35m	佐藤　勝郎	渡部　弘美
富沢　第41次	長町南３丁目15－17	昭和63年７月18日～７月30日	約　26㎡	後背湿地	東部	測量実施せず	宅地	11.15m	8.65m	鈴木はま子	佐藤　甲二
富沢　第42次	泉崎１丁目７	昭和63年８月１日～９月14日	約　98㎡	微高地縁辺	北西部	X＝－197.52475 km Y＝＋　3.45888 km	宅地	14.5m	13.1m	㈱大　京	中富　洋
富沢　第43次	長町南４丁目５－10	昭和63年８月22日～９月27日	約　80㎡	後背湿地	中央部	X＝－197.647206km Y＝＋　3.865533km	宅地	不　明	8.65m	阿部　文生	太田　昭夫
富沢　第44次	長町南１丁目８－17	昭和63年８月24日～９月２日	約　40㎡	後背湿地	東部	X＝－197.55204 km Y＝＋　4.29071 km	宅地	10.5m	9.2m	高橋　孝雄	平間　亮輔
富沢　第45次	泉崎１丁目７	昭和63年９月５日～９月14日	約　23㎡	微高地上	北西部	X＝－197.55696 km Y＝＋　3.43648 km	宅地	14.0m	13.3m	階本智世･深町輝明	中富　洋
富沢　第46次	長町南３丁目３－１	昭和63年10月３日～11月30日	約 222㎡	後背湿地	東部	X＝－197.48210 km Y＝＋　4.12891 km	宅地	10.35m	9.0m	丹野七五郎	佐藤甲二・佐藤　淳 渡部弘美
富沢　第47次	鹿野３丁目13	昭和63年９月26日～10月24日	約　95㎡	後背湿地	北部	X＝－197.33883 km Y＝＋　3.64944 km	水田	11.2m	—	㈱仙台土地開発	中富　洋
富沢　第48次	泉崎１丁目２	昭和63年10月３日～10月14日	約　80㎡	微高地縁辺	中央部	X＝－197.64340 km Y＝＋　3.59720 km	宅地	11.7m	10.85m	草刈　孝	太田　昭夫
泉崎浦第４次	泉崎１丁目16－３	昭和63年11月１日～11月17日	約　21㎡	微高地上	西部	X＝－197.73579 km Y＝＋　3.46402 km	宅地	13.6m	12.8m	瀬戸　熙	佐藤　淳
山口　第５次	泉崎１丁目32－22	昭和63年４月18日～５月14日	約　48㎡	後背湿地	北西部	X＝－197.98450 km Y＝＋　3.29478 km	畑地	13.2m	12.15m	㈱仙台土地開発	平間　亮輔
山口　第６次	富沢１丁目11	昭和63年４月18日～５月27日	約　42㎡	後背湿地	西部	X＝－198.09771 km Y＝＋　3.17936 km	宅地	13.9m	12.85m	㈱仙台土地開発	平間　亮輔
山口　第７次	泉崎１丁目32	昭和63年８月１日～８月５日	約　33㎡	後背湿地	北西部	X＝－197.98361 km Y＝＋　3.26817 km	畑地	13.2m	12.2m	小池　善二	佐藤　甲二
山口　第８次	富沢１丁目５－１	昭和63年８月１日～８月５日	約　35㎡	後背湿地	北部	X＝－198.02952 km Y＝＋　3.41342 km	宅地	12.5m	11.45m	山本　定美	佐藤　甲二

第２章　調 査 結 果

第１節　富沢遺跡第36次調査

１．調査方法

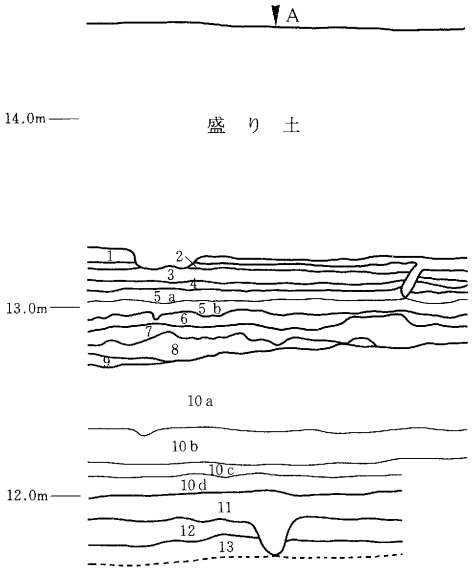
調査区の設定面積は約6.5×5.5m（36m²）である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査区は10層上面までは、調査区全面の精査を実施し、10層以下は、約４×３ｍの試掘区を設けて掘り下げた（10c層以下は約３×1.5m)。遺構の測量は、杭Ａ・Ｂを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.45700km　Ｙ＝＋3.46200km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.45700km　Ｙ＝＋3.46800km)。



第３図　調査区位置図・設定図

２．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別13層、細別では18層が確認された。各層の土質は７層まではシルト、８層以下が粘土を主とする。この内、４層は砂層で、10層は砂層を中心とする河川堆積土と考えられる。グライ化は、10層以下から漸次進み、13層では顕著である。現代のものを除く水田土壌は７層である。また、２・３・5a・5b・5c・６・８・９・11層も水田土壌の可能性がある。10a 層上面からは灰白色火山灰が検出されている。遺物出土層は２・３・９層である。各層は、ほぼ水平な堆積状況を示している。



第4図　基 本 層 序

３．検出遺構と出土遺物

(1)　７層上面

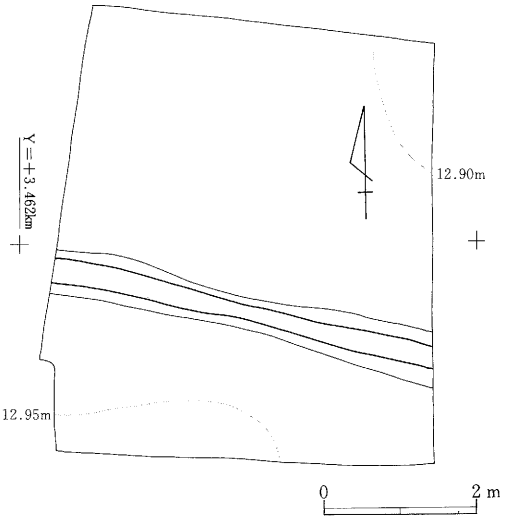
７層水田跡（第５図）

＜遺構状況＞畦畔が１条検出されたのみである。畦畔は調査区の南側に位置し、N—76°—W 方向をとる。畦畔は耕作土と同一土壌を盛り上げ作られている。下端幅は約40～70cm で、耕作土上面からの高さは約７ cm である。水口は認められなかった。耕作土は、粘土層で、厚さは５～10cm 前後であるが、畦畔を境とした北側の方が、耕作深度が深い。下面は凹凸が顕著で、耕作土下部に下層（８層）ブロックを巻き上げている箇所も認められる。下面には鉄分の集積

層序	土　　色	土　質	層　厚	混　入　物	備　　考
1	暗オリーブ灰色2.5G Y 4/1	シルト質砂	2 cm～12cm	炭化物粒・細砂	水田耕作土（現代）
2	黄褐色　10Y R 5/6	シルト質砂	2 cm～ 6 cm	鉄分多量・細砂・小礫	水田耕作土？
3	暗灰黄色　2.5Y 4/2	砂質シルト	3 cm～ 8 cm	鉄分・細砂	水田耕作土？
4	黄灰色　2.5Y 4/1	砂	3 cm～ 6 cm	マンガン粒多量・鉄分多量	自然堆積層
5 a	灰　色　5 Y 4/1	シルト質砂	4 cm～ 8 cm	マンガン粒少量・炭化物・小礫	水田耕作土？
5 b	黒褐色　10Y R 3/2	砂質シルト	5 cm～10cm	マンガン粒・炭化物粒・小礫多量	水田耕作土？・下面起伏
5 c	褐灰色　7.5Y R 4/1	シルト質粘土	2 cm～ 6 cm	マンガン粒少量・鉄分	水田耕作土？・部分的分布
6	黒褐色　2.5Y 3/1	シルト	2 cm～10cm	マンガン粒・鉄分・炭化物粒・細砂	水田耕作土？・下面若干起伏
7	黒褐色　10Y R 3/1	粘土質シルト	3 cm～18cm	鉄分・炭化物粒・８層ブロック	水田耕作土・下面起伏
8	褐灰色　10Y R 4/1	粘土	3 cm～12cm	鉄　分	水田耕作土？
9	オリーブ黒色　5 Y 3/1	粘土	3 cm～ 8 cm	細砂・小礫	水田耕作土？
10 a	灰　色　10Y 5/1	砂	25cm～45cm	鉄分・小礫・植物遺体・上面に灰白色火山灰小ブロック	自然堆積層・下部に同色シルトを挟む
10 b	にぶい黄褐色　10Y R 5/3	シルト	15cm～25cm	植物遺体多量・グライ粘土	自然堆積層
10 c	灰　色　10Y 5/1	砂	5 cm～12cm	植物遺体少量	自然堆積層
10 d	黒褐色　10Y R 3/2	粘土質シルト	10cm前後	植物遺体・下部に細砂	自然堆積層
11	黒　色　10Y R 3/1	粘土	12cm前後	植物遺体	水田耕作土？
12	灰オリーブ色　5 Y 5/2	粘土	7 cm～14cm	植物遺体少量	自然堆積層
13	オリーブ灰色　2.5G Y 5/1	粘土	15cm以上	植物遺体少量	自然堆積層

層は認められない。尚、畦畔部分の直下層上面には、擬似畦畔（斎野：1987）は形成されていない。水田面の標高は12.85～12.95m の間で、北東方向へのわずかな下り傾斜を示す。

＜出土遺物＞耕作土内より赤焼土器片・中世陶器片が各１点出土した。中世陶器片（写真52－２）は甕の体部資料で、色調は内外面が黒褐色（10YR 3/1）、胎土がにぶい褐色（7.5YR 4/4）である。胎土中には細かい砂粒を含む。産地は不明である。



第５図　７層水田跡平面図

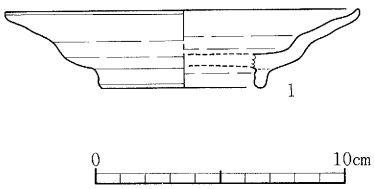
⑵　その他の出土遺物

２層より陶器片が１点、３層より時期不明の土器片が２点、９層より土師器片が１点出土したのみである。陶器片（第６図１）は志野産の皿で、製作年代は江戸時代初頭頃である。土師器片はロクロ使用の高台付坏の底部資料で、内面は黒色処理されている。陶器片を除き他は、細片のため図化し得なかった。

４．遺構の所属年代とまとめ

検出遺構としては、７層水田跡がある。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層の２・３・5a・5b・5c・６・８・９・11層が上げられる。これらの所属年代であるが、時期決定資料に乏しく、隣接調査区との層位の対応も不可能で、明確な年代は不明である。ただし、７層水田跡から中世陶器等を出土したこと、10a 層上面で灰白色火山灰が検出されたことにより、以下のような大づかみな推定年代が与えられる。

11層 ― 平安時代以前　10層～８層－平安時代以降・中世？以前　７層水田跡 ― 中世？（６層より上位の各層はこれ以降近代までの間）



No.	図版番号	遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	口　径	底　径	器　高	特　　徴
1	写真52－1	２層	陶　器	皿	約 ⅓	(14.2cm)	(6.6cm)	3.1cm	志野、17世紀前半、付高台

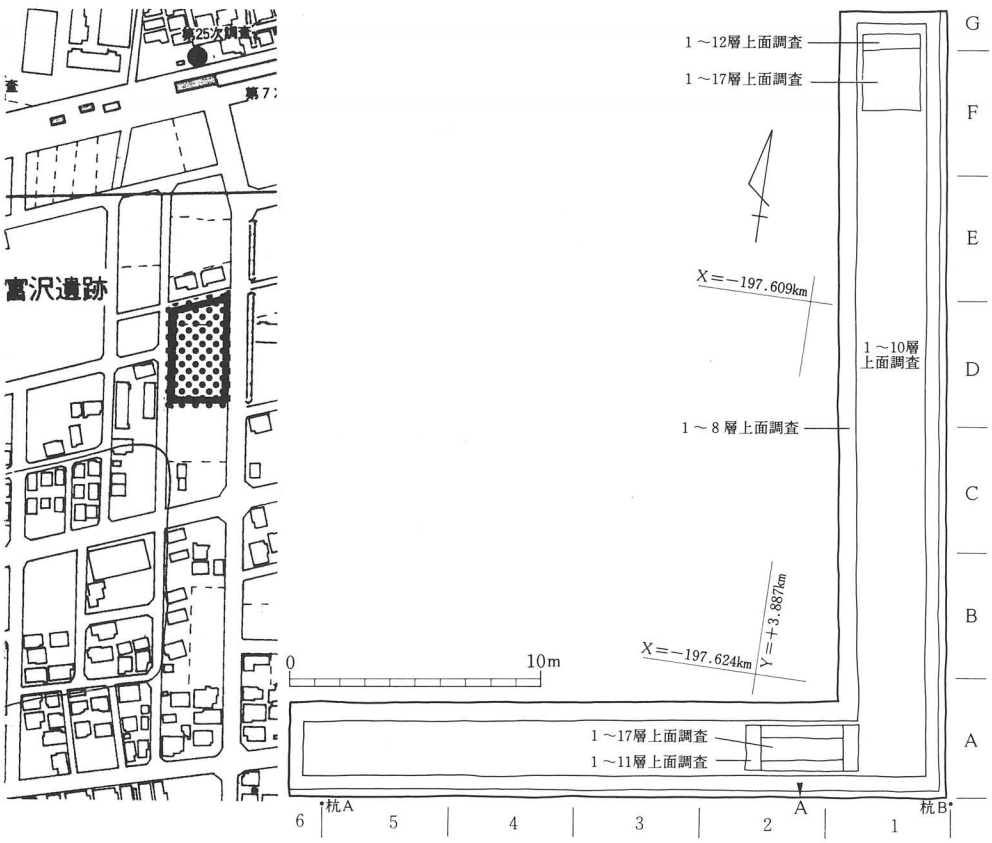
（　）内は復元値

第６図　出土遺物

第２節　富沢遺跡第37次調査

１．調査方法

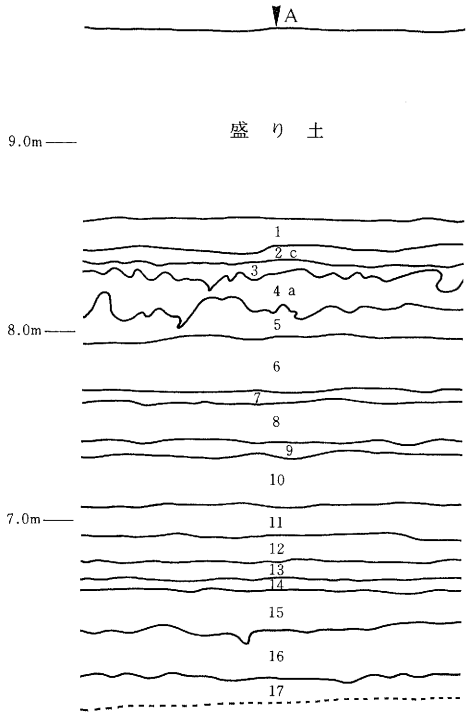
調査区の設定面積は約200m² である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。８層上面までは、調査区全面の精査を実施した。８層上面から10層上面までは安全確保のために調査区を内側に縮小して、約130m² で調査を行った。10層以下は調査区南北にそれぞれ一箇所ずつの試掘区を設けて掘り下げた。（北側試掘区では12層上面までは2.5×３m、12層以下は2.5×2.5m。南側試掘区では11層上面までは２×4.5m、11層以下は1×3m。）遺構の測量は、任意に設定した5×5m のグリッド（南北軸Ａ～Ｇ、東西軸１～６）を基準として実施した。尚、グリッド基準杭（杭Ａ、Ｂ）の平面座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.631827km、Ｙ＝＋3.868989km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.628111km、Ｙ＝＋3.895422km）。



第７図　調査区位置図・設定図

２．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別17層、細別では20層が確認された。各層の土質は１層がシルト質で、2a 層は砂である。2b 層は粘土、2c 層はシルト質である。３・４層は粘土質である。５～15層の間は泥炭質粘土であるが、間に７・９層の粘土層をはさむ。16・17層は粘土である。グライ化は16層以下から漸次進む。現代のものを除く水田土壌は4a 層であるが、この耕作土に利用された基本層は4b 層である。また2b・2c・３層も水田土壌の可能性がある。4a 層からは灰白色火山灰が検出されているが下層からの巻き上げである。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。遺物出土層は、2a・2b・2c・4a・4b・５層である。



第８図　基 本 層 序

層序	土　　色	土　　質	層　厚	混　　入　　物	備　　考
1	灰　色　10Y 5/1	シルト質粘土	5 cm～25cm		水田耕作土（現代）
2 a	黄褐色　2.5Y 5/6	砂	5 cm～18cm	小礫多量	自然堆積層・部分的分布
2 b	黒　色　10Y R 3/1	粘土	5 cm～20cm	細砂・粗砂・小礫多量	水田耕作土？・下面起伏・部分的分布
2 c	灰　色　5 Y 5/1	砂質シルト	2 cm～16cm	炭化物粒・凝灰岩粒少量	水田耕作土？・下面起伏・部分的分布
3	黒褐色　2.5Y 3/1	粘土	2 cm～14cm	鉄分多量・凝灰岩粒	水田耕作土？・下面起伏・部分的分布
4 a	黒　色　10Y R 3/1	粘土	10cm～30cm	灰白色火山灰粒	水田耕作土・下面起伏
4 b	黒　色　5 Y 3/1 灰　色　5 Y 5/1 にぶい黄橙色　10Y R 6/3	粘土 粘土 シルト質粘土	4 cm～16cm	鉄　分	自然堆積層・不連続で部分的な分布
5	黒褐色　10Y R 3/1	泥炭質粘土	8 cm～20cm	植物遺体多量	自然堆積層
6	褐　色　10Y R 5/4	泥炭質粘土	22cm～30cm	植物遺体多量	自然堆積層
7	暗灰黄色　2.5Y 5/2	粘土	4 cm～10cm	植物遺体多量	自然堆積層
8	黒　色　10Y R 1.7/1	泥炭質粘土	15cm～22cm	植物遺体多量	自然堆積層
9	灰オリーブ色　5 Y 5/2	粘土	5 cm～10cm	植物遺体多量	自然堆積層
10	黒　色　10Y R 3/1	泥炭質粘土	23cm～33cm	植物遺体多量	自然堆積層
11	黒褐色　10Y R 3/2	泥炭質粘土	12cm～20cm	植物遺体多量	自然堆積層
12	黒　色　10Y R 1.7/1	泥炭質粘土	10cm～15cm	植物遺体多量	自然堆積層
13	黒　色　2.5Y 3/1	泥炭質粘土	5 cm～10cm	植物遺体多量	自然堆積層
14	黒　色　10Y R 1.7/1	泥炭質粘土	5 cm前後	植物遺体多量	自然堆積層
15	黒褐色　10Y R 3/3	泥炭質粘土	15cm～23cm	植物遺体多量	自然堆積層
16	褐灰色　10Y R 5/1	粘土	20cm～27cm	細砂少量・植物遺体	自然堆積層
17	オリーブ灰色　7.5Y 5/2	砂質粘土	20cm以上	植物遺体	自然堆積層

３．検出遺構と出土遺物

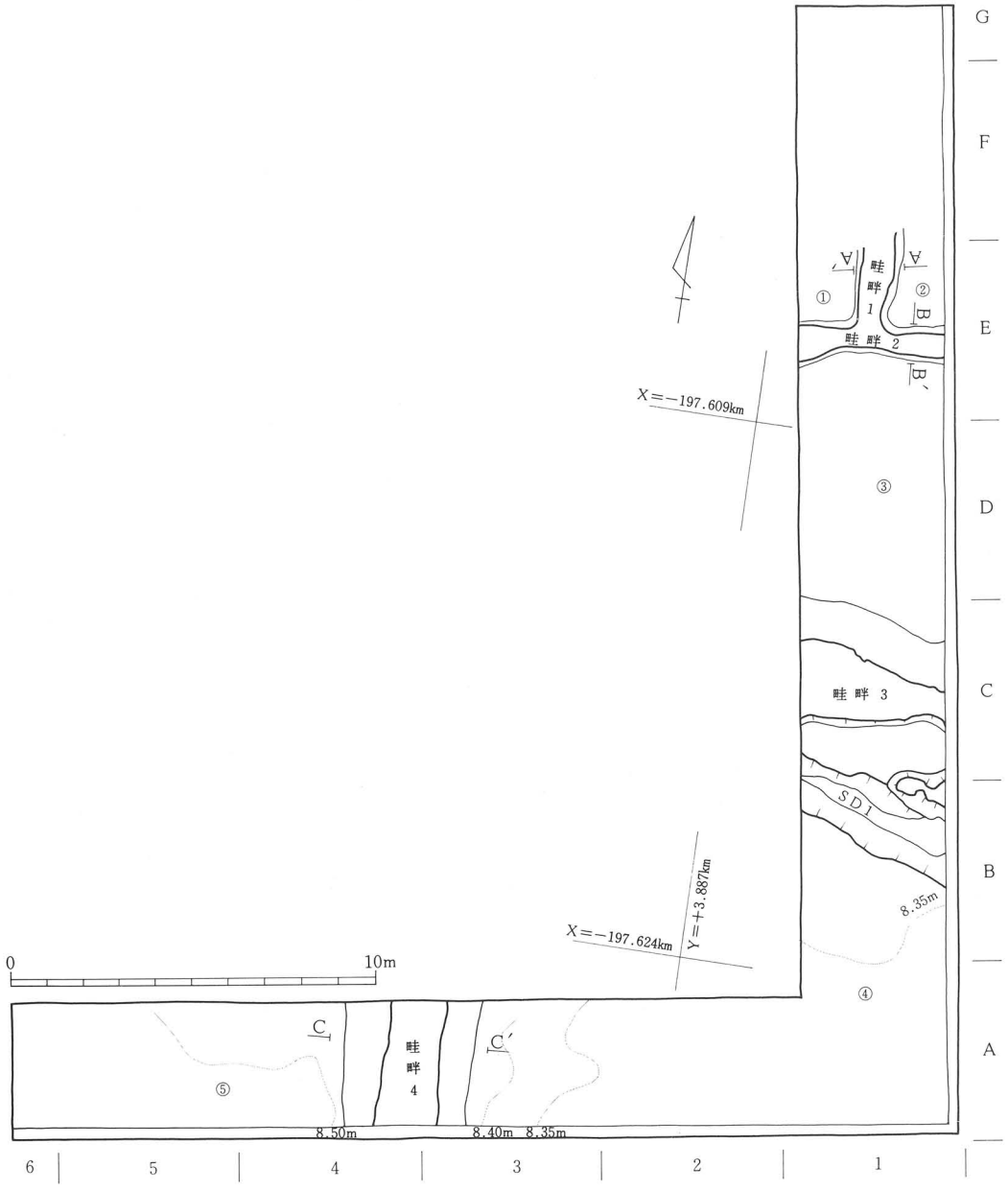
(1)　４層上面

4a 層水田跡・１号溝跡 — SD1 — (第９図)

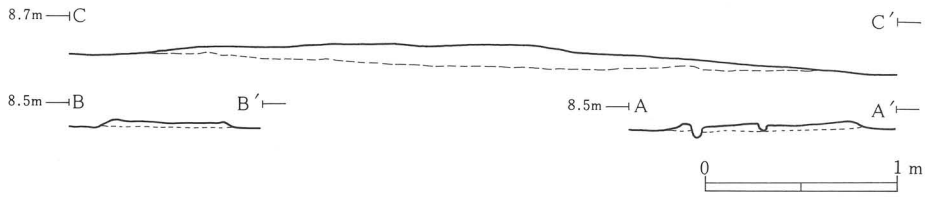
大畦畔（畦畔３、４）、小畦畔（畦畔１、２）が検出され、これに溝跡（SD1）１条を伴っている。これらによって区画される水田区画は５区画（①～⑤）である。

畦畔１、２はほぼ直交し、方向はそれぞれＮ－4°－W、Ｎ－88°－Ｅである。下端幅は畦畔１が0.5～0.7m、畦畔２は0.9～1.2m で、耕作土上面からの高さはともに２～５ cm である。畦畔３は SD1 北岸に沿って検出された大畦畔であるが、これに取りつく小畦畔はみられなかった。方向はＮ－78°－W で、畦幅は2.5～3.5m を計る。耕作土上面からの高さは４～９ cm である。尚、畦畔１、２と畦畔３は水田区画③を区画するが、この南北幅は6.5～7.5m である。ここは今回検出した水田区画のうち規模を知り得る唯一の箇所である。畦畔４も大畦畔であるが、これに取りつく小畦畔は検出されなかった。方向はＮ－4°－Ｅで、同じく南北に向く畦畔１とほぼ同じ方向を示す。下端幅は3.5m 前後で、耕作土上面からの高さは６～10cm である。この畦畔は調査区外を北に延びて、SD1 と接するものと考えられる。畦畔はいずれも耕作土と同じ4a 層を盛り上げて作られている。耕作土4a 層は粘土互層の4b 層を攪拌することによって形成されており、分解が進んでいる。層厚は３～20cm である。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積は認められない。水田面の標高は8.35～8.50m の間で、全体的には北東方向に下っているが、水田の区画ごとにみると水田面⑤が最も高く、次に④が低くなり、①・②・③が最も低い。また耕作土4a 層中の一部で灰白色火山灰のブロックが検出されたが、これは下層のものが巻き上げられて混入したものとみられる。 SD1 は畦畔３に伴って検出され、上端幅は２.～4.5m、深さは約0.4m である。北岸では壁に段を有し、中段幅は1.5～2m である。断面形は概ね船底形を呈するが、壁面、底面ともに凹凸が著しい。堆積土は礫を含む砂の単層で、遺物の出土はない。

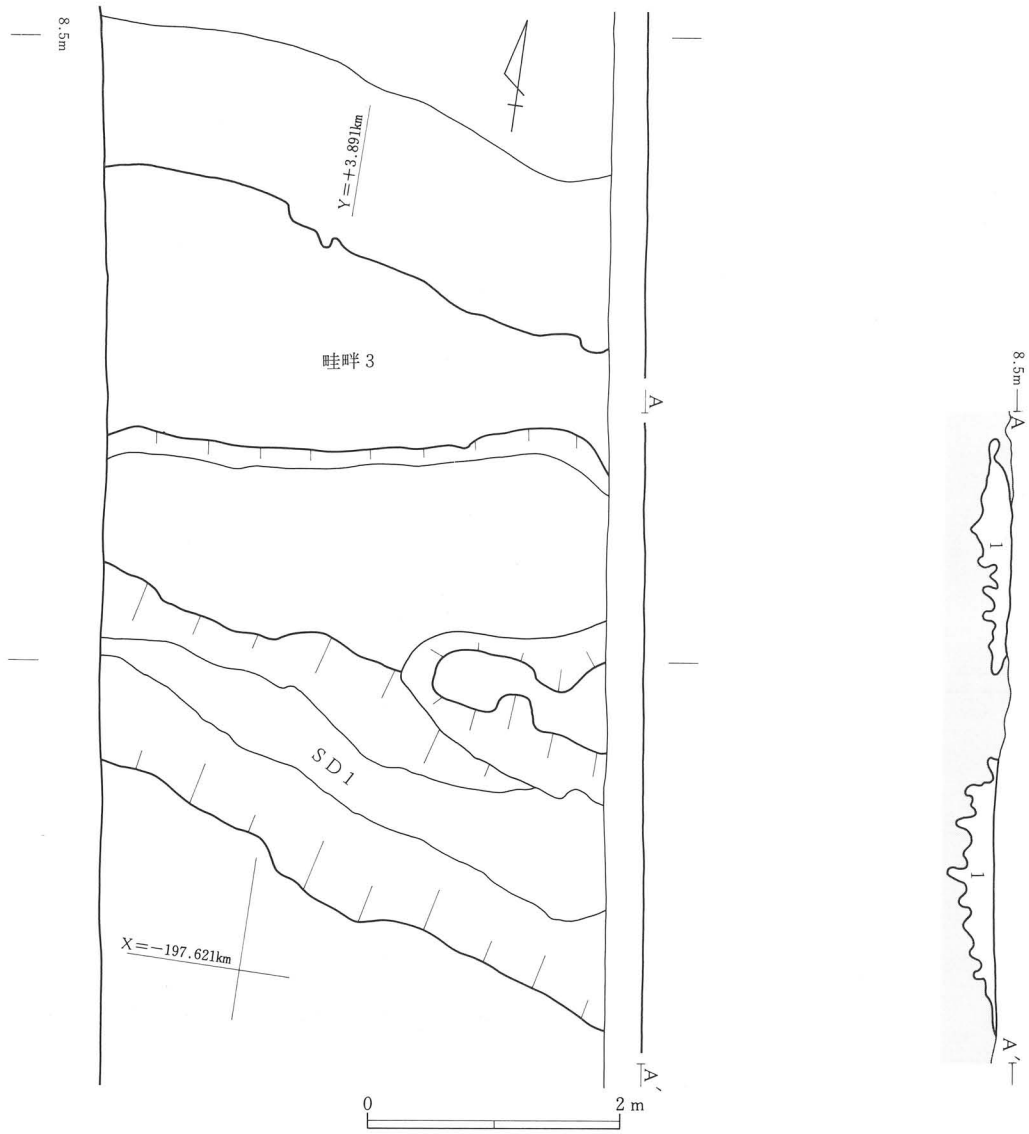
なお、耕作土中より土師器片（１点）、須恵器片（２点）、赤焼土器片（２点）、陶器片（１点）、瓦片（１点）、羽口片（１点）、古銭（１点）が出土した。土器、瓦片はいずれも小破片で、復元及び図化できるものではなかった。土師器はロクロが使用され、内面はヘラミガキの後黒色処理を施されている。切り離し技法は磨滅のため不明である。須恵器は２点出土した。１点は口縁部破片で、外面はロクロ調整後、波状沈線文が施されている。もう一方は器種不明である。赤焼土器は坏の底部から体部下端部分の破片が２点出土したが、これらは同一個体とみられる。陶器片は甕の体部破片で、常滑産の中世陶器と考えられる。瓦片は平瓦、丸瓦の区別はつけ難い。胎土には砂粒を多く含み、また焼成の特徴から中世末頃に属するものと考えられる。羽口片はフイゴの羽口破片である。古銭は皇宋通宝（北宋銭、初鋳年 — 1039年）である（第12図３）。



第９図　４ａ層水田跡平面図



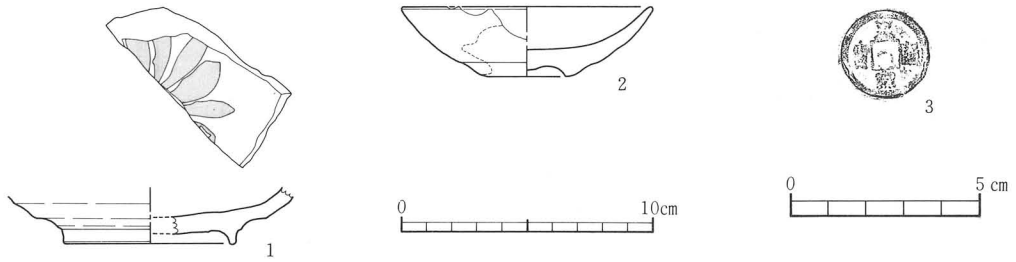
第10図　４ａ層畦畔断面図



第11図　畦畔３・ＳＤ１平面・断面図

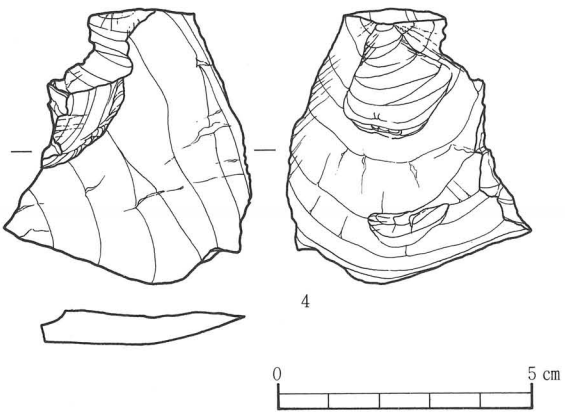
⑵　その他の出土遺物

基本層2a・2b・2c・５層から土師器片・須恵器片・赤焼土器片・陶器片（第12図１・２）・石器などが10点出土した。土器片は全て2a・2b・2c 層からの出土で、いずれも細片である。このうち陶器片は2a 層から２点出土した。皿、鉢の破片で産地はそれぞれ美濃、唐津であるが、中世末～近世初頭に属するものと思われる。石器は５層より剝片が１点出土した（第12図４）。



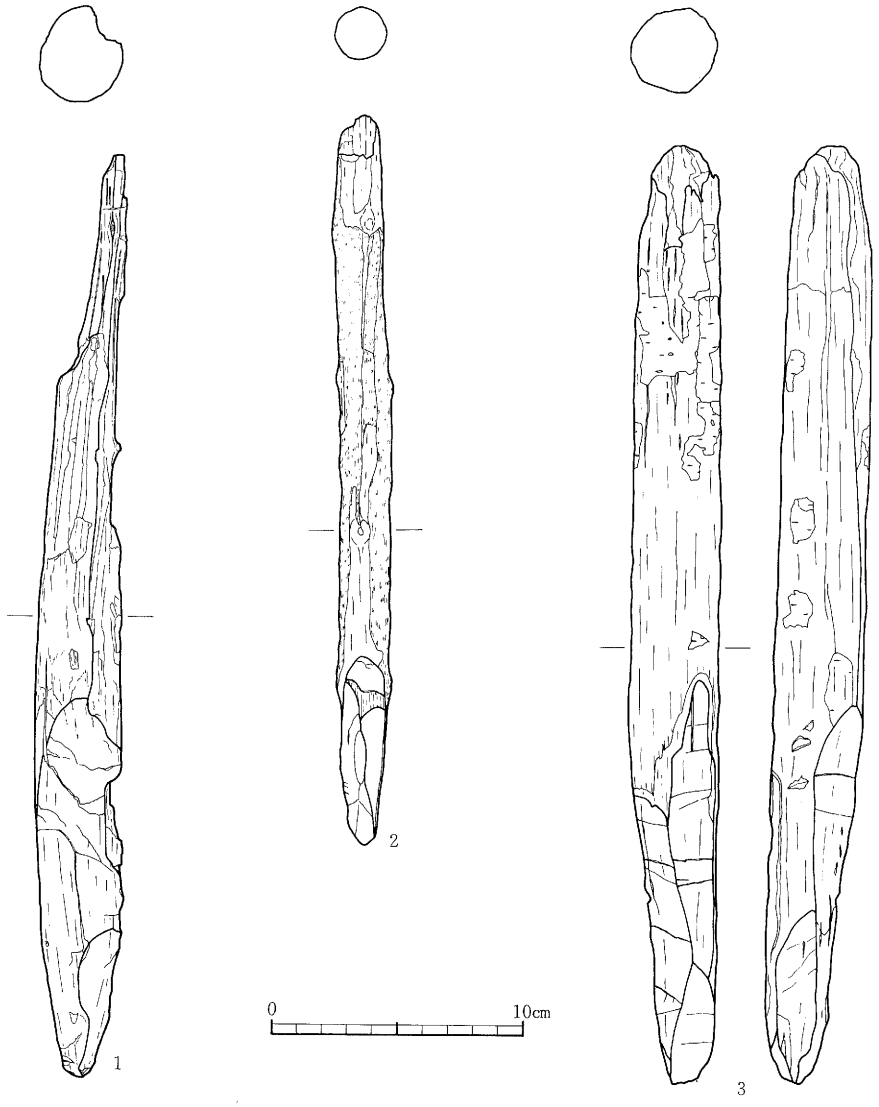
No.	図版番号	遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	口　径	底　径	器　高	特　　徴
1	写真53－２	２ a層	陶　器	皿	約 ¼		(6.8cm)		美濃、17世紀前半、鉄絵
2	写真53－１	２ a層	陶　器	鉢	約 ¼	(10.0cm)	(4.0cm)	2.8cm	唐津、16世紀末、長石釉系、底部削り出し
3	――	４ a層水田跡	――	古銭	――	――	――	――	北宋、「皇宋通宝」

(　)内は復元値



No.	図版番号	名　　称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　　質	備　　考
4	写真53-3	剝　　片	54.5	49.0	7.0	17.4	凝灰(岩)質シルト岩	

第12図　出土遺物（1）



No.	挿図番号	図版番号	出土遺構・層位	種　別	材　質	素材形状	長　さ	幅・直径	先端加工	表面加工	備　　考
1	——	——	４ａ層水田跡	杭	広	丸　木	9.6cm	3.0cm	１方向		一部樹皮遺存
2	——	——	４ａ層水田跡	杭	広	丸　木	37.8cm	3.8cm	複数方向	な　し	一部樹皮遺存
3	第13図１	写真53-4	４ａ層水田跡	杭	広 ？	丸　木	36.5cm	3.5cm	２方向	な　し	樹皮遺存
4	——	——	４ａ層水田跡	杭	広	丸　木	15.5cm	3.3cm	１方向	な　し	な　し
5	第13図２	写真53-5	４ａ層水田跡	杭	？	丸　木	29.0cm	2.0cm	１方向		樹皮遺存
6	第13図３	写真53-6	４ａ層水田跡	杭	広 ？	丸　木	37.5cm	3.3cm	複数方向	な　し	樹皮遺存
7	——	——	４ａ層水田跡	杭	広	丸　木	22.2cm	1.8cm	１方向以上	な　し	一部樹皮遺存
8	——	——	４ａ層水田跡	杭	針 ？	丸　木	35.3cm	2.7cm	複数方向	な　し	

第13図　出土遺物（2）

４．遺構の所属年代とまとめ

検出遺構は4a 層水田跡のみで、その他水田跡の可能性がある層としては2b・2c・３層があげられる。4a 層水田跡は大畦畔、小畦畔、及び水路によって区画された水田区画が５区画発見された。区画の形状、規模を明確にすることはできなかったが、畦畔、溝跡の方向のあり方から、ほぼ方形を呈するものと考えられる。時期は出土遺物から中世に所属するものと推定される。同時期の水田跡は西方約200m 離れた第30次調査（報告書未刊）でも発見されているが、これらの関係及び水田域の範囲を明らかにすることが今後の課題となろう。なお、水田の存在が予想されるその他の層の時期は、出土遺物から以下のように推定される。

３　層　　中世以降～近世

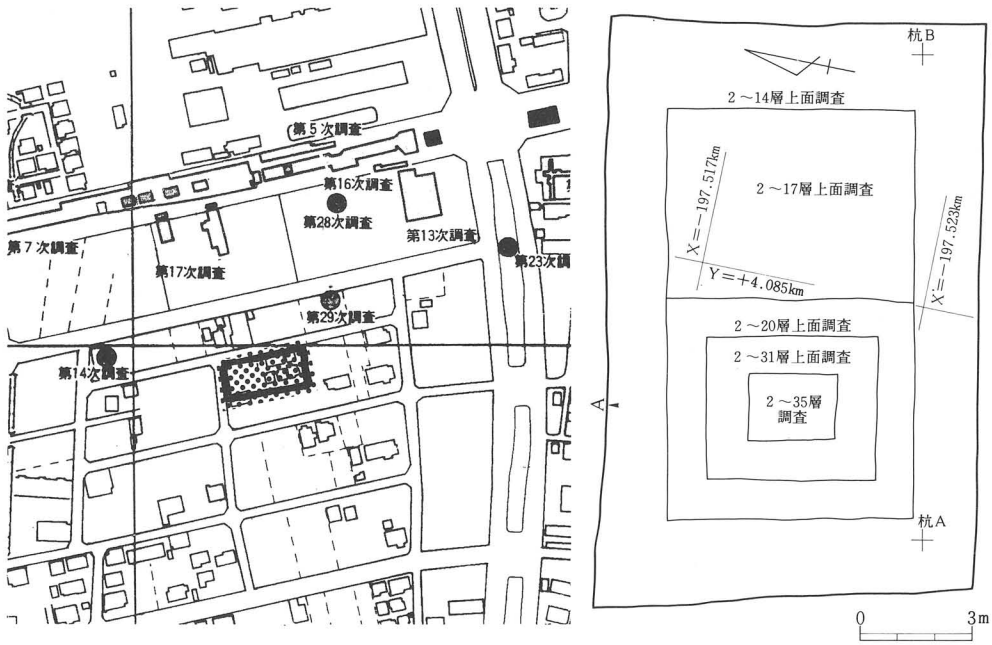
２ｂ層　　近世

２ｃ層　　近世

第３節　富沢遺跡第38次調査

１．調査方法

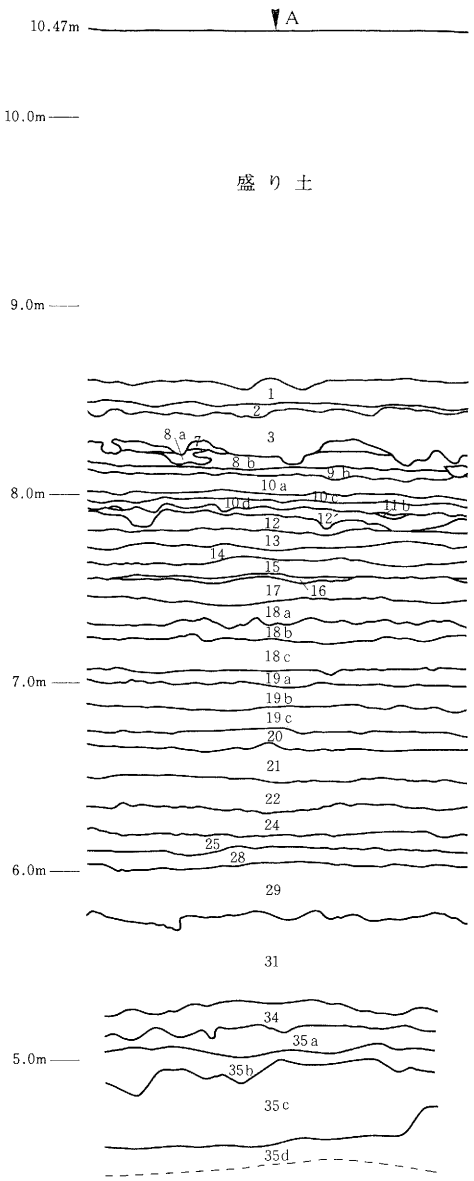
調査区の設定面積は約15×10m（153m²）である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。14層上面までは、調査区全面の精査を実施し、14層以下は、約11×6.5mの試掘区を設けて掘り下げた（17層以下は約６×6.5m、20層以下は約４×4.5m、31層以下は約２×2.5m）。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X＝－197.52418kmY＝＋4.07889km　杭B：X＝－197.52163km　Y＝＋4.09164km）。



第14図　調査区位置図・設定図

2．基本層序

当調査に際しては第28次調査区（佐藤：1988）の隣接地であり、層序の対応が可能であったことにより、第28次調査時における基本層序と同一層序を使用した。従って、欠落した層もあり、連続した層位番号となっていない。また、新たに認められた層の関係で、6・18・19・35層の各層は分層し、アルファベット名を付した新層位名となっている（ex. 6層→6a層・6b層）。今回の調査では、盛土下に1～35層までの40層が確認された。これら各層は、1～3層までが粘土層、6～29層までが粘土と泥炭の互層を基本とする泥炭質粘土層、31～35層が粘土層あるいは砂質シルト層に分類される。グライ化は、24層以下から漸次進み、31層以下では、顕著である。現代のものを除く水田土壌は10d層のみである。また、2・3・6b層も水田土壌の可能性がある。遺物出土層は2・3・19c層である。3層からは灰白色火山灰が検出されているが、下層からの巻き上げの可能性がある。全体的な層の傾きは、南東側へ緩やかに下る。



第15図　基本層序

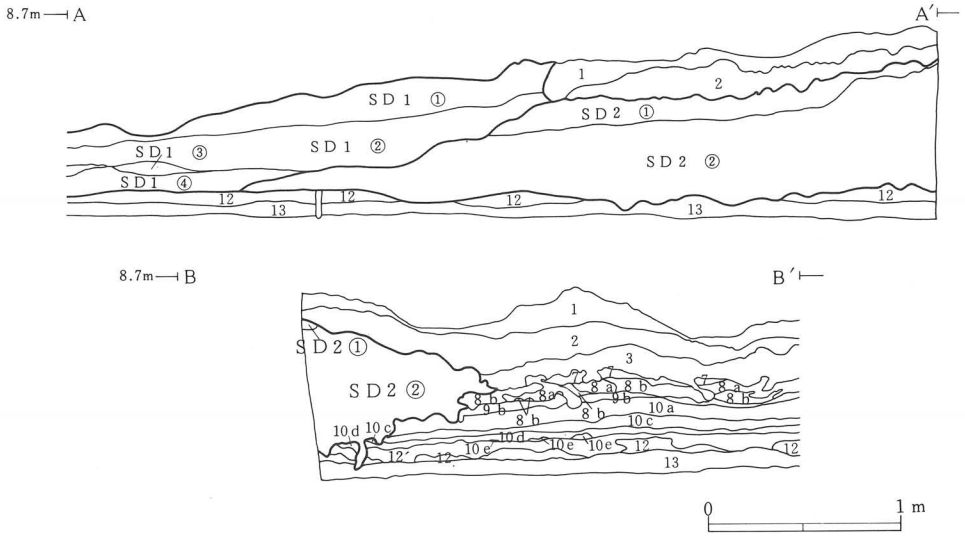
3．検出遺構と出土遺物

(1)　2・3層上面

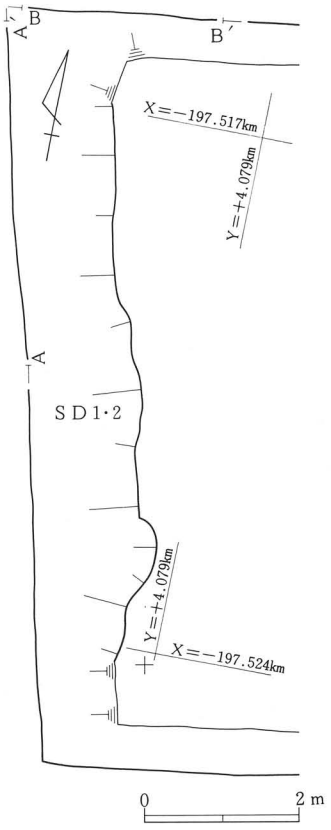
1・2号溝跡 — SD1・2 — (第16図・17図)

調査区西端際で南北方向をとる重複した溝跡（SD1・2）の一部が検出された。検出面はSD2が3層上面、SD1が2層上面である。方向性はSD2が調査区西壁方向よりやや東に振れる。両溝跡とも幅は不明であるが、深さは80cm前後で底面レベルは、ほぼ同一である。尚、SD1のさらに上に1層段階の溝跡があったことが確認されている。溝跡内、その周辺より杭が16本

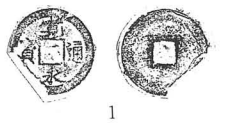
層序	土色		土質	層厚	混入物	備考
1	オリーブ黒色	5Y 3/1	シルト質粘土	1cm～24cm	鉄分多量	水田耕作土（現代）・下面に鉄分集積層
2	灰色	5Y 4/1	シルト質粘土	1cm～21cm	鉄分	水田耕作土？・下面起伏
3	黒色	10YR 1.7/1	シルト質粘土	2cm～30cm	灰白色火山灰小ブロック	水田耕作土？・下面起伏
6a	オリーブ黒色	5Y 3/1	泥炭質粘土	2cm～24cm		互層・自然堆積層・部分的分布
	灰色	5Y 5/1				
6b	黒褐色	10YR 3/1	泥炭質粘土	1cm～5cm		水田耕作土？・不連続で部分的な分布・下面若干起伏
7	黒色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	1cm～12cm		互層・自然堆積層・不連続で部分的な分布
	褐灰色	10YR 5/1	泥炭質粘土			
8a	黄灰色	2.5Y 5/1	泥炭質粘土	2cm～14cm		8b層の自然分解層？・不連続で部分的な分布
8b	暗灰黄色	2.5Y 5/2	泥炭質粘土	1cm～11cm		自然堆積層・不連続で部分的な分布
	黒色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土			
9b	暗灰黄色	2.5Y 5/2	泥炭質粘土	2cm～9cm		互層・自然堆積層・不連続な分布
	黒色	2.5Y 3/1	泥炭質粘土			
10a	褐色	7.5YR 4/4	泥炭質粘土	3cm～16cm		互層・自然堆積層
	暗灰黄色	2.5Y 5/2	泥炭質粘土			
	黒色	2.5Y 3/1	泥炭質粘土			
10c	黒色	2.5Y 3/1	泥炭質粘土	1cm～9cm		互層・自然堆積層
	暗灰黄色	2.5Y 5/2	泥炭質粘土			
10d	黄灰色	2.5Y 4/1	泥炭質粘土	1cm～14cm	下部に10e層小ブロック	水田耕作土・下面起伏
10e	黄灰色	2.5Y 5/1	泥炭質粘土	1cm～9cm		互層・自然堆積層・不連続で部分的な分布
11b	黒色	2.5Y 3/1	泥炭質粘土	1cm～6cm		不連続で部分的な分布
12′	黒色	2.5Y 3/1	泥炭質粘土	1cm～15cm		不連続で部分的な分布・12層の自然分解層？
12	黒色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	1cm～15cm		互層・自然堆積層
	暗灰黄色	2.5Y 5/2	泥炭質粘土			
13	黒色	10YR 3/1	泥炭質粘土	3cm～13cm		自然堆積層
14	黒色	10YR 3/1	泥炭質粘土	3cm～14cm		自然堆積層
15	黒褐色	10YR 3/2	泥炭質粘土	6cm～11cm		自然堆積層
16	黒褐色	10YR 3/2	泥炭質粘土	1cm～2cm		自然堆積層・不連続で部分的な分布
17	黒色	10YR 3/1	泥炭質粘土	8cm～17cm		自然堆積層
18a	黒色	10YR 3/1	泥炭質粘土	8cm～17cm		互層・自然堆積層
	灰黄褐色	10YR 5/2	泥炭質粘土			
18b	黒褐色	10YR 3/1	泥炭質粘土	4cm～13cm		互層・自然堆積層
	黒色	10YR 3/1	泥炭質粘土			
18c	黒色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	14cm～19cm		自然堆積層
19a	灰オリーブ色	5Y 5/2	泥炭質粘土	4cm～11cm		自然堆積層
19b	黒褐色	10YR 3/2	泥炭質粘土	9cm～16cm		互層・自然堆積層
	暗褐色	10YR 3/3	泥炭質粘土			
19c	黒色	10YR 3/1	泥炭質粘土	9cm～16cm		互層・自然堆積層
	暗灰黄色	2.5Y 5/2	粘土			
20	黒色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	5cm～12cm		自然堆積層
21	黒色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	14cm～21cm		互層・自然堆積層
	灰黄褐色	10YR 4/2	粘土			
22	黒色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	11cm～18cm		自然堆積層
24	灰黄褐色	10YR 5/2	粘土	11cm～20cm		互層・自然堆積層
	黒色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土			
25	黒色	10YR 3/1	泥炭質粘土	5cm～13cm		自然堆積層
28	黒褐色	10YR 3/1	泥炭質粘土	5cm～11cm		自然堆積層
29	黒色	10YR 3/1	泥炭質粘土	24cm～33cm		下面起伏・自然堆積層
31	オリーブ灰色	5GY 5/1	粘土	44cm～53cm	植物遺体	互層・自然堆積層
	褐色	10YR 4/4	砂質シルト			
34	褐灰色	10YR 5/1	粘土	6cm～18cm	植物遺体	下面起伏・自然堆積層
35a	オリーブ灰色	2.5GY 5/1	砂質シルト	4cm～17cm	植物遺体	自然堆積層
35b	オリーブ灰色	5GY 5/1	砂質シルト	4cm～26cm	植物遺体	自然堆積層
35c	緑灰色	10GY 5/1	砂質シルト	18cm～44cm	植物遺体	自然堆積層
35d	緑灰色	10GY 5/1	砂	34cm以上	植物遺体・下部粗砂	自然堆積層



SD１	①	10YR２/１	黒色	シルト質粘土	下部に10YR1.7/1黒色粘土の層がうすく広がる。
	②	2.5Y２/１	黒色	シルト質粘土	2.5Y４/１黄灰色砂2.5Y２/１が主体。
	③	５Y２/１	黒色	シルト質粘土	グライ土。
	④	2.5Y２/１	黒色	砂	
SD２	①	５Y３/１ ５Y５/２	オリーブ黒色 灰オリーブ色	粘土 粘土	
	②	2.5Y４/１ 2.5Y５/１	黄灰色 黄灰色	粘土 砂	砂層が主体。２C層下部に2.5Y４/１の粘土層が底面に広がる。



第16図　ＳＤ１・２平面・断面図



第17図　出土遺物（1）

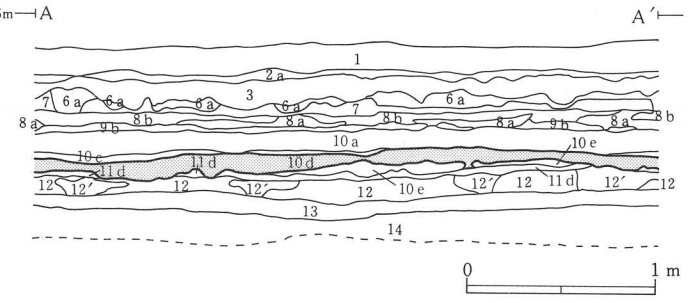
No.	出土遺構・層位	種　別	材　質	素材形状	長　さ	幅・直径	先端加工	表面加工	備　　考
1	ＳＤ１	杭	針	丸　木	55.3cm	3.4cm	不　明	な　し	
2	ＳＤ１	杭	針	丸　木	65.1cm	3.2cm	複数方向	な　し	一部樹皮残る
3	ＳＤ１	杭	針	丸　木	83.1cm	4.8cm	複数方向	枝払い	
4	ＳＤ１	杭	広？	丸　木	21.3cm	2.5cm	一方向以上	な　し	
5	ＳＤ１	杭	竹	丸　木	74.2cm	2.1cm	不　明	な　し	
6	ＳＤ１	杭	針	丸　木	14.0cm	5.2cm	不　明	不　明	
7	ＳＤ１	杭	針	丸　木	13.8cm	3.5cm	不　明	不　明	
8	ＳＤ１	杭	針(杉)	丸　木	117.9cm	3.6cm	ノコギリ(直)	枝払い	一部樹皮残る
9	ＳＤ１	杭	針	丸　木	18.1cm	4.6cm	不　明	枝払い	
10	ＳＤ１	杭	針(杉)	丸　木	113.8cm	5.0cm	複数方向	枝払い	
11	ＳＤ１(２層上面)	杭	針	丸　木	37.8cm	3.6cm	２方向	な　し	
12	ＳＤ１(２層上面)	杭	針(杉)？	丸　木	28.4cm	4.6cm	複数方向	枝払い	一部樹皮残る
13	ＳＤ１	杭	広	４分割材	17.8cm	3.1cm	複数方向	な　し	
14	ＳＤ１	杭	広	丸　木	57.1cm	2.6cm	複数方向	枝払い	
15	ＳＤ１	杭	広	丸　木	21.2cm	4.0cm	複数方向	な　し	
16	ＳＤ１	杭	針(杉)	丸　木	88.6cm	4.6cm	２方向	雑な枝払い	一部小枝が付く

検出された。なかには列をなすものもある。これらは１層の溝跡を含め、いずれの時期に属するか不明である。出土遺物はSD1 堆積土中より、土師器片と寛永通宝が各１点出土したのみである。

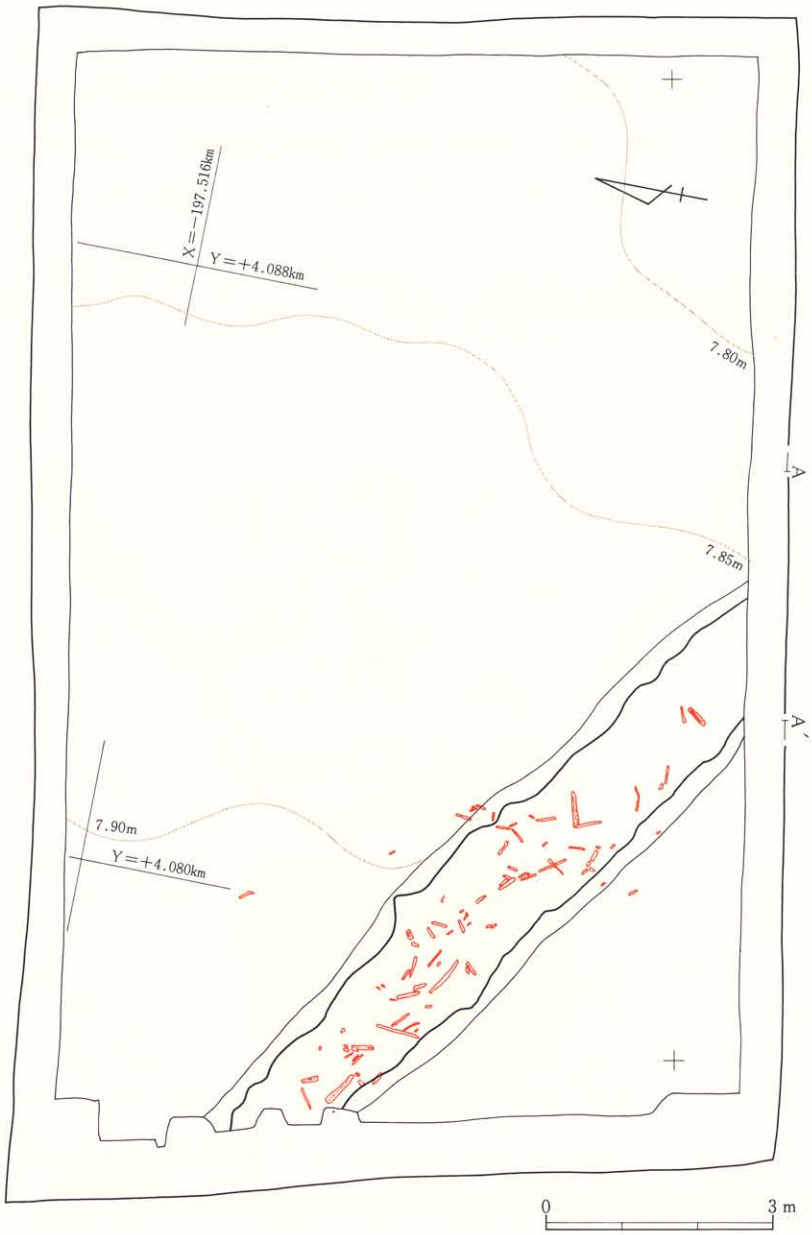
⑵　10層上面

10d 層水田跡（第19図）

大畦畔が１条検出されたのみで、小畦畔は検出されなかった。畦畔の検出面は10a 層下面である。畦畔方向はＮ－56°－Ｗで、直線的に延びる。畦畔は耕作土と同一土壌 ― 10d 層 ― を盛り上げ作られている。下端幅は1.8m 前後で、耕作土上面からの高さは６ cm 前後である。上面及びその中より、小枝を主とする多量の樹木片が出土した。尚、畦畔上には水口は検出されなかった。耕作土は泥炭質粘土層の10e 層から12層上面を攪拌し、耕作土 ― 10d 層 ― としている。畦畔部分では耕作が及ばなかったためか、直下の10e 層が擬似畦畔となって残っている。耕作土の厚さは７ cm 前後で、余り分解が進んでおらず、下部では下層ブロックを多量に含む。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。水田面（耕作域）の標高は7.75～7.95m の間で、南東方向の緩やかな下り傾斜を示す。傾斜の度合いは約1.0cm/m である。畦畔出土の樹木片を除けば、出土遺物はない。



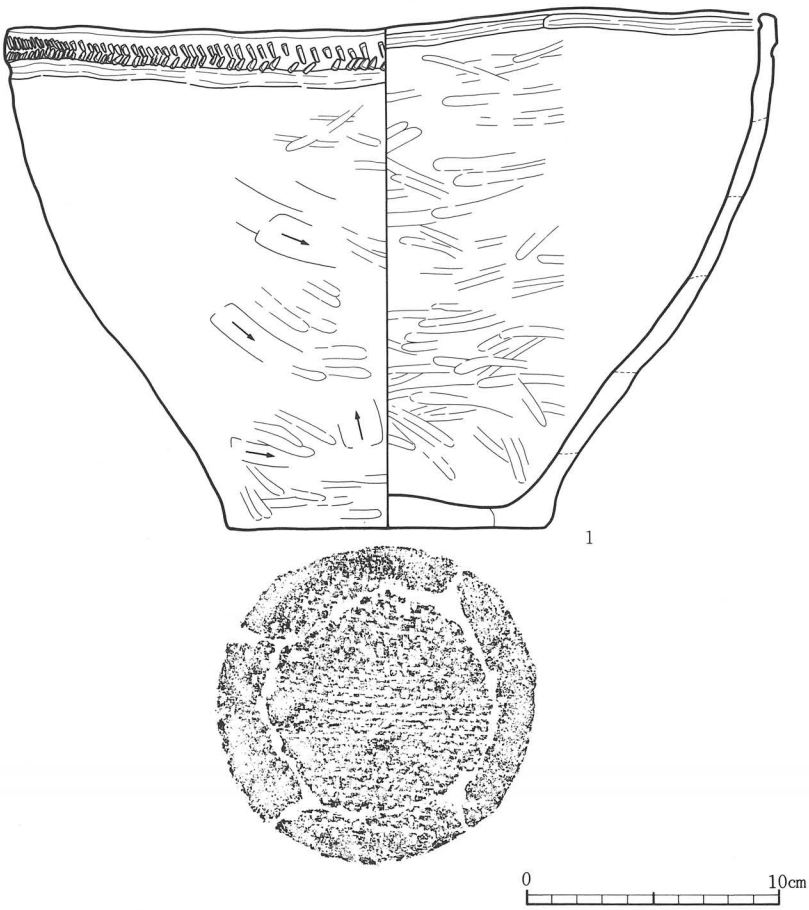
第18図　10ｄ層畦畔断面図



第19図　10ｄ層水田跡平面図

⑶　その他の出土遺物

基本層１・２・３・19c層から縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器等が出土した。19c 層出土の縄文土器を除けば、全て細片で、３層以上の出土である。２層出土のものには近代以降の陶器片・磁器片が含まれる。19c 層出土の縄文土器（第20図１）はほぼ完形で、土圧で潰れたような状況で出土した。これに伴う落ち込みや他の遺物は認められなかった。最大径を口縁部にもち、体部下半のしぼむ椀状を呈する鉢形土器である。口縁部は直立し、やや肥厚する。口唇部は、一部丸味を帯びる部分も認められるが、基本的には平坦で、やや外面側



No.	図版番号	層　位	種　別	器種	遺存度	口　径	底　径	器　高	特　　徴
1	写真54	19ｃ層	縄文土器	鉢	ほぼ完形	30.5cm	13.0cm	20.7cm	口縁部―沈線・刺突文、体部―無文、底部―網代痕

第20図　出 土 遺 物 (2)

に傾いている。文様の施文部位は、内外面とも口縁部に限られ、他は無文である。外面は、下端に文様区画用の浅く幅広い不明瞭な横位沈線が1条引かれ、その上に矢羽根状文様が横位にめぐる。矢羽根状文様は、斜位の刺突によって表出されている。施文順序は上の刺突（下→上）が一巡した後、下の刺突（上→下）が加えられている。内面は、明確な太い横位沈線が1条めぐる。内外面の調整は、外面ヘラ削り・ナデの後粗いミガキ、内面は丁寧なミガキである。胎土には多量の砂粒を含む。色調は、内外面とも灰黄褐～褐灰色で、外面体部下端及び内面口縁部付近・体部下半に黒色の付着物が認められる。内面口縁部付近には、火はね状の小さな剝離痕が多数みられる。尚、底部は網代底である。

4．遺構の所属年代とまとめ

1．検出遺構としては、10d層水田跡、SD1･2がある。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層とした6b・3・2層の各層が上げられ、SD2は3層段階の水路、SD1は2層段階の水路の可能性がある。これらの年代であるが、今回の調査では、時期決定資料に乏しいが、層位の対応が可能な隣接28次調査（佐藤：1988）の結果を踏まえれば、以下のような所属年代が与えられる。

・10d層水田跡 ― 弥生時代（桝形囲式期以降　十三塚式期以前）
・6b層 ― 弥生時代（十三塚式期）以降　平安時代以前
・SD2 ― 近世以降　近代以前　　・SD1 ― 近代以降　現代以前

2．検出された弥生時代の水田跡は、10d層水田跡のみであった。隣接28次調査で検出された、11c・11a・10b・9a層の各水田跡の耕作域は当調査区には延びてきていない。

3．当調査区では、3層下に4・5層が認められなかった。これは3層が水田耕作土で、下層の4・5層を耕作土として利用した結果とも考えられる。

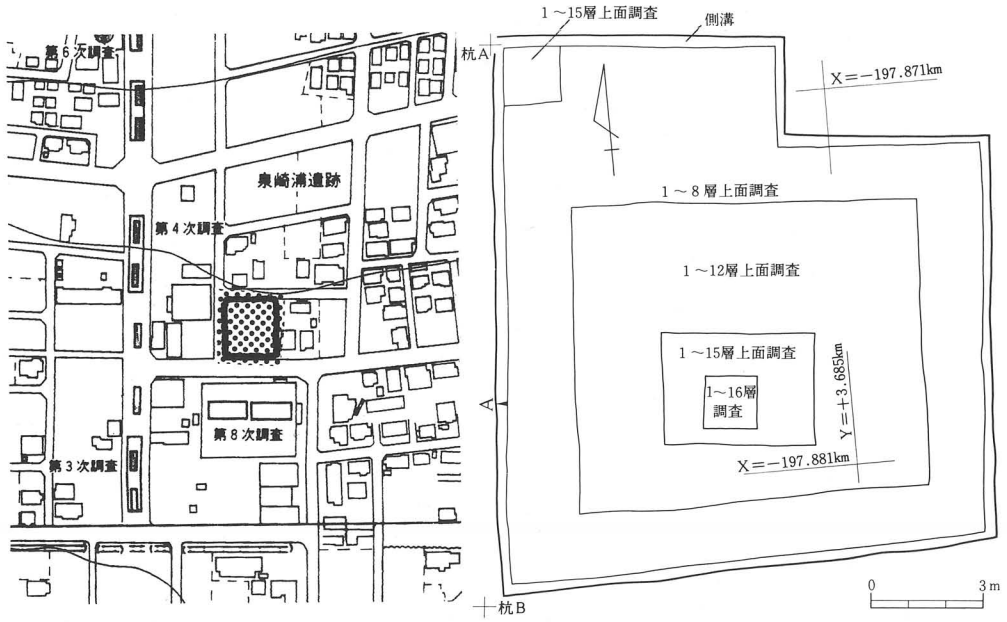
4．今回の調査で、ほぼ完形の土器1点ではあるが、19c層より初めて遺物の出土をみた。当土器を一応、縄文土器としたが、当地域において現在のところ、類例が認められないことより、所属時期は不明としておきたい。ただし、第28次調査区で23層中より縄文中期末葉の遺物が出土し、24層の^{14}C測定年代結果がB.C. 2290±120年であったことより、縄文後期以降、弥生時代桝形囲式期以前のいずれかの時期に所属する公算が強い。

5．隣接第28次調査区で、縄文時代早期後葉の遺物を出土した34層は当調査区でも認められた。しかし、層厚は薄く、不安定な層で、遺物も出土しなかった。

第４節　富沢遺跡第39次調査

１．調査方法

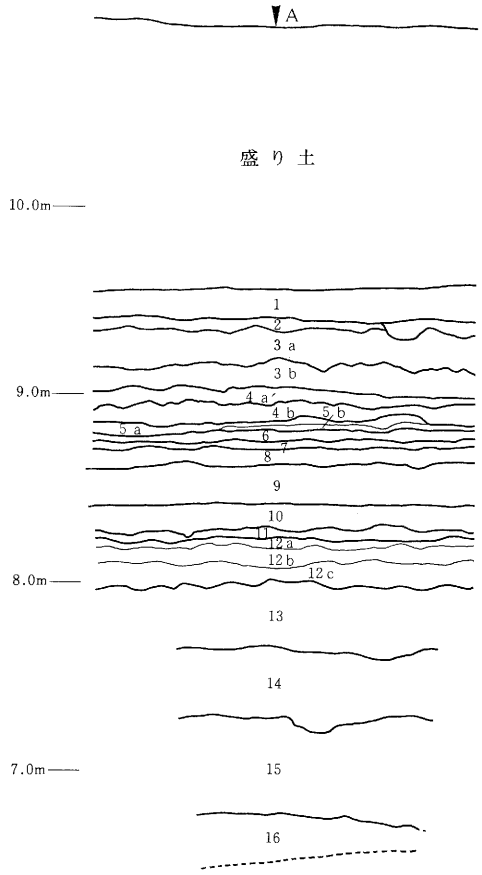
調査区の設定面積は160m² である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。８層上面までは調査区全面の精査を実施した。８層以下12層上面までは安全確保のため、調査区を８×９ｍに縮小した。12層以下は調査区中央部に試掘区を設けて掘り下げた（15層までは３×４ｍ、15層以下は1.5×1.5m）。また８層上面から調査区北西コーナーに1.5×1.5m の土層観察用の試掘区を設け、15層までの掘り下げを行った。遺構の測量は杭Ａ・Ｂを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.86909km、Ｙ＝＋3.67622km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.88405km、Ｙ＝＋3.67484km）。



第21図　調査区位置図・設定図

２．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別16層、細別では22層が確認された。各層の土質は１・２層がシルト質で、3a・3b・4a 層は粘土層であるが、3b・4a 層は泥炭を含んでいる。4a～８層は泥炭質粘土層である。９～12c 層は泥炭を含む粘土層であるが、間に10層の砂層をはさむ。13～15層は粘土層である。16層は砂礫層である。グライ化は13層から漸次進み、15層では顕著である。現代のものを除く水田土壌は3a・4a・4a′層であるが、これらの耕作土に利用された基本層は、それぞれ3b・4b 層である。また２層も水田土壌の可能性がある。3a 層からは灰白色火山灰が検出されているが、下層からの巻き上げと考えられる。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。遺物出土層は１・２・3a・4a・4b 層である。



第22図　基本層序

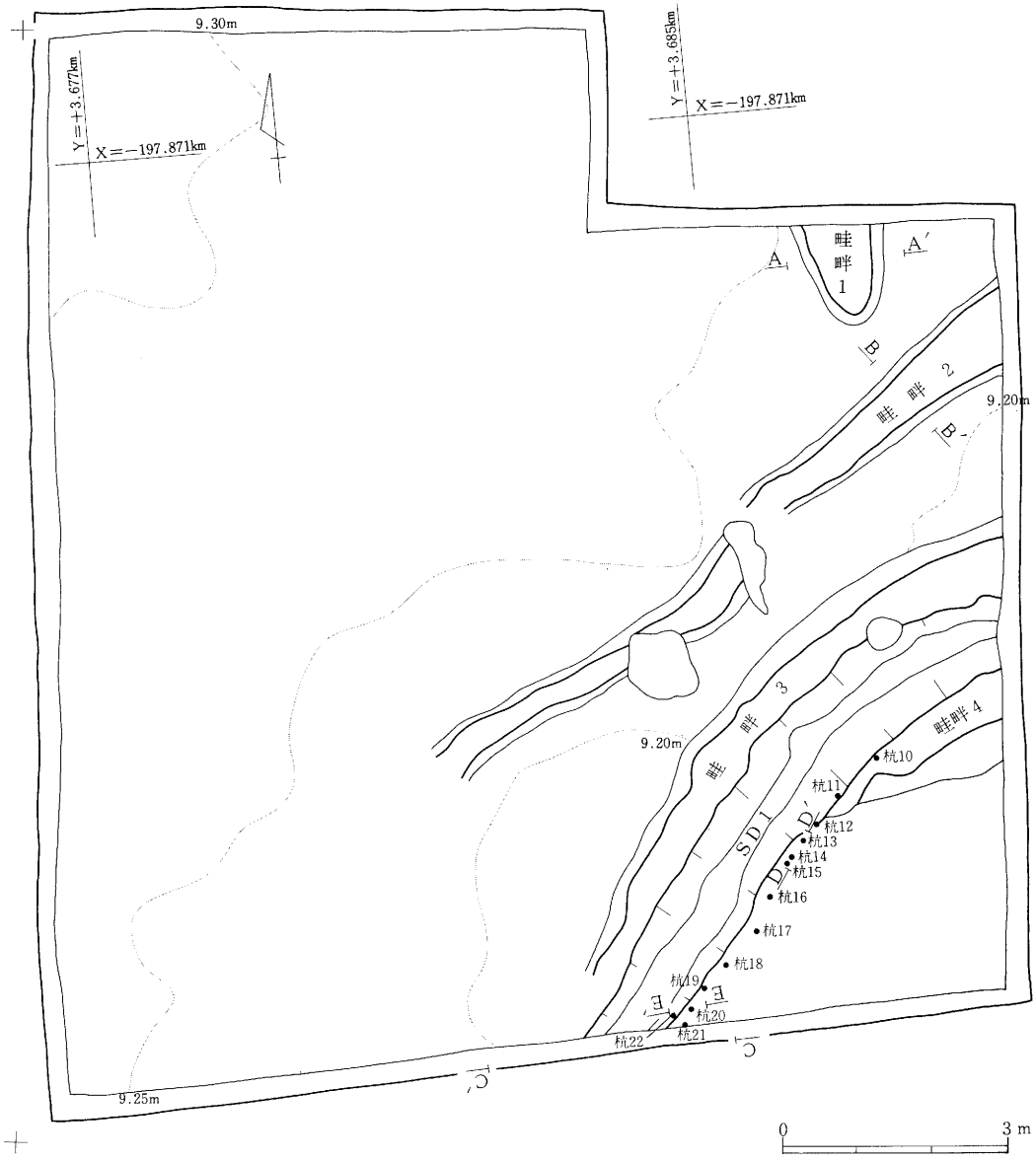
層序	土色	土質	層厚	混入物	備考
1	暗灰黄色 2.5Y 5/2	シルト	10cm～20cm		水田耕作土(現代)・下面に鉄分集積層
2	黒褐色 10YR 3/1	シルト質粘土	4 cm～12cm	鉄分多量・凝灰岩粒	水田耕作土・下面若干起伏
3a	黒色 10YR 1.7/1	粘土	8 cm～22cm	鉄分多量・灰白色火山灰ブロック	水田耕作土・下面起伏
3b	暗灰黄色 2.5Y 5/2 黒色 7.5YR 1.7/1 黄灰色 2.5Y 5/1	粘土 泥炭質粘土 粘土	8 cm～18cm	 植物遺体多量 植物遺体	自然堆積層
4a	黒褐色 10YR 3/1	粘土	10cm～20cm	植物遺体	水田耕作土・下面起伏
4a′	黒褐色 10YR 3/1	泥炭質粘土	3 cm～15cm	鉄分・植物遺体多量	水田耕作土・下面起伏・部分的分布
4b	黒色 5YR 1.7/1	泥炭質粘土	3 cm～12cm	植物遺体多量	自然堆積層
5a	黒褐色 10YR 3/1	泥炭質粘土	2 cm～5 cm	植物遺体多量	自然堆積層
5b	にぶい黄褐色 10YR 5/3	泥炭質粘土	2 cm～4 cm	植物遺体多量	自然堆積層
6	黒褐色 10YR 3/2	泥炭質粘土	2 cm～10cm	植物遺体多量	自然堆積層
7	暗灰黄色 2.5Y 5/2	泥炭質粘土	2 cm～6 cm	植物遺体多量	自然堆積層
8	赤黒色 2.5YR 1.7/1	泥炭質粘土	5 cm～10cm	植物遺体多量	自然堆積層
9	黒色 7.5YR 2/1	粘土	20cm前後	細砂・植物遺体多量	自然堆積層
10	灰オリーブ色 5Y 5/2	砂	10cm～15cm		自然堆積層
11	灰オリーブ色 7.5Y 5/2	粘土	3 cm～8 cm	植物遺体	自然堆積層
12a	オリーブ黒色 7.5Y 3/1	粘土	3 cm～6 cm	植物遺体	自然堆積層
12b	黒褐色 2.5Y 3/1	粘土	5 cm～10cm	植物遺体	自然堆積層
12c	灰色 5Y 4/1	粘土	6 cm～15cm	植物遺体	自然堆積層
13	オリーブ灰色 2.5GY 5/1	シルト質粘土	35cm前後	植物遺体	自然堆積層
14	灰色 10Y 4/1	粘土	35cm～40cm	植物遺体	自然堆積層
15	緑灰色 10GY 5/1	シルト質粘土	45cm～55cm	植物遺体	自然堆積層
16	暗緑灰色 10GY 4/1	砂礫	25cm以上	植物遺体	自然堆積層

３．検出遺構と出土遺物

(1)　３層上面

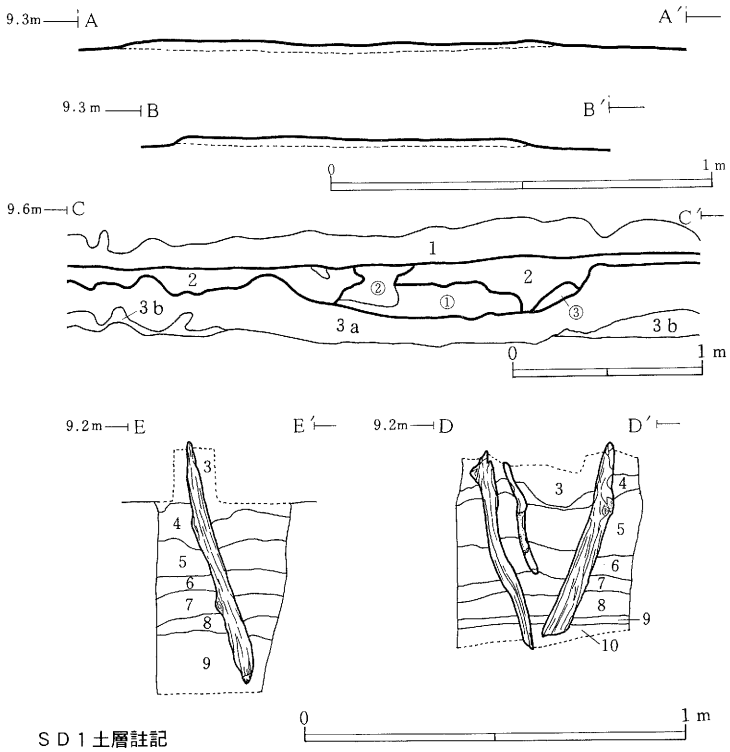
3a 層水田跡（第23図）

＜遺構状況＞　４本の畦畔（畦畔１・２・３・４）と 溝跡 （SD1）１条を検出したが、畦畔３・４は SD1 に伴うものである。また、SD1 の南岸に沿って杭列が検出された。畦畔１は調査区北



第23図　３層水田跡平面図

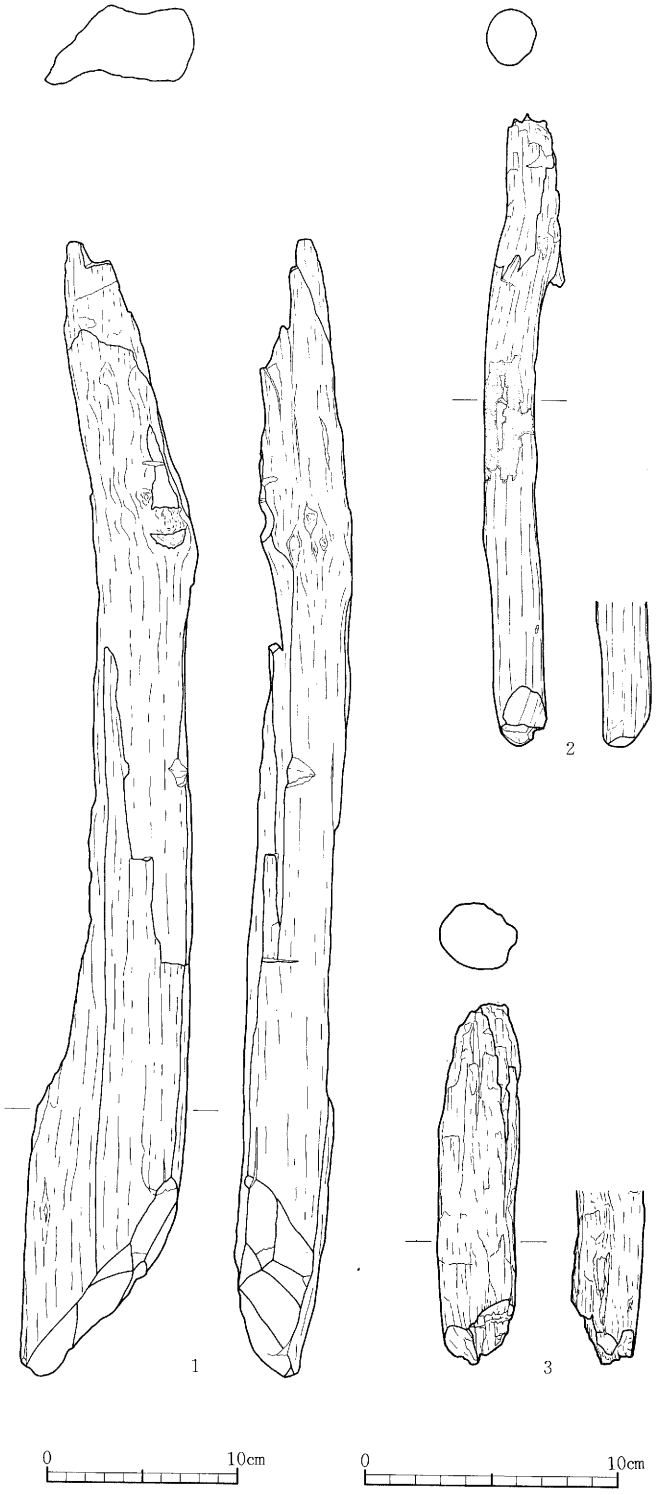
東コーナー付近で検出され、方向はＮ－6°－Ｗである。下端幅は最大で1.1ｍで、耕作土上面からの高さは２cm前後である。畦畔２は方向がＮ－56°－Ｅで下端幅が0.7～1.1m、耕作土上面からの高さは１～２cmである。なお、畦畔１・２は接続せず、この間は水口であった可能性がある。畦畔３・４は、SD1の両岸に沿って検出された。下端幅はそれぞれ0.6～１ｍ、１ｍ前後で、耕作土上面からの高さは２～４cm、２～５cmである。これらの畦畔に接続する他の畦畔は検出されなかった。また畦畔２・３間の水田面の南北幅は0.7～2.4mである。畦畔はいずれも耕作土と同じ3a層を盛り上げて作られている。耕作土3a層は泥炭を含む粘土層の3b層を攪拌することによって形成されているが、耕作深度の深い箇所では一部4a層に達しているところもある。層厚は８～22cmである。下面は凹凸が著しく、鉄分の集積は認められない。水田面の標高は9.2～9.3mの間で、全体的に南東方向に下っている。また、耕作土3a層中の一部で灰白色火山灰が少量検出されたが、これは下層のものが巻き上げられて混入したものと思われる。SD1は調査区南東部で検出されたが、北東から南西方向に緩やかに弯曲する。両岸には畦畔３・４を伴っている。上端幅は0.9～1.4m、深さは30～40cmである。断面形は船底形を呈し、底面には若干の凹凸がみられる。堆積土は砂礫、砂質シルト、粘土及び基本層２層で、遺物は出土しなかった。杭列はSD1の南岸上端に沿って検出され、杭13本からなる。これらの杭の間隔は20～70cmでほぼ直線的に並ぶ。杭材には丸木及び分割材が使用されている。



ＳＤ１土層註記

① 暗緑灰色　7.5ＧＹ４/１　粗砂及び小礫　黒褐色2.5Ｙ３/１粘土をブロック状に含む。
② 暗オリーブ灰色　５ＧＹ４/１　砂質シルト。
③ 灰色　５Ｙ４/１　粘土　粗砂が混入。

第24図　３層畦畔・溝・杭断面図



第25図　出　土　遺　物（1）

＜出土遺物＞　3a層中からの出土遺物は次のとおりである。土師器片（１点）、須恵器片（９点・３個体）、赤焼土器片（３点）、弥生土器片（40点・１個体）、石器（１点）、種子（１点）。土器片はいずれも小破片で、復元することができたのは須恵器１点のみである。土師器片はロクロ使用の坏で、内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。須恵器片はいずれも坏で、１点を除いて底部切り離し技法は回転糸切りである。復元、図化ができたものは（第27図３）であるが全体的の磨滅が著しく、切り離し技法も不明である。赤焼土器片は坏である。弥生土器片（第27図４～６）は合計40点出土したが、磨滅が著しい。いずれも地文に撚糸文が施されており同一個体の可能性もある。胎土には砂粒を多く含んでいる。詳しい時期は不明である。

No.	挿図番号	図版番号	出土遺構・層位	種　別	材　質	素材形状	長　さ	幅・直径	厚　さ	先端加工	表面加工	備　考
1	——	——	2　層	杭	竹	丸　木	11.4cm	2.6cm	——	不　明	な　し	焦　痕
2	——	——	2　層	杭	広	丸　木	41.9cm	4.6cm	——	複数方向	枝払い	樹皮遺存
3	——	——	2　層	杭	？	丸　木	66.5cm	2.6cm	——	複数方向	枝払い	折れあり
4	——	——	2　層	杭	広	丸　木	29.0cm	3.4cm	——	複数方向	な　し	樹皮遺存
5	——	——	2　層	杭	？	分割材	21.7cm	3.5cm	——	不　明	な　し	
6	——	——	2　層	杭	広	丸　木	47.5cm	2.9cm	——	複数方向	な　し	樹皮遺存
7	——	——	2　層	杭	針？	丸　木	41.9cm	3.8cm	——	複数方向	な　し	
8	——	——	2　層	杭	針	板	13.0cm	7.5cm	1.4cm	不　明	ノコギリ	
9	——	——	2　層	杭	広	丸　木	24.7cm	3.1cm	——	2　方　向	な　し	
10	——	——	3 a層水田跡	杭	広	丸　木	9.6cm	2.5cm	——	1　方　向	枝払い	樹皮遺存
11	——	——	3 a層水田跡	杭	広	丸　木	6.9cm	1.5cm	——	1　方　向	な　し	樹皮遺存
12	——	——	3 a層水田跡	杭	広	丸　木	19.5cm	2.4cm	——	2　方　向	な　し	
13	第25図１	写真56-3	3 a層水田跡	杭	針？柾目	分割材	59.5cm	7.8cm	——	1　方　向	な　し	
14	第25図２	写真56-4	3 a層水田跡	杭	針	丸　木	25.1cm	1.9cm	——	1　方　向	な　し	
15	——	——	3 a層水田跡	杭	針？	分割材	54.3cm	5.9cm	——	不　明	枝払い	
16	——	——	3 a層水田跡	杭	広	丸　木	14.4cm	1.6cm	——	不　明	な　し	樹皮遺存
17	——	——	3 a層水田跡	杭	広	丸　木	10.6cm	2.4cm	——	2　方　向	な　し	一部樹皮遺存
18	——	——	3 a層水田跡	杭	広	丸　木	14.0cm	2.2cm	——	1　方　向	枝払い	樹皮遺存
19	第25図３	写真56-2	3 a層水田跡	杭	広	丸　木	14.0cm	3.4cm	——	複数方向	枝払い	
20	——	——	3 a層水田跡	杭	針	分割材	66.0cm	4.0cm	——	複数方向	枝払い	
21	——	——	3 a層水田跡	杭	針	分割材	23.7cm	4.8cm	——	3　方　向	な　し	
22	——	——	3 a層水田跡	杭	針	2分割材	33.6cm	4.1cm	——	1方向以上	枝払い	

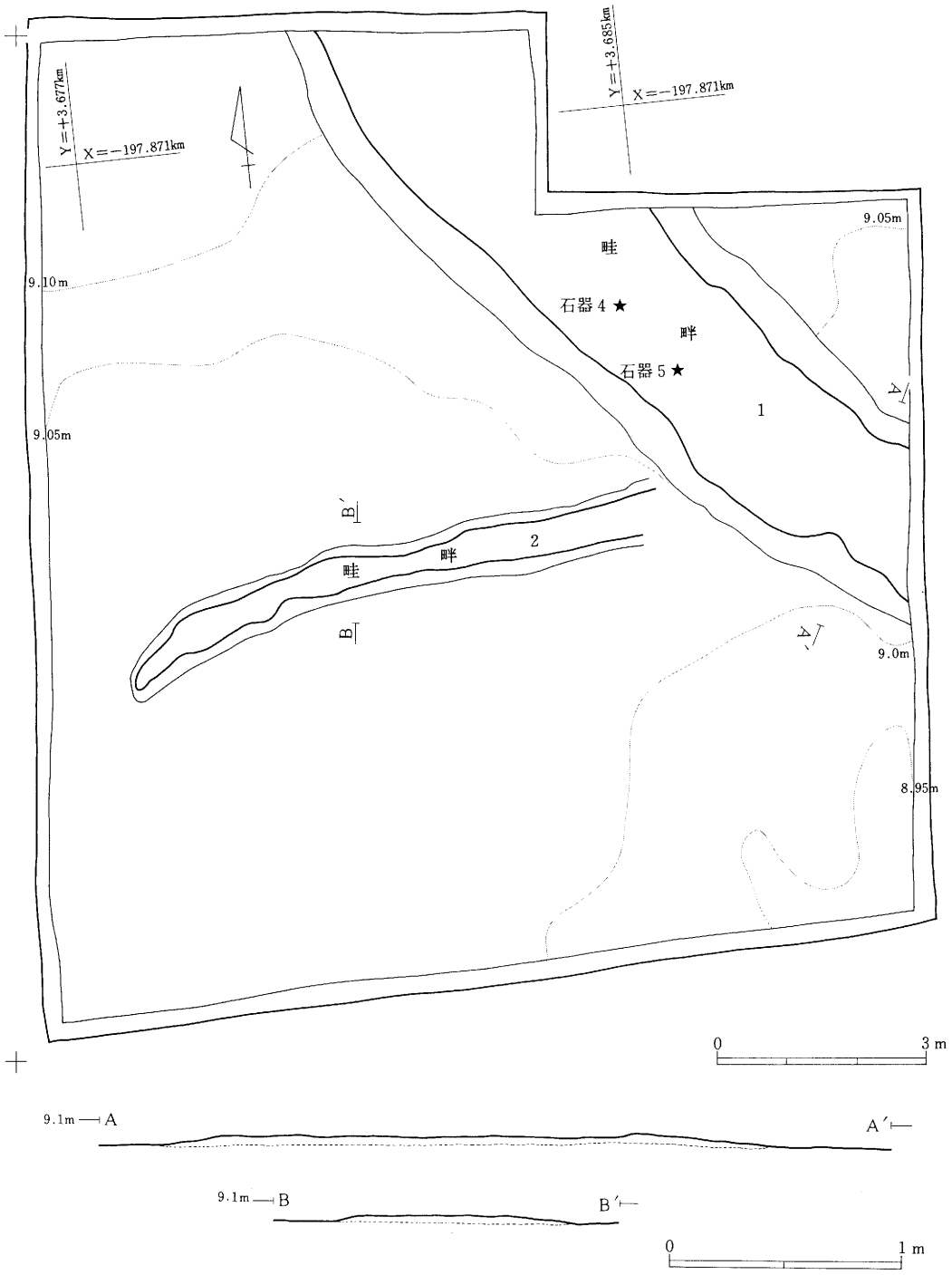
(2)　4層上面

4a層水田跡（第26図）

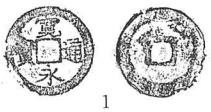
＜遺構状況＞　畦畔（畦畔１・２）２本を検出した。これによって区画される水田区画は３区画である。畦畔１は大畦畔で方向はＮ－40°－Ｗ、下端幅は2.8～3.1mで耕作土上面からの高さは１～５cmである。畦畔２は方向Ｎ－79°－Ｅで、畦畔１に取りつく小畦畔である。下端幅は0.7～0.8m、耕作土上面からの高さは１～２cmである。畦畔はいずれも耕作土と同じ4a・4a′層を盛り上げて作られている。耕作土は4a・4a′層である。両者は基本的には同じであるが、前者は泥炭分の含有が少なく粘性が強い。分布も調査区北西部分に限られる。耕作土の4a・4a′層は泥炭質粘土層の4b層を攪拌することによって形成されたもので、層厚は4a層が10～20cm、4a′層が３～15cmである。4a・4a′層とも分解が進んでいるが、前者の方がより顕著である。また両層ともに下面は凹凸が著しく、鉄分の集積は認められない。水田面の標高は9.0～9.1mの間で、全体的に南東に下っている。

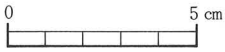
＜出土遺物＞　出土遺物は次のとおりである。弥生土器片（28点・３個体）、石器（４点）、樹木片（１点）、種子（１点）。

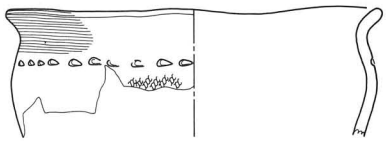
弥生土器片は合計で28点出土したが、これらは３種類に分類される。（①第27図８、②第27図10、③第27図９、④第27図７、11）①は甕である。体部上端には列点刺突文が施され、これより下位の体部にはLR縄文が施されている。口縁部から列点刺突文の間の無文帯には明瞭なヨコナデが施されている。内面調整はミガキである。所属時期は桝形囲式期前後と考えられる。②は体部資料であるが、器種は不明である。LR縄文が施されている。③は底部である。器厚が厚く、内外面とも磨滅が著しく詳細は不明である。④は壺で外面にはLR縄文が施されている

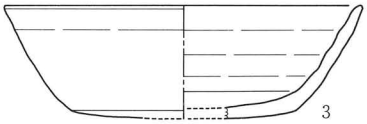


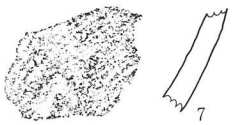
第26図　４ａ層水田跡平面・断面図











No	図版番号	遺構・層位	種　別	器種	遺存度	口　径	底　径	器　高	底径/口径	特　　徴
1	———	2　層　中	———	古銭	———	———	———	———	——	「寛永通宝」
2	———	溝(西側)	土 師 器	坏	縁　½		(7.3cm)			ロクロ、回転糸切無調整、ヘラミガキ・黒色処理
3	写真56-1	3 a層水田跡	須 恵 器	坏	約　¼	(14.2cm)	(9.0cm)	(4.5cm)	0.63	ロクロ
4	写真55-8	3 a層水田跡	弥生土器	壺	体部小片				——	R撚糸文？
5	写真55-3	3 a層水田跡	弥生土器	壺	口縁部小片				——	2本1描沈線文
6	写真55-7	3 a層水田跡	弥生土器	壺	体部小片				——	L撚糸文
7	写真55-5	4 a層水田跡	弥生土器	壺	体部小片				——	LR縄文
8	写真55-1	4 a層水田跡	弥生土器	甕	口縁部½	(15.0cm)			——	口縁部、横ナデ、体部、刺突文、LR縄文
9	写真55-2	4 a層水田跡	弥生土器	甕	底部のみ		6.8cm		——	
10	写真55-4	4 a層水田跡	弥生土器	—	体部小片				——	LR縄文
11	写真55-6	4 a層水田跡	弥生土器	壺	頸　部				——	LR縄文

(　)内は復元値

第27図　出　土　遺　物 (2)

が、小破片であるために詳細は不明である。石器は４点出土した。そのうち１点は大形板状安山岩製石器で（第28図５）、畦畔１上面からの出土である。他のものは剝片である（第28図２、３、４）。

⑶　その他の出土遺物

基本層１・２層から土師器片、赤焼土器片、須恵器片、陶器片、瓦片、杭、種子が出土した。土師器片はロクロ使用の坏で、内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。赤焼土器片は坏である。須恵器片は大甕と坏で、前者には波状沈線文が施されている。陶器、磁器のうち産地、年代などが確定できたものは４点であるが、１層からは志野･皿（16c 末～17c 前）、瀬戸･灰釉皿（室町）、灰釉皿（江戸）、２層からは土瓶あるいは壺（江戸）が出土した。瓦片は平瓦が１点１層より出土したが、焼成の特徴から近世のものと思われる。

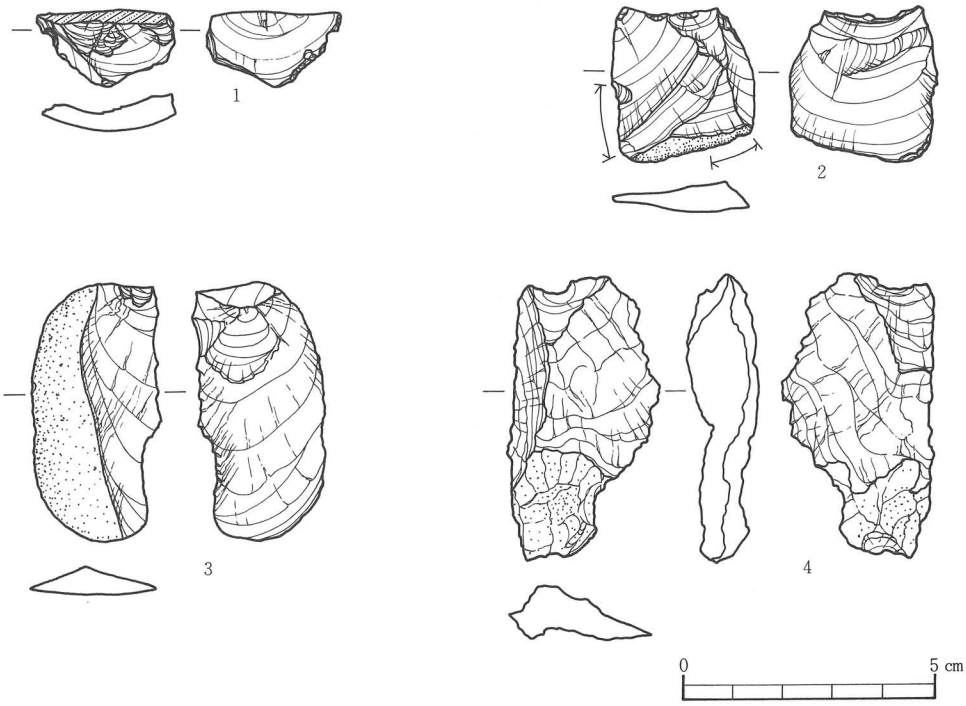
４．遺構の所属年代とまとめ

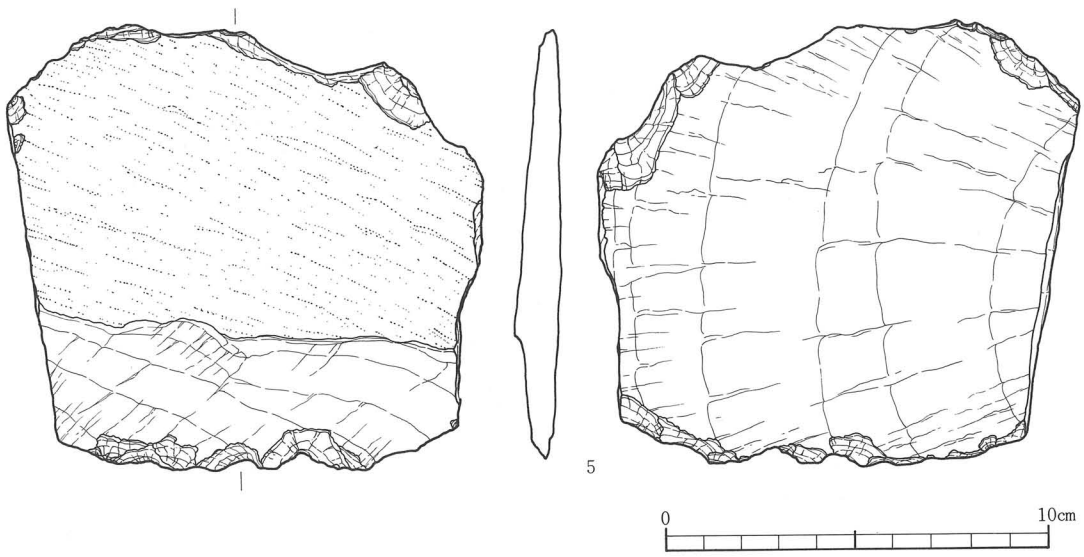
検出遺構は3a 層水田跡、4a 層水田跡で、その他水田跡の可能性がある層は２層である。

１．3a 層水田跡は畦畔４本（畦畔１・２・３・４）と溝跡１条（SD1）が検出されたが、畦畔３・４は SD1 の両岸に作られたものである。水田区画の規模、形状を明確にすることはできなかったが、水口を一箇所検出した。また、SD1 の南岸に沿って杭列が検出されたが、これは土留めの性格が考えられる。3a 層からの出土遺物は土師器、須恵器、弥生土器などであるが、南方約30m の富沢遺跡第８次調査区（工藤：1984）との層位対比や、灰白色火山灰のあり方から平安時代以降～中世に所属する水田跡と推定される。

２．4a 層水田跡は交接する２本の畦畔（畦畔１・２）を検出した。畦畔１は大畦畔、畦畔２は小畦畔である。これらの畦畔によって区画される水田区画の規模、形状は明確にすることができなかった。この水田跡の所属時期は出土遺物から、弥生時代中期頃（桝形囲式期）と推定される。

３．その他水田跡の可能性のある層は２層であるが、その時期は出土遺物から近世と考えられる。





No	図版番号	出土遺構・層位	名　　称	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)
1	写真56－５	３ａ層水田跡	剥片石器	15.5	28.5	5.5	2.4
2	写真56－６	４ａ層水田跡	微細剥離痕のある剥片	31.0	29.0	6.0	6.4
3	写真56－７	４ａ層水田跡	剥　　片	52.0	25.5	5.7	8.9
4	写真56－８	４ａ層水田跡	剥　　片	57.0	30.5	14.0	13.2
5	写真56－９	４ａ層水田跡	大形板状安山岩製石器	118.5	126.0	11.5	252.7

第28図　出　土　遺　物（3）

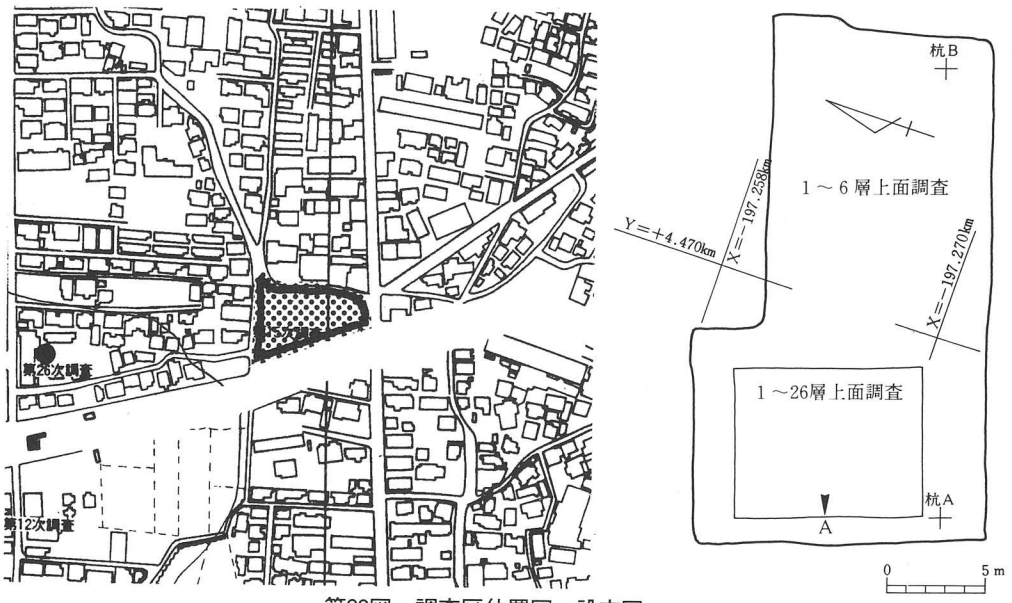
第５節　富沢遺跡第40次調査

１．調査方法

調査区の設定面積は28×12～15m（約360m²）である。調査は、盛土および直下の１層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区には土層観察および排水用の側溝を設けた。６層上面までは調査区全面の調査を実施し、７層以下は11×８ｍ（約78m²）に規模を縮小して掘り下げた。遺構の測量は、杭Ａ・Ｂを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.26584km　Ｙ＝＋4.48371km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.2738km　Ｙ＝＋4.46091km）。

２．基本層序

今回の調査では盛土下に26層が確認された。各層の土質は１～５層が砂質シルトまたはシルト、６～16層までが粘土質シルト、17～24層までが砂質シルト、25･26層が泥炭質粘土である。現代のものを除いて水田土壌の可能性があるのは、２・３・７～13・15・18・19・21層である。各層の傾きは、１～10層はほぼ水平で11層以下は南西側に緩やかに下っている。なお当調査区は第15次調査（斎野：1987）Ⅳ区に隣接しているが、各層の対応関係については遺構の対応関係と共に後述する。



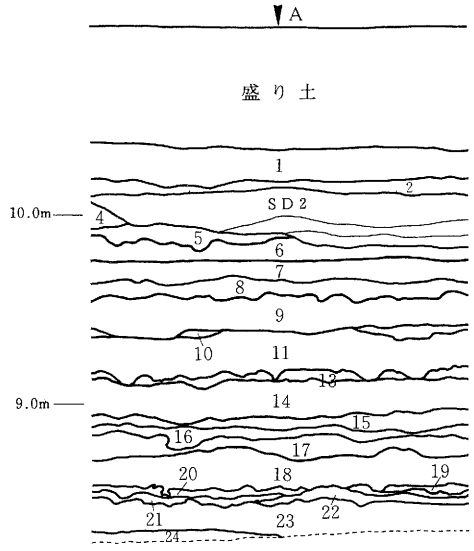
第29図　調査区位置図・設定図

３．検出遺構と出土遺物

(1)　４層上面

１号溝跡 ― SD１ ― (第31図)

調査区の北端に位置し、東西方向に走る。北側上端は調査区外のため検出できなかった。幅７ｍ以上、深さ約55cmで、断面形は有段の緩やかな「U」字形を呈する。底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は５層に分層されるが、全て基本層４層に類似した自然堆積層である。また、溝の南側に沿って長さ約11.5m、下端幅約60～120cm、高さ約２cmの土手状の高まりが



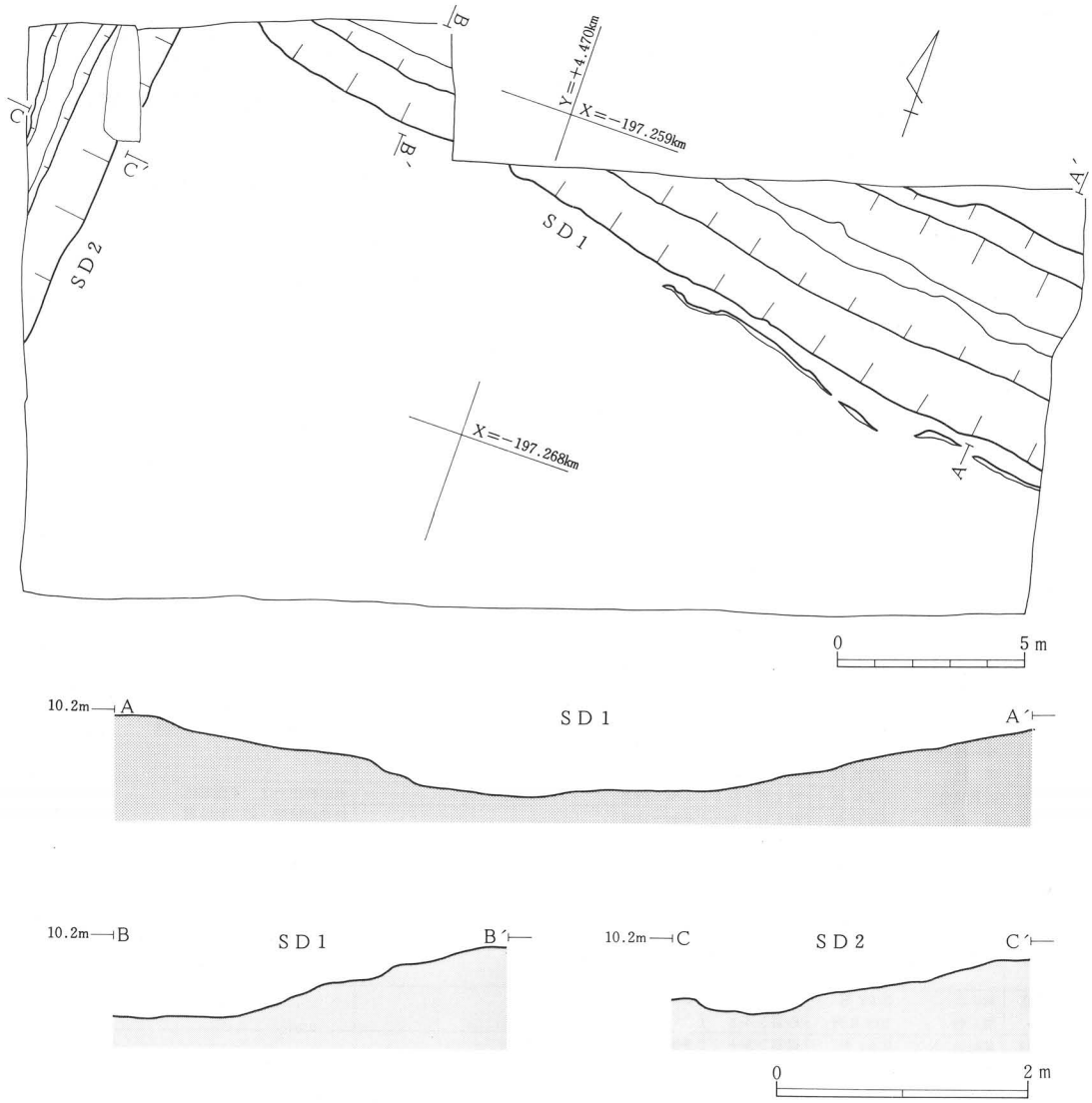
第30図　基本層序

層序	土色		土質	層厚	混入物	備考
1	灰　色	5Y 5/1		6 cm～24cm	小　礫	水田耕作土（現代）
2	灰　色	5Y 5/1	砂質シルト	2 cm～24cm	小　礫	水田耕作土？・下面若干起伏・下面に鉄分集積層
3	灰　色	5Y 5/1	砂質シルト	3 cm～8 cm	小　礫	水田耕作土？・不連続な分布・下面若干起伏・下面に鉄分集積層
4	灰黄褐色	10YR 5/2	シルト	5 cm～20cm	マンガン粒	
5	にぶい黄褐色	10YR 5/3	シルト	4 cm～25cm	マンガン粒・鉄分	
6	黒褐色	10YR 3/2	粘土質シルト	5 cm～20cm	マンガン粒	
7	にぶい黄褐色	10YR 5/3	粘土質シルト	5 cm～12cm	マンガン粒・鉄分・灰白色火山灰小ブロック	水田耕作土？・下面起伏
8	灰黄褐色	10YR 5/2	粘土質シルト	4 cm～18cm	マンガン粒・鉄分・灰白色火山灰ブロック	水田耕作土？・下面起伏
9	褐　色	10YR 5/6	粘土質シルト	8 cm～26cm	マンガン粒・鉄分・灰白色火山灰ブロック	水田耕作土？・下面起伏
10	灰黄褐色	10YR 5/2	粘土質シルト	1 cm～10cm	マンガン粒・鉄分	水田耕作土？・部分的で不連続な分布・下面起伏
11	にぶい黄橙色	10YR 7/2	粘土質シルト	10cm～30cm	マンガン粒・鉄分少量	水田耕作土？・下面起伏
12	黄褐色	10YR 5/6	粘土質シルト	2 cm～8 cm	マンガン粒・鉄分	水田耕作土？・部分的で不連続な分布・下面起伏
13	灰黄褐色	10YR 5/2	粘土質シルト	2 cm～10cm		水田耕作土？・不連続な分布・下面起伏
14	灰白色 にぶい黄橙色 褐灰色 黒　色	10YR 8/2 10YR 7/4 10YR 5/1 10YR 3/1	粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト 粘土質シルト	12cm～22cm		自然堆積層・富沢遺跡第15次調査における基本層序10ａ層に対応の可能性
15	灰黄褐色	10YR 5/2	粘土質シルト	2 cm～20cm		水田耕作土？・下面起伏
16	黒　色 灰白色	10YR 3/1 10YR 7/1	粘土質シルト 粘土質シルト	2 cm～14cm		自然堆積層・部分的分布
17	黒褐色	10YR 3/2	砂質シルト	4 cm～12cm	炭化物粒・植物遺体	部分的分布
18	褐　色	10YR 5/4	砂質シルト	2 cm～24cm	植物遺体少量	水田耕作土？
19	にぶい黄褐色	10YR 5/3	砂質シルト	5 cm～22cm	凝灰岩粒多量	水田耕作土？
20	黄灰色	2.5Y 5/1	砂質シルト	1 cm～8 cm	凝灰岩粒・植物遺体	不連続で部分的な分布
21	黄灰色	2.5Y 5/1	砂質シルト	2 cm～8 cm		水田耕作土？・不連続で部分的な分布・下面起伏
22	黄灰色 黒　色	2.5Y 5/1 10YR 3/1	砂質シルト 砂質シルト	2 cm～8 cm		
23	黄灰色 黒　色	2.5Y 5/1 10YR 3/1	砂質シルト 砂質シルト	8 cm～18cm		
24	灰　色 黒　色	5Y 5/1 10YR 3/1	砂質シルト 砂質シルト	18cm～26cm		
25	黒　色	10YR 3/1	泥炭質粘土	6 cm～11cm		
26	灰白色 黒　色	10YR 7/1 10YR 3/1	泥炭質粘土 泥炭質粘土	13cm以上		

認められた。遺物は土師器片、赤焼土器片、中世陶器片、磁器片、種子等が出土している。これらのうち底面から出土したのは中世陶器と種類判別が不可能な素焼きの土器片で、中世陶器は常滑産の甕の体部破片である。

２号溝跡 ― SD2 ― (第31図)

調査区の西端に位置し、南北方向に走る。西側上端は調査区外のため検出できなかった。幅3.6m以上、深さ約25cmで、断面形は有段の緩やかな「U」字形を呈する。底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は３層に分層されるが全て基本層４層に類似した自然堆積層である。遺物は出土しなかった。



第31図　ＳＤ１・２平面図・断面図

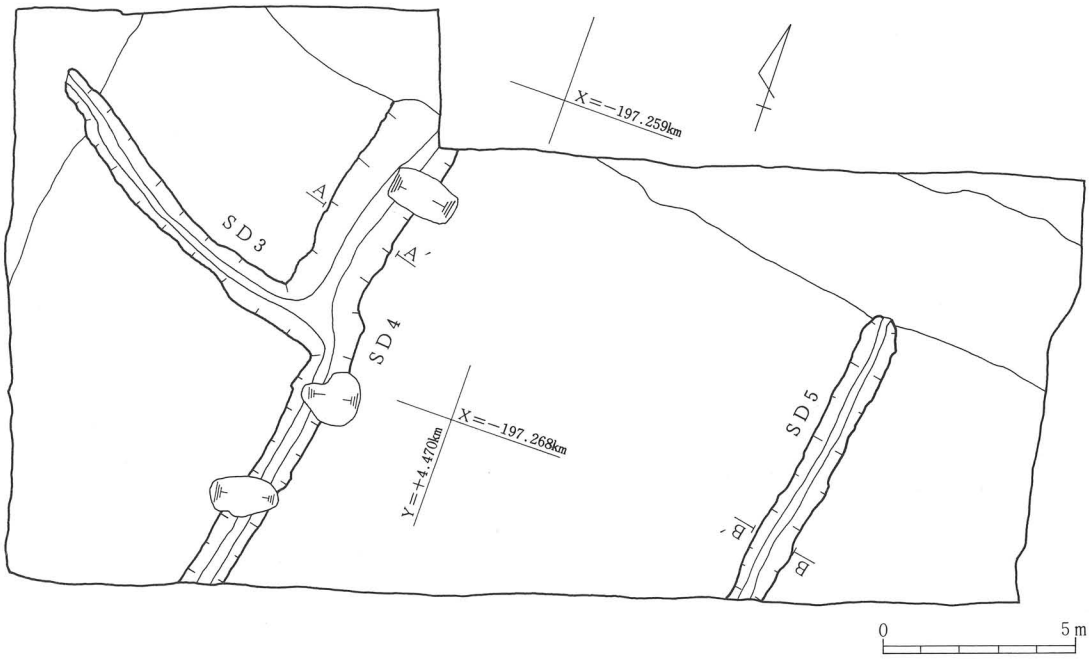
⑵　５層上面

３・４号溝跡 ― SD3・4 ― (第32図)

調査区の西部に位置し、「T」字形に接する。幅約２ m、深さ約35cm、断面形は緩やかな「U」字形を呈する。底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は２層に分層され、基本層４層に類似した自然堆積層である。遺物は堆積土中から土師器片、須恵器片等が出土した。

５号溝跡 ― SD5 ― (第32図)

調査区の東部に位置し、南北方向に走る。幅約1.2m、深さ約35cm、断面形は緩やかな「U」字形を呈する。底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は基本層４層に類似した単層である。遺物は堆積土中から土師器片が出土した。



SD４　①　褐　色　10YR4/4　シルト　３ａ層及び３ｂ層の小ブロック混在、層上部にマンガン粒がみられる。
　　②　褐　色　10YR4/4　シルト質粘土　①層に較べやや粘土質で若干暗い。
SD５　①　暗褐色　10YR3/4　シルト　マンガン粒が斑にみられる。

第32図　ＳＤ３～５平面・断面図

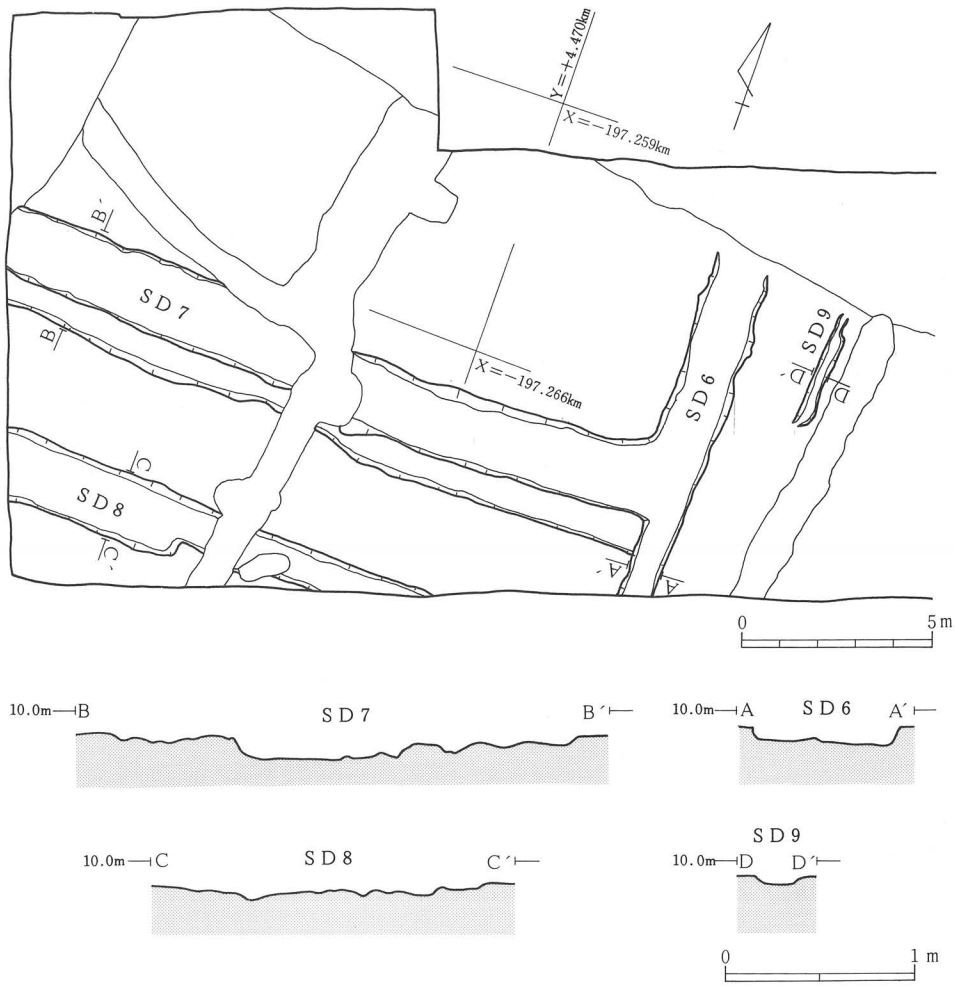
⑶　６層上面

６号溝跡 ― SD6 ― (第33図)

調査区の東部を南北方向に走り、東西方向に走るSD7と「T」字状に接する。切り合い関係は認められなかった。幅約0.7～1.5m、深さ約10cmで、壁及び底面は凹凸が著しい。底面のレベルは南側に向かって緩やかに下っている。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土しなかった。

７号溝跡 ― SD7 ― (第33図)

調査区の中央部を東西方向に走り、SD6と「T」字状に接する。幅約2.8m、深さ約10cmで、南壁側が２段に掘りこまれている。壁及び底面は凹凸が著しい。底面のレベルは西側に向かって緩やかに下っている。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土しなかった。



第33図　ＳＤ６～９平面・断面図

８号溝跡 ― SD8 ― (第33図)

調査区の南部に位置し、SD7 と並行している。幅約１～1.8m、深さ約10cm で、壁及び底面は凹凸が著しい。底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土しなかった。

９号溝跡 ― SD9 ― (第33図)

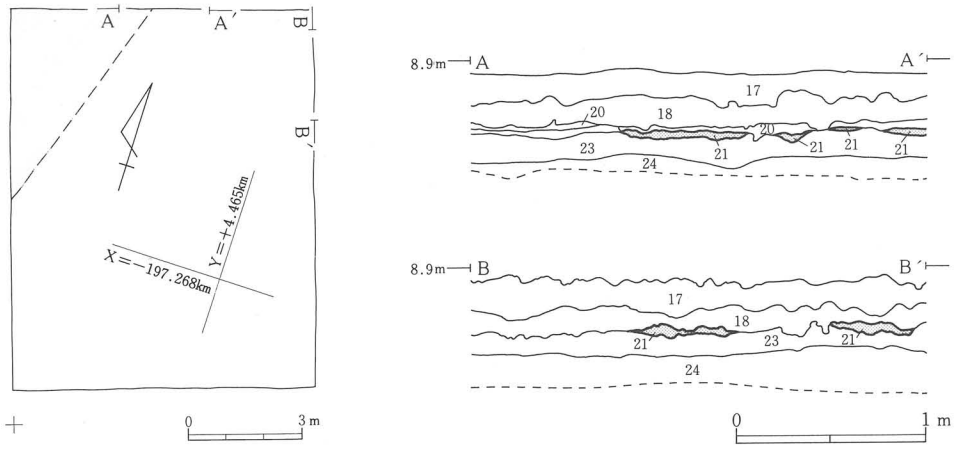
調査区の東部に位置し、SD6 と並行している。検出した長さは約3.4m で、幅約30cm、深さ約５ cm で、底面のレベルはほぼ水平である。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土しなかった。

(4)　21層上面

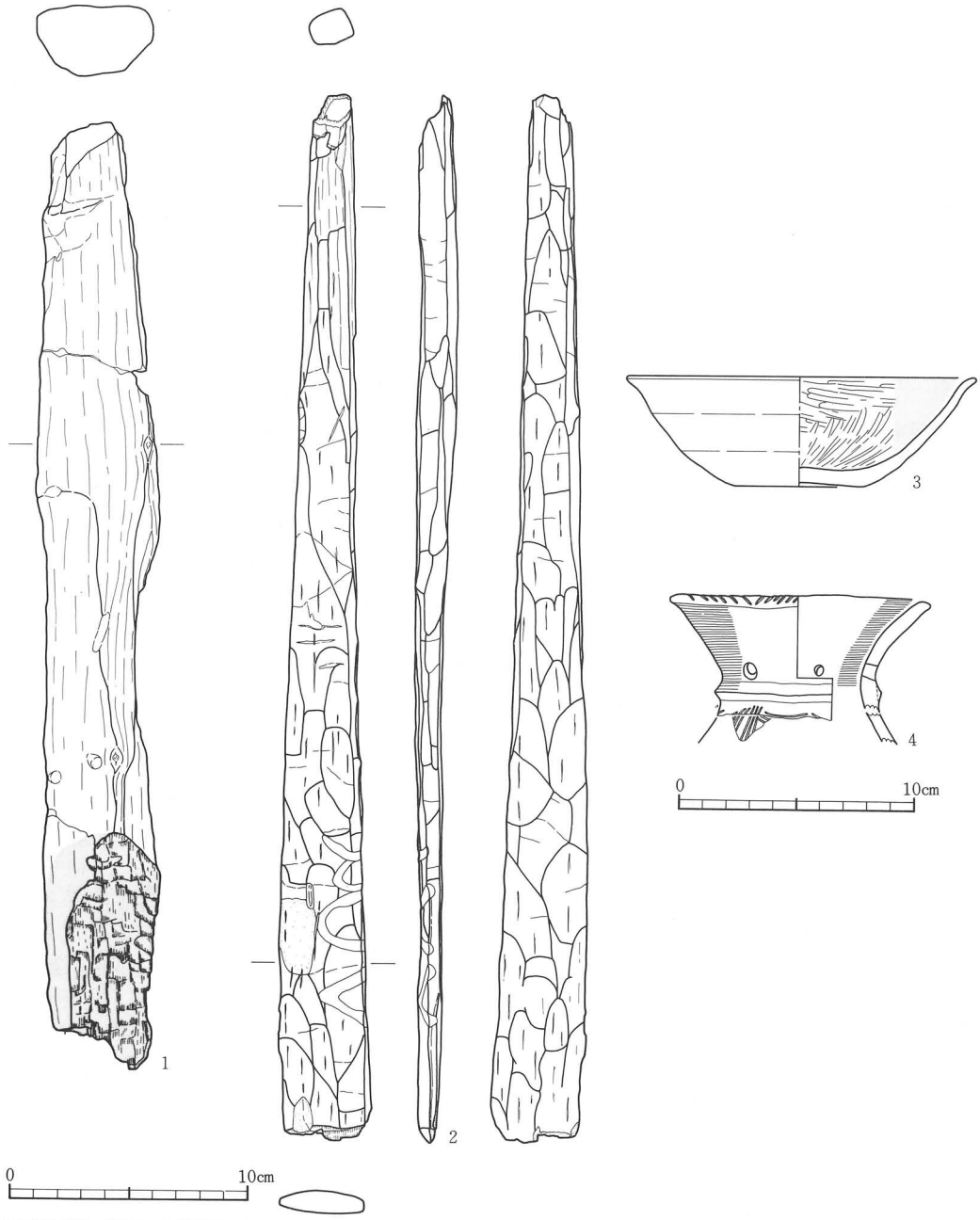
21層水田跡（第34図）

耕作土のみで畦畔などは検出できなかったが、耕作域（21層）と非耕作域（22層）との境界が認められ、また第15次調査区の水田跡と同一の層であることが確認されたため水田跡と確定した。ただ、耕作域と非耕作域との境界は平面で確認したのではなく、調査区外壁セクションでの確認である（第30図)。境界ラインは調査区の北西部に想定され、N－18°－E の方向をとる。耕作域はこのラインの南東側である。耕作土（21層）は直下にある砂質シルトの互層（22層）を攪拌したもので、厚さは２～８ cm である。下面は凹凸が著しく、鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は約8.525～8.575m で西側へ緩やかな下り傾斜を示す。

なお、遺物は出土しなかった。



第34図　21層水田跡平面・断面図

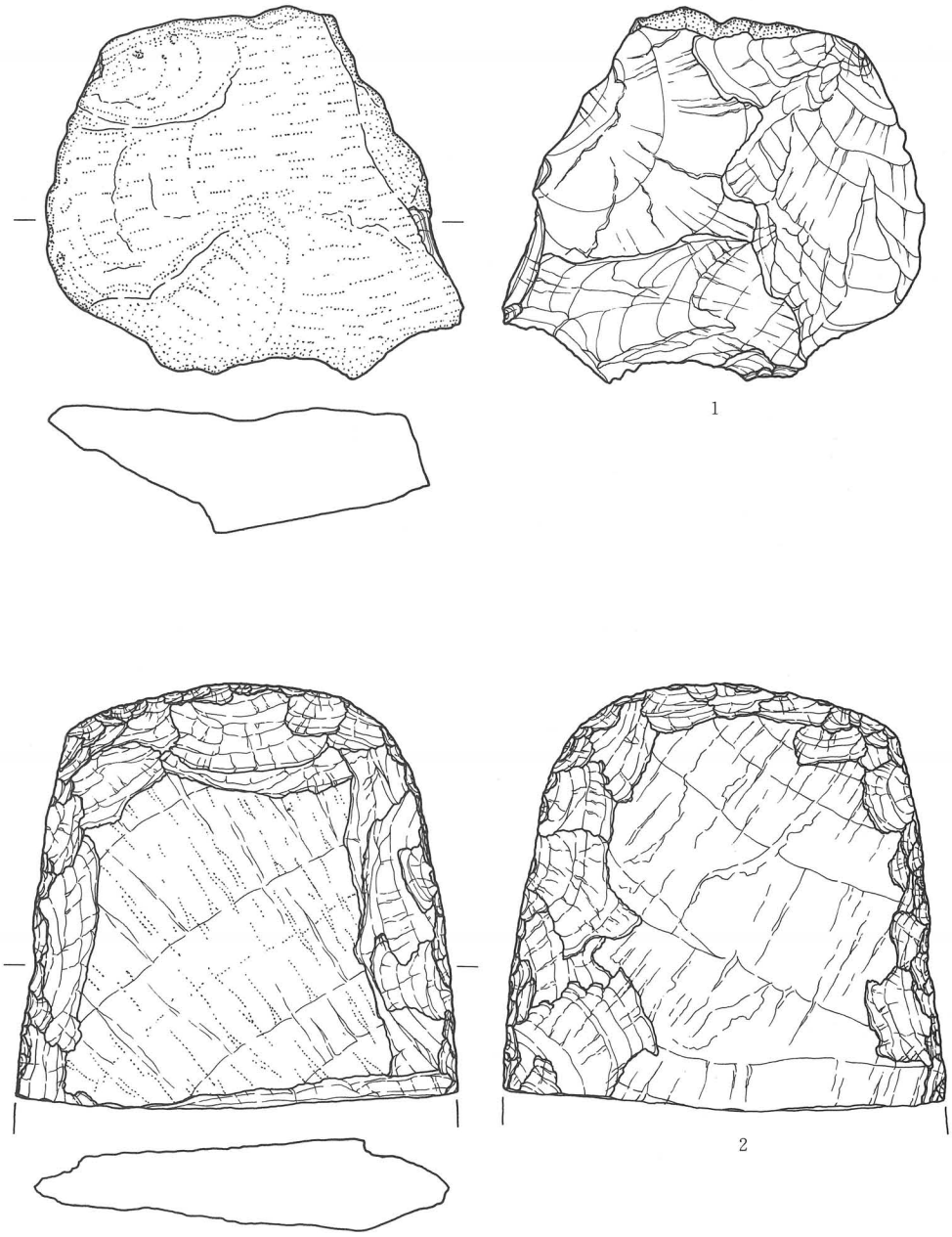


No.	図版番号	出土遺構・層位	種　別	材　質	素材形状	長　さ	幅・直径	厚　さ	先端加工	表面加工	備　考
1	写真57-3	18　層	加工材	広	4分割材	40.1cm	4.4cm	——	複数方向	な　し	端部に焦痕
2	写真57-4	18　層	木製品	柾目～一部板目	板・一部棒状	44.3cm	3.8cm	0.8cm	不　明	全面に面取り	一部焦痕

No.	図版番号	遺構・層位	種　別	器種	遺存度	口　径	底　径	器　高	底径／口径	特　　徴
3	写真57-1	6　層	土師器	坏	約 1/3	(14.8cm)	5.4cm	(4.7cm)	0.36	ロクロ、回転糸切無調整、ヘラミガキ・黒色処理
4	写真57-2	18　層	弥生土器	壺	口縁～頸部	11.1cm			——	横位隆帯１条、穿孔２（外面→内面）→横ナデ→口縁部、斜位沈線多条（穿孔部分を境として逆方向、外面→内面）頸部、３本１描沈線（縦位２条４単位→連孤文多重）ナデ（口縁部横ナデ）→口縁部下半、縦位の粗いミガキ

第35図　出土遺物（1）

（　）内は複元値



No.	図版番号	層　位	名　　称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　　質	備　　考
1	写真57-5	18　層	石　　核	77.0	86.0	24.0	170.1	不　　明	変成岩か堆積岩が硅化したもの
2	写真57-6	18　層	石　　鏃	87.5	91.0	19.0	218.6	細粒砂岩？	搬入品の可能性

第36図　出　土　遺　物（2）

(5)　その他の出土遺物

基本層４～７・９層からは、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、種類判別不能な素焼きの土器片、陶器片、磁器片、瓦片、土製品が出土している。このうち土師器はすべてロクロ使用・内面ヘラミガキ後黒色処理されたもので、４～７層から出土している。図示できたのは６層出土の１点のみである（第35図３）。また、陶器、磁器で産地・年代などが確定できたものは９点あるが、そのうち４層中からは在地の中世陶器２点及び瀬戸・美濃の灰釉皿１点（16世紀末～17世紀初頭）が出土し、５・６層から常滑産の甕３点（中世）、瀬戸産の碗２点（15世紀）、灰釉の碗１点（15世紀）が出土している。基本層18層からは弥生土器１点（第35図４）、石器２点（第36図）、加工材２点（第35図１・２）のほか樹木片、種子が出土した。弥生土器は十三塚式に比定できるものである。石器のうち１点は石核である。他の１点は打製の石鏃と思われ、破損している。加工材のうち１点は棒状を呈し、全面が面取りされている。用途は不明である。

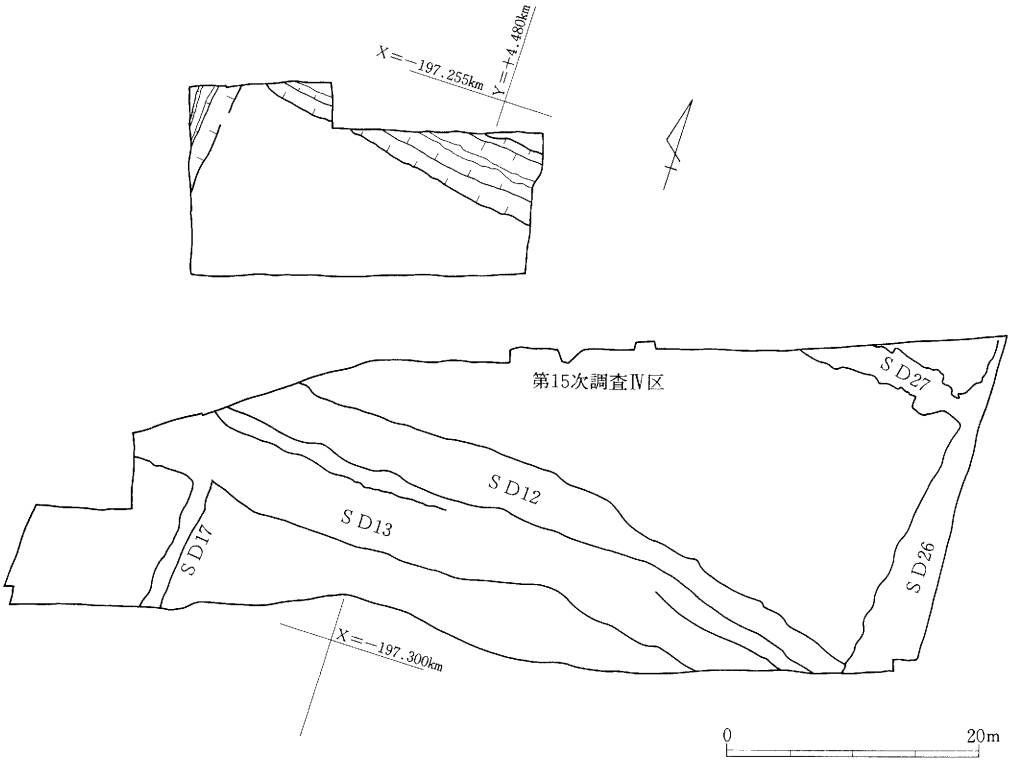
４．遺構の所属年代とまとめ

１．検出した遺構は４～６層上面の溝群（SD1～9）と21層水田跡である。また、水田跡の可能性のある層としては基本層とした２・３・７～13・15・18・19層の各層が上げられる。これらの年代については隣接する第15次調査の結果も考慮に入れると、以下のように推定される。なお、第15次調査の基本層序と確実に対応できたのは１～13層と20～26層で、その間の14～19層の対応関係を明らかにすることは出来なかった。

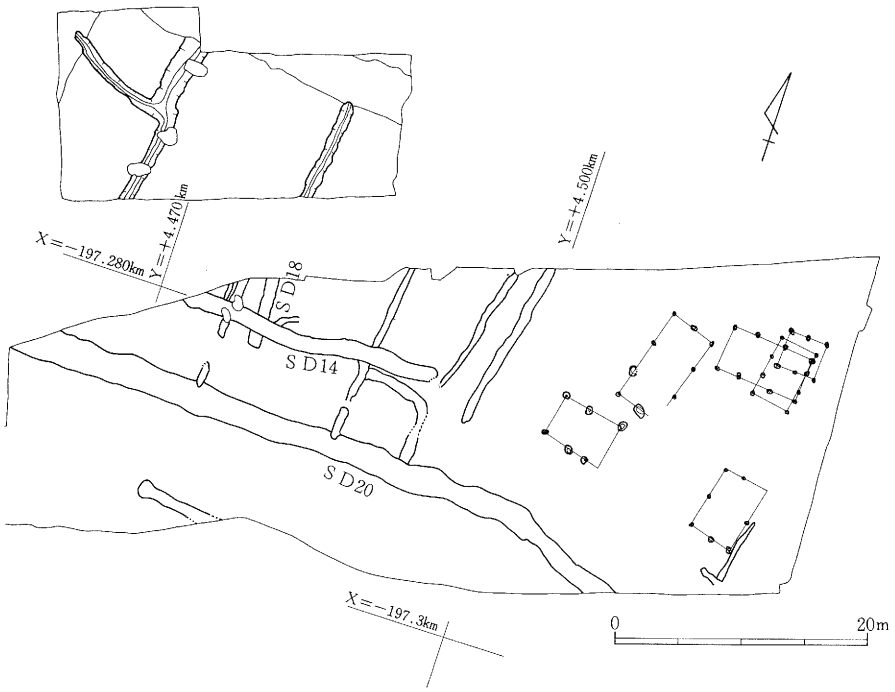
２・３層	近世以降……	第15次調査１・２層
４　層	中世……	３ａ層
５　層	中世……	３ａ～３ｂ層
６　層	中世……	３ｂ層
７　層	平安時代（灰白色火山灰降下以降）……	４ｂ層
８　層	平安時代（灰白色火山灰降下前後）……	５ａ層
９　層	平安時代（灰白色火山灰降下以前）……	６　層
10・11層	……	７ｂ層
12・13層	……	７ｃ層
14～19層	……	８～12層
20　層	……	13ａ層
21　層	弥生時代・桝形囲式期以前……	13ｂ層
22　層	……	13ｃ層
23　層	……	14ａ層

24　層 …… 14ｂ層
25　層 …… 15　層
26　層 …… 16　層

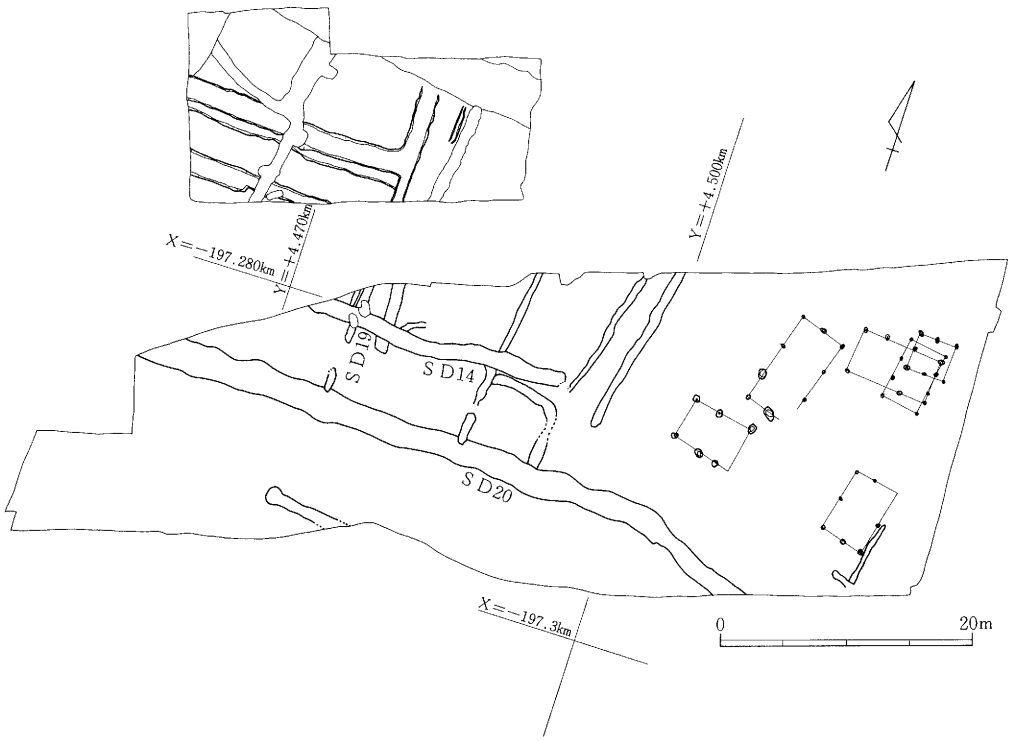
２．中世の遺構は４層上面～６層上面まで３時期にわたって検出された。第15次調査では3a・3b層の２時期のみの確認に留まっているが、3b層の遺構に切り合い関係が認められるので、本来は当調査区のように３時期程度の変遷があったものと考えられる。両調査区で検出された遺構の応対関係は第37～39図に示すとおりである。なお第15次調査ではこれらを13～14世紀に位置づけているが、今回の調査では明確な時期を示す遺物としては15～17世紀初頭のものが出土したのみであった。今後の検討課題としたい。



第37図　40次４層・15次３ａ層平面図



第38図　40次５層・15次３ｂ層平面図



第39図　40次６層・15次３ｂ層平面図

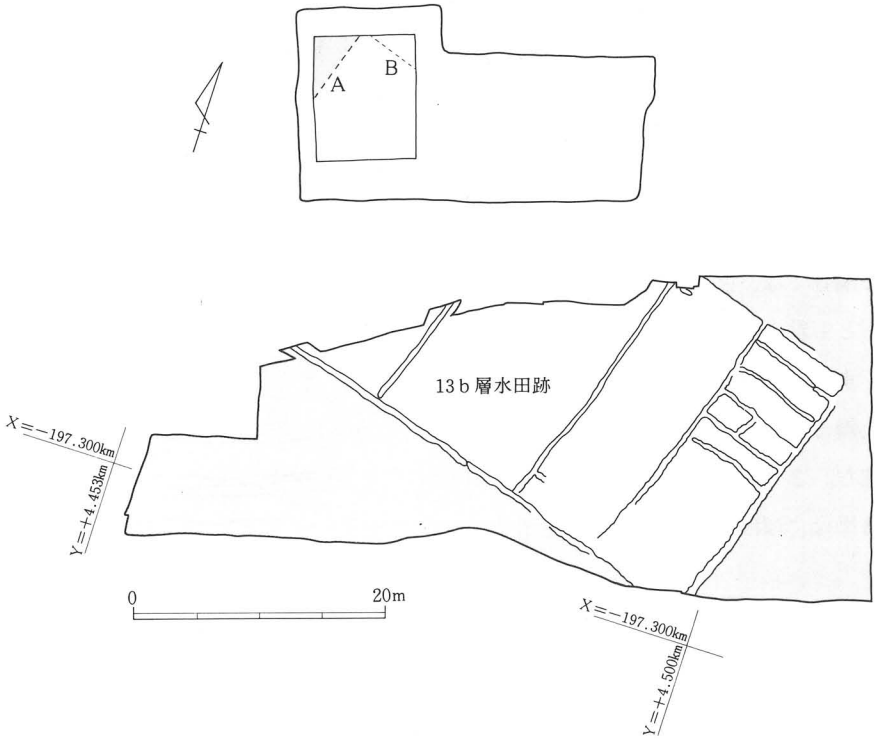
３．21層水田跡は桝形囲式期以前に位置づけられている第15次調査13b層水田跡に対応する。第15次調査では水田域の北・東・南側に非耕作域を検出しており、水田域の西側への広がりが不明であった。今回の調査では断面観察ではあるが、耕作域と非耕作域との境界ラインを想定することができ、これによって水田域の西端を確認することができた（第40図A）。

なお調査区の北部にも水田域北側の境界ラインの存在が予想されたが（第40図B）、この付近は上層の19層による攪乱が著しく、21層は部分的に認められただけであった。したがって、この部分については耕作域と非耕作域の区別をすることは困難であり、確実な境界ラインを想定することは出来なかった。ただ調査区の南半部では耕作土が連続的に認められることから以下のような可能性は考えられる。

①境界ラインは第15次調査区から直線的に延び、推定ラインBに接続する。この場合の耕作域は南北約23.5m、東西約47mの長方形で面積は約1105m²である。

②境界ラインは第15次調査区から北側に振れて延び、推定ラインBよりも北側を通る。この場合の耕作域は西辺がやや長い不正な長方形となる。

③境界ラインは第15次調査区から直線的に延びるのではなく、途中で北側に屈曲する。この場合の耕作域は①、②よりもさらに北側に拡大された形となる。

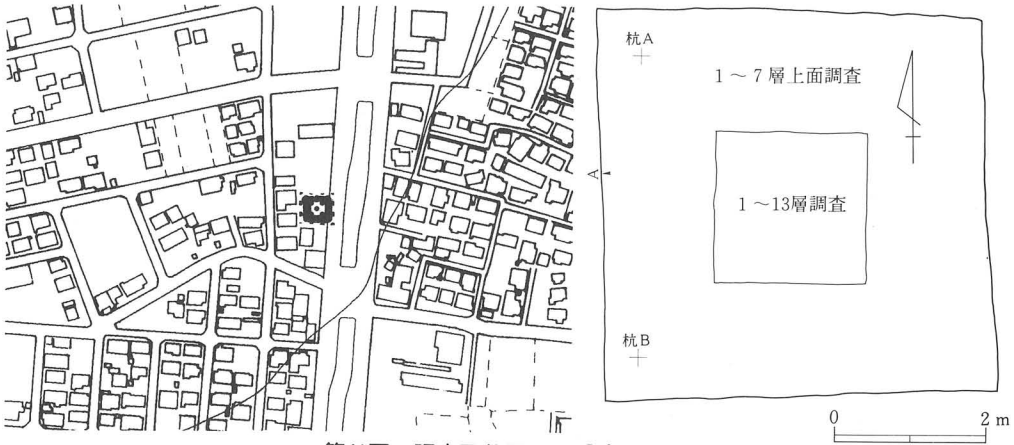


第40図　40次21層・15次13b層平面図

第6節　富沢遺跡第41次調査

1．調査方法

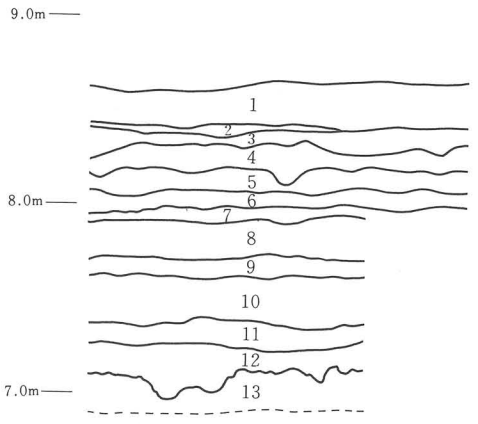
調査区の設定面積は約5×5m（26m²）である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。7層上面までは、調査区全面の精査を実施し、7層以下は、約2×2mの試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。



第41図　調査区位置図・設定図

2．基本層序

今回の調査では、盛土下に13層が確認された。各層とも粘土層で、特に6・7層は粘性が強い。また、10層以下では泥炭分を含む泥炭質粘土層となる。グライ化は、7層以下から漸次進む。2～5層は水田土壌の可能性がある。各層は、ほぼ水平な堆積状況を示している。



第42図　基　本　層　序

層序	土色	土質	層厚	混入物	備考
1	暗緑灰色　10G Y 3/1	粘土	15cm～25cm		水田耕作土（現代）
2	暗オリーブ灰色 5G Y 4/1	粘土	2 cm～8 cm	マンガン粒	水田耕作土？・部分的分布
3	灰黄褐色　10Y R 4/2	粘土	10cm～18cm	マンガン粒多量	水田耕作土？下面若干起伏
4	赤褐色　5 Y R 4/6	粘土	8 cm～16cm	マンガン粒多量	水田耕作土？・下面若干起伏・鉄分集積層
5	にぶい黄橙色　10Y R 6/4	粘土	6 cm～15cm	マンガン粒多量・鉄分	水田耕作土？・下面若干起伏・上面に鉄分集積層
6	暗褐色　10Y R 3/4 にぶい黄橙色　10Y R 6/4	粘土	5 cm～10cm	マンガン粒多量	互層・自然堆積層
7	灰　色　5 Y 4/1	粘土	8 cm～18cm		
8	明緑灰色　5 G 7/1 オリーブ黒色　5 Y 3/1	粘土	20cm前後		互層・自然堆積層
9	黒　色　5 Y R 1.7/1	粘土	10cm前後	泥炭微量	自然堆積層
10	暗灰黄色　2.5Y 4/2 黒　色　5 Y R 1.7/1	泥炭質粘土	18cm～28cm	泥炭	互層・自然堆積層
11	黒　色　5 Y 3/1	泥炭質粘土	8 cm～14cm	泥炭多量	
12	オリーブ黒色　10Y 3/1	泥炭質粘土	10cm～25cm	炭化物粒・泥炭	
13	暗オリーブ灰色 5 G Y 3/1	泥炭質粘土	20cm以上	泥炭	

3．検出遺構と出土遺物

(1)　3層上面

杭列

調査区北東側で、南北方向に4本出土した。この内3本は集中している。この3本は矢板で、他の1本は分割材である。杭列検出付近は2層が存在せず、1層下が直接3層となっており、当層から打ち込まれたかどうかは不明である。

(2)　4層上面

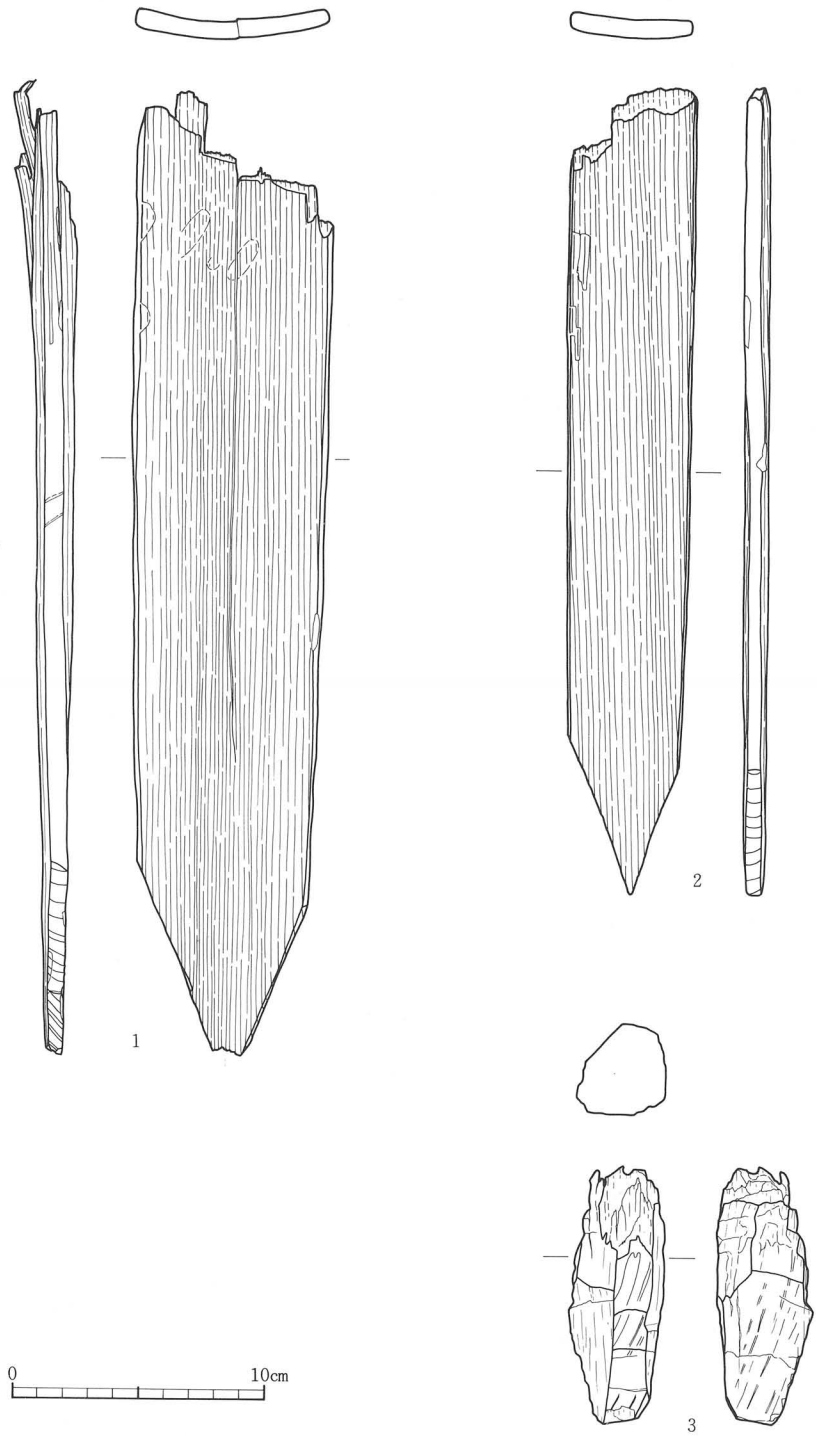
1号溝跡 ― SD1 ― (第44図)

調査区の東隅に位置し、南北方向に直線的に走行する。上端幅約130cm、深さ約15～25cmで、断面形は「U」字状を呈する。底面・壁面は凹凸が著しい。堆積土は粘土の単層。出土遺物は、底面より摩滅した土器片が1点出土したのみである。

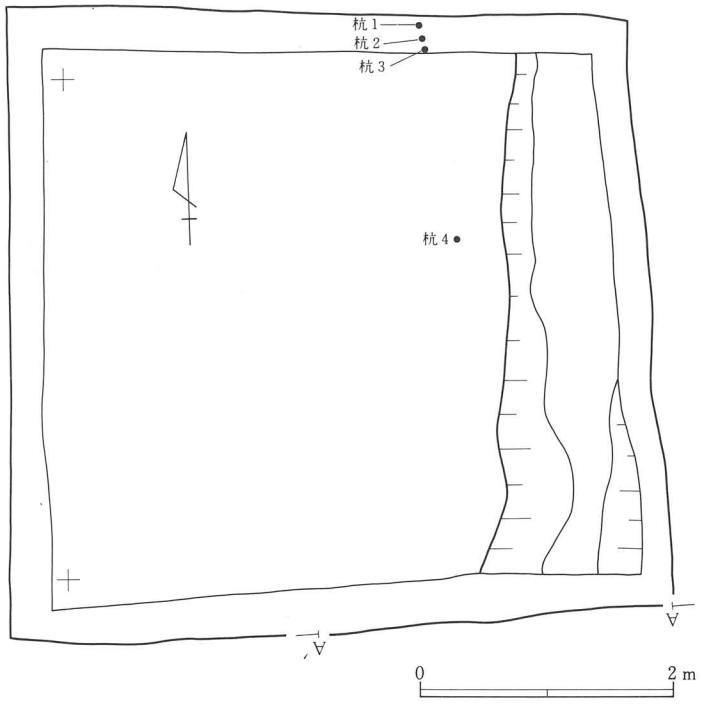
(3)　その他の出土遺物

2層中よりロクロ使用の土師器片が1点出土したのみである。

No.	挿図番号	図版番号	出土遺構・層位	種別	材質	素材形状	長さ	幅・直径	厚さ	先端加工	表面加工	備考
1	第43図 1	写真58－1	3層？	杭	針、柾目	板	38.7cm	7.8cm	0.8cm	2 方向	平滑	ノコギリ使用
2	第43図 2	写真58－2	3層？	杭	針、柾目	板	32.1cm	5.0cm	0.8cm	2 方向	平滑	ノコギリ使用
3	――	――	3層？	杭	針、柾目	板	15.0cm	3.5cm	0.5cm	2 方向	平滑	ノコギリ使用
4	第43図 3	写真58－3	3層？	杭	針	分割材	10.2cm	3.5cm		複数方向	不明	先端のみ遺存



第43図　出　土　遺　物



ＳＤ１　土層註記
①　黒褐色　５ＹＲ3/1　粘土　下層の土をブロックで少量含む。

第44図　杭（３層）平面・ＳＤ１（４層）平面・断面図

４．ま　と　め

１．検出遺構としては、杭列、SD1がある。これらは水田跡に伴う施設、水路の可能性もある。これら遺構及び各層の所属年代であるが、時期決定資料がなく、周辺調査区との層位の対応も不可能で、年代は不明である。

２．土層の断面観察より、２・４・５層は水田耕作土の可能性のある層としたが、これら各層からは、イネのプラント・オパールは検出されなかった。今後の検討課題としたい。

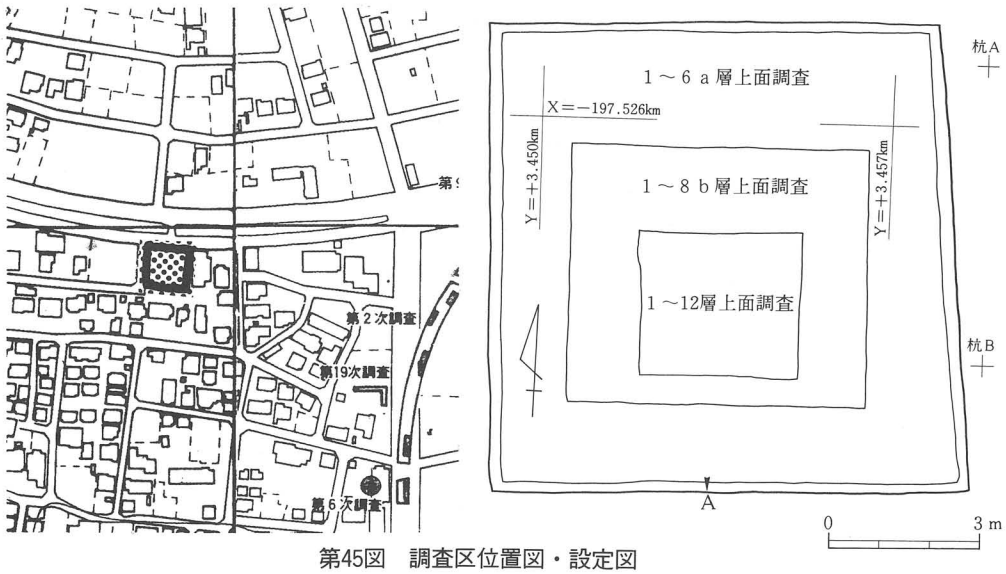
第７節　富沢遺跡第42次調査

１．調査方法

調査区の設定面積は約80m² である。調査は盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力によって行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。6a 層までは調査区全面の精査を実施した。6a 層より8b 層上面までは安全確保のために調査区を内側に縮小して、約30m² で調査を行った。8b 層以下は3×3m の試掘区を設定し、12層までの掘り下げを行った。遺構の測量は、杭Ａ・Ｂを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.52475km、Ｙ＝＋3.45888km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.53077km、Ｙ＝＋3.45892km）。

２．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別12層、細別では19層が確認された。各層の土質は１～５層がシルト質、6a～6e 層は砂礫及び砂質シルトで河川などの氾濫によって堆積したものと思われる。７層以下は粘土質となるが8a･8b 層は泥炭を含み、8a 層は泥炭質粘土である。また、9a･9c 層は砂である。グライ化は11層から漸次進み、12層では顕著になる。現代のものを除く水田土壌は４層であるが、この他に２・３・７層も水田土壌の可能性がある。また３層からは灰白色火山灰が少量検出されているが、これは下層のものが巻き上げられて混入したものと考えられる。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。遺物出土層は１・３・４・8b 層である。



第45図　調査区位置図・設定図

層序	土	色	土　質	層　厚	混　入　物	備　考
1	黒褐色	10YR 3/2	砂質シルト	4 cm～15cm	鉄分	水田耕作土(現代)・下面に鉄分集積層
2	黒褐色	2.5Y 3/1	砂質シルト	4 cm～10cm	鉄分	水田耕作土？・下面起伏
3	暗褐色	10YR 3/3	粘土質シルト	6 cm～15cm	灰白色火山灰粒	水田耕作土？・下面起伏
4	黒褐色	10YR 3/2	粘土質シルト	7 cm～12cm	鉄分・粗砂多量	水田耕作土・下面起伏
5	黒褐色	10YR 3/2	粘土質シルト	2 cm～ 8 cm	鉄分・粗砂少量	不連続で部分的な分布
6 a	褐灰色	10YR 5/1	砂	30cm～35cm	鉄分・小礫多量	自然堆積層
6 b	褐灰色	10YR 5/1	砂礫	35cm程度	鉄分	自然堆積層
6 c	黒褐色	10YR 3/2	砂質シルト	3 cm～ 8 cm		自然堆積層
6 d	褐灰色	10YR 5/1	砂	6 cm～20cm		自然堆積層
6 e	黒褐色	10YR 3/2	砂質シルト	16cm～30cm		自然堆積層
7	黒　色	5Y 3/1	粘土	3 cm～14cm	植物遺体	水田耕作土？・下面起伏
8 a	オリーブ黒色	7.5Y 3/1	泥炭質粘土	4 cm～10cm	植物遺体	自然堆積層
8 b	灰　色 黒　色	10Y 5/1 2.5Y 3/1	泥炭質粘土 粘土	10cm前後	植物遺体 植物遺体	自然堆積層
9 a	にぶい黄褐色	10YR 5/3	砂	8 cm程度		自然堆積層
9 b	灰　色 黒　色	7.5Y 5/1 7.5Y 3/1	シルト質粘土 シルト質粘土	10cm～18cm	植物遺体 植物遺体	自然堆積層
9 c	にぶい黄褐色	10YR 5/3	砂	10cm程度		自然堆積層
10	黒　色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	4 cm前後	植物遺体	自然堆積層
11	黄灰色	2.5Y 5/1	粘土	6 cm～20cm	植物遺体	自然堆積層
12	灰　色	10Y 5/1	シルト質粘土	50cm以上	植物遺体少量	自然堆積層

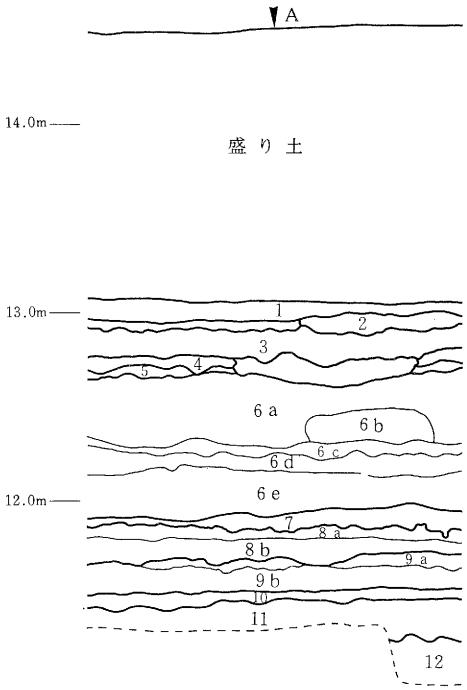
3．検出遺構と出土遺物

(1)　4層上面

4層水田跡（第47図）

＜遺構状況＞　調査区西半部で大畦畔を検出したが、部分的な検出で形状、規模は明らかでない。方向はN－39°－Eで、検出部分での最大幅は4.5m、耕作土上面からの高さは2～5cmである。これに取りつく小畦畔は検出されなかった。畦畔は、耕作土と同じ4層を盛り上げて作られている。耕作土4層は層厚7～12cmで、分解が進んでいる。下面は凹凸が著しく、鉄分の集積は認められない。水田面の標高は12.75～12.8mの間で、全体的に南東方向に下っている。

＜出土遺物＞　作土中より須恵器坏が1点出土した（第50図2）。底部を欠いており、切り離し技法は不明である。胎土は緻密であるが、若干の細砂粒及び白色針状物質を含んでいる。

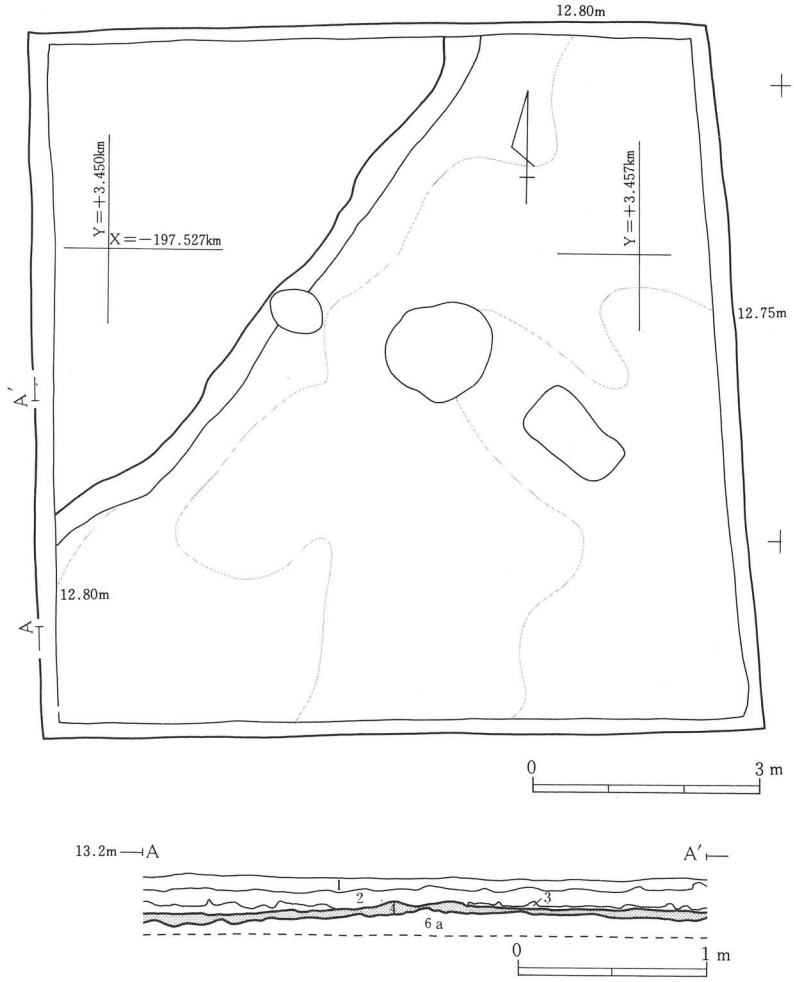


第46図　基　本　層　序

(2)　6層上面

1号溝跡―SD1―・1～7号土坑―SK1～7―（第48図）

SD1は調査区を北東から南西方向に横切る溝跡で、方向はN－64°－Eである。上端幅は

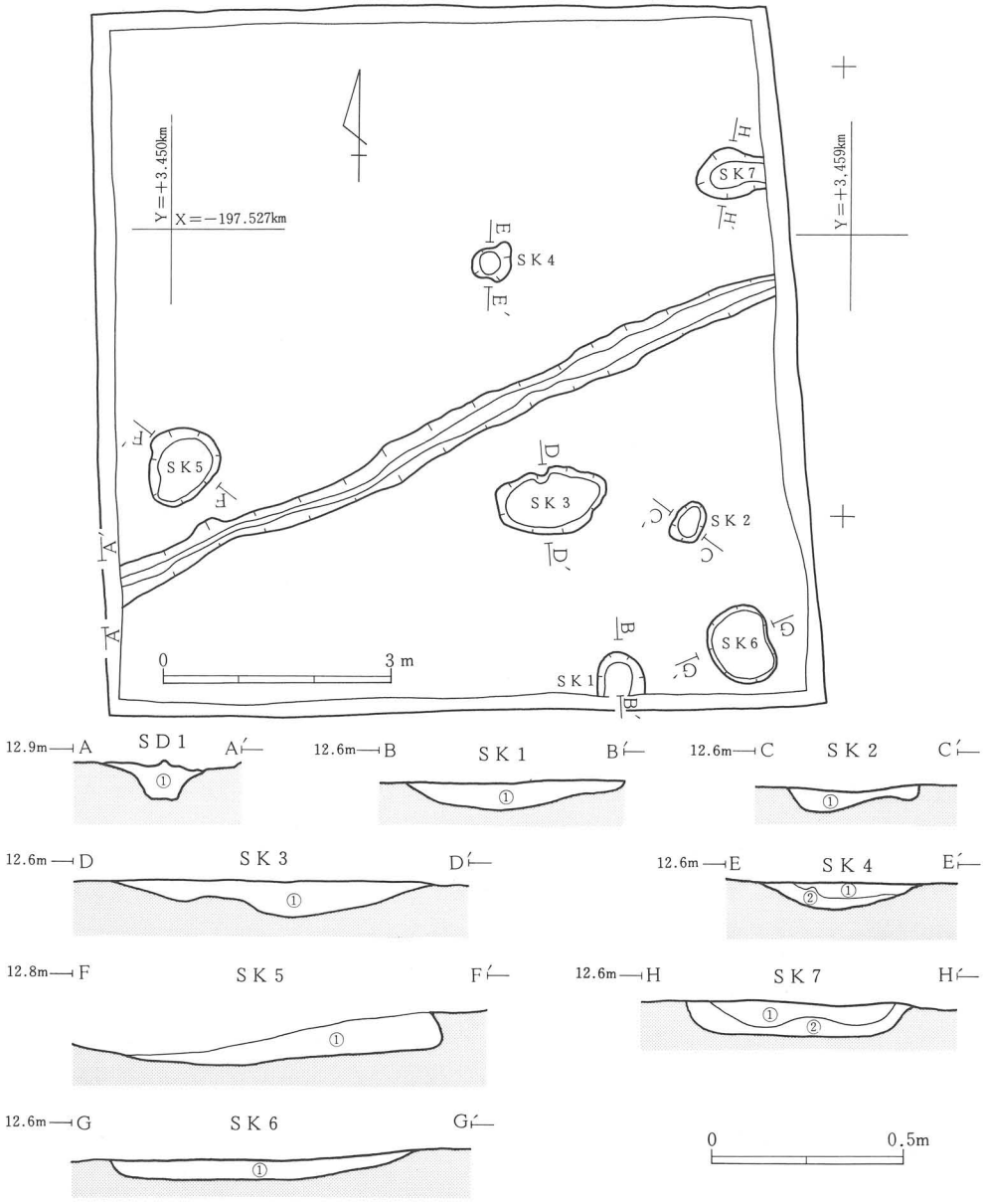


第47図　４層水田跡平面・断面図

40～60cm、下端幅は10～25cm である。深さは約20cm 程度で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は砂質シルトの単層である。土坑は平面形がいずれも楕円形を呈し、掘りかたも浅い。遺構の検出面である6a 層は河川などの氾濫によって堆積したと思われる砂層で生活面とは考えにくく、掘りこみ面は上層であった可能性が強い。溝跡、土坑ともに性格は不明である。溝跡、土坑とも遺物の出土は無かった。

土坑計測表

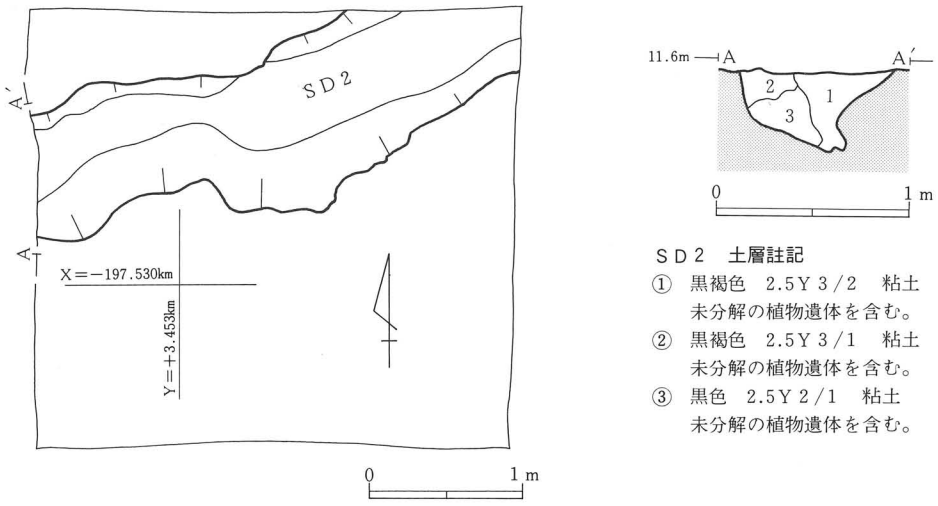
No	ＳＫ１	ＳＫ２	ＳＫ３	ＳＫ４	ＳＫ５	ＳＫ６	ＳＫ７
大きさ(cm)	55×62以上	37×57	85×145	50×57	87×108	75×105	69×92以上
深　さ(cm)	7	6	10	7	14	5	9



第48図　ＳＤ１・ＳＫ１～７平面・断面図

土層註記

ＳＤ１　①　黒褐色　10ＹＲ２/２　砂質シルト　層下部には６ａ層褐灰色10ＹＲ６/１より若干暗い砂層がみられる。
　　層上部にはⅣ層黒褐色と考えられるブロックがまじる。
ＳＫ１　①　黒褐色　10ＹＲ３/１　砂質シルト　酸化鉄、軽石粒を含む。
ＳＫ２　①　黒褐色　10ＹＲ３/１　砂質シルト　酸化鉄、軽石粒を含む。黒褐色10ＹＲ３/２粘土をブロック状に含む。
ＳＫ３　①　黒褐色　10ＹＲ３/１　砂質シルト　酸化鉄、軽石粒を含む。
ＳＫ４　①　黒褐色　10ＹＲ３/１　砂質シルト　酸化鉄、軽石粒を含む。
　　②　黒　色　10ＹＲ２/１　粘　土　炭化物を少量含む。
ＳＫ５　①　黒褐色　10ＹＲ３/１　砂質シルト　酸化鉄、軽石粒を含む。灰オリーブ色５Ｙ５/２砂をブロック状に含む。
ＳＫ６　①　黒褐色　10ＹＲ３/１　砂質シルト　酸化鉄、軽石粒を含む。
ＳＫ７　①　黒褐色　10ＹＲ３/１　砂質シルト　酸化鉄、軽石粒を含む。
　　②　灰オリーブ色　５Ｙ５/２　砂　砂に①の土を多くブロック状に含む。



第49図　ＳＤ２平面・断面図

⑶　11層上面

２号溝跡 ― SD2 ― (第49図)

調査区（試掘区）内を北東から南西方向に横切る溝跡で、方向はＮ－73°－Ｅである。平面形は直線的ではなく、凹凸がみられる。上端幅は0.7～1.2m、下端幅は0.3～0.6m で、断面形は概ね逆台形を呈するが、不整形である。堆積土は粘土３層からなる。性格は不明であるが、自然流路の可能性もある。遺物の出土はなかった。

⑷　その他の出土遺物

基本層の１・３・8b 層から陶器片、土師器片、木製品、石製品などが出土した。陶器片は２点で、ともに１層からの出土である。土師器片は３層から坏の小破片が１点出土した。内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。石製品は11層から磨石が１点出土した。

４．遺構の所属年代とまとめ

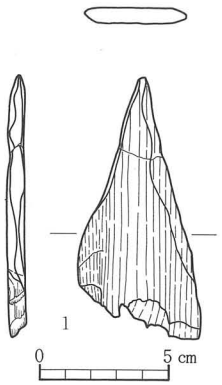
１．４層水田跡では大畦畔を検出したのみで、水田区画の形状、規模を明らかにすることはできなかった。時期はこれを知る資料に乏しく明確ではないが、出土遺物や灰白色火山灰のあり方から、一応平安時代としておきたい。

２．6a 層では溝跡１条と土坑７基を検出したが、出土遺物もなく性格は不明である。これらの遺構は、上層からの掘りこみである可能性が強い。時期は平安時代以前である。

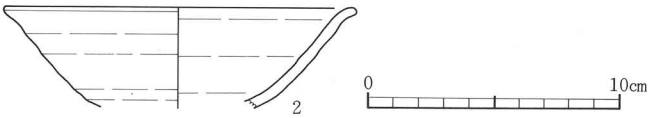
３．11層上面で溝跡１条を検出した。出土遺物もなく性格は不明であるが、平面、断面形が不整形で、自然流路の可能性も強い。

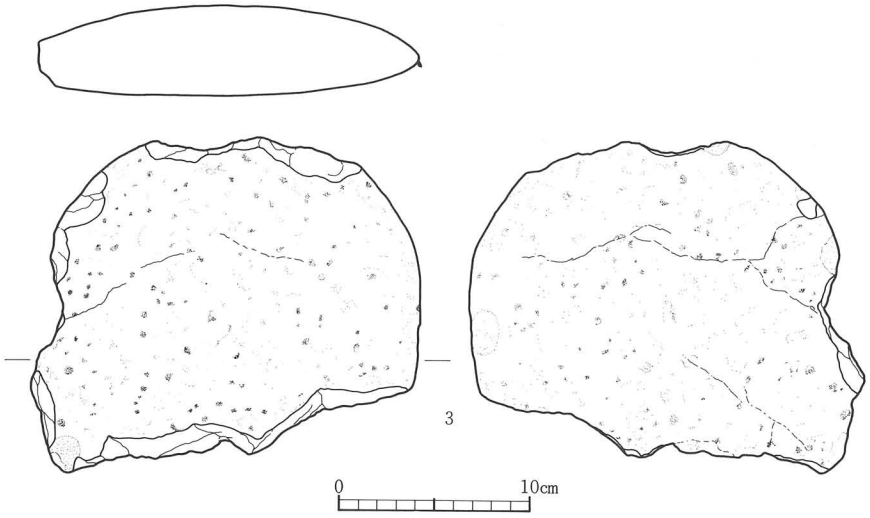
４．４層以外で水田跡の可能性がある層は２・３・７層であるが、各々の推定時期は次のとおりである。２層 — 中世以降、３層 — 平安時代以降～中世、７層 — 平安時代以前

なお、当調査区周辺は調査例が少なく、各水田跡の様相には不明な点が多い。今後調査例の増加を待って、水田の規模、形状、所属時期及び水田域の広がりなどを明らかにしていかなければならない。



図版番号	出土遺構・層位	種　別	材　質	素材形状	長　さ	幅・直径	厚　さ	先端加工	表面加工	備　考
写直59－３	３　層	加工材	針、柾目	板	10.5cm	3.9cm	7mm	２方向	平　滑	ノコギリ使用





No.	図版番号	遺構・層位	種　別	器　種	遺　存　度	口　径	底　径	器　高	特　　徴
2	写真59－１	４層水田跡	須恵器	坏	口縁～体部3/4	14.0cm			ロクロ
3	写真59－２	11層	磨石	——	——	——	——	——	安山岩

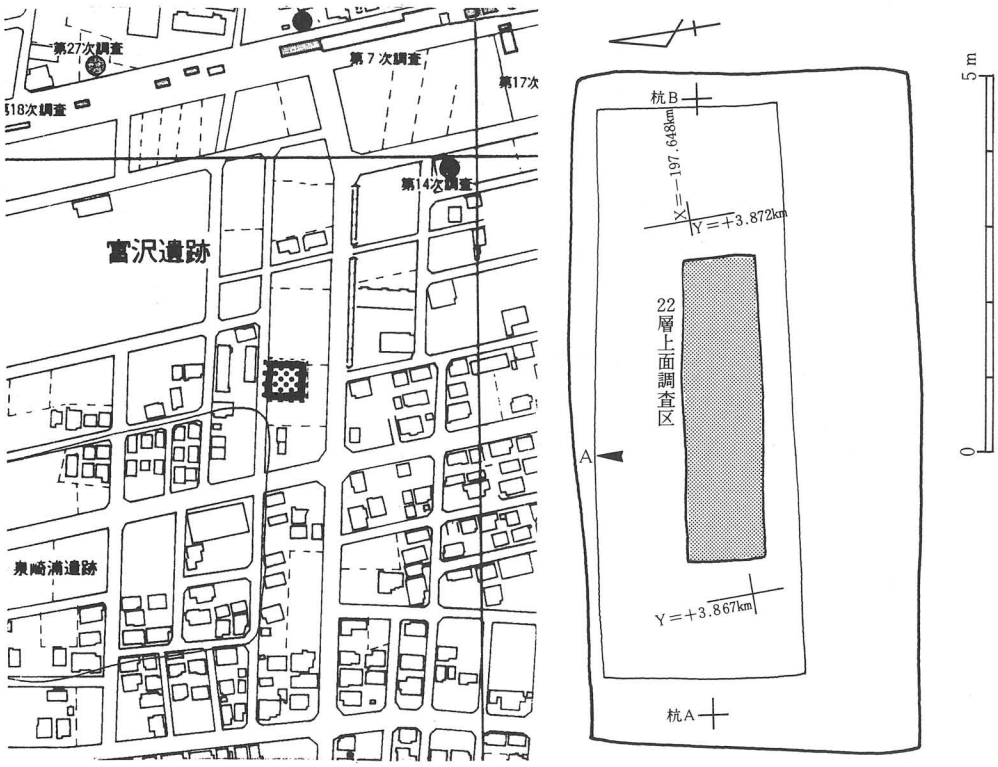
第50図　出　土　遺　物

第８節　富沢遺跡第43次調査

１．調査方法

調査区の設定面積は9×4.5m（約40m²）である。調査は、現地表下2.5mにも及ぶ最近の攪乱層を重機で除去し、以下は人力で行った。調査区は第37次調査区の南側隣接地であるが、前述した攪乱により37次調査で確認された水田土壌のほとんどは失われていた。したがって、今回の調査では主に５層以下の、弥生時代以前の土層が調査の対象となった。特に、旧石器時代の層が確認された30次調査地点（太田他：1988）から東に100m程の近い地点であることから、同様の層の存在の確認と広がりの把握をねらいとした。なお、安全確保のため下層になるにしたがい調査面積を縮小し、また、そのつど、周囲に土層観察と排水を兼ねた側溝を設けた。実測では杭A•Bを基準として行った。その杭の座標値は、A：X＝－197.647206km、Y＝＋3.865533、B：X＝－197.648336km、Y＝＋3.873603kmである。

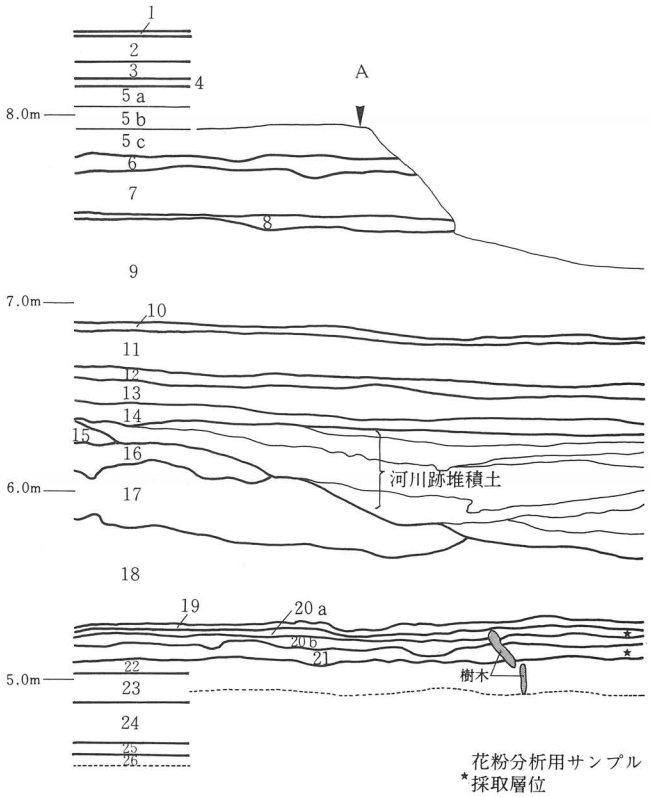
２．基本層序



第51図　調査区位置図・設定図

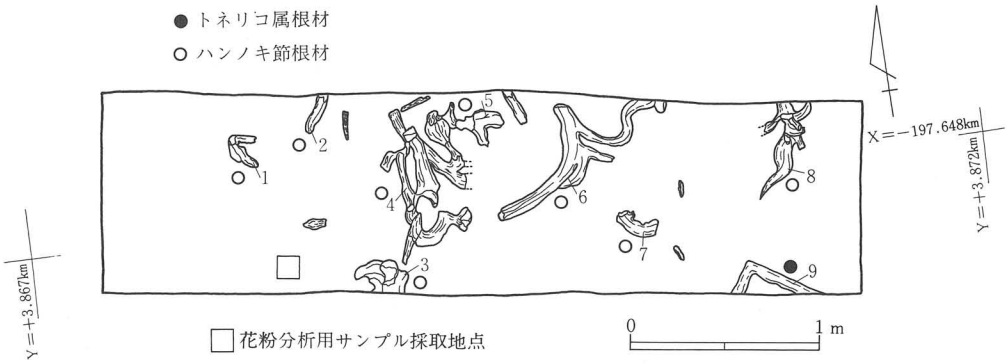
今回の調査では、26層の層序が確認された。これらは基本的には、５～11までの泥炭層か泥炭質粘土、12～14層の粘土、15層以下のシルト・砂・粘土の互層から成っており、グライ化は15層以下から漸次進んでいる。

各層からは遺構は検出されなかったが、15層上面で河川跡とみられる落ち込みが２条重なって発見された。また、20・21層は植物遺体を多く含む泥炭質粘土層であることが判明し、22層上面からは主に根の部分を中心とする樹木が10本前後検出された。この大半は樹木の状況から、その場に生育していたものと考えられる。さらに、



第52図　基　本　層　序

層序	土　色	土　質	層　厚	混　入　物	備　考
1	黒褐色　10Y R 3/2	シルト	3 cm	細砂	水田耕作土？
2	黒　色　10Y R 2/1	シルト質粘土	13cm		水田耕作土？下面起伏
3	黒　色　10Y R 2/1	泥炭質粘土	9 cm		粘土と縞状をなす
4	暗灰黄色　2.5Y 4/2	粘土	4 cm		
5 a	黒　色　10Y R 2/1	泥炭	10cm	植物遺体多量	
5 b	黒　色　10Y R 1.7/1	泥炭質粘土	13cm	植物遺体	
5 c	黒褐色　10Y R 3/3	泥炭	20cm	植物遺体多量	
6	灰黄褐色　10Y R 4/2	粘土	7 cm		
7	黒　色　10Y R 1.7/1	泥炭質粘土	24cm	植物遺体	
8	灰黄褐色　10Y R 5/2	粘土	2 cm～9 cm		
9	黒　色　10Y R 1.7/1	泥炭質粘土	50cm	植物遺体	層中に粘土・泥炭を挟む
10	黒褐色　10Y R 3/2	泥炭質粘土	4 cm	植物遺体	
11	黒　色　10Y R 1.7/1	泥炭質粘土	22cm	植物遺体	層中に粘土を挟む
12	黒　色　10Y R 1.7/1	粘土	6 cm	植物遺体少量	
13	黒　色　10Y R 2/1	粘土	8 cm～18cm	植物遺体少量	
14	黒　色　7.5Y R 2/1	シルト質粘土	5 cm～28cm	砂粒	
15	灰　色　5 Y 4/1	砂質シルト	14cm	砂粒	
16	緑灰色　7.5G Y 5/1	砂（細砂）	14cm		
17	明緑灰色　7.5G Y 7/1	粘土質シルト	19cm～43cm		細砂が不規則に介在
18	緑灰色　5 G 5/1	シルト質砂	50cm		砂と縞状をなす
19	明緑灰色　7.5G Y 7/1	粘土	4 cm		
20 a	灰黄褐色　10Y R 4/2	泥炭質粘土	4 cm	植物遺体	
20 b	暗灰黄色　2.5Y 5/2	泥炭質粘土	6 cm	植物遺体	植物遺体を含む薄い層が何枚も挟まれている
21	黒褐色　10Y R 3/2	泥炭質粘土	8 cm	植物遺体（樹木など）	
22	にぶい黄色　2.5Y 6/3	粘土	7 cm		21層の影響か、わずかに黒味がある。
23	浅黄色　2.5Y 7/3	粘土	15cm		
24	明緑灰色　7.5G Y 7/1	シルト質粘土	22cm		
25	にぶい黄褐色　10Y R 5/3	粘土	5 cm	植物の腐植層、植物遺体多量	
26		細砂			



第53図　22層上面樹木出土状況

一部の試掘ではあるが、25層にも樹木が含まれていることも確認された。

3．出土遺物

遺物には、河川跡の壁際から出土した細片の縄文土器９点があるが、いずれも磨滅が著しく図示できなかった。土器の胎土中に植物繊維を含むことから、縄文時代の早期末から前期前葉頃のものと考えられる。

また、20・21層中、22層上面からは樹木や、種子（水洗選別により採取）などの植物遺体が検出された。樹木は後記の分析結果によるとその大半がハンノキの根であることが判明した。種子では、福島大学の鈴木敬治氏によると、大半がミツガシワ（Menyanthes trifoliata Linn.）とスゲ属（Carex）であるとのことである。

4．ま　と　め

今回の調査では攪乱が大きく及んでいたこともあり、遺構は発見されなかった。しかし、下層から樹木や植物遺体を含む泥炭質粘土層の存在が確認されたことは30次調査の旧石器時代の層との関連で大きな成果であった。これらの層のうち、20a・21層については花粉分析を行い、後記の結果を得た。それによると両層とも周辺には針葉樹林が発達し、現在よりも寒冷な気候であったことを示しているとのことである。また、特に20a層では挺水植物のミツガシワが多いのが特徴で、21層に比べ、より沼地的であったらしい。このミツガシワの花粉の層位的なあり方は種子でも同様の傾向を示しているようである。22層上面については樹種同定によるとその大半がハンノキであり、付近は湿地林の様相を呈していたとのことである。尚、これらの樹木の一部について C_{14} 年代測定を行ったところ、後述の結果を得た。上下を含めた層の特徴や樹木の年代などからみると、30次調査の旧石器時代の層と同じ層である可能性が高いが、今後、周辺の調査を進めることにより、さらに検討していく必要があろう。

5．分析・同定

（1）花粉分析

守　田　益　宗　（東北大学理学部生物学教室）

富沢遺跡の第43次調査に関連して、花粉分析を行ったので報告する。

花粉分析の試料は、植物遺体を多く含む21層とその上位の20a層から、それぞれ1試料を採取した。第52・53図にその位置と層位を示す。試料は、KOH-$ZnCl_2$-Acetolysis法で処理を行い、花粉・胞子の同定は、顕微鏡の倍率を250～1250倍にして行った。各試料について、花粉・胞子の総計が500粒以上で、そのうち高木花粉（Tree Pollen：TP）が200粒以上になるまで同定し、その間に出現するすべての花粉・胞子を記録した。花粉分析結果を下表に示す。

21層・20a層ともに、高木花粉のうち針葉樹が約70％を占めるが、21層では*Pinus*が20a層では*Picea*が最優勢を示すという違いが認められる。広葉樹の花粉は、*Betula*を除き、あまり出現しない。両層の堆積当時、本遺跡の周辺には針葉樹林が発達しており、古気候は現在に比べかなり寒冷であったと言える。しかし、両層の針葉樹花粉の出現の違いが、遺跡周辺の広域的な植生の変化を示しているのか、この付近の局地的な植生の違いによるものかは分析点数が少なく明らかにしえない。

草本花粉では、両地点ともCyperaceaeが優占するが、20a層では挺水植物の*Menyanthes*の多産が特徴的である。*Menyanthes*（ミツガシワ）は、沼地などの岸に近い所などに生育するので、20a層の時代にはそのような場所が付近にあったことを物語っている。

		20a層	21層
Pinus	マツ属	84	141
Abies	モミ属	9	10
Larix	カラマツ属	2	4
Picea	トウヒ属	119	109
Tsuga	ツガ属	33	26
Cryptomeria	スギ属	1	1
Juglans	クルミ属	1	
Betula	シラカンバ属	69	69
Carpinus	クマシデ属	8	4
Quercus	コナラ属	9	4
Ulmus	ニレ属	7	9
Salix	ヤナギ属		2
Corylus	ハシバミ属	15	12
Alnus	ハンノキ属	18	11
Alnaster	ヤシャブシ属	2	2
Araliaceae	ウコギ科	1	
Ericaceae	ツツジ科	1	2
Fraxinus	トネリコ属	1	
Lonicera	スイカヅラ属	1	
Viburnum	ガマズミ属	1	

		20a層	21層
Gramineae	イネ科	14	5
Cyperaceae	カヤツリグサ科	207	370
Liliaceae	ユリ科	2	
Bistorta	イブキトラノオ属		1
Aconitum	トリカブト属	2	
Clematis	センニンソウ属	3	
Ranunculus	キンポウゲ属	1	
Thalictrum	カラマツソウ属	13	9
Sanguisorba	ワレモコウ属	2	
Other Rosaceae	バラ科	5	4
Umbelliferae	セリ科	4	26
Menyanthes	ミツガシワ属	61	2
Artemisia	ヨモギ属	8	8
Other Compositae	キク科	4	1
1-lete type FS	単条溝型シダ胞子	5	2
Eguisetum	トクサ属		1
Lycopodium	ヒカゲノカズラ属	1	
Sphagnum	ミズゴケ属	2	3
TP	高木花粉	342	377
NTP	非高木花粉	366	455
FS	シダ胞子	6	3
Unknown	不　明	29	37

（２）木材の樹種

鈴木三男（金沢大学教養部生物学教室）
能城修一（大阪市立大学理学部生物学教室）

仙台市の富沢遺跡の第43次発掘で更新統の泥炭質の21層及び25層から出土した木材化石10点の樹種を調査した。その結果、カラマツ属、ハンノキ属ハンノキ節、トネリコ属の３樹種が同定されたので、その同定の根拠となった材形質を以下に記載し、その顕微鏡写真を写真69に示した。また、仙台市教育委員会が作成した22層上面におけるこれらの木材化石の分布図に同定結果を書き入れたものが第53図である。これら同定に用いた木材組織プレパラートはMYG-85～MYG-94の標本番号で仙台市教育委員会と金沢大学教養部生物学教室にそれぞれ１セットづつ保存されている。

材形質の記載

１．カラマツ属　枝・幹材　Larix　マツ科　写真1a-c（MYG-94）

早材部と晩材部では仮道管の大きさが極端に違い、年輪のはっきりした針葉樹材で、垂直及び水平の樹脂道を持つ。早材の仮道管は直径が大きく薄壁で、有縁壁孔はしばしば２列に対列状に並ぶ。放射組織は単列と紡錘形のものがあり、後者ではその中央に水平樹脂道を持つ。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、放射仮道管の内壁は平滑で薄く、有縁壁孔も大きめである。以上の形質からマツ科のカラマツ属の枝あるいは幹の材と同定した。カラマツ属には本州中部の亜高山帯にあるカラマツと千島・樺太にあるグイマツが考えられるが、これらを材構造で区別することはできていない。

２．ハンノキ属ハンノキ節　根材　Alnus sect. Gymnothyrsus カバノキ科　写真2a-c（MYG-85）

薄壁で角張った小道管が放射方向に数個複合して散在する散孔材で、年輪界は不明瞭、道管の穿孔は横棒が20本くらいの階段状、繊維細胞は直径が大きく薄壁で短い、放射組織は同性で単列のものと集合状のものがある。さらに、繊維細胞が道管と極端には違わないほど太く、放射組織の細胞も大きめであるなどからハンノキ属ハンノキ節の根あるいは根株の材であると同定した。この節には冷温帯から暖温帯にかけて広く全国の低湿地に普通なハンノキ（ヤチハンノキ）、山地斜面におおいヤマハンノキなどがあるが材構造での区別はできない。

３．トネリコ属　根材　Fraxinus　モクセイ科　写真3a-c（MYG-93）

薄壁で角張った小型の道管が単独あるいは２個放射方向に複合して、小数が散在している散孔材で、年輪界は不明瞭、道管の穿孔は単一で、側壁の壁孔はきわめて小さく交互状に密に分

布する。繊維細胞は薄壁で太く、極端に短い、放射組織はやや異性的な同性で、幅は１ないし２列で背は低い。以上のことからこの材化石はモクセイ科のトネリコ属の樹木の根あるいは根株の材であると同定した。トネリコ属には冷温帯の低湿地や扇状地などに多いヤチダモをはじめ多数の種があるが材構造での区別はできていない。ただ、関東平野の縄文時代の低湿地遺跡で多量のトネリコ属の材が出土し、それがヤチダモの大型植物化石をともなっていることから、これらの材化石がこの種のものであるとみなされている。当遺跡からの出土材も関東平野のものによく一致することからヤチダモの材である可能性が考えられる。

以上見てきたように、同定を行った10点のうち９点が21層から出土している。これらの22層上面における分布を示したのが第53図である。この図を見て分かるようにいずれもが根株状でその同定結果も９点中８点がハンノキ節の根材で、残り１点がトネリコ属の根材である。このことからこれらの樹木は泥炭質の21層に生育し、下位の22層中に根株材をはっていた埋没林の一部であると考えることができる。そして根材の２樹種が現在でも亜寒帯下部から暖温帯にかけての低湿地に普遍的な樹種であり、この埋没林は亜寒帯ないしは温帯の低湿地性のものであるということができる。一般に氷期の寒冷な時期の泥炭層に含まれる木材化石はトウヒ属、カラマツ属、モミ属、マツ属の単維管束亜属などの亜寒帯あるいは冷温帯性の針葉樹が圧倒的であり、このように落葉広葉樹が優占するのはあまり知られていない。これらの木材の放射性炭素年代は、後述のように最終氷期のうち、もっとも寒冷とみなされている時期を示しており、花粉分析の結果もそれを支持している。従って、この埋没林が寒冷の時期の河川敷などに成立した落葉広葉樹林を示していると見なされるが、その一方で、寒冷な時期からはずれた、多少とも冷涼といえる時期のものである可能性もある。また残りの１点はこれらより下位の植物遺体を含む黄褐色の粘土層（25層）から出土しており、これは落葉針葉樹のカラマツ属であることから、これは寒冷な時期の堆積物と考えられる。

（３）放射性炭素年代測定結果報告

測定機関　日本大学文理学部地理学教室

年代測定室

Code　No.	試料名	依頼者のコード	確定年代	付加誤差	計測者名
ＮＵ－127	木　材	富沢遺跡第43次	22,880	$\pm^{670}_{620}$	小元久仁夫

注(1)　年代計算の際、放射性炭素の半減期として5,570年を使用

(2)　付加誤差はβ線計測時の標準偏差（1σ）に相当する年代

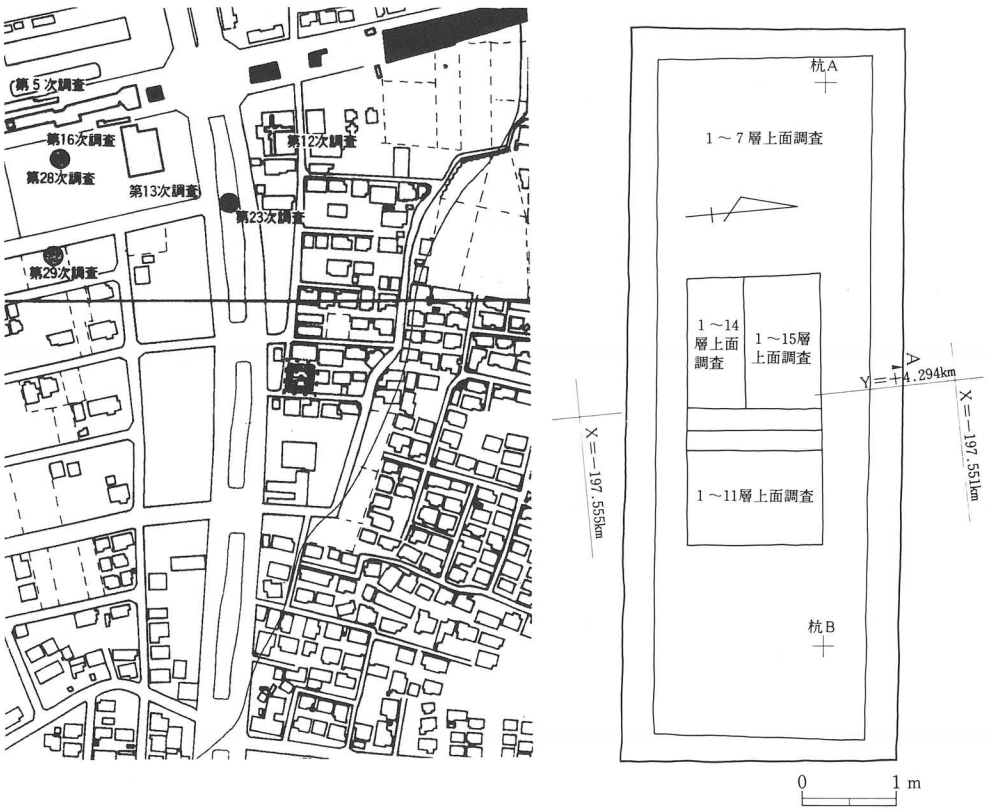
第９節　富沢遺跡第44次調査

１．調査方法

調査区の設定面積は約8×3m（22.6m²）である。調査は、盛土および直下の１層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察および排水用の側溝を設けた。７層上面までは調査区全面の調査を実施し、８層以下は2.9×1.4mの試掘区を設けて掘り下げた。(11層以下は1.9×1.4m、14層以下は1.4×0.8m) 遺構の測量は、杭Ａ・Ｂを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.55204km　Ｙ＝＋4.29071km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.55267km　Ｙ＝＋4.29668km)。

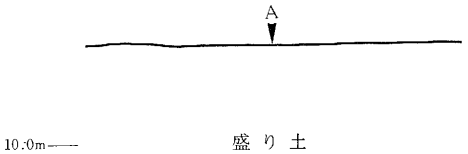
２．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別15層、細別では16層が確認された。各層の土質は１層が粘土、



第54図　調査区位置図・設定図

２層がシルトを主とし、３～７層のあいだは粘土、８・９層がシルト質粘土を主とし、10層以下は泥炭質粘土である。グライ化は５・8b・９層で若干認められる程度である。現代のものを除いて２～8a層が水田土壌の可能性がある。なお、５・６層からは灰白色火山灰が検出されている。５層中のものは、本来６層上面に乗っていたものが後の５層の攪乱により層中に巻き上げられたものと思われる。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。

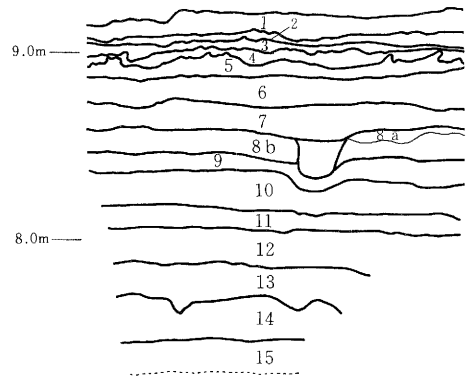


３．検出遺構と出土遺物

(1)　６層上面

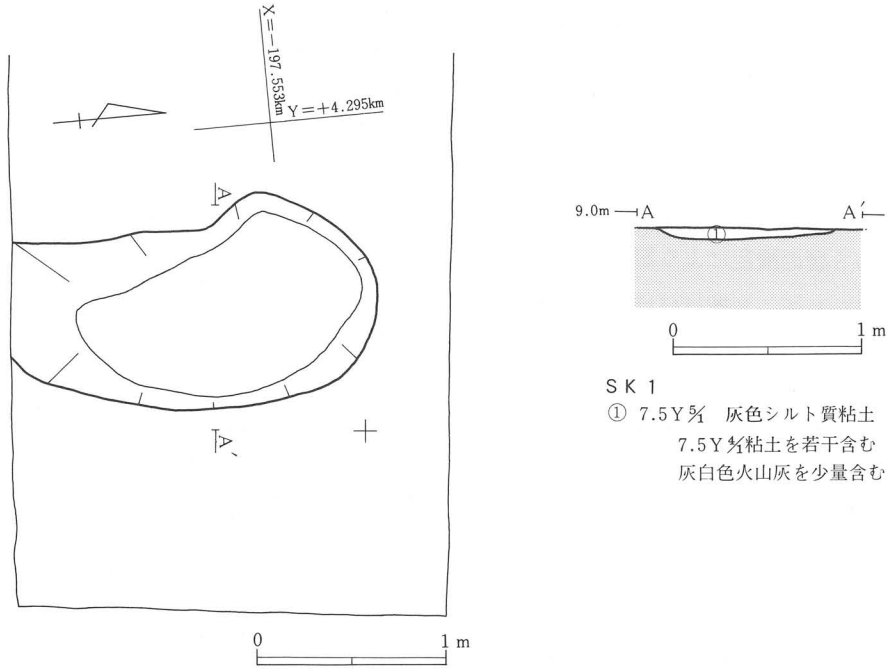
１号土坑－SK1－（第56図）

調査区の東部に位置する。平面形は不正な楕円形を呈し、南北長は1.95m以上、東西長は約 1mである。断面形は浅いすり鉢状を呈する。堆積土は単層で、灰白色火山灰を含んでいる。遺物は出土しなかった。



第55図　基　本　層　序

層序	土　　色	土　質	層　厚	混　入　物	備　　考
1	黄灰色　2.5Y 5/1	シルト質粘土	5 cm～15cm		水田耕作土（現代）
2	灰　色　5 Y 5/1	粘土質シルト	2 cm～8 cm	細砂少量	水田構作土？
3	灰　色　7.5Y 5/1	粘土	2 cm～8 cm		水田耕作土？・下面起伏・上面に鉄分集積層
4	灰　色　10Y 5/1	粘土	2 cm～10cm	マンガン粒少量	水田耕作土？・下面起伏
5	オリーブ灰色　2.5G Y 5/1	粘土	5 cm～15cm	マンガン粒少量・灰白色火山灰ブロック	水田耕作土？・下面一部起伏
6	灰　色　10Y 6/1	粘土	10cm～20cm	マンガン粒少量・鉄分少量・上面に灰白色火山灰ブロック	水田耕作土？・下面一部起伏
7	黄灰色　2.5Y 5/1	粘土	10cm～15cm	マンガン粒多量	水田耕作土？・下面に鉄分集積層
8 a	黄灰色　2.5Y 5/1	シルト質粘土	3 cm～8 cm		水田耕作土？
8 b	灰白色　5 Y 7/1 灰　色　5 Y 6/1 黒　色　5 Y R 1.7/1	シルト質粘土 シルト質粘土 泥炭質粘土	10cm～15cm		自然堆積層
9	灰　色　5 Y 5/1 灰白色　10Y 7/1	シルト質粘土 シルト質粘土	5 cm～15cm		自然堆積層
10	黒　色　10Y R 1.7/1 灰　色　5 Y 5/1 暗灰黄色　2.5Y 5/2	泥炭質粘土 粘土 粘土	15cm～20cm		自然堆積層
11	暗灰黄色　2.5Y 5/2	泥炭質粘土	8 cm～12cm	植物遺体多量	自然堆積層
12	暗灰黄色　2.5Y 4/2 黒　色　10Y R 1.7/1	泥炭質粘土 泥炭質粘土	20cm前後	植物遺体多量	自然堆積層
13	暗灰黄色　2.5Y 4/2 灰オリーブ色　5 Y 5/2	泥炭質粘土 泥炭質粘土	15cm～20cm	植物遺体多量 植物遺体少量	自然堆積層
14	黒　色　5 Y 3/1 暗灰黄色　2.5Y 5/2	泥炭質粘土 泥炭質粘土	15cm～25cm	植物遺体多量	自然堆積層
15	暗灰黄色　2.5Y 5/2	泥炭質粘土	18cm以上	植物遺体多量	自然堆積層



第56図　ＳＫ１平面・断面図

⑵　その他の出土遺物

基本層２～５層から土師器片、須恵器片、陶器片、磁器片等が計63点出土したが、そのうち半数以上は５層中から出土した。図示できるものはない。土師器は３層以下から出土しており調整技法の分かるものの大部分がロクロ使用・内面ヘラミガキ後黒色処理されたもので、５層中から出土した１点のみが非ロクロのものである。須恵器は３層以下から出土しているが量は少ない。陶器・磁器は２・３層中からのみ出土しており、３層中の唐津・青緑釉皿片１点を除いてすべて近世以降である。

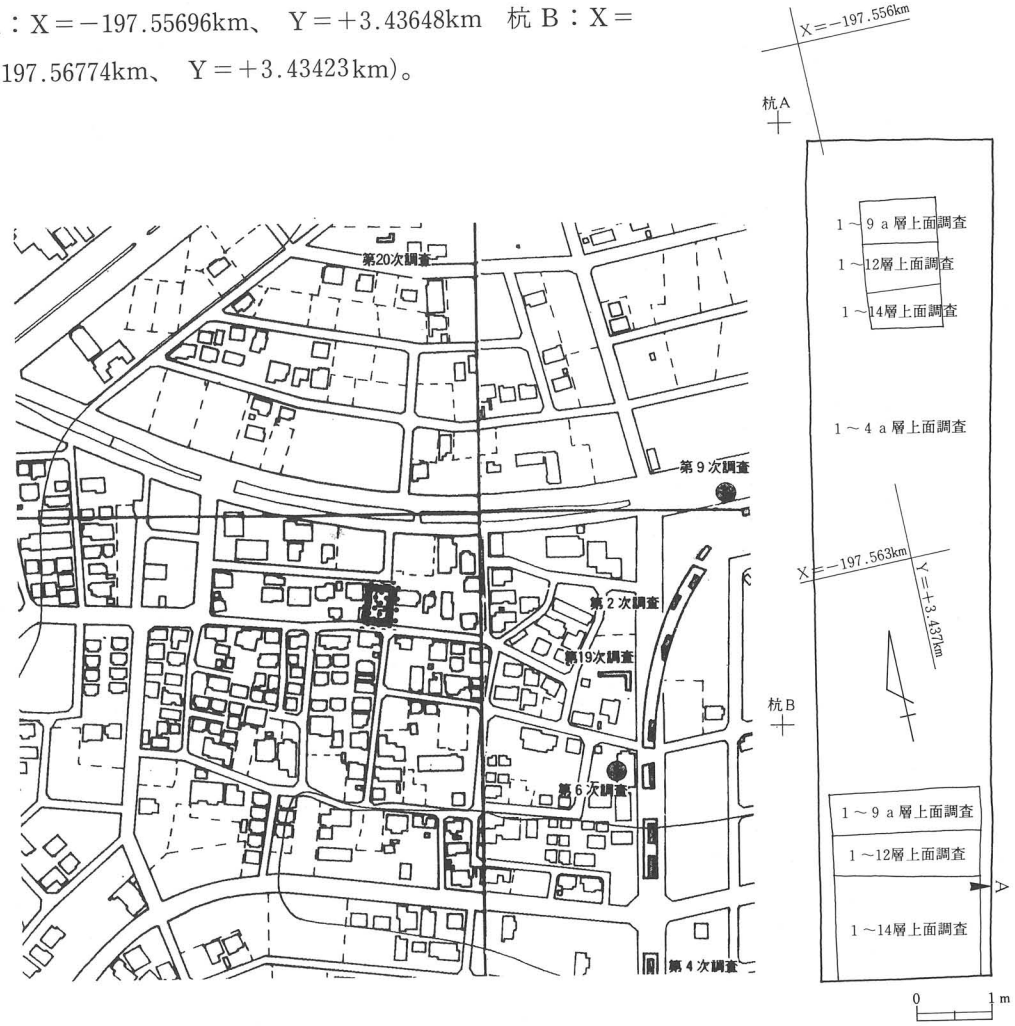
４．遺構の所属年代とまとめ

検出遺構はSKIのみで、性格は不明である。また基本層２～8a層は土質、層下面の状況から判断して水田跡の可能性がある。これらの時期については２層が近世以降、３層が近世、４・５層が平安時代～近世、６層及びSK1が平安時代（灰白色火山灰降下前後）と推定される。なお、７・8a層の時期については第28次調査区（佐藤：1988）の基本層序との対応関係から平安時代（灰白色火山灰降下以前）に比定できる可能性が考えられる。

第10節　富沢遺跡第45次調査

１．調査方法

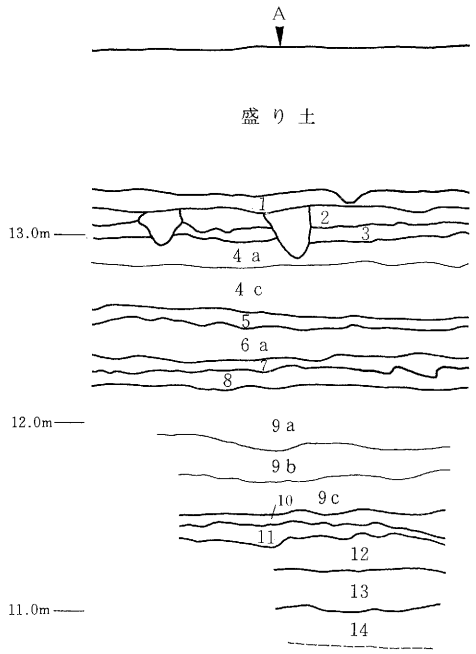
調査区の設定面積は約30m² である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行った。4a 層上面までは、調査区全面の精査を実施した。4a 層以下は、調査区の南端部、北端部に一箇所ずつの試掘区を設けて掘り下げた（南試掘区は9a 層上面まで2.5×2m、12層上面まで2×2m、14層まで1.5×2m、北試掘区は9a 層上面まで2×1m、12層上面まで1.2×1m、14層まで0.7×1m）。測量は杭Ａ・Ｂを基準にして実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.55696km、　Ｙ＝＋3.43648km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.56774km、　Ｙ＝＋3.43423km）。



第57図　調査区位置図・設定図

2．基本層序

今回の調査では盛土下に大別14層、細別で19層が確認された。各層の土質は1～3層がシルトである。4a～4c層は砂質層であるが、4b層は砂礫、4c層は砂質シルトと粘土の互層である。5層以下は粘土層が主体となるが、7・10・11層は泥炭質粘土である。また9b層は砂礫である。グライ化は12層から漸次進むが、14層では顕著である。現代のもの以外で水田土壌の可能性のある層は、2・3層である。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。



第58図　基　本　層　序

3．検出遺構と出土遺物

遺構、遺物ともに検出されなかった。

4．ま　と　め

水田耕作土の可能性のある層が確認された（2・3層）のみで、遺構、遺物は検出されなかった。2・3層の時期は隣接する42次調査区との層位対比から、平安時代以降と考えられる。

層序	土色	土質	層厚	混入物	備考
1	灰色 5Y 5/1	シルト	4cm～14cm	鉄分	水田耕作土(現代)・下面に鉄分集積層
2	オリーブ黒色 5Y 3/1	粘土質シルト	2cm～10cm	鉄分・炭化物粒少量	水田耕作土？・下面～部起伏
3	灰色 10Y 5/1	砂質シルト	5cm～10cm	鉄分・凝灰炭粒	水田耕作土？・下面一部起伏
4a	暗緑灰色 7.5GY 5/1	砂	10cm～26cm	鉄分	自然堆積層
4b	暗緑灰色 7.5GY 5/1	砂礫	12cm程度		自然堆積層
4c	灰色 10Y 5/1 黄灰色 2.5Y 5/1	砂質シルト 粘土	10cm～28cm	鉄分・細砂 鉄分・炭化物粒	自然堆積層
5	黒色 7.5YR 3/1	粘土	4cm～10cm	鉄分少量	自然堆積層
6a	暗灰黄色 2.5Y 5/2	粘土	12cm～35cm	サウンドパイプ・炭化物粒・細砂	自然堆積層
6b	灰オリーブ色 7.5Y 5/2	シルト質粘土	5cm～12cm	サンドパイプ少量	自然堆積層
7	黒色 10YR 1.7/1	泥炭質粘土	4cm～12cm	植物遺体	自然堆積層
8	黒褐色 10YR 3/1	粘土	6cm～10cm	植物遺体少量	自然堆積層
9a	オリーブ灰色 5GY 5/1	砂質粘土	20cm～34cm	植物遺体	自然堆積層
9b	暗オリーブ灰色 5GY 4/1	砂礫	6cm～22cm		自然堆積層
9c	オリーブ灰色 2.5GY 5/1 黒色 2.5Y 3/1	シルト質粘土 粘土	15cm～20cm	植物遺体 植物遺体	自然堆積層
10	黒色 10YR 1.7/1	泥炭質粘土	5cm～14cm	植物遺体多量	自然堆積層
11	黒褐色 10YR 3/1	泥炭質粘土	2cm～12cm	植物遺体	自然堆積層
12	黄灰色 2.5Y 4/1	粘土	10cm～18cm	植物遺体	自然堆積層
13	灰黄褐色 10YR 4/2	粘土	15cm～22cm	植物遺体	自然堆積層
14	オリーブ灰色 5GY 5/1	シルト質粘土	30cm以上	植物遺体少量	自然堆積層

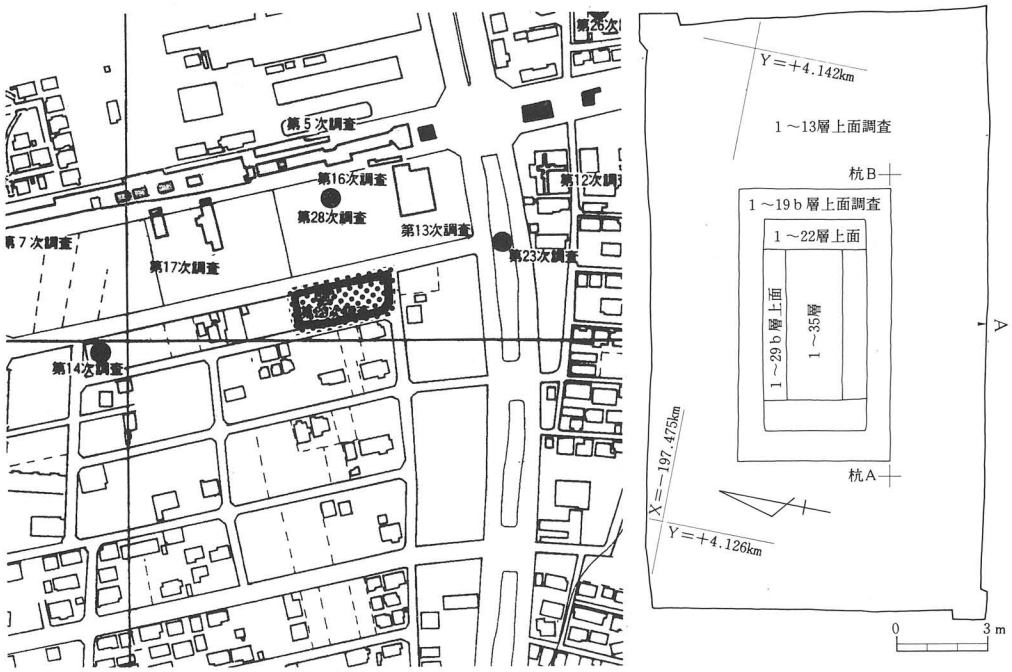
第11節　富沢遺跡第46次調査

１．調査方法

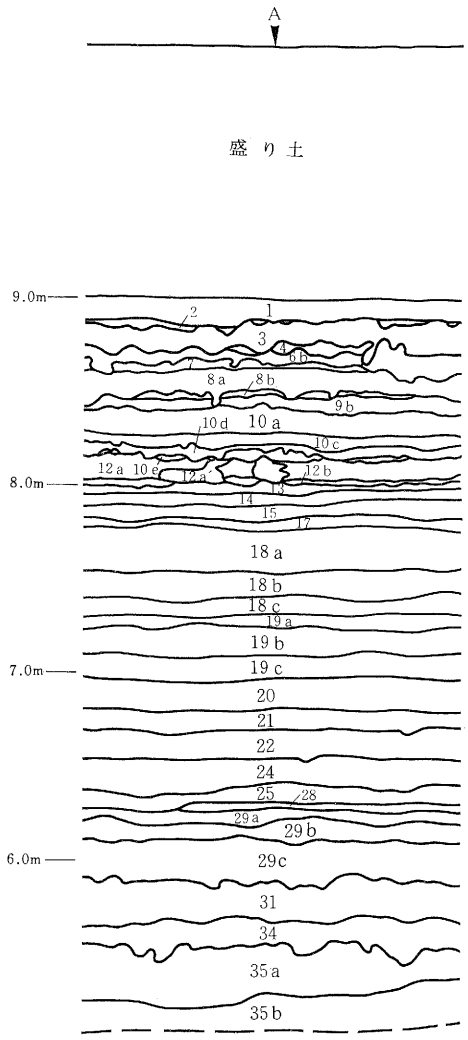
調査区の設定面積は約20×11m（222m²）である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）上面までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。13層上面までは、調査区全面の精査を実施し、13層以下は、約9×5m の試掘区を設けて掘り下げた（19b 層以下は約7×3.5m、22層以下は約5×3.5m、29b 層以下は約5×1.8m）。遺構の測量は、杭Ａ・Ｂを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.48210km、Ｙ＝＋4.12891km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.48015km、Ｙ＝＋4.13878km）。

２．基本層序

当調査に際しては第28次調査区（佐藤：1988）の隣接地であり、層序の対応が可能であったことより、第28次調査時における基本層序と同一層序を使用した。従って、欠落した層もあり、連続した層位番号となっていない。また、新たに認められた層の関係で、６・12・18・19・29・35層の各層は分層し、アルファベット名を付した新層位名となっている（ex. 6 層→6a 層・6b



第59図　調査区位置図・設定図



第60図　基　本　層　序

層)。今回の調査では、盛土下に1～35層までの42層が確認された。これら各層は、1～4層までが粘土層、6～29層までが粘土と泥炭の互層を基本とする泥炭質粘土層、31～35層が粘土層あるいは砂質シルト層に分類される。グライ化は、22層以下から漸次進み、31層以下では、顕著である。現代のものを除く水田土壌は9a・10d・11a層である。また、2・3・4・6b層も水田土壌の可能性がある。遺物出土層は1・3・4・10c層である。3・4・29b層からは、火山灰が検出されている。この内3・4層中のものは灰白色火山灰である。これらの火山灰は、4層中に入っていたものが、後の3層の攪乱により3層中に巻き上げられたものである。また、29b層中のものは、第28次調査29層中検出のものと同一のものと考えられる。各層の傾きとしては、1～12層までが北側へ緩やかに下り、13層以下ではほぼ水平となる。

3．検出遺構と出土遺物

遺構は10d・11層上面で各水田跡が検出された。また、9層上面では畦畔は認められなかったが、第28次調査区の9a層水田跡耕作土のひろがりが確認された。

(1)　9層上面

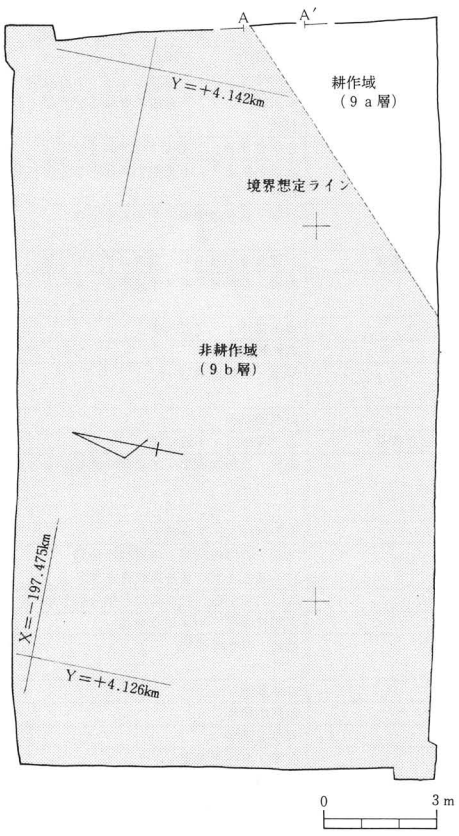
9a層水田跡（第61図）

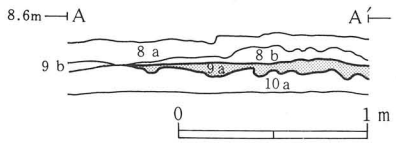
＜遺構状況＞　耕作土のみで、畦畔等は検出されなかったが、耕作域（9a層）と非耕作域（9b層）の境界が認められた。ただし、調査区外壁セクション面での確認で、平面的に確認した訳ではない。調査区外壁セクション面から想定される境界ラインは、調査区の南東側に位置し、N－46°－E方向をとる（第61図）。従って、耕作域はこのライン南東側（20m²）で、その反対側が非耕作域であったものと考えられる。耕作土は、粘土層を主とする泥炭質粘土層の9b層を攪拌し、耕作土―9a層―としている。耕作土の分解の度合いは、下面では下層上面―10a層

層序	土色		土質	層厚	混入物	備考
1	黒褐色	10YR 3/2	粘土	1 cm～29cm		水田耕作土（現代）・下面に鉄分集積層
2	灰黄褐色	10YR 4/2	砂質シルト	2 cm～ 6 cm		水田耕作土？・不連続で部分的な分布
3	黒褐色	2.5Y 3/1	粘土	7 cm～31cm	灰白色火山灰ブロック	水田耕作土？・不連続な分布・下面起伏
4	黒褐色	10YR 3/2	粘土	1 cm～25cm	灰白色火山灰ブロック	水田耕作土？・不連続で部分的な分布・下面起伏
6 a	にぶい黄褐色	10YR 5/4	泥炭質粘土	1 cm～ 2 cm		自然堆積層・不連続で部分的な分布
6 b	黒褐色	10YR 3/1	泥炭質粘土	1 cm～18cm	下層のブロック	水田耕作土？・不連続で部分的な分布・下面起伏
7	黒　色	5YR 1.7/1	泥炭質粘土	1 cm～20cm		互層・自然堆積層・不連続な分布
	にぶい黄褐色	10YR 5/3	泥炭質粘土			
8 a	黒褐色	10YR 3/1	泥炭質粘土	3 cm～26cm	下部に８ｂ層ブロック多量	不連続な分布・８ｂ層の自然分解？層
8 b	黒　色	7.5YR 1.7/1	泥炭質粘土	1 cm～22cm		互層・自然堆積層・不連続な分布
	灰オリーブ色	5Y 5/2	泥炭質粘土			
9 a	暗灰黄色	2.5Y 5/2	泥炭質粘土	1 cm～12cm	下部に10ａ層ブロック	水田耕作土・下面起伏
9 b	暗灰黄色	2.5Y 5/2	泥炭質粘土	1 cm～14cm		自然堆積層
10 a	黒褐色	7.5YR 3/2	泥炭質粘土	8 cm～17cm		互層・自然堆積層
	暗灰黄色	2.5Y 5/2	泥炭質粘土			
10 c	黒　色	5Y 2/1	泥炭質粘土	3 cm～10cm		自然堆積層
10 d	灰　色	7.5Y 4/1	泥炭質粘土	4 cm～12cm	下部に10ｅ層ブロック多量	水田耕作土・下面起伏
10 e	黒　色	5Y 2/1	泥炭質粘土	2 cm～10cm		互層・自然堆積層・不連続で部分的な分布
	灰オリーブ色	7.5Y 5/2	泥炭質粘土			
	灰白色	5Y 7/2	泥炭質粘土			
11 a	黒褐色	2.5Y 3/1	泥炭質粘土	2 cm～18cm	下部に12・13層ブロック	水田耕作土・下面起伏
12 a	黒褐色	10YR 3/1	泥炭質粘土	1 cm～20cm		互層・自然堆積層・不連続な分布
	灰　色	5Y 4/1	泥炭質粘土			11ｂ層を上部に含む可能性あり。
12 a′	オリーブ黒色	5Y 3/2	泥炭質粘土	5 cm～14cm		部分的な分布・12ａ層の自然分解？層
12 b	灰　色	5Y 4/1	泥炭質粘土	1 cm～ 7 cm		自然堆積層・不連続な分布
13	黒　色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	2 cm～14cm		互層・自然堆積層
	にぶい黄褐色	10YR 5/4	泥炭質粘土			
14	黒　色	5YR 1.7/1	泥炭質粘土	2 cm～40cm		自然堆積層
15	黒　色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	4 cm～ 6 cm		自然堆積層
17	黒　色	5YR 1.7/1	泥炭質粘土	3 cm～ 7 cm		自然堆積層
18 a	黒　色	7.5YR 1.7/1	泥炭質粘土	20cm～26cm		互層・自然堆積層
	褐灰色	5YR 4/1	泥炭質粘土			
18 b	黒　色	5Y 2/1	泥炭質粘土	10cm～17cm		互層・自然堆積層
	黒　色	5YR 1.7/1	泥炭質粘土			
18 c	黒　色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	7 cm～12cm		自然堆積層
19 a	暗灰黄色	2.5Y 4/2	泥炭質粘土	3 cm～ 9 cm		自然堆積層
19 b	黒褐色	2.5Y 3/2	泥炭質粘土	12cm～19cm		自然堆積層
19 c	黒　色	7.5YR 1.7/1	泥炭質粘土	10cm～15cm		自然堆積層
20	黒　色	10YR 1.7/1	泥炭質粘土	25cm～28cm		自然堆積層
21	暗灰黄色	2.5Y 5/2	泥炭質粘土	7 cm～14cm		自然堆積層
22	黒　色	5Y 2/1	砂質シルト	14cm～18cm		自然堆積層
24	オリーブ黒色	5Y 3/2	泥炭質粘土	6 cm～21cm		互層・自然堆積層
	暗灰黄色	2.5Y 4/2	粘土			
25	黒　色	5Y 2/1	泥炭質粘土	4 cm～11cm		自然堆積層
28	黒　色	N 1.5/0	泥炭質粘土	3 cm～ 5 cm		自然堆積層
29 a	黒　色	5Y 2/1	泥炭質粘土	3 cm～ 9 cm		自然堆積層
29 b	オリーブ黒色	5Y 3/1	泥炭質粘土	5 cm～15cm	火山灰	自然堆積層
29 c	黒　色	10YR 2/1	泥炭質粘土	17cm～27cm		自然堆積層・下面起伏
31	オリーブ灰色	5GY 5/1	粘土	16cm～27cm	砂粒少量・植物遺体	自然堆積層
34	灰　色	10Y 5/1	粘土	8 cm～23cm	炭化物粒・植物遺体	自然堆積層・下面起伏
35 a	オリーブ灰色	5GY 5/1	砂質シルト	11cm～34cm	植物遺体	自然堆積層
35 b	オリーブ灰色	5GY 5/1	砂質シルト	24cm以上	植物遺体・粗砂	自然堆積層

―をブロック状に巻き上げているものの、9a層自体は分解が進んでいる。耕作土の下面は凹凸が激しいが、耕作土の厚さは平均で７cm位である。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面（耕作域）の標高は8.35～8.45mで、北東側へ緩やかな下り傾斜を示す。

＜出土遺物＞　非耕作域上面より樹木片が３点出土したのみである。いずれの樹木片も20cm以下の小片のものであるが、この内２点は一方の端部に焦痕が認められた（第62図１・２）。



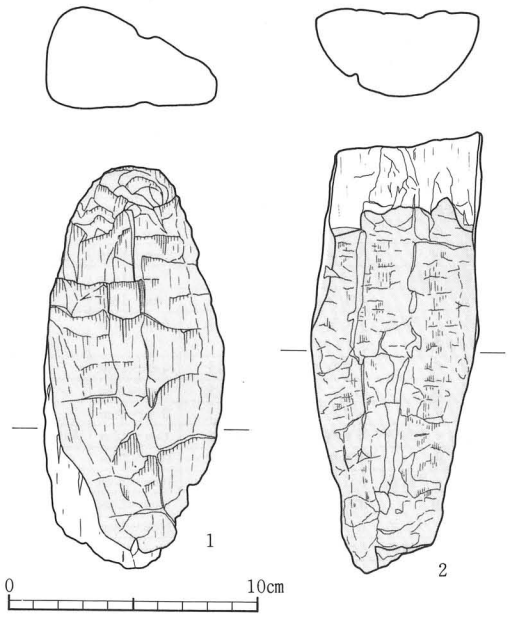


第61図　9 a 層水田跡平面・断面図

(2)　10d 層上面

10d 層水田跡（第63図）

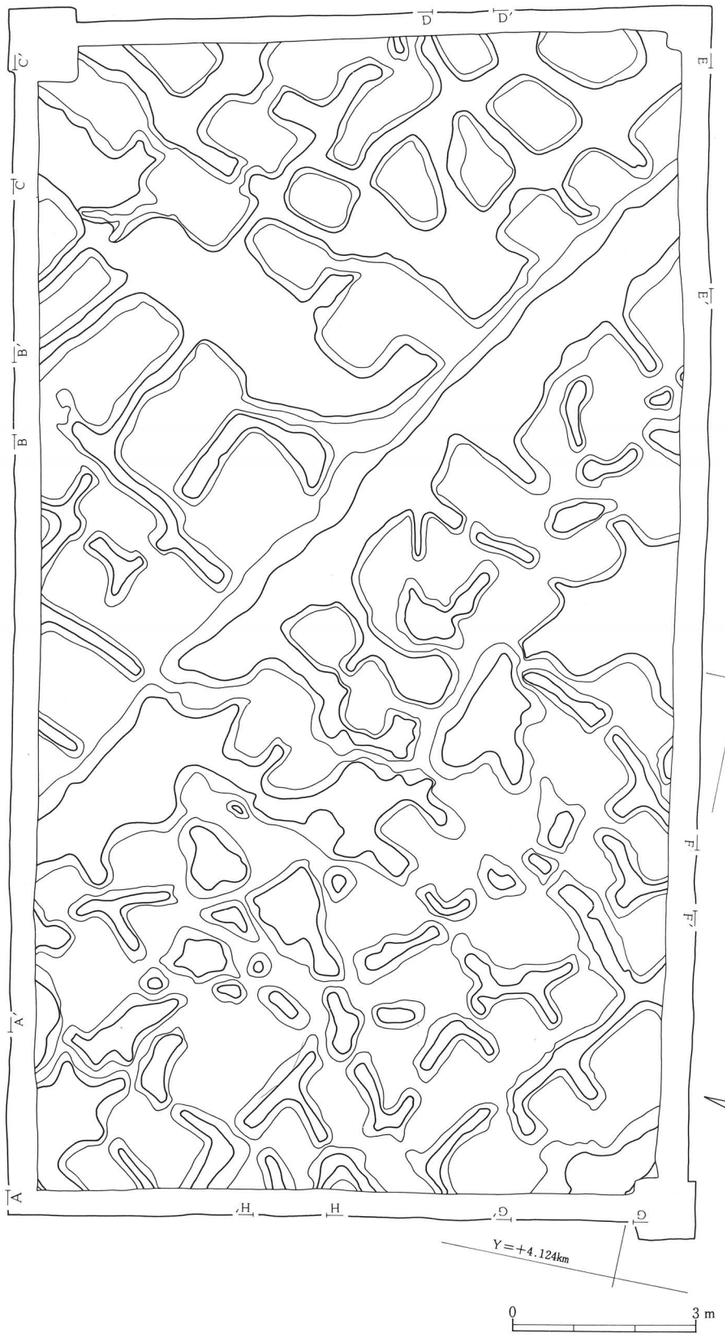
小区画の水田が70区画以上検出された。畦畔には大区画を形成する大畦畔と、それをさらに細かく分割し、小区画を形成する小畦畔がある。大畦畔は 4 条検出されたが（大畦畔 1 ～ 4 ）、この内、大畦畔 2 ・ 4 は畦畔の高まりが小畦畔とほぼ同じであったり、水口で細かく分断されていたりして（大畦畔 2 ）他の大畦畔と様相を異にする。検出面は、大畦畔 1 ・ 3 が10a 層下面で、他の畦畔は10c 層中である。これらに伴う水路は検出されていない。また、出土遺物は皆無であった。



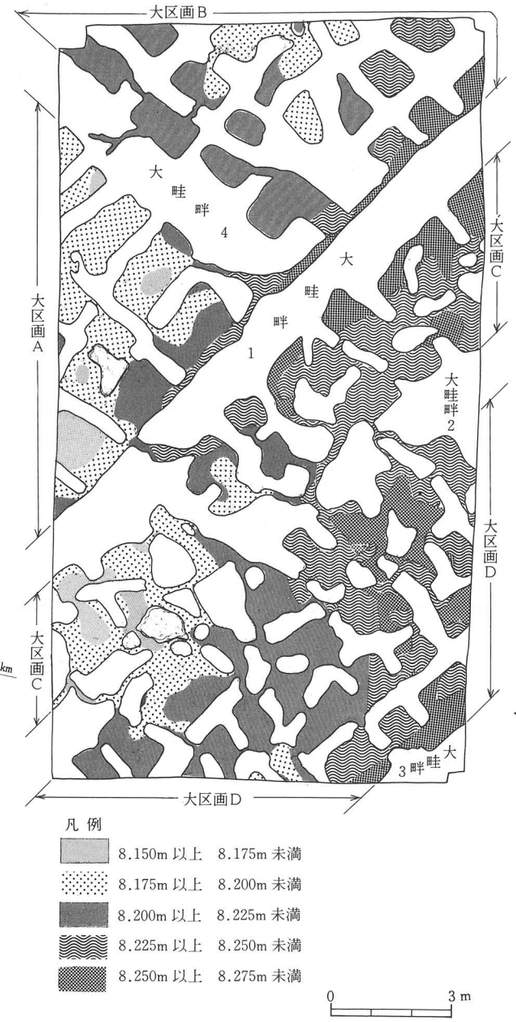
No.	挿図番号	図版番号	出土遺構・層位	種　別	材　質	素材形状	長　さ	幅・直径	厚　さ	先端加工	表面加工	備　考
1	第62図 1	写真60－6	9 b 層上	樹木片	広	丸　木	16.1cm	6.4cm	——	——	な　し	端部に焦痕
2	第62図 2	写真60－5	9 b 層上	樹木片	広	丸　木	17.7cm	6.5cm	——	——	な　し	端部に焦痕
—	——	——	9 b 層上	樹木片	広	丸　木	15.0cm	5.0cm	2.8cm	——	な　し	

第62図　出　土　遺　物（1）

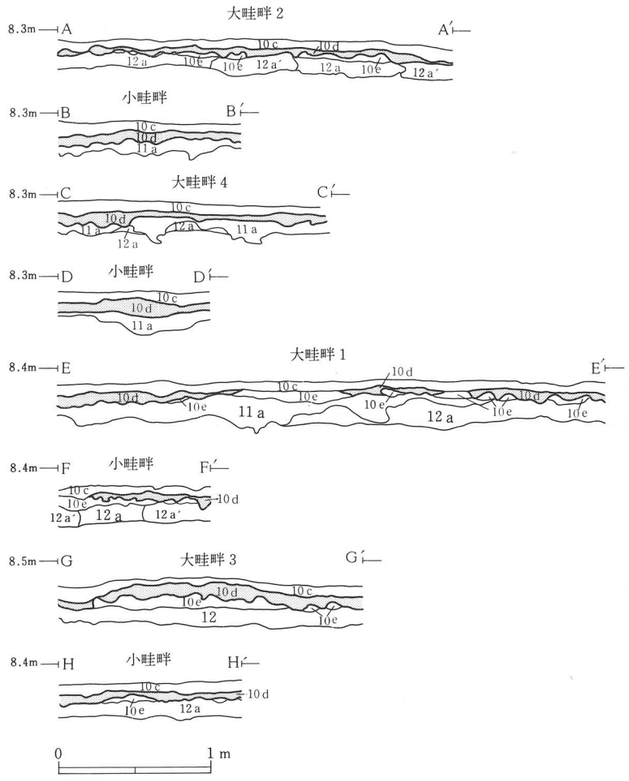
1．水田跡平面図



2．区画・畔2．区画・畦畔名及び水田面の標高



3．畦畔断面図



第63図　10ｄ層水田跡平面・断面図

＜畦畔の配列＞　大畦畔には、下層11a 層水田跡大畦畔を踏襲し位置、方向とも同一のもの（大畦畔１）と新たにこの時期に取り付けられたもの（大畦畔２・３・４）がある。いずれもほぼ直線的に延びる。大畦畔２・３は大畦畔１にほぼ平行しほぼ同一方向をとるが、大畦畔４はこれらとほぼ直交方向をとる。大畦畔１～３の方向はＮ－約57°－Ｗで、等高線にほぼ直交する。大畦畔の交点は１ケ所認められ、「T」字状に交わる。小区画ごとの小畦畔は、水口によって断片的であったり、やや弯曲したものが多く、また．大畦畔に対して斜位方向のものもわずかに認められたが、多くはいずれかの大畦畔方向をとり、連続性を示す。従って、全体としての小畦畔は、整然と直線的に連続する状態のものではないが、いずれかの大畦畔方向への連続性が認められる。この内、北西―南東方向のものがより明確な連続性を示す。小畦畔の交わり方は斜位方向を除けば、「＋」状のものが主体である。

＜畦畔の規模＞　畦畔は耕作土と同一土壌―10d―を盛り上げ作られている。下端幅は、大畦畔が1.4m 前後、小畦畔はやや画一性を欠くが50cm 前後を中心とする。耕作土上面からの高さは、大畦畔１・３が約10～16cm、大畦畔２・４及び小畦畔が約２～５ cm である。

＜水田１区画の形状と規模＞　大畦畔によって大区画が４区画検出されている（大区画Ａ～Ｄ）。大区画は、いずれも区画全体が検出されておらず、明確な形状･規模は不明である。しかし、形状に関しては、大畦畔の方向性よりいずれも方形を呈すると考えられる。大区画Ｃ・Ｄは短辺の全長が検出されており北西―南東方向を長辺とする短冊型が想定される。それぞれの長さ及び面積は大区画Ａが（6.8）×（6.6）m･(23)m²、大区画Ｂが（7.6）×（8.2）m･(36)m²、大区画Ｃが（15.2）×1.8～3.2m･(32)m²、大区画Ｄが（13.0）×6.4m･(50)m²である［（　）は一部検出のみの数値］。小区画は76区画検出（内、一部検出23）された（大区画Ａ－12、Ｂ－17、Ｃ－19、Ｄ－28）。区画の形状は整形のものは少ないが、いずれも方形･三角形を基調としている。このうち方形状のものが主体を占め、三角形状のものは、わずかに認められる程度である。三角形状のものは、大畦畔際のものに多い。面積が明確に或は推定で判るものは58区画（明確なもの51区画）ある。この内、最小のものは0.4m²、最大のものでも3.0m²と全体的

小区画水田の面積　＊（　）内は推定面積のものも加えた数値

小区画＼大区画名		A	B	C	D	全区画
区画数	1㎡未満	2（同）	6（同）	10（同）	8（9）	26（27）
	1～1.9㎡		4（5）	7（8）	8（11）	19（24）
	2～2.9㎡	4（5）	1（同）			5（6）
	3～3.9㎡				1（同）	1（同）
最小～最大面積㎡		0.9～2.8(同)	0.7～2.6(同)	0.4～1.7(同)	0.5～3.0(同)	0.4～3.0(同)
平均面積㎡		1.8(1.9)	1.1(同)	1.0(同)	1.2(同)	1.2(同)

に面積は狭い。主体となる面積は2.0m² 未満のもの（全体の88%）であるが、大区画ごとに多少差異が認められる。大区画Cでは1.0m² 未満の狭いものがやや多く、反対に大区画Aでは2.0m² 以上の全体に比べればやや広いものが多い。

＜耕作土＞　粘土層を主とする泥炭質粘土層の10e 層を攪拌し、耕作土 ― 10d 層 ― としている。耕作深度が深い部分では、さらに下層の11a 層、12a 層（11a 層水田跡非耕作域）をも攪拌している。耕作土の分解の度合いは、大畦畔１を境として大区画Ａ・Ｂと大区画Ｃ・Ｄでは差が認められ、大区画Ｃ・Ｄの方は余り分解が進んでいない。耕作土の厚さは４～12cm である。ただし、耕作土の分解度と同様に大区画Ａ・Ｂと大区画Ｃ・Ｄでは耕作深度も異なり、耕作土の平均の厚さは大区画Ａ・Ｂでは約７ cm、大区画Ｃ・Ｄでは約５ cm である。耕作土の下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。尚、大畦畔部分では（特に大畦畔１・３）、直下に耕作が及ばなかったためか、直下層上部が擬似畦畔となっている。また、大区画Ｃ・Ｄ内の小畦畔は、直下の耕作土に10e 層が残存する場合が多い。

＜水田面の傾斜＞　水田面の標高は8.15～8.30m の間である。全体的な傾斜としては、北方向の下り傾斜を示すが、大区画ごとの傾斜ではやや異なり、大区画Ａ・Ｂでは北ないし北東方向、大区画Ｃ・Ｄでは北西方向となる。大区画ごとの傾斜の度合いは、Ａが約1.2cm/m、 Ｂが約1.0 cm/m、 Ｃが約0.8cm/m、 Ｄが約1.0cm/m で、全体的に緩やかである。小区画の耕作土上面の比高差（１区画が明確な51区画に基づく）は、1.0～6.2cm までのものが認められ、多くは1.5～3.5cm の間である。平均では2.7cm である。大区画ごとの差は認められない。

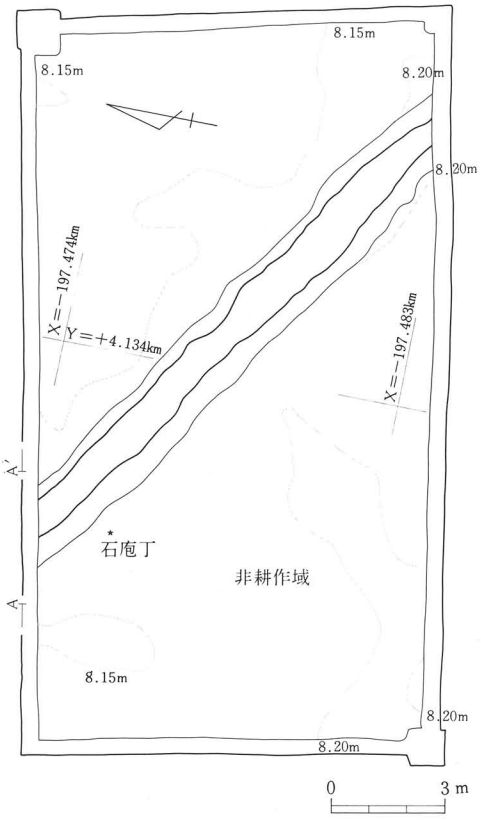
＜水口＞　水口は大畦畔・小畦畔とも認められた。この内、大畦畔１・４上及び両者の交点に設けられたものは、大区画間のもの、その他のものは小区画間のものと考えられる。水口底面のレベルは、耕作土上面よりやや高いものとほぼ同じものがあり、大区画間のものは前者で、小区画間のものは後者を主体とする。また、水口前面の耕作土上面は、やや窪む場合が多い。小区画には水口が検出されたものと検出されなかったものがある。検出されたものには、小区画の１辺の畦畔のみのものから、取り囲む全ての畦畔に設けられるものまでの各種がある。１辺の畦畔に設けられる水口の数は、大部分が１ケ所であるが希に数ケ所のものも認められる。また、取り付けられる箇所は、畦畔のほぼ中央か交点部分のいずれかである。尚、大畦畔１とその北側の小畦畔との交点では、大畦畔４の交点と同様に、全てに水口が設けられており、明確に水口が同一方向に連続するという規則性が認められる。

⑶　11層上面

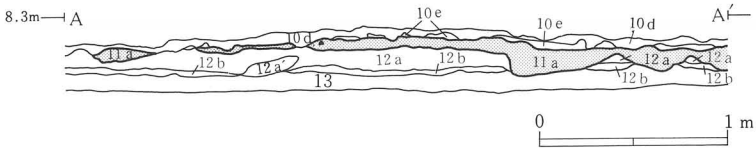
11a 層水田跡（第64図）

＜遺構状況＞　大畦畔が１条検出されたのみである。畦畔の検出面は10d 層中である。水田の範囲は、調査区全面に広がらず、畦畔の北東側のみ耕作域（11a 層　70m² ）で、南西側は非耕作

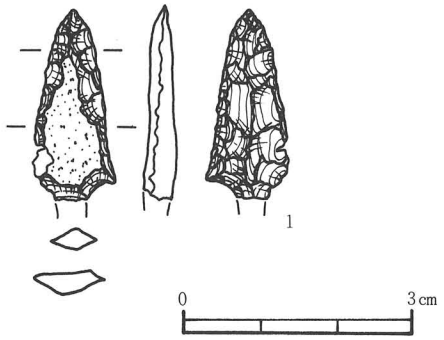
域（12a 層）となっている。耕作域部分では、上層の10d 層水田跡の耕作深度が深かったために、上面がやや削平されている。畦畔方向は N－56°－W で、直線的に延びる。畦畔は耕作土と同一土壌 ― 11a 層 ― を盛り上げ作られている。下端幅は1.8m 前後で、耕作土上面からの高さは 8 cm 前後である。耕作土は泥炭質粘土層の12a 層から12b 層を攪拌し、耕作土 ― 11a 層 ― としている。耕作深度が深い部分では、さらに下層の13層上面をも攪拌している。畦畔部分では耕作が及ばなかったためか、直下の12a 層上部が擬似畦畔となって残っている。耕作土は余り分解が進んでおらず（特に、畦畔部分では顕著）、下部では12・13層ブロックを多量に含む。耕作土の下面は凹凸が激しいが、耕作土の厚さは平均で12cm 位である。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面（耕作域）の標高は8.10～8.20m の間で、北方向の緩やかな下り傾斜を示す。傾斜の度合いは約1.2cm/m である。非耕作域もほぼ同様な標高を示すが、傾斜は中央部を境として、北西側・南東側の両方向に緩やかに下がる傾向を示す。尚、畦畔上には水口は検出されなかった。

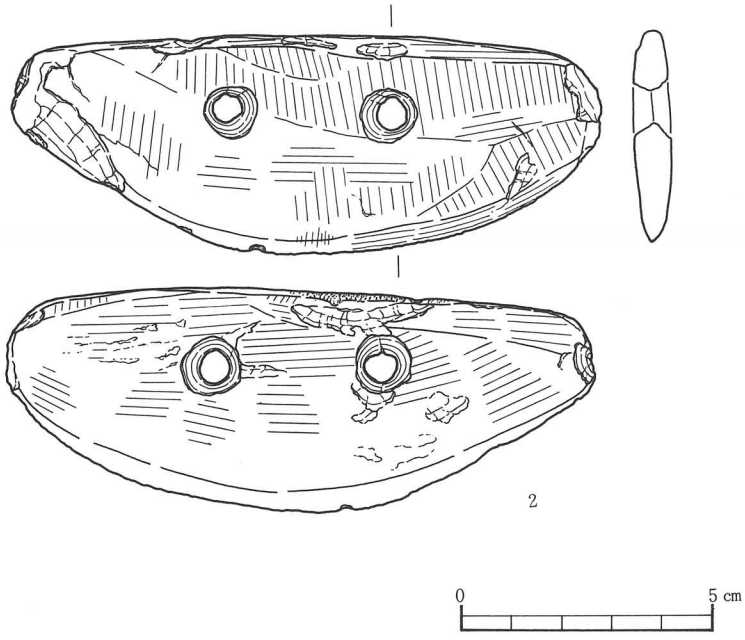


＜出土遺物＞　完形の磨製石庖丁が１点（第65図２）出土したのみである。出土地点は畦畔から南西に約40cm 離れた非耕作域上面である。石庖丁は、長さ117.5mm の小形のものである。刃部の強い外弯に比して背部が弱く外弯する、半月形状を呈す。中央部の背部寄りには、二孔一対の紐孔が穿たれている。紐孔は両面からの回転穿孔である。背部付近には剝離痕・敲打痕、刃部の端部寄りに剝離痕が認められるが、この部分も含め両面とも良く磨かれている。刃部は両面とも、さらに丁寧な横方向の研磨が加えられ、一部光沢面が見られる。尚、細かい刃こぼれが数ケ所に認められる。



第64図　11 a 層水田跡平面・断面図



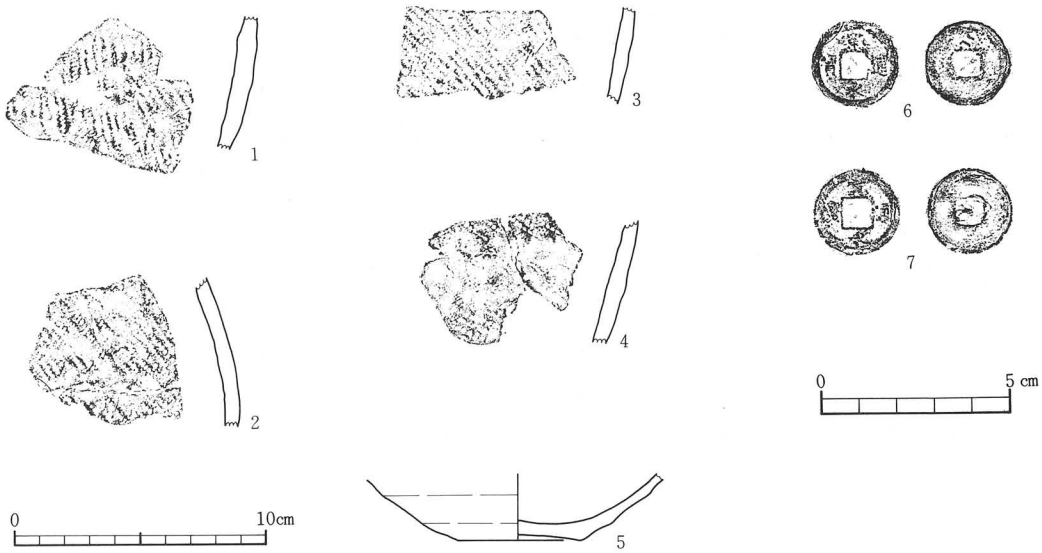


No.	図版番号	遺構・層位	名称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
1	写真60—7	10c層	石鏃	25.0	11.0	4.0	1.0	石英	
2	写真60—8	11a層水田跡・非耕作域上面	石庖丁	117.5	44.0	7.5	52.9	粘板岩	紐穴径6mm・紐穴間隔27mm

第65図　出土遺物(2)

(4)　その他の出土遺物

基本層１・３・４・10c 層から弥生土器片・土師器片・赤焼土器片・須恵器片・陶器片・磁器片・石器・金属製品等が出土した。この内、出土量が最も多かったのが１層で、６層以下では極端に出土量が減少する。弥生土器は３・４層から各１点出土した。いずれも地文のみの体部資料で、遺存状態は悪い（第66図１～４）。土師器・赤焼土器・須恵器は４層以上の層位から合計18点出土した。このうち図化できたものは、４層出土の赤焼土器の坏１点（第66図５）のみである。底部の切り離し技法は回転糸切りで、無調整である。土師器には、ロクロ不使用・ロクロ使用の両者が認められる。陶器・磁器は出土量が多く、合計89点出土した。３層出土の陶器片１点を除けば、全て１層出土である。製作年代の判る資料は、全て近世以降で、中でも近代から現代にかけてのものがほとんどである。３層出土の陶器片の製作年代は細片のため不明である。石器では石鏃が１点（第65図１）、10c 層より出土している。平面形が二等辺三角形のもので、茎部を有する。金属製品では、１層中より寛永通宝が２枚出土している（第66図６・７）。また、自然遺物としては、10a 層中よりクルミの種子が７点出土している。



No.	図版番号	遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	口　径	底　径	器　高	特　　徴
1～4	写真60－1～4	4　層	弥生土器	壺	体部小片				同一個体・外面横位ＲＬ縄文
5	―――	4　層	赤焼土器	坏	体部¼～底部		5.0cm		ロクロ、回転糸切無調整
6	―――	1　層	古　銭						「寛永通宝」
7	―――	1　層	古　銭						「寛永通宝」

第66図　出　土　遺　物（3）

4．遺構の所属年代とまとめ

1．検出遺構としては、11a層・10d層・9a層の3時期の水田跡が検出された。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層とした6b・4～2層の各層が上げられる。これらの年代であるが、今回の調査では、時期決定資料にかけたが、層位の対応が可能な隣接第28次調査（佐藤：1988）の結果を踏まえれば、以下のような所属年代が与えられる。

・11a層水田跡 ― 弥生時代桝形囲式期

・10d層水田跡 ― 弥生時代桝形囲式期以降　十三塚式期以前

・9a層水田跡 ― 弥生時代十三塚式期

・4層 ― 平安時代以降　近世以前　　・3層 ― 近世　　・2層 ― 近代以降　現代以前

2．11a層水田跡の次の段階の10d層水田跡では、11a層水田跡と同一耕作域をとり、それをさらに拡大している。11a層の大畦畔は踏襲され、拡大時に伴う新たな大畦畔もこれと方向性を同一にする。しかし、9a層水田跡の段階になると水田域は変化し、10d層の大畦畔も踏襲されない。10d層水田跡の水田区画の方法は、まず、11a層水田跡の大畦畔を踏襲した大畦畔1、また新たに非耕作域に取り付けられた大畦畔3によって大きな大区画が形成される。次にやや規模の劣る大畦畔2・4によって大区画は2分割される。さらに、これらを小畦畔によって細分し、最終の小区画の水田が作られている。これらの各期における水田域・大畦畔の変遷、10d層水田跡の最終区画（小区画）に至るまでの区画方法は、隣接第28次調査区とほぼ同一である。

3．10d層水田跡では、大畦畔1を境とする南西側部分（大区画C・D）と南東側部分大区画（A・B）の耕作土を比較すると、南西側部分は耕作深度が浅く、下部に10e層ブロックを多量に含み、耕作土の分解も進んでいない。このように両者の耕作土には著しい違いが認められ、これは耕作期間の差によって生じたものとも考えられる。

4．隣接の第28次調査区では34層より、第38次調査区（本文 p.20）では19c層より遺物の出土をみたが、当調査区では両層とも確認されたものの遺物は出土しなかった。この内、縄文時代早期後葉の遺物を出土している34層は、当調査区では薄く、不安定な状態となっている。

第12節　富沢遺跡第47次調査

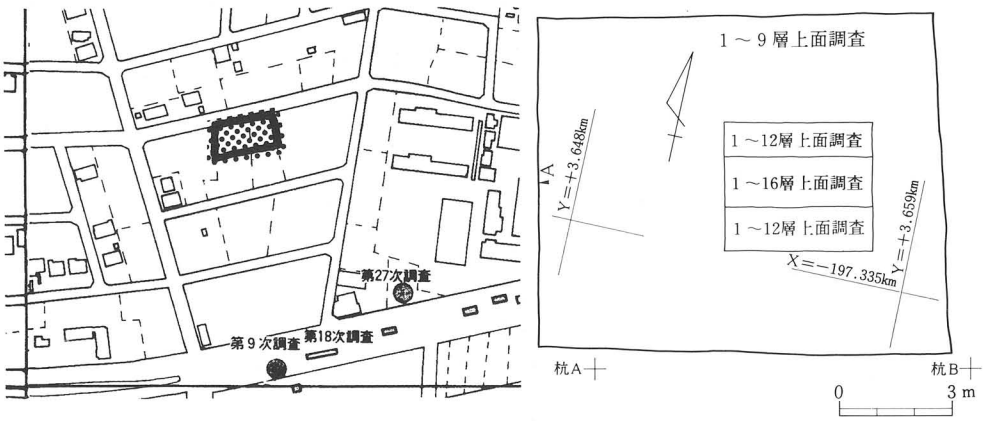
１．調査方法

調査区の設定面積は約95m² である。当調査区は近年まで水田経営が続けられていた場所で、盛り土はされておらず１層（旧水田耕作土）下面までを重機で除去し、以下は人力により調査を行った。なお調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。９層上面までは調査区全面の精査を実施した。９層以下は調査区中央部に試掘区を設けて掘り下げた。（９層上面から12層までは４×3.5m、 12層以下16層までは４×1.5m）

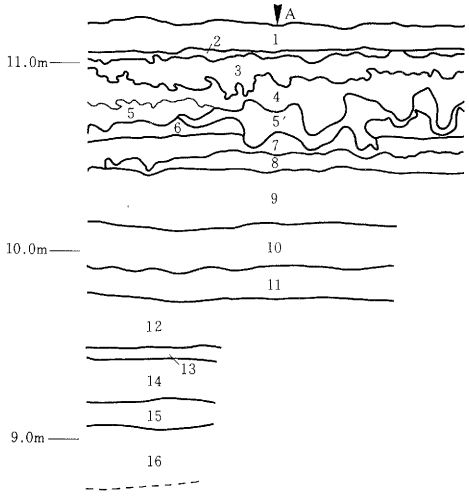
遺構の測量は杭Ａ・Ｂを基準として行なったが、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.33883km、 Ｙ＝＋3.64944km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.33667km、 Ｙ＝＋3.65920km）。

２．基本層序

今回の調査では大別16層、細別では17層が確認された。各層の土質は１層がシルトで２～５層は粘土層であるが、３・４・５・５′層は泥炭を含んでいる。なお５・５′層は基本的には同一の層であるが、５′層は５層に比べてより分解が進んでいる。６層以下12層までは泥炭の含有が増加して泥炭質粘土層となるが、８層は粘土層である。13～16層は粘土質が主体であるが、14層は泥炭質粘土層である。グライ化は15層から漸次進み16層では顕著になる。現代のものを除く水田土壌は４層である。この他２・３・５・５′・８層も水田土壌の可能性がある。４・５・５′層からは灰白色火山灰が検出された。いずれの層の時期に降下したものか判然としないが、



第67図　調査区位置図・設定図



第68図　基　本　層　序

量的には5・5′層に多く、またこれらの層の上面に乗る傾向も数ケ所認められるため、この時期に降下した可能性も考えられる。各層はほぼ水平な堆積状況を示している。遺物の出土層は1・2・4・5・7・8層である。

層序	土色		土質	層厚	混入物	備考
1	灰　色	7.5Y 4/1	粘土質シルト	2 cm～10cm	鉄分	水田耕作土（現代）
2	褐灰色	10YR 5/1	粘土	2 cm～8 cm	マンガン粒・鉄分	水田耕作土？・下面起伏・部分的な分布
3	黒　色	5Y 2/1	粘土	3 cm～20cm	鉄分少量・灰白色火山灰粒少量・植物遺体少量	水田耕作土？・下面起伏・不連続な分布
4	暗灰黄色	2.5Y 5/2	粘土	3 cm～30cm	鉄分少量・灰白色火山灰ブロック・植物遺体	水田耕作土・下面起伏
5	オリーブ黒色	5Y 3/1	粘土	5 cm～23cm	鉄分少量・灰白色火山灰ブロック・植物遺体	水田耕作土？・下面起伏・部分的な分布
5′	黒褐色	2.5Y 3/1	粘土	4 cm～18cm	灰白色火山灰ブロック少量・植物遺体	水田耕作土？・下面起伏
6	褐　色	7.5YR 4/4	泥炭質粘土	2 cm～18cm	植物遺体多量	自然堆積層
7	黒　色	7.5YR 1.7/1	泥炭質粘土	8 cm～18cm	植物遺体多量	自然堆積層
8	オリーブ黒色	5Y 3/1	粘土	2 cm～12cm	植物遺体	水田耕作土？・下面起伏
9	黒　色	2.5Y 3/1	泥炭質粘土	18cm～35cm	植物遺体多量	自然堆積層
10	黒褐色	2.5Y 3/2	泥炭質粘土	13cm～23cm	植物遺体多量	自然堆積層
11	黒褐色	10YR 3/2	泥炭質粘土	12cm～20cm	植物遺体多量	自然堆積層
12	黒　色	7.5YR 1.7/1	泥炭質粘土	25cm～30cm	植物遺体多量	自然堆積層
13	オリーブ黒色	5Y 3/1	粘土	5 cm～8 cm	植物遺体	自然堆積層
14	黒　色	7.5YR 1.7/1	泥炭質粘土	23cm～30cm	植物遺体	自然堆積層
15	灰　色	5Y 4/1	粘土	10cm～20cm	粗砂少量・植物遺体	自然堆積層
16	灰オリーブ色	7.5Y 5/2	粘土	30cm以上	粗砂・植物遺体	自然堆積層

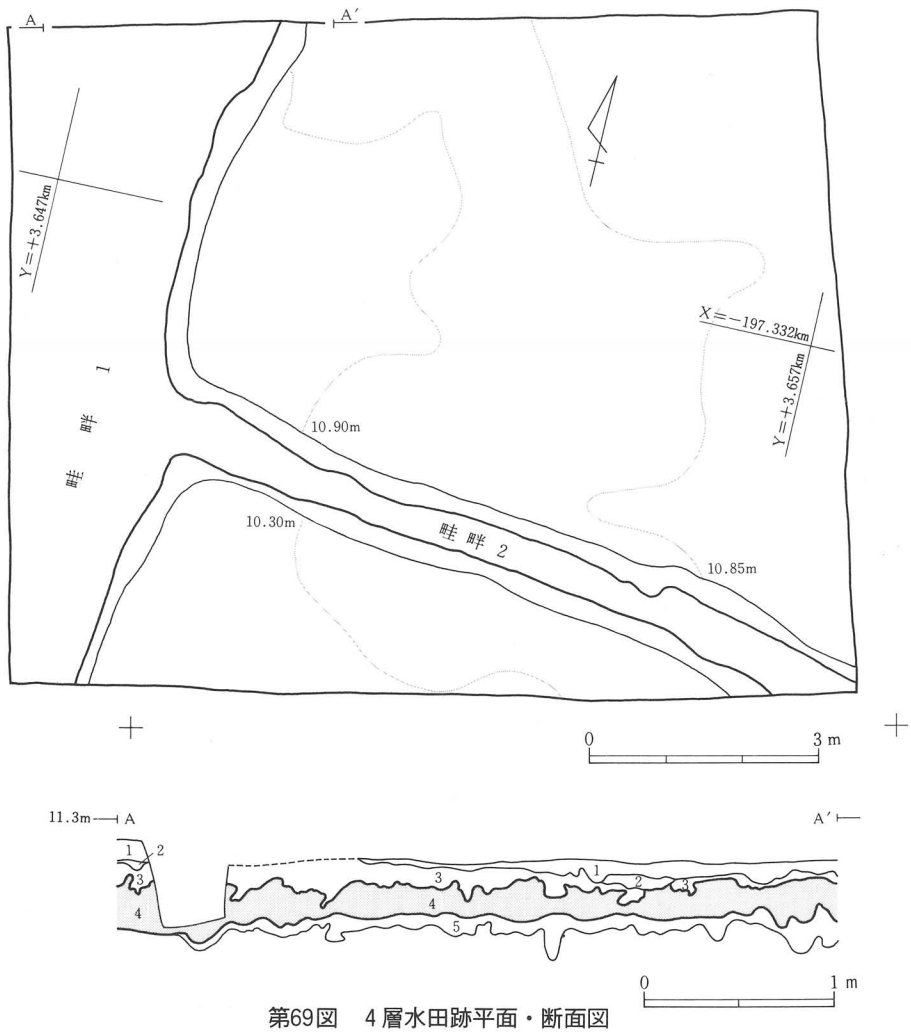
3．検出遺構と出土遺物

(1)　4層上面

4層水田跡（第69図）

＜遺構状況＞

ほぼ直交する2本の畦畔を検出したが、畦畔1は大畦畔で畦畔2はそれにとりつく小畦畔である。畦畔1は部分的な検出であるが、方向はN－2°－Eでほぼ真北方向を指す。下端幅は2.5m以上で、耕作土上面からの高さは2～3 cmである。畦畔2は方向がN－83°－Wで、下端幅は約0.8m程である。耕作土上面からの高さは約1～2 cmを計る。畦畔1・2によって区画される水田区画は2区画である。部分的な検出のため明確な規模、形状は知り得ないが、畦畔の



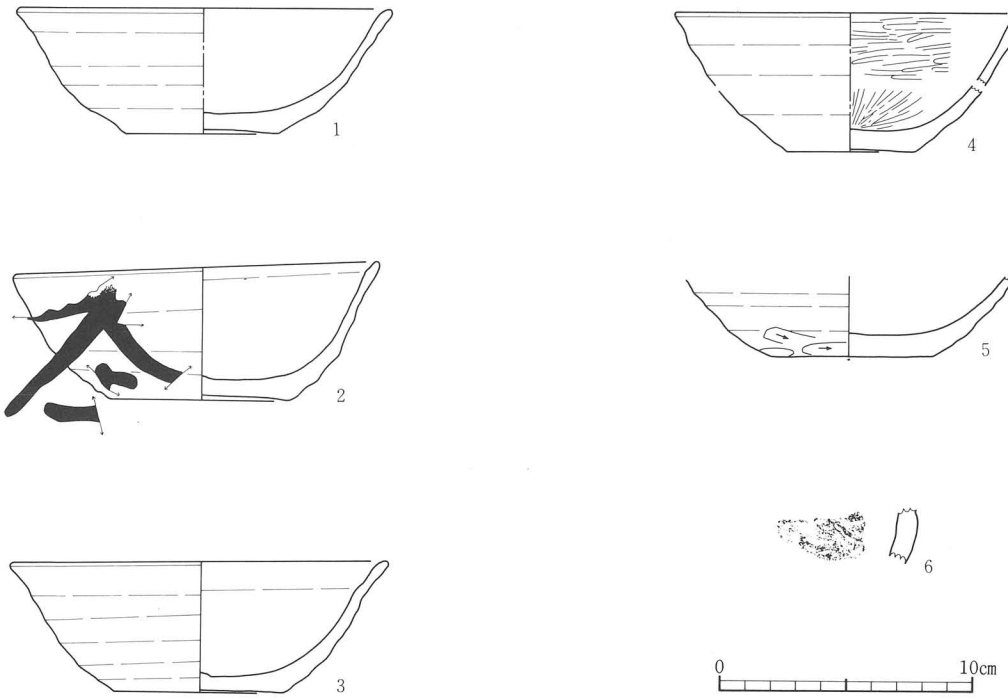
第69図　４層水田跡平面・断面図

交接のありかたから方形を呈するものと考えられる。畦畔はいずれも耕作土と同じ４層を盛り上げて作られている。耕作土の４層は層厚が約３～30cm で分解が進んでいる。また下面は凹凸が著しく、鉄分の集積は認められない。水田面の標高は10.85～10.90m の間で全体的に東方向に下っている。また耕作土中からは灰白色火山灰ブロックが検出されたが、これは下層のものが巻き上げられたものとみられる。

＜出土遺物＞

耕作土中より土師器４点、赤焼土器11点、須恵器6点が出土した。このうち復元、図化ができたのは土師器２点、赤焼土器３点である。

土師器はいずれも坏である。第70図４は製作にロクロが使用され、内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。底部切り離しは回転糸切り無調整である。第70図５もロクロが使用さ



No.	図版番号	遺構・層位	種　別	器種	遺存度	口　径	底　径	器　高	底径／口径	特　　徴
1	写真61－3	4 a層水田跡	赤焼土器	坏	約 1/3	(14.8cm)	(5.9cm)	5.0cm	0.39	ロクロ、回転糸切無調整
2	写真61-5･6	4 a層水田跡	赤焼土器	坏	約 3/5	14.5cm	7.0cm	5.6cm	0.48	ロクロ、回転糸切無調整、墨書「大上」
3	写真61－4	4 a層水田跡	赤焼土器	坏	ほぼ完形	14.8cm	6.6cm	5.3cm	0.44	ロクロ、回転糸切無調整
4	写真61－1	4 a層水田跡	土 師 器	坏	約 1/2	(13.8cm)	5.0cm	(5.5cm)	0.36	ロクロ、回転糸切無調整、ヘラミガキ･黒色処理
5	写真61－2	4 a層水田跡	土 師 器	坏	約 1/4		6.4cm			ロクロ、手持ヘラケズリ
6	—	7 層	弥生土器	壺	体部小片					R 撚糸文

(　)内は復元値

第70図　出　土　遺　物 (1)

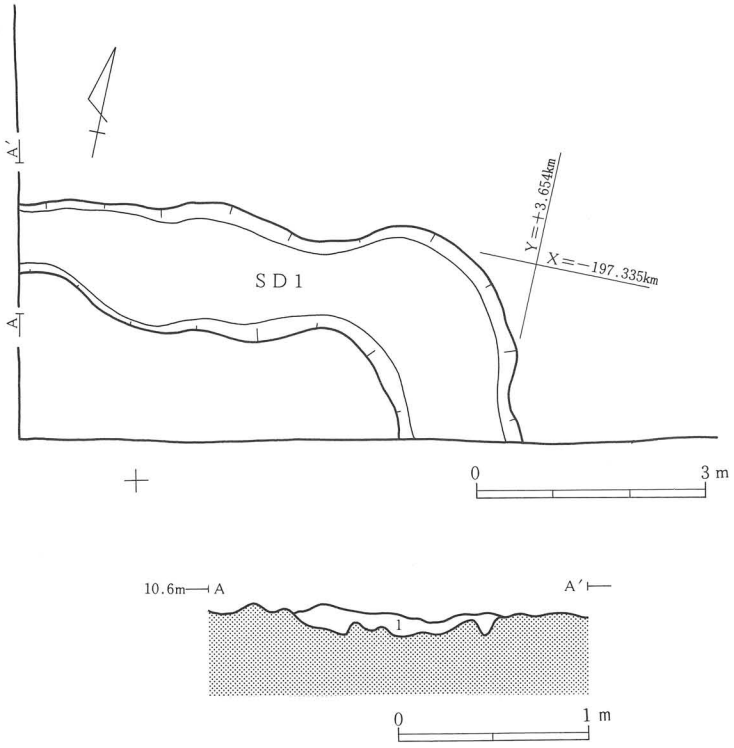
れている。外面の体部下端は手持ちヘラケズリ、内面はロクロ調整のみで黒色処理は施されていない。底部は手持ちヘラケズリである。赤焼土器の器種はすべて坏である（第70図１、２、３）いずれも体部にゆるいふくらみを持ち、口縁部は軽く外反する。底部は回転糸切り無調整である。第70図２のものには「大上」と思われる墨書がある。須恵器はすべて坏の小破片である。

(2)　8層上面

1号溝跡 — SD1 — (第71図)

＜遺構状況＞

調査区南西隅付近で検出された。上端幅は1.2～2m、深さは約15cm 程である。断面形はゆるやかな舟底形を呈する。堆積土は黒褐色粘土の単層で遺物の出土はなかった。



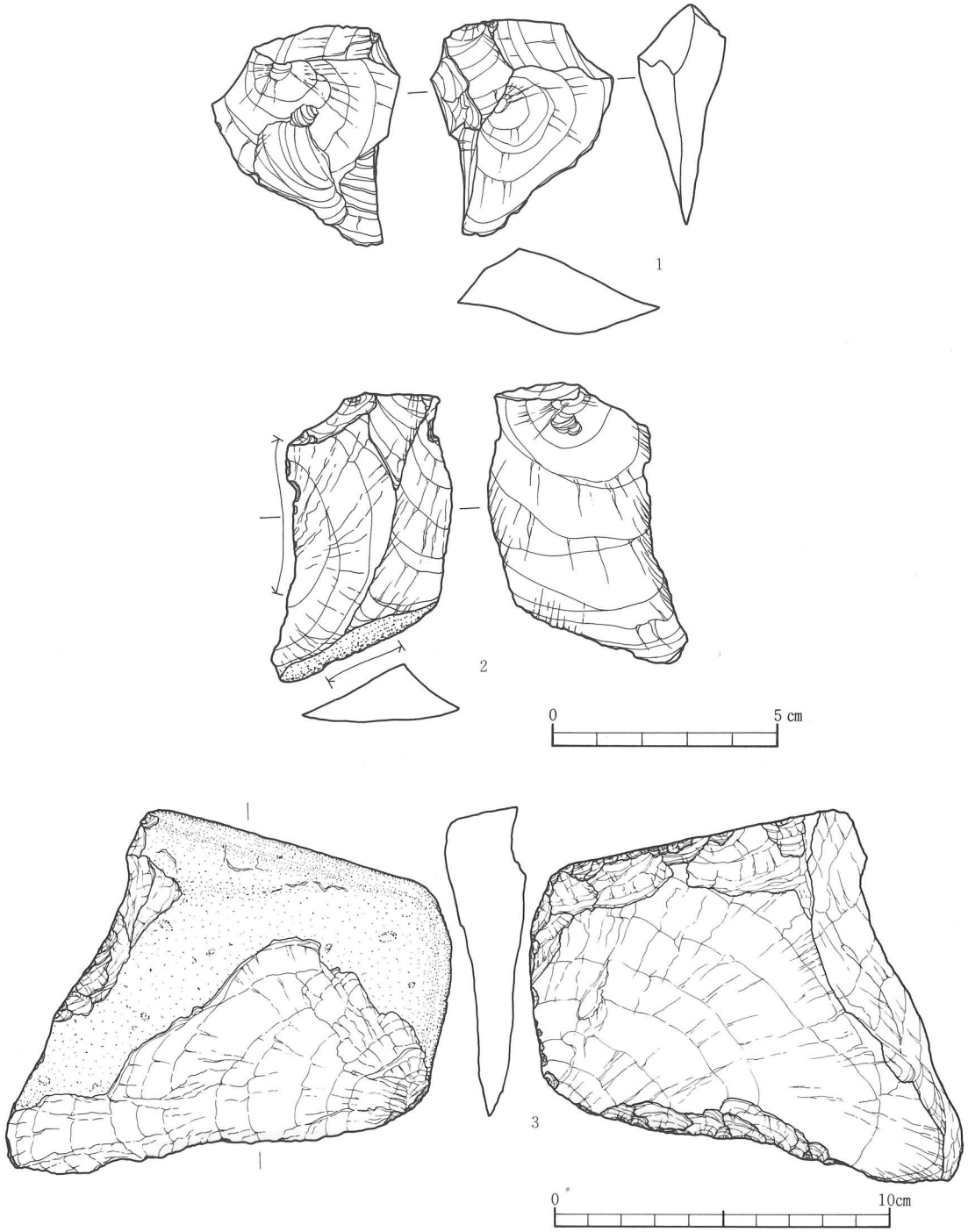
第71図　ＳＤ１平面・断面図

＜出土遺物＞

上面から石器２点が出土した。第72図３は大形板状安山岩製石器である。角ばった自然礫を素材とし、主に３縁辺に二次加工が施されているが、下縁辺が刃部と想定される。下縁辺には使用痕とみられる著しい光沢が観察される。第72図２は微細剥離痕のある剥片である。また層中からも剥片が１点出土した。（第72図１）

⑶　その他の出土遺物

基本層１・２・５・７層から磁器片、土師器片、赤焼土器片、弥生土器片などが出土した。磁器片は２層から１点出土したが、器種は皿、産地は肥前で近世に属するものと考えられる。土師器片（３点）、赤焼土器片（５点）は５層からの出土であるが、復元･図化し得るものはなかった。土師器はすべてロクロ使用の坏である。内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。底部切り離しは回転糸切りである。赤焼土器片もすべて坏である。弥生土器片は７層から１点のみ出土したが、細片のうえ磨滅が著しく詳しい時期は不明である。外面に撚糸文が施されている。（第70図６）



No.	図版番号	名　　称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
1	写真61－8	剝　片	50.0	41.5	19.0	23.7
2	写真61－7	微細剝離痕のある剝片	64.0	42.0	12.5	29.7
3	写真61－9	大形板状安山岩製石器	109.0	136.0	24.0	319.5

第72図　出　土　遺　物（2）

４．遺構の所属年代とまとめ

遺構が検出されたのは４層及び８層であるが、その他２、３、５・５′層も水田跡である可能性がある。

４層水田跡はほぼ直交する２本の畦畔（畦畔１、２）によって区画される水田区画を２区画検出した。この所属時期は出土遺物や灰白色火山灰のありかたから、平安時代（10c 前半以降）と考えられる。また畦畔１は大畦畔であるが、その方向はほぼ真北方向を指しており、近年富沢遺跡でその存在が指摘されている条里型地割畦畔である可能性もある（平間：1988)。なお西側に隣接する第34次調査区４層上面でも同時期と考えられる水田跡が検出されているが、今回発見された水田跡はこれと連続するものと思われる（佐藤：1988)。

８層上面では溝跡を１条検出したのみであるが、第34次調査区でこの層と対応すると考えられる９層上面で弥生時代の水田跡が検出されていること、弥生時代の水田耕作に関与すると推定されている大形板状安山岩製石器が層上面から出土したことなどから、詳しい時期は不明であるものの弥生時代の水田跡である可能性が考えられる。

水田の存在が予想されるその他の層の時期は、出土遺物や隣接調査区との層位対比から次のように推定される。

２層……近世

３層……中世

５・５′層……平安時代（10c 前半以前）

第73図　47次４層・34次４層平面図

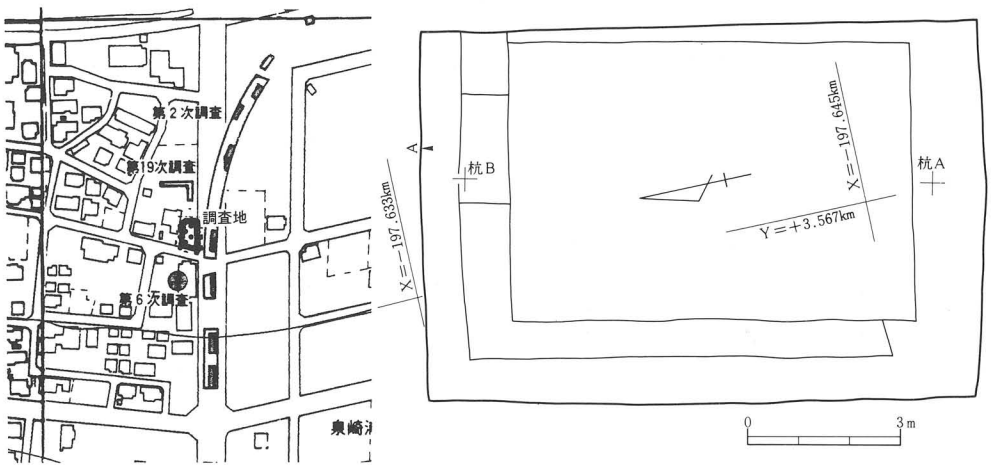
第13節　富沢遺跡第48次調査

1．調査方法

調査区の設定面積は約11×7.5m（約80m²）である。調査は、盛土および1層（旧水田耕作土）面までを重機で除去し、以下は人力により行った。調査地点は泉崎浦付近の微高地の北東縁辺に近いところで、以前に南側の隣接地（第6次―佐藤：1983）と北側の隣接地（第19次―渡辺：1986）で調査が行われており、前者では平安時代の、後者では弥生・平安・平安以降の各時期の水田跡がそれぞれ確認されている。したがって、今回の調査でも水田跡の存在が予想された。なお、調査区周辺には土層観察および排水用の側溝を設けた。13層上面までは調査区全面の精査を実施し、13層以下は約2×1mの試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、A・Bを基準として実施した。その杭の座標位置は、A：X＝－197.64340km、Y＝＋3.59720km　B：X＝－197.63436km、Y＝＋3.59910km である。

2．基本層序

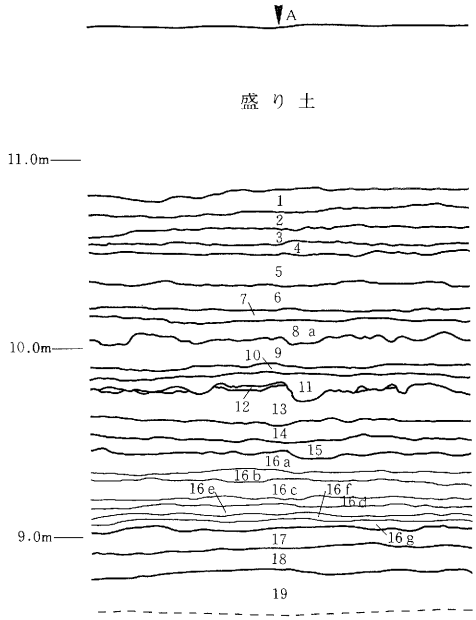
今回の調査では、盛土下に19層が確認された。これらの各層は基本的には、1～4層がシルト層、5層が厚い砂層、6～9層が粘土層、10～18層が粘土と泥炭の互層を基本とする泥炭質粘土から成り、グライ化は19層から始まる。現代のものを除く水田土壌とみられる層は8a層・11層である。また、2・3・4・8b層も水田土壌の可能性がある。12層までの各層の傾きは概して北東方向にわずかに下がる。



第74図　調査区位置図・設定図

３．検出遺構と出土遺物

明確な遺構は発見されなかったが、8b かまたは９層上面、12層かまたは13層上面から、それぞれ畦畔状の高まりが発見された。これらの高まりが平面的に直交するプランであること、層が主に自然堆積層であること、上層の8a 層および11層が土層の特徴や下面の状況から水田土壌と考えられることなどから、この高まりは8a 層および11層を耕作土とした水田耕作に伴い形成された擬似畦畔Ｂ（斎野他：1987）と考えられる。したがって本来、擬似畦畔の検出された直上の8a および11層上面に畦畔が存在したものと推測される。

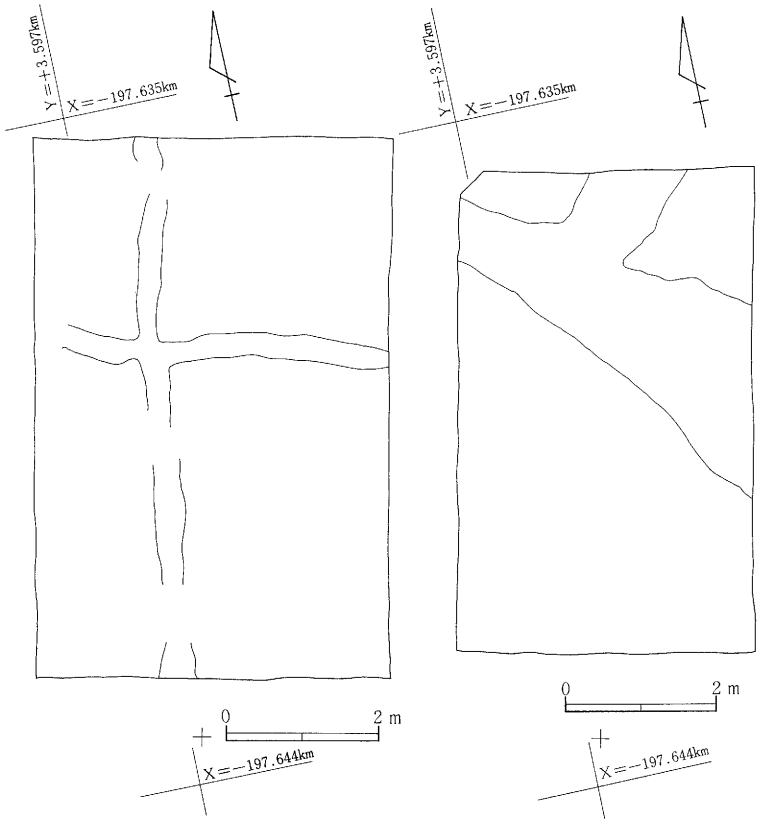


第75図　基　本　層　序

(1)　8a 層水田跡（第76図）

＜遺構の検出＞　8b および９層上面で、交叉する二条の擬似畦畔Ｂが確認された。畦畔の南北方向はＮ－9°－Ｅで、東西方向はこれとほぼ直交する。幅は30cm 前後である。区画全体の形

層序	土色	土質	層厚	混入物	備考
1	黒褐色　10YR 3/2	シルト	6 cm～16cm	炭化物・凝灰岩粒	水田耕作土（現代）
2	にぶい黄褐色　10YR 5/3	砂質シルト	10cm前後	鉄分多量・炭化物小量・小礫	水田耕作土？
3	黒褐色　10YR 3/2	砂質シルト	5 cm～10cm	鉄分多量・炭化物少量	水田耕作土？・下面若干起伏・下面に鉄分集積層
4	黒　色　10YR 3/1	砂質シルト	6 cm～8 cm	炭化物少量	水田耕作土？・下面起伏・部分的分布
5	オリーブ灰色　2.5GY 5/1	砂	10cm～20cm	炭化物・灰白色火山灰ブロック	自然堆積層
6	黄灰色　2.5Y 5/1	粘土	10cm～15cm		自然堆積層
7	黒　色　2.5Y 3/1	泥炭質粘土	5 cm前後	植物遺体	自然堆積層
8 a	黒　色　5Y 3/1	泥炭質粘土	5 cm～15cm		水田耕作土・下面起伏
8 b	黒　色　5Y 3/1	粘土	2 cm～6 cm		水田耕作土？・部分的で不連続な分布
9	灰　色　5Y 5/1	粘土	10cm～18cm		自然堆積層
10	オリーブ黒色　5Y 3/1	泥炭質粘土	5 cm前後		自然堆積層
11	オリーブ黒色　5Y 3/1	泥炭質粘土	5 cm～15cm	凝灰岩粒多量	水田耕作土・下面起伏
12	黄灰色　2.5Y 5/1	粘土	2 cm～4 cm		自然堆積層・部分的で不連続な分布
13	黒　色　2.5Y 3/1	泥炭質粘土	12cm～20cm		自然堆積層
14	黒　色　5Y 3/1	泥炭質粘土	10cm前後		自然堆積層
15	黒　色　5Y 3/1	粘土	5 cm～10cm		自然堆積層
16 a	黄灰色　2.5Y 5/1	粘土	6 cm～12cm		自然堆積層
16 b	黒　色　10YR 3/1	粘土	3 cm～6 cm		自然堆積層
16 c	黄灰色　2.5Y 5/1	粘土	10cm前後		自然堆積層
16 d	黒　色　10YR 3/1	粘土	3 cm～6 cm		自然堆積層
16 e	黄灰色　2.5Y 5/1	粘土	5 cm前後		自然堆積層
16 f	黒　色　10YR 3/1	粘土	2 cm～4 cm		自然堆積層
16 g	黄灰色　2.5Y 5/1	粘土	5 cm前後		自然堆積層
17	黒　色　2.5Y 3/1	粘土	10cm前後		自然堆積層
18	黒褐色　10YR 3/1	粘土	10cm～15cm		自然堆積層
19	褐灰色　10YR 5/1	砂質シルト	25cm以上		自然堆積層



第76図　8 a層・11層水田跡平面図

状を把握できたものはないが、南東部の最も大きい残存部での面積は約2.8×4.2m（約11.8m²）である。耕作土は8b・9層の粘土を基盤としており、残存土壌中には特に9層の灰色土ブロックが多く混じっている。

＜出土遺物＞　層中からの遺物は発見されなかった。

(2)　11層水田跡（第76図）

＜遺構の状況＞　12・13上面でT字形に交わる二条の擬似畦畔Bが確認された。畦畔の南北方向はN―43°―Eで、東西方向はこれとほぼ直交する。幅は平均約1mを計る。区画全体の形状を把握できたものはないが、南半部の最も大きい残存部の面積は約20m²である。耕作土は12・13層の粘土および泥炭層を基盤とする泥炭質粘土であり、残存土壌中には12・13層ブロックが多く混じっている。

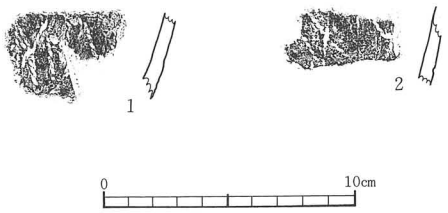
＜出土遺物＞　上面および層中からは同一個体とみられる弥生土器片が2点と石器が7点出土した。

弥生土器（第77図1・2）は地文のみのもので、条間の広い撚糸文（R）である。詳しい時期は不明である。

石器は素材となる剝片の大きさから2つに分けられる。

A類―大形の剝片を素材とするもので、いずれも片面に自然面をもっている。これらにはいわゆる撥形をなす石器（第79図3）と、剝片の一部に二次加工が加えられただけの石器がある（第78図1、第80図3）。前者は二次加工として側縁の上部両側に抉りを入れ、下縁辺に二次加工が加えられないのを特徴としている。使用痕としては、下縁辺のみに微細剝離痕と顕著な光沢面があり、その部分が刃部と想定される。後者のうち第78図1の使用痕としては、左側辺か

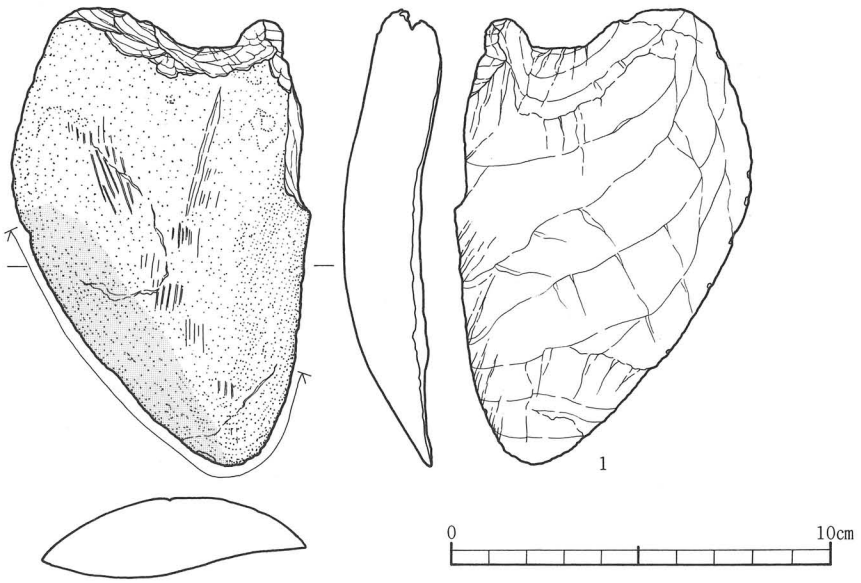
ら下縁辺にかけて微細剥離痕が認められ、また、自然面側の左側辺部には光沢面、中央から末端部にかけては擦痕が認められる。したがつて刃部としては、左側辺から下縁辺を中心とした部分が想定される。



第77図　出　土　遺　物（1）

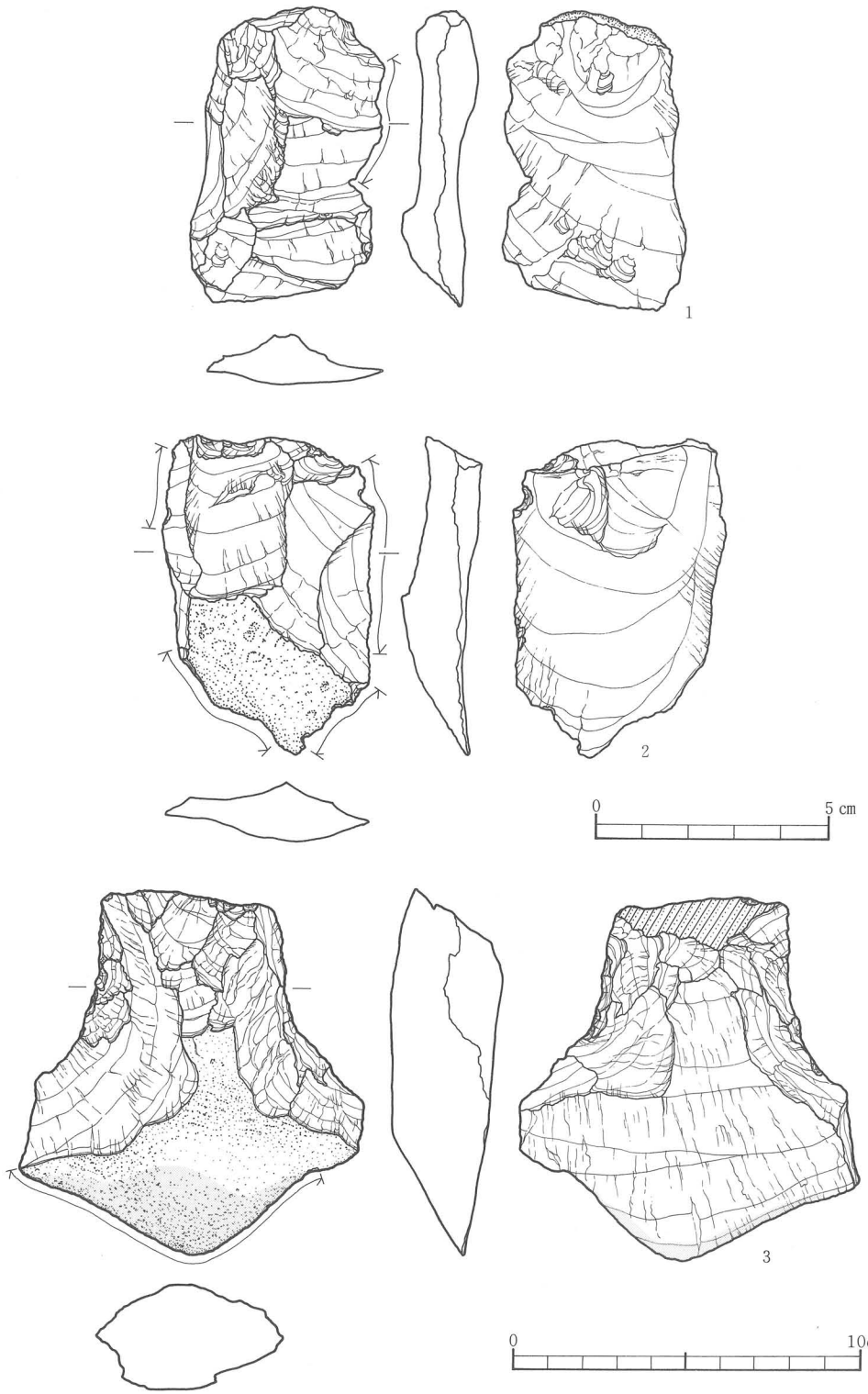
B類（第79図１・２、第80図１・２）―小形の剥片である。これらには一部に二次加工が加えられているもの（第80図１・２）と加えられていないもの（第79図１・２）がある。いずれも石材は流紋岩である。前者では二次加工が加えられている部分を中心に微細剥離痕や光沢面などが、後者では素材縁辺の一部か周縁に微細剥離痕などの使用痕が認められた。

No.	遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	特　　徴
1	11層水田跡	弥生土器		体部小片	R 撚糸文
2	11層水田跡	弥生土器		体部小片	R 撚糸文

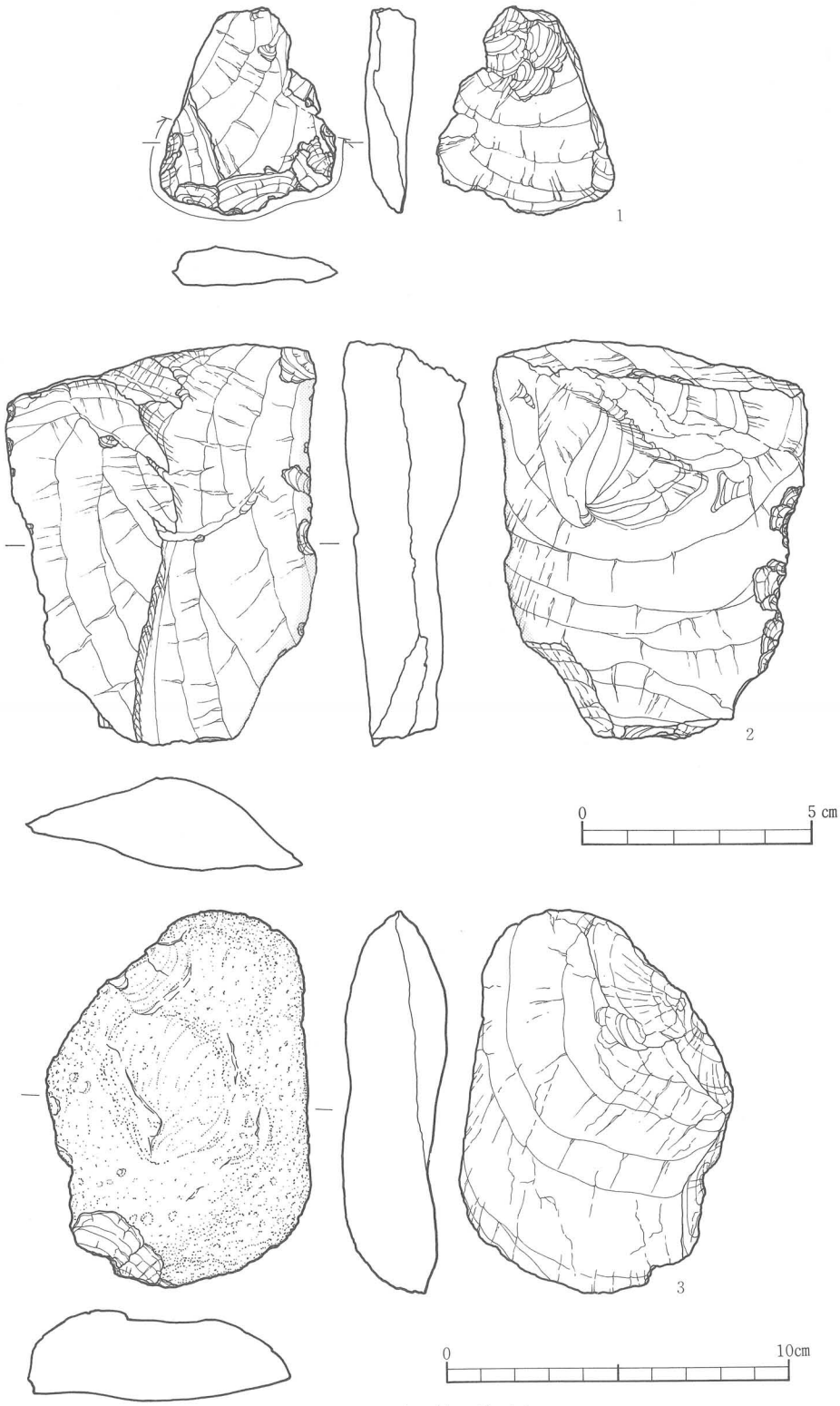


挿図番号	図版番号	名　　称	長さ(mm)	幅（mm）	厚さ(mm)	重量(ｇ)	石　　質	備　　考
第78図１	写真63－３	二次加工のある剥片	122.0	78.0	20.5	210.8	硅質凝灰岩	グリーンタフに近い
第79図１	写真62－１	剥　片	64.0	41.0	13.0	28.1		
第79図２	写真63－１	〃	68.5	45.0	14.0	37.3	硬質頁岩	
第79図３	写真62－３	剥片石器	105.0	99.0	31.0	265.5	流 紋 岩	
第80図１	写真62－２	二次加工のある剥片	45.0	38.0	10.0	16.4		
第80図２	写真63－２	〃	87.0	67.5	26.5	137.0		
第80図３	写真62－４	〃	110.0	77.0	29.0	271.9	硅質流紋岩質凝灰岩	

第78図　出　土　遺　物（2）



第79図　出　土　遺　物（3）



第80図　出　土　遺　物（4）

(3)　その他の出土遺物

基本層の２・３・４層からロクロ使用の土師器片などが数点出土しているが、細片のため図示はできなかった。また、自然遺物としては４層から種子が２点出土しているが、東北大学の星川清親氏によるとモモの種子とのことであった。

4．遺構の所属年代とまとめ

１．明確な遺構は検出されなかったが、8a および11層の水田跡の擬似畦畔Ｂが確認された。この内、8a 層については時期決定資料がなく、年代を特定することはできないが、５層中から10世紀前半に降下したとされている灰白色火山灰が含まれていることから、弥生時代以降平安時代以前と考えられる。11層については遺物から弥生時代の水田土壌と考えられる。なお、６次および19次調査の層序と、今回の層序について詳しい対応関係を把握することはできなかった。ただし、今回の11層は、層の特徴や層の上下関係から19次の7b 層と対応する可能性が強い。

２．今回、11層の弥生時代水田土壌より石器が比較的まとまって発見された。今回の調査では縄文時代の遺物は全く発見されておらず、石器の特徴からもこれらは弥生時代の水田跡に伴った可能性が強い。

石器は大きく２つの特徴をもったものから成っているが、それらの内、Ａ類の一部とＢ類に類似する石器については、これまでも富沢遺跡第15次調査（斎野他：1987）や泉崎浦遺跡（主浜：1988）などで数点の出土例があり、最近では弥生時代に伴うものとして認識されつつある石器群である。15次調査ではこれらに、いわゆる「大形板状安山岩製石器」と名付けられた大形の石器が伴っており、それをも含めていずれも水田耕作に係わる機能が想定されている。さらに使用法としてこれらの中の大形のものは収穫時のワラの刈り取り用として、小形のものは穂摘具としての可能性を示唆している。今回の出土例でも大半が微細剝離痕をもち、一部にコーン・グロスを思わせる強い光沢面が認められることなどから、水田耕作に係わる機能をもった石器であろうと考えられる。

Ａ類の中の撥（ばち）形の石器であるが、富沢遺跡では初めての出土例である。形状は縄文時代の打製石器の１タイプに近似するものの、片面に自然面を残し、刃部と想定される部位に何ら二次加工が加えられない点で、大きく異なる特徴をもっている。使用痕としてはその他の石器と同様に微細剝離痕と光沢面をもっていることなどから、同様の機能を有したものと推定される。今後の類似資料を待ちたい。

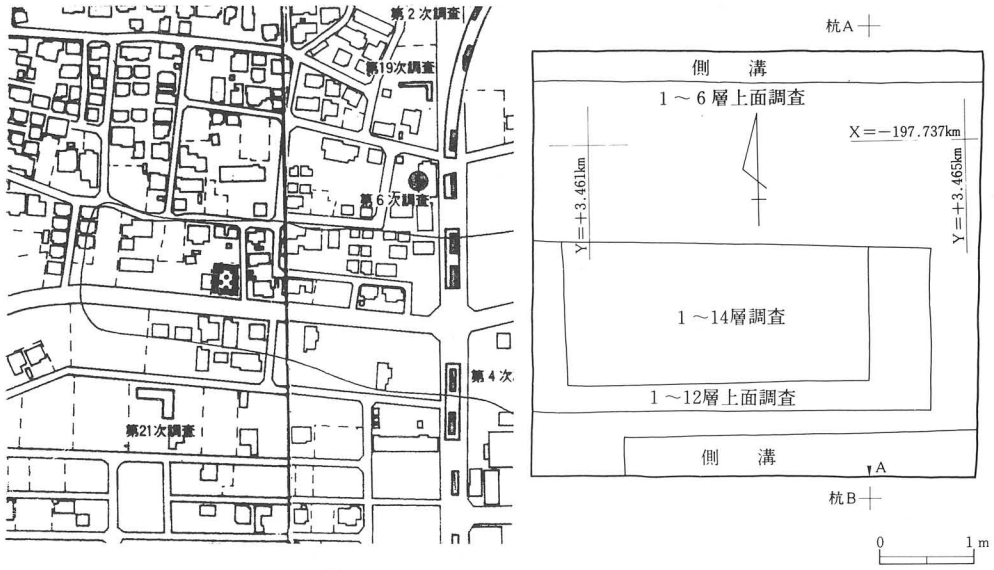
第14節　泉崎浦遺跡第４次調査

１．調査方法

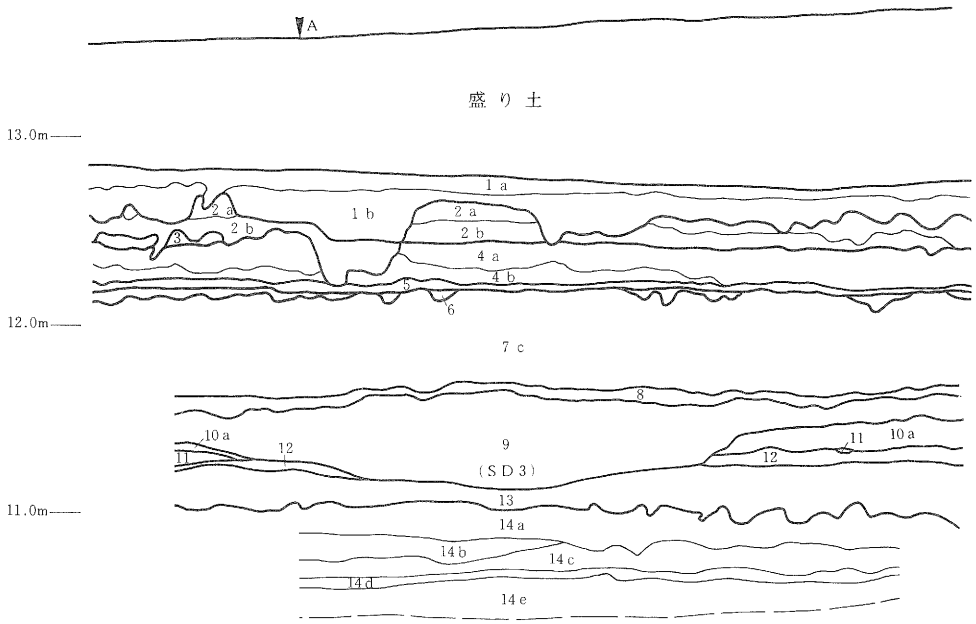
調査区の設定面積は約4.8×4.5m（21m²）である。調査は、盛土及び直下の１層（旧耕作土）上部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査区は安全確保のため、６層以下では約4.2×1.8m に縮小した。さらに、12層以下では約3.2×1.5m の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭Ａ・Ｂを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.73579km、　Ｙ＝＋3.46402km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.74079km、Ｙ＝＋3.46393km）。

２．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別14層、細別では24層が確認された。全体的に砂質成分が多く、他の調査地点とは異なる。この内１・２・７・９・11・14各層は砂層で、小河川・水路に伴う堆積土・氾濫土の可能性がある。グライ化は、７層以下から漸次進み、14層では顕著である。５・６・８・10a・12層の各層は水田土壌の可能性がある。遺物出土層は１層のみである。尚、３層中からは、灰白色火山灰が検出されているが、下層からの巻き上げの可能性もある。



第81図　調査区位置図・設定図



第82図　基　本　層　序

層序	土　　色	土　質	層　厚	混　入　物	備　　考
1 a	にぶい黄褐色　10YR 4/3	砂質シルト	5 cm～12cm		畑耕作土
1 b	にぶい黄褐色　10YR 5/3	砂質シルト	10cm～25cm		自然堆積層
2 a	にぶい黄褐色　10YR 5/4	砂	5 cm～20cm		自然堆積層・不連続で部分的な分布
2 b	灰黄褐色　10YR 5/2	砂質シルト	2 cm～15cm		自然堆積層
3	浅黄色　2.5Y 7/3	シルト	1 cm～ 8 cm	灰白色火山灰粒	不連続で部分的な分布
4 a	灰黄褐色　10YR 5/2	砂質シルト	10cm～25cm		
4 b	にぶい黄橙色　10YR 7/2	砂質シルト	2 cm～15cm		
5	灰褐色　7.5YR 5/2	シルト	2 cm～ 8 cm		水田耕作土？
6	黒褐色　7.5YR 3/1	シルト	2 cm～10cm		水田耕作土？・不連続で部分的な分布
7 a	褐灰色　7.5YR 5/1	砂質シルト	5 cm～18cm		自然堆積層・部分的分布
7 b	褐灰色　10YR 5/1	砂	7 cm～20cm		自然堆積層・部分的分布
7 c	灰白色　10YR 7/1	砂	6 cm～28cm		自然堆積層
8	褐灰色　10YR 5/1	シルト	3 cm～12cm	炭化物粒	水田耕作土？・下面起伏
9	にぶい黄橙色　10YR 6/4	砂	2 cm～50cm		自然堆積層
10 a	褐灰色　10YR 5/1	粘土	2 cm～16cm		水田耕作土？・下面若干起伏
10 b	褐灰色　10YR 4/1 灰白色　10YR 7/1	粘土 粘土	―――		自然堆積層・部分的分布
11	灰黄色　2.5Y 6/2	砂	5 cm～16cm		部分的分布
12	オリーブ黒色　5 Y 3/1	粘土	2 cm～ 5 cm		水田耕作土？・部分的分布
13	黒　色　10YR 1.7/1	シルト	8 cm～32cm	植物遺体少量	
14 a	オリーブ灰色　2.5GY 5/1	砂	10cm～25cm		自然堆積層
14 b	オリーブ灰色　5 GY 5/1	砂	10cm～15cm		自然堆積層・部分的分布
14c	オリーブ灰色　5 GY 5/1	砂	5 cm～18cm		自然堆積層
14 d	褐灰色　10YR 4/1 灰白色　10YR 7/1	粘土 粘土	3 cm～ 8 cm		自然堆積層
14 e	オリーブ灰色　5 GY 5/1	砂	22cm以上		自然堆積層

３．検出遺構と出土遺物

(1)　２層上面

１号溝跡 ― SD1 ― (第84図)

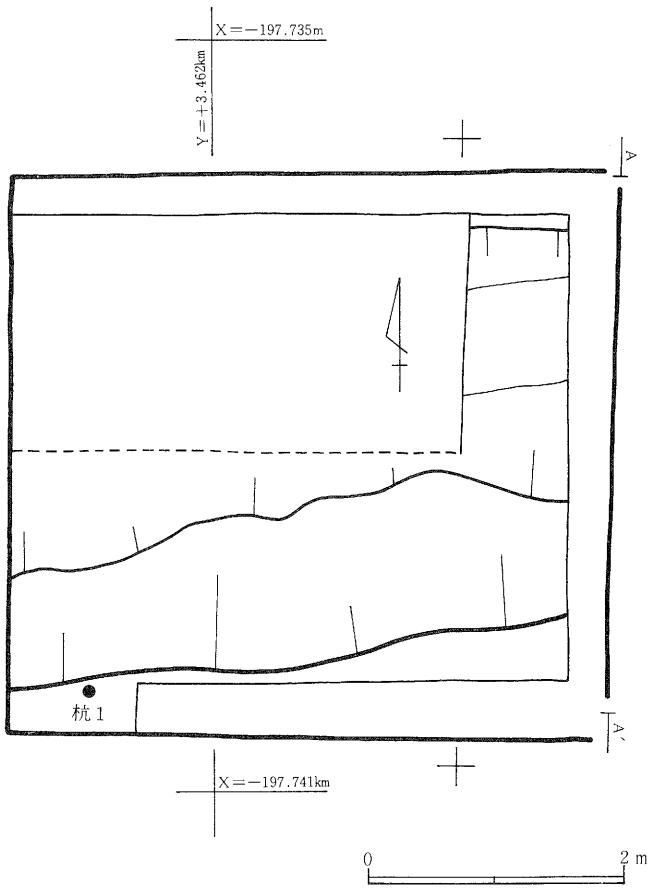
SD2 の上に重複する溝跡で、方向・溝幅とも SD2 とほぼ同様である。深さは約60cm で、堆積土は基本層1b 層が入り込んだものである。堆積土中よりビニール袋・陶器・磁器が出土している。

(2)　３層上面

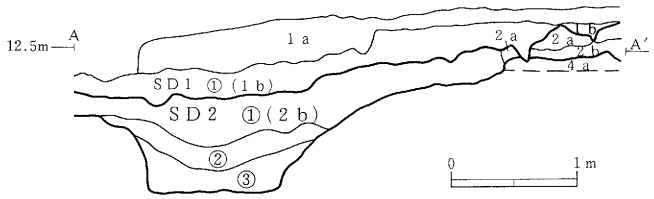
２号溝跡 ―SD2 ― (第83・84図)

＜遺構状況＞　東西方向に延びる大溝で、北側の肩は調査区外となり、検出できなかった。調査の都合上、東側の一部を完掘したのみである。推定上端幅４m 前後、深さ約１ m で、壁面中央に段を有す。中段幅は約２ m で、これを境とし壁面は上半が緩やかな傾斜面となる。中段以下の断面形は逆台形状を呈す。堆積土は３層から成るが、最上層は基本層の2b 層である。各層とも自然堆積状況を示す。尚、溝の南側の肩付近に丸木の杭が１本打ち込まれていた。

＜出土遺物＞　堆積土①層から土師器片・陶器片・磁器片・瓦片が計７点、堆積土層②より杭材が１点出土した。陶器・磁器は全て近代以降のものである。



第83図　ＳＤ２平面図



土層註記

ＳＤ１

①　にぶい黄褐色　10ＹＲ４/３　砂質土　旧耕作土でビニール含む。

ＳＤ２

①　灰黄褐色　10ＹＲ５/２　砂質シルト　５ａ層を小ブロック状に含む。

②　黒褐色　10ＹＲ３/２　粘質土　植物遺体を多量に含む。

③　灰色　５Ｙ４/１　粘質土　砂との自然堆積互層。

第84図　ＳＤ１・２断面図

第85図　ＳＤ３平面図

(3)　10層上面

３号溝跡 ― SD3 ― (第85図)

北西⇔南東方向に延びる溝で、10a 層上面で検出された。上端幅約2.5m、深さ約40cm で、断面形は開いた「U」字形を呈す。堆積土は基本層９層が入り込んだものである。出土遺物はない。

４．遺構の所属年代とまとめ

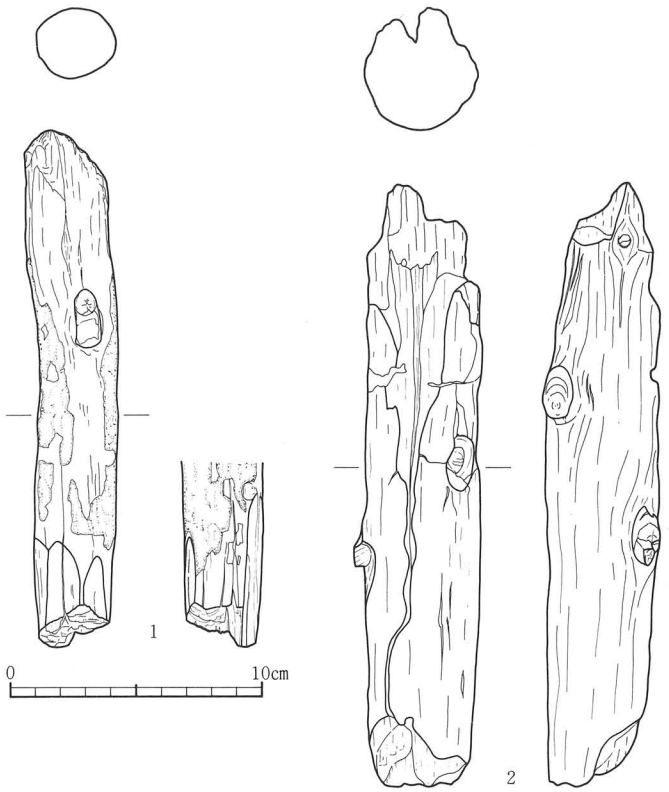
１．検出遺構としては、10層上面で SD3、３層上面で SD2、２層上面で SD1 が、また、水田跡の可能性のある層としては、基本層の12・10a・８・６・５層が上げられる。これらの所属年代であるが、時期決定資料に乏しく、隣接調査区との層位の対応も不可能で、明確な年代は不明である。ただし、３層より灰白色火山灰を検出したことより３層を年代のキー層として考えた

い。ただし、下層からの巻き上げの可能性もあることより、４層以上を平安時代以降、５層以下を平安時代以前の堆積層として考えたい。従って、各遺構の推定所属年代は以下のとおりである。

・SD3 — 平安時代以前　　・SD2 — 平安時代以降　現代以前

・SD1 溝跡 — 現　　代

２．SD2 は検出層の10a 層が、水田土壌の可能性があることより、水田に伴う水路としての機能も想定される。



No.	挿図番号	図版番号	出土遺構・層位	種　別	材　質	素材形状	長　さ	幅・直径	厚　さ	先端加工	表面加工	備　考
1	第86図１	写真64－２	ＳＤ１	杭	広？	丸　木	20.6cm	3.2cm	——	複数方向	枝払い痕	一部樹皮遺存
2	——	——	11　層	木　片	広	４分割材	15.0cm	5.5cm	——	不　明	な　し	状態悪い
3	第86図２	写真64－１	５ａ層上面	杭	広？	丸　木	24.1cm	4.4cm	——	２方向以上	枝払い痕	

第86図　出　土　遺　物

第15節　山口遺跡第５次調査

１．調査方法

調査区の設定面積は約13×3.7m（48m²）である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。９層上面までは、調査区全面の精査を実施し、９層以下は、約8×2.2mの試掘区を設けて掘り下げた（11層以下は約4.8×2.2m、12層以下は約4.4×1m）。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X＝－197.98450km、Y＝＋3.29478km　杭B：X＝－197.99648km、Y＝＋3.29439km）。

第87図　調査区位置図・設定図

２．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別12層、細別では14層が確認された。各層の土質は１・２層がシルト、３～７層までが粘土あるいは砂で、以下８～11層までが粘土を主とし泥炭が混じる泥炭質粘土となり、12層で再び粘土となる。グライ化は、11層以下から漸次進み、12層では顕著である。現代のものを除く水田土壌は4a 層である。4a 層は、4b 層の分解の度合いの差によって、a_1 と a_2 に細分される。また、２・５層も水田土壌の可能性がある。遺物出土層は11層のみである。各層の傾きとしては、２～６層までが南東側へ緩やかに下り、７層以下ではほぼ水平となる。

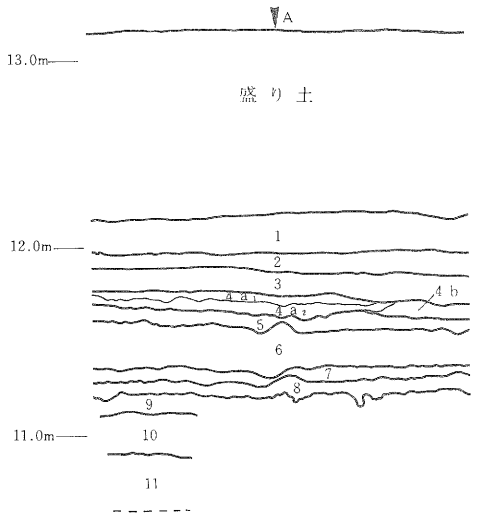
３．検出遺構と出土遺物

１号溝跡（SD1）、4a 層水田跡が検出された外、遺構としては認定し得なかったが、５層上面で帯状に走る土層の変化が認められた。

(1)　３層上面

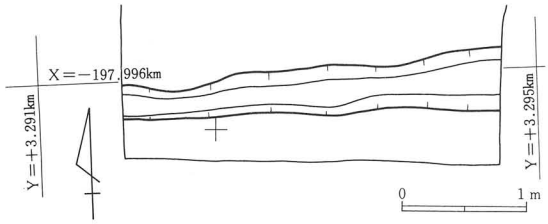
１号溝跡－SD1－（第89図）

調査区の南隅に位置し、東西方向に直線的に走行する小規模な溝である。上端幅約25～50cm、深さ約５～10cm で、断面形は「U」字形を呈する。堆積土は基本層の２層が入り込んだものである。出土遺物はない。溝跡としたが、その性格は不明である。

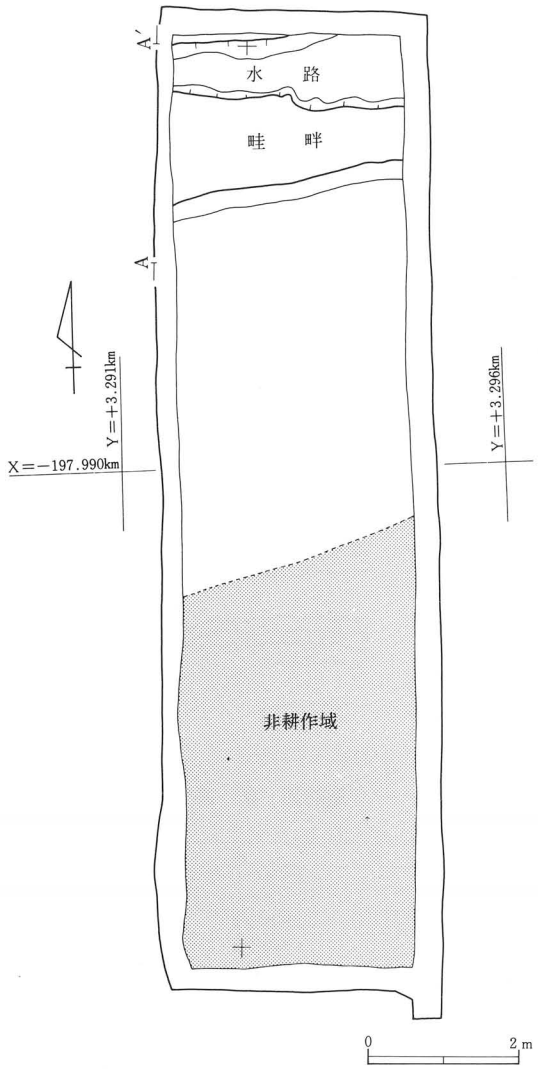


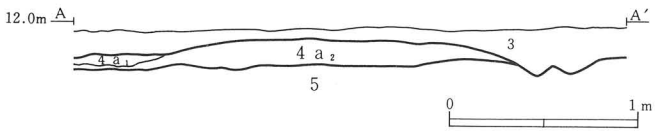
第88図　基　本　層　序

層序	土　　色	土　質	層　厚	混　入　物	備　　考
1	オリーブ黒色　5Y 3/1	シルト質粘土	10cm～30cm	細砂少量	水田耕作土（現代）
2	暗褐色　10YR 3/3	シルト	7 cm～14cm	細砂多量	水田耕作土？・上面に鉄分集積層
3	にぶい黄褐色　10YR 5/3	砂	10cm～20cm		自然堆積層
4 a_1	灰黄褐色　10YR 5/2	粘土	2 cm～ 6 cm		水田耕作土・下面起伏
4 a_2	黒褐色　10YR 3/1	粘土	2 cm～ 8 cm		水田耕作土・下面起伏・不連続で部分的な分布。b層の分解が進んでない層
4 b	灰黄褐色　10YR 5/2 黒褐色　10YR 3/2 黒褐色　10YR 3/2	粘土	5 cm～10cm		自然堆積層・互層
5	黒　色　10YR 3/1	粘土	5 cm～12cm	細砂多量	水田耕作土？・下面起伏
6	にぶい黄褐色　10YR 5/4	砂	12cm～28cm	凝灰岩粒多量	自然堆積層
7	黒褐色　10YR 3/2	粘土	2 cm～ 8 cm	植物遺体少量	下面起伏
8	灰黄褐色　10YR 5/2	泥炭質粘土	5 cm～10cm	植物遺体多量	粘土を主体とする・下面起伏
9	黒褐色　10YR 3/2	泥炭質粘土	5 cm～14cm	植物遺体多量	粘土を主体とする・下面一部起伏
10	黒　色　10YR 3/1 灰黄褐色　10YR 5/2	泥炭質粘土	18cm～25cm	植物遺体多量	自然堆積層・粘土と泥炭の互層で粘土を主体とする
11	黄灰色　2.5Y 5/1	泥炭質粘土	30cm～50cm	植物遺体多量	自然堆積層・粘土を主体とする・下面起伏
12	緑灰色　5G 5/1	粘土	50cm以上	植物遺体少量	自然堆積層



第89図　ＳＤ１平面図





第90図　４ａ層水田跡平面・断面図

(2)　４層上面

4a 層水田跡（第90図）

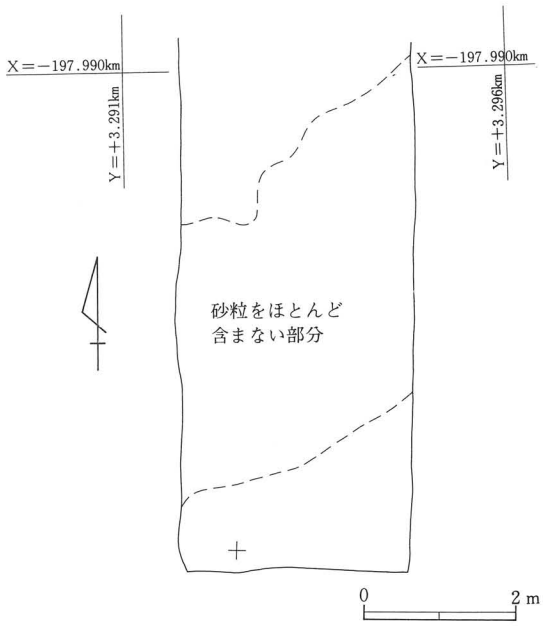
＜遺構状況＞　畦畔と非耕作域によって区画された水田面が検出されたが、一部の検出のため、１区画の形状・規模は不明である。畦畔は北に水路を伴っている。畦畔は調査区の北側に位置し、N−81°−Eの方向をとる。畦畔の南側には、約4.5mの間隔をもってほぼ平行に耕作域（4a層）が広がり、その南側は非耕作域（4b層）となっている。非耕作域との境界には畦畔は検出されなかった。また、水路の北側の畦畔の有無は調査区外のため不明である。畦畔は耕作土と同一土壌―4a層―を盛り上げ作られている。下端幅は約１～1.5mで、耕作土上面からの高さは約10cmである。水口は認められなかった。水路は上端幅約0.6～1m以上、深さ10cm前後で、断面は開いた「U」字状を呈する。底面は凹凸が著しい。堆積土は、基本層の３層が入り込んだものである。耕作土は、粘土層の4b層を攪拌し、耕作土―4a層―としている。耕作土は分解の度合いでa_1・a_2に分けられるが、下面には分解の進んでいないa_2が必ず認められる。耕作土の厚さは10cm前後である。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。尚、畦畔部分では、耕作がさほど及ばなかったためか、分解の余り進んでいないa_2層となっており、さらに、下層上面が擬似畦畔となっている。

水田面の標高は11.60～11.80mの間で、南東方向の下り傾斜を示す。

＜出土遺物＞　非耕作域上面より土器片が２点出土した。いずれも細片で遺存状態も悪いが、１点にはわずかに縄文が認められた。所属年代については不明である。

⑶　５層上面（第91図）

５層は下層６層（砂層）を巻き上げ、砂粒を多量に含む層である。調査区の北側で砂粒をほとんど含まない部分が、帯状に検出された。幅約3.5mで北東⇔南西方向をとる。直下の６層上面には、擬似畦畔状の高まりは認められなかった。



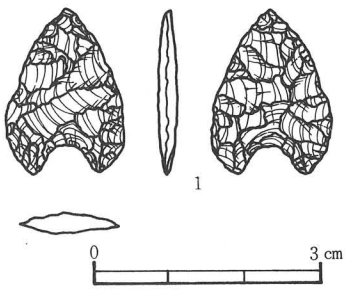
第91図　５層上面平面図

⑷　その他の出土遺物

11層中より石鏃が１点出土したのみである。石鏃（第92図１）は完形で、基部に抉りをもつハート形のものである。尚、11層中からは10cm前後の自然礫が３点程出土している。

4．ま　と　め

検出遺構としては、SD1、4a層水田跡がある。この内、4a層水田跡は、小規模な水路を伴う畦畔と非耕作域によって区画されたものであるが、１区画の形状・規模は不明である。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層の２・５層が上げられる。これらの所属年代であるが、時期決定資料がなく、周辺調査区との層位の対応も不可能で、年代は不明である。



No.	図版番号	名　　称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　　質	備　　考
1	写 真 65	石　　鏃	22.0	16.0	3.0	0.9	チャート	

第92図　出　土　遺　物

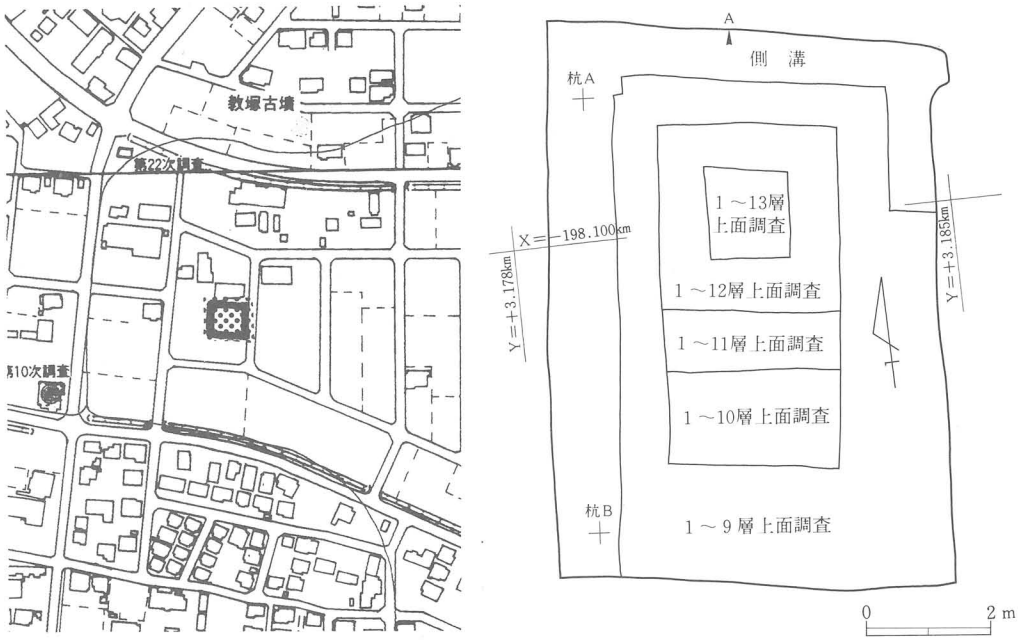
第16節　山口遺跡第６次調査

１．調査方法

調査区の設定面積は約８×５ｍ（41.6m²）である。調査は、盛土および直下の１層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区周辺には土層観察および排水用の側溝を設けた。９層上面までは調査区全面の調査を実施し、９層以下は5.5×2.8ｍの試掘区を設けて掘り下げた。（10層以下は4.0×2.8m、11層以下は3.0×2.8m、12層以下は1.4×1.3m）遺構の測量は、杭Ａ・Ｂを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している。（杭Ａ：Ｘ＝－198.09771km、Ｙ＝＋3.17936km　杭Ｂ：Ｘ＝－198.10467km、Ｙ＝＋3.17882km）

２．基本層序

今回の調査では盛土下に13層が確認された。各層の土質は１～４層がシルト質を主とし、５層が砂質で６層がシルト質粘土層、以下８～13層までは粘土や粘土質シルトである。９層以下はやや泥炭を含んでいる。グライ化は11層以下から漸次進み、12層では顕著である。現代のものを除く水田土壌は基本層６層で、その他２～４・８層も水田土壌の可能性がある。各層の傾きは１～５層まではほぼ水平であるが、６層以下は北～北東側へ緩やかに下っている。



第93図　調査区位置図・設定図

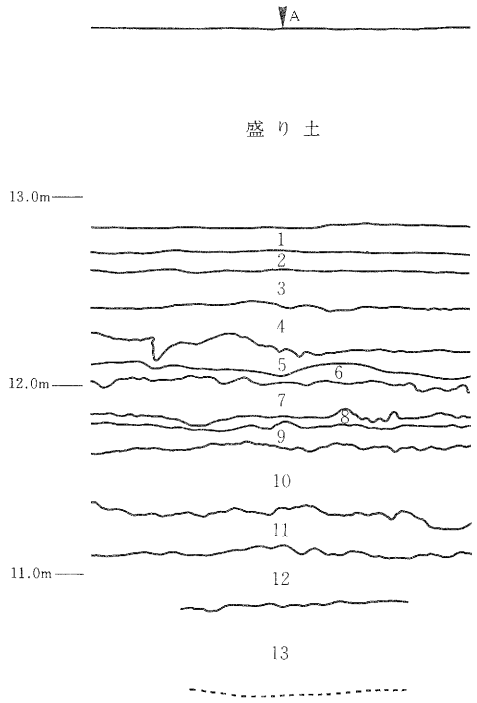
３．検出遺構と出土遺物

(1)　６層上面

６層水田跡（第95図）

＜遺構状況＞　ほぼ直交する２本の畦畔（畦畔１・２）と、それによって区画された水田面を４区画検出した。一区画は一辺５ｍ以上の方形と推定される。畦畔１の方向はＮ－21°－Ｅで、畦畔２は交点付近でやや屈曲している。これら２本の畦畔は耕作土と同じ６層を盛り上げて作られており下端幅は0.4～0.7m、耕作土上面からの高さは約５cmである。なお畦畔１は交点北側で幅約20cmの部分が途切れており、上層を覆っていた５層の砂がこの部分を西から東へ向かって流れた痕跡が認められた。この部分は水口であった可能性がある。耕作土は厚さ約５～15cmで全体的に分解が進んでいる。下面は凹凸が顕著で鉄分の集積は認められない。水田面の標高は12.04～12.18mの間で、全体的には北東方向へ下っているが水田の区画ごとに見ると南西の区画が最も高く、次に南東の区画、北西の区画の順に低くなり、北東の区画が最も低い。

＜出土遺物＞　畦畔の交点の北西側において、水田面を覆っていた砂層の最下部、６層水田面よりもやや浮いた状態で土師器・甕が出土している。厳密にはこの水田に伴う物ではないが、水田の廃絶時期に極めて近い時期のものと考えられる。栗囲式の範疇で捉えられるが細かい時期は確定できない。



第94図　基　本　層　序

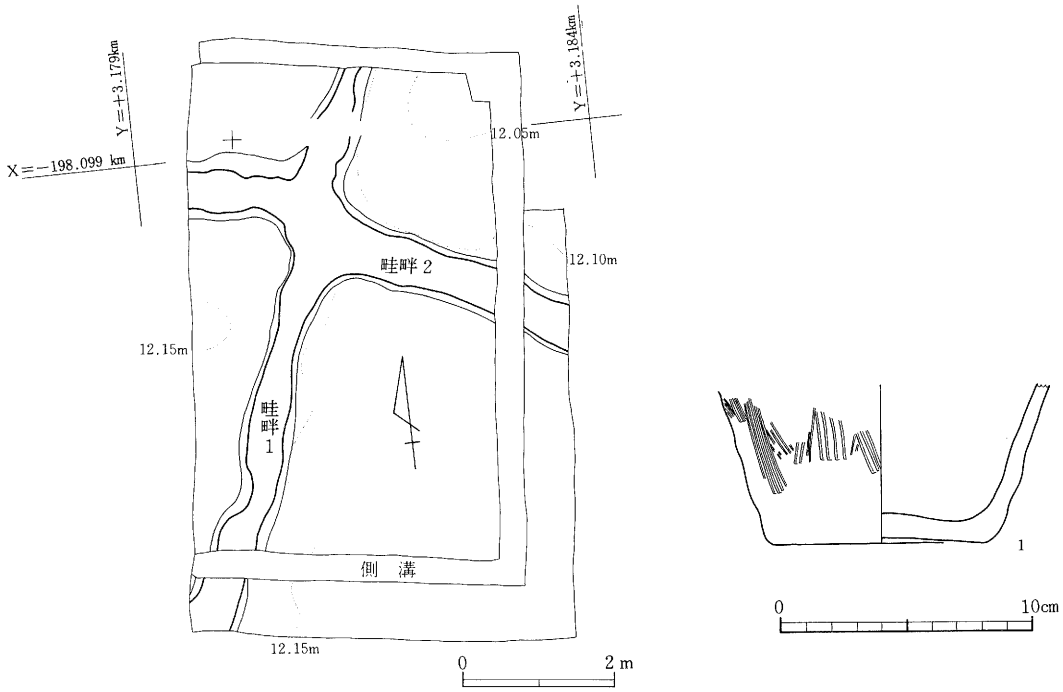
層序	土	色	土　質	層　厚	混　入　物	備　考
1	灰黄褐色	10YR 4/2	粘土質シルト	15cm前後		水田耕作土(現代)
2	灰黄褐色	10YR 5/2	シルト	10cm前後		水田耕作土？・下面に鉄分集積層
3	灰黄褐色	10YR 5/2	シルト	20cm前後	マンガン粒多量・下半部に鉄分少量・炭化物粒少量	水田耕作土？
4	にぶい黄褐色	10YR 4/3	粘土質シルト	10cm～25cm	マンガン粒・炭化物粒多量	水田耕作土？・下面起伏・下面の一部に鉄分集積層
5	にぶい黄褐色	10YR 4/3	砂	5cm～20cm	φ１～２cmの凝灰岩粒少量	自然堆積層
6	黒褐色	10YR 3/2	シルト質粘土	5cm～15cm		水田耕作土・下面起伏
7	暗灰黄色	2.5Y 4/2	シルト質砂	10cm～25cm		自然堆積層
8	暗褐色	10YR 3/3	粘土	2cm～10cm		水田耕作土？・下面若干起伏
9	黒　色	10YR 2/1	粘土	10cm～15cm	植物遺体少量	下面若干起伏
10	黒褐色	10YR 3/2	粘土	30cm～40cm	植物遺体少量	自然堆積層
11	オリーブ黒色	7.5Y 3/1	粘土質シルト	10cm～30cm	植物遺体少量	自然堆積層
12	オリーブ灰色	2.5GY 5/1	粘土質シルト	20cm～30cm	植物遺体少量	自然堆積層
13	オリーブ灰色	2.5GY 5/1	粘土	50cm以上	植物遺体少量	自然堆積層

(2)　その他の出土遺物

基本層１・２・３層から土師器片、陶器片、磁器片、瓦片、フイゴ羽口片、種子などが出土した。磁器は１層中から出土し、近世以降に属するが、３層中出土の陶器は時期が確定できなかった。土師器のうち調整技法が分かるものの大部分は内面ヘラミガキ後黒色処理されたものである。

4．遺構の所属年代とまとめ

検出遺構は６層水田跡のみで、その他水田跡の可能性のある層としては２～４・８層があげられる。６層水田跡は一区画の形状・規模は不明であるが、全面が砂に覆われて遺存状況は比較的良好であった。時期は出土遺物から古墳時代後期と推定される。同時期の水田跡が西方約250m離れた第24次調査区で検出されているが、これらの関係を明らかにすることが今後の課題である。なお、その他の基本層の時期は確定できない。



第95図　６層水田跡平面図

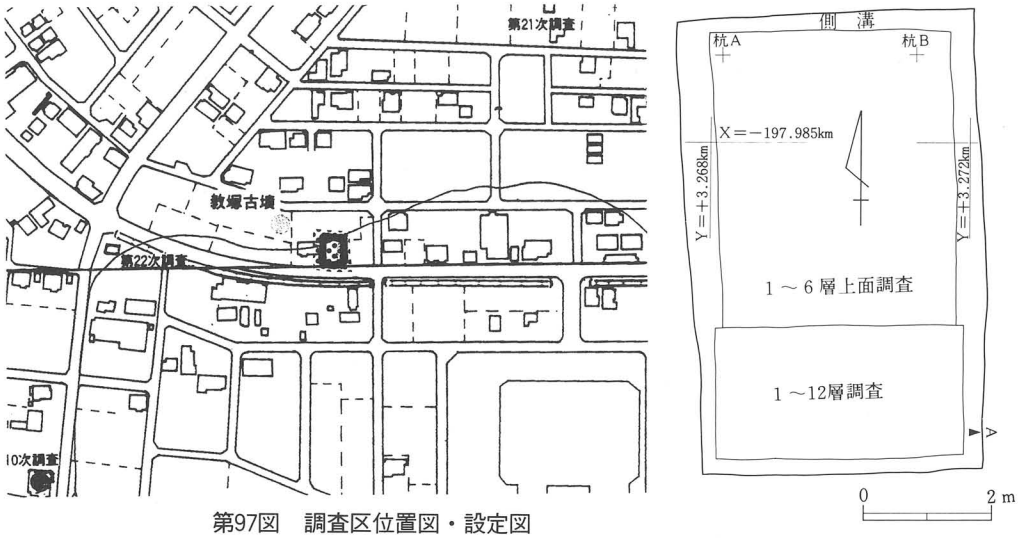
No.	図版番号	遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	底　径	特　徴
1	写真66	５層下部	土師器	甕	底部付近のみ	8.4cm	ハケ目・ナデ、網代痕

第96図　出　土　遺　物

第17節　山口遺跡第７次調査

１．調査方法

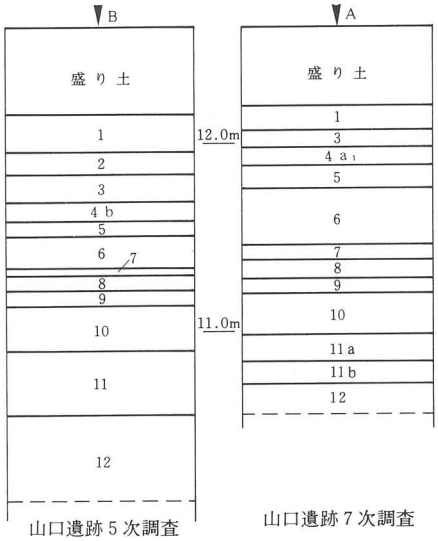
調査区の設定面積は約7.3×4.6m（33m²）である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。６層上面までは、調査区全面の精査を実施し、６層以下は、約2.6×3.3mの試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭Ａ・Ｂを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.98361km、　Ｙ＝＋3.26817km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.98361km、　Ｙ＝＋3.27117km）。



第97図　調査区位置図・設定図

２．基本層序

今回の調査では盛土下に大別12層、細別では15層が確認された。これら各層は、隣接第５次調査と同様であるので各層の状況はこれを参照されたい（本文 p.103）。尚、調査区内は４層上面まで新しい時期の攪乱が入っており、４層以上の状況は調査区東壁の観察による。第98図は第５次調査区東壁中央部（第87図▼Ｂ）と当調査区東壁南端の土層柱状図である。両地点は直線距離で23mである。両地点の各

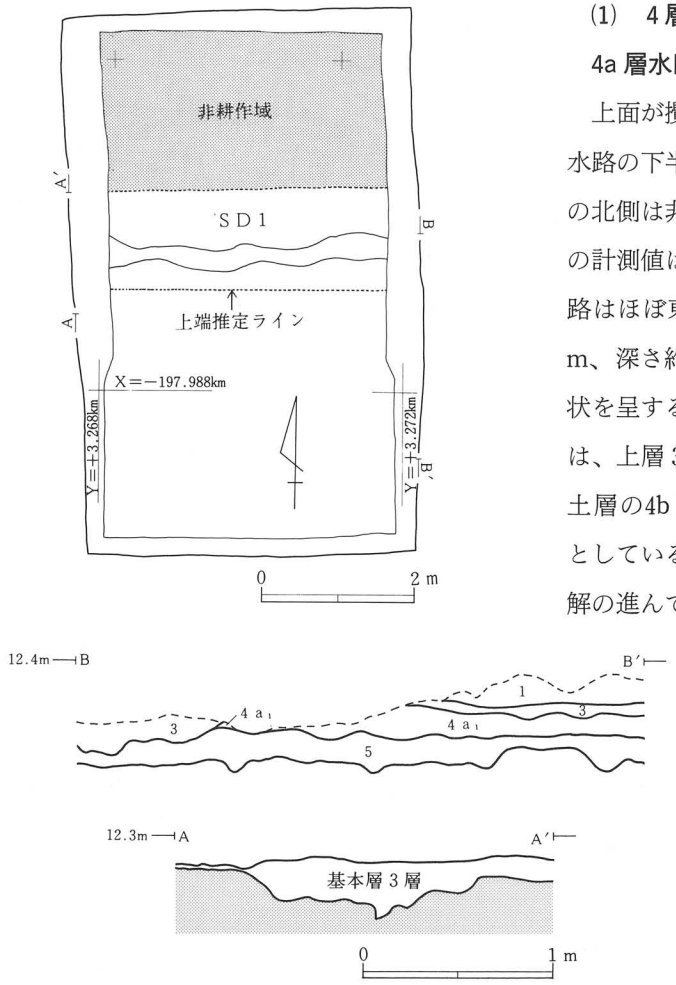


第98図　基　本　層　序

層の標高を比較すると、至近距離にも拘わらず、当調査区の方が高く、６層（砂層）が厚く堆積しているせいか、６層以上はその差が顕著で、20～40cm の標高差となっている。遺物出土層は６層のみである。

３．検出遺構と出土遺物

４層上面で畦畔は確認できなかったが、第５次調査区の4a 層水田跡耕作土のひろがりと水路の延長が認められた。また、遺構としては認定し得なかったが、５層上面で土層の変化が認められた。



第99図　４ａ層水田跡平面・ＳＤ１断面図

(1)　４層上面

4a 層水田跡・SD １（第99図）

上面が攪乱により削平されていたため、水路の下半が検出されたのみである。水路の北側は非耕作域となっている。尚、遺構の計測値は全て調査区壁面観察による。水路はほぼ東西方向をとる。推定上幅約1.3 m、深さ約15cm で、断面は開いた「U」字状を呈する。底面は凹凸が著しい。堆積土は、上層３層の単層である。耕作土は、粘土層の4b 層を攪拌し、耕作土 ― 4a 層 ― としている。耕作土は a_1 層で、下面には分解の進んでいない a_2 は認められない。耕作土の厚さは10cm 前後である。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。

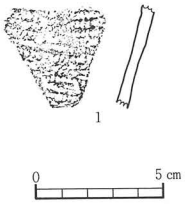
水田面の標高は12m 前後で、傾斜は不明である。出土遺物はない。

(2)　５層上面

５層は下層６層（砂層）を巻き上げ、砂粒を多量に含む層である。しかし、調査区北側の4a 層水田跡非耕作域と同一範囲は、砂粒をほとんど含まず、層の状況が異なった。

(3)　その他の出土遺物

６層中より土器片が２点出土した。１点は外面が斜位 LR 縄文の地文のみのもので（第100図１）、他の１点は細片で遺存状態が悪く文様の有無は不明である。所属年代については不明である。

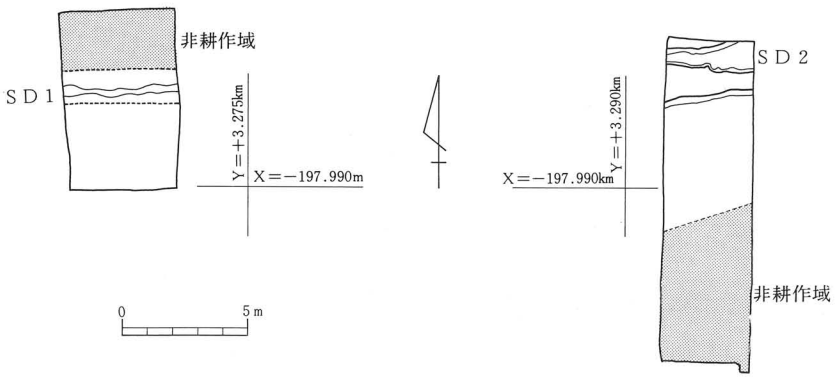


No.	図版番号	遺構・層位	種　　別	特　　徴
1	写真67	6　層	縄文土器か弥生土器	斜位ＬＲ縄文

第100図　出土遺物

4．ま　と　め

検出遺構は４層で水田跡が検出されたのみである。当水田跡の水路（SD1）は、規模・方向性の点より第５次調査検出水路（SD2）と同一のものである。第５次調査ではこの水路の北側の状況は調査区外のため不明であったが、当調査区では非耕作域となっている。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層の２・５層が上げられる。この内、５層は第５次調査区と同様に、面的な層の変化が確認された。これらの所属年代であるが、第５次調査同様時期決定資料がなく、周辺調査区との層位の対応も不可能で、年代は不明である。



第101図　山口遺跡５・７次４ａ層水田跡平面図

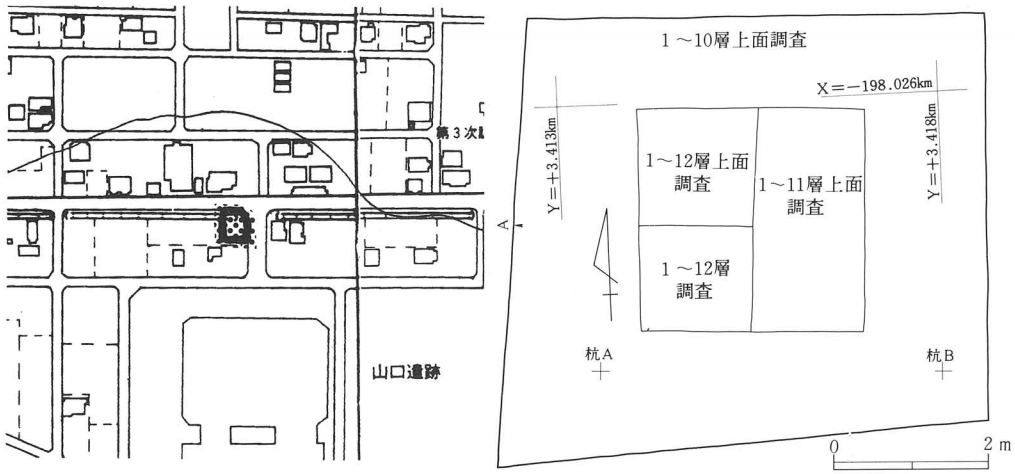
第18節　山口遺跡第８次調査

１．調査方法

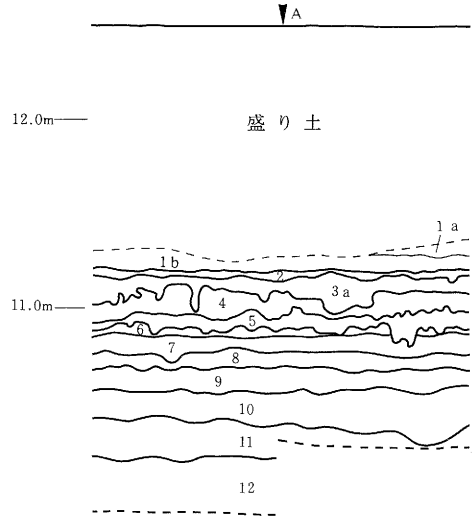
調査区の設定面積は約６×６ m（35m²）である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。10層上面までは、調査区全面の精査を実施し、10層以下は、約３×３ mの試掘区を設けて掘り下げた（11層以下は約3×1.5m、 12層以下は約1.5×1.5m）。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－198.02952km、 Ｙ＝＋3.41342km　杭Ｂ：Ｘ＝－198.02971km、 Ｙ＝＋3.41792km）。

２．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別12層、細別では14層が確認された。各層の土質は１～４層がシルト質、５～９層の間が粘土質、以下はシルト質のものを主とする。3b層は砂質の度合いが強い。グライ化は、10層以下から漸次進む。現代のものを除く水田土壌は４・５層である。また、２・3a層も水田土壌の可能性がある。４・５層からは、灰白色火山灰が検出されている。４層中のものは、本来５層中に入っていたものが、後の４層の攪乱により層中に巻き上げられたものである。遺物出土層はない。全体的な層の傾きは、南東側へ緩やかに下がる。



第102図　調査区位置図・設定図



第103図　基本層序

層序	土色	土質	層厚	混入物	備考
1a	暗緑灰色 7.5GY 4/1	シルト質粘土	15cm以上		水田耕作土（現代）
1b	灰オリーブ色 5Y 4/2	シルト	8cm前後	鉄分	水田耕作土(現代)・1層の鋤床層？
2	暗オリーブ灰色 5GY 3/1	粘土	2cm～5cm	鉄分多量	水田耕作土？・上面鉄分集積層・下面起伏
3a	黄褐色 2.5Y 5/3	砂質シルト	5cm～20cm	マンガン粒多量・凝灰岩粒	水田耕作土？・下面起伏
3b	灰オリーブ色 5Y 4/2	砂質シルト	5cm～30cm	植物遺体･粗砂と粘土を挟み込む	自然堆積層・部分的分布
4	暗灰黄色 2.5Y 4/2	シルト質粘土	5cm～20cm	マンガン粒・灰白色火山灰ブロック	水田耕作土・下面起伏
5	黒褐色 2.5Y 3/1	粘土	2cm～20cm	マンガン粒・鉄分・灰白色火山灰ブロック	水田耕作土・部分的分布
6	黒色 10YR 1.7/1 黒色 10YR 2/1	粘土 粘土	2cm～8cm	凝灰岩粒少量	互層・自然堆積層・不連続で部分的分布
7	灰色 5Y 5/1	粘土	5cm～10cm		自然堆積層
8	黒色 5Y 2/1 灰色 5Y 4/1 黒色 2.5Y 2/1	粘土 粘土 粘土	5cm～10cm		互層・自然堆積層
9	黒褐色 7.5YR 3/1	泥炭質粘土	10cm前後	植物遺体多量	自然堆積層
10	オリーブ灰色 2.5GY 5/1	砂質シルト	12cm～25cm	植物遺体多量	自然堆積層
11	緑灰色 7.5GY 6/1	砂質シルト	18cm～22cm	小礫・植物遺体	自然堆積層
12	明緑灰色 5G 7/1	シルト質粘土	30cm以上	小礫・植物遺体	自然堆積層

3．検出遺構と出土遺物

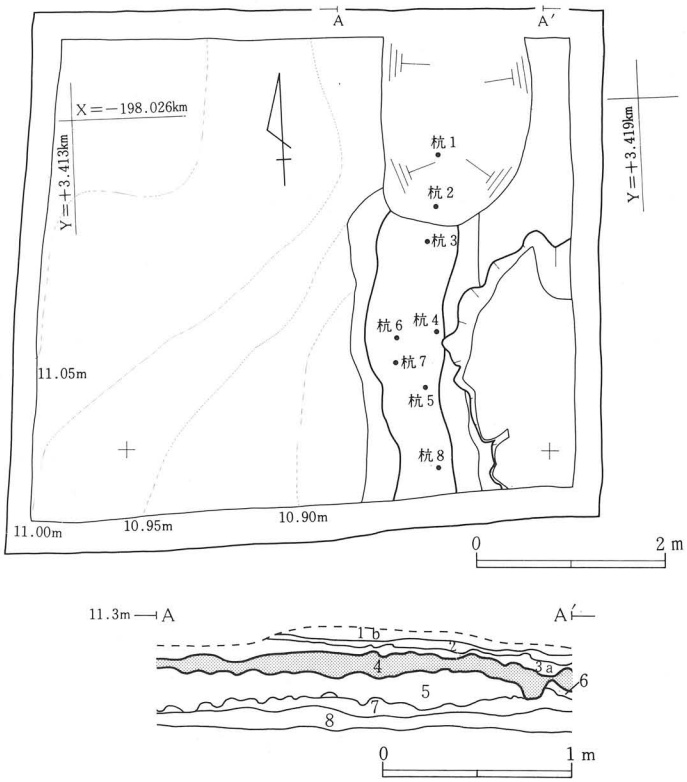
(1)　4層上面

4層水田跡（第104図）

＜遺構状況＞　真北方向をとる畦畔が１条検出されたのみである。畦畔は調査区の東側に位置し、北側は攪乱によって不明である。畦畔は耕作土と同一土壌を盛り上げ作られている。下端幅は約1.3m前後で、耕作土上面からの高さは7 cm前後である。上面をやや下げた段階で杭列が検出されている。この連続のものは北側攪乱部分でも検出されており、杭数は合計８本である（杭１～８）。杭３～５・８は上端の東側に打たれており、杭１・２も同位置に打たれたものと考えられる。これらは0.5～１ mでほぼ等間隔で並んでいる。ただし、杭６・７は杭４・５の

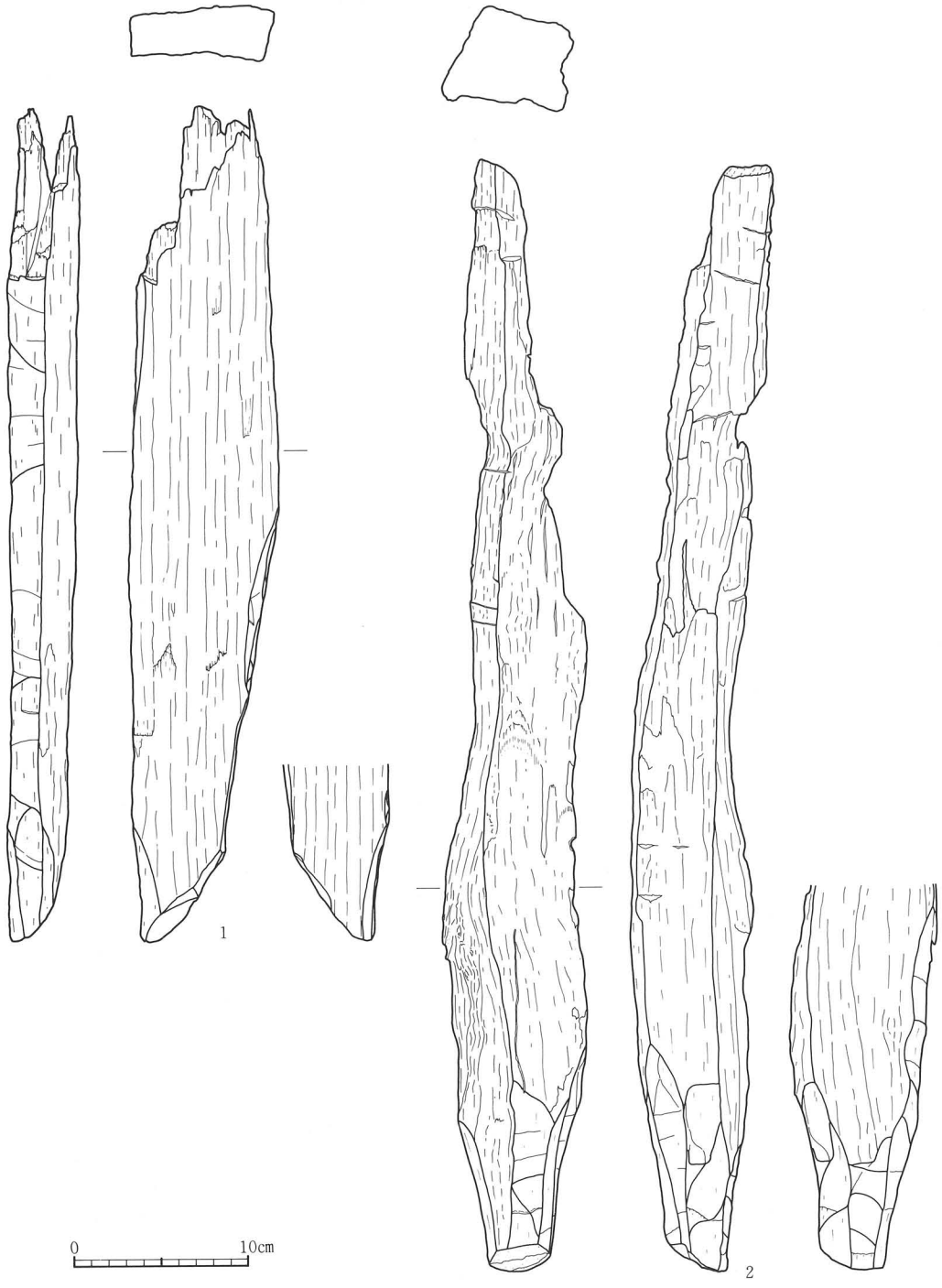
反対側に位置し間隔も狭い。杭材は分割材が使用されている。耕作土の厚さは10～15cm である。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。畦畔の東側に接した耕作土上面は大きく窪んでおり、畦畔もこれによって一部削られている。窪の底面は凹凸が激しく、深い部分では耕作土上面から約30cm 下がる。堆積土には、上層3b 層の粗砂が多量に堆積していた。水田面の標高は10.85～11.10m の間で、南東方向の下り傾斜を示す。

＜出土遺物＞　赤焼土器・須恵器等の土器片が７点出土したが、図化が可能なものはない。

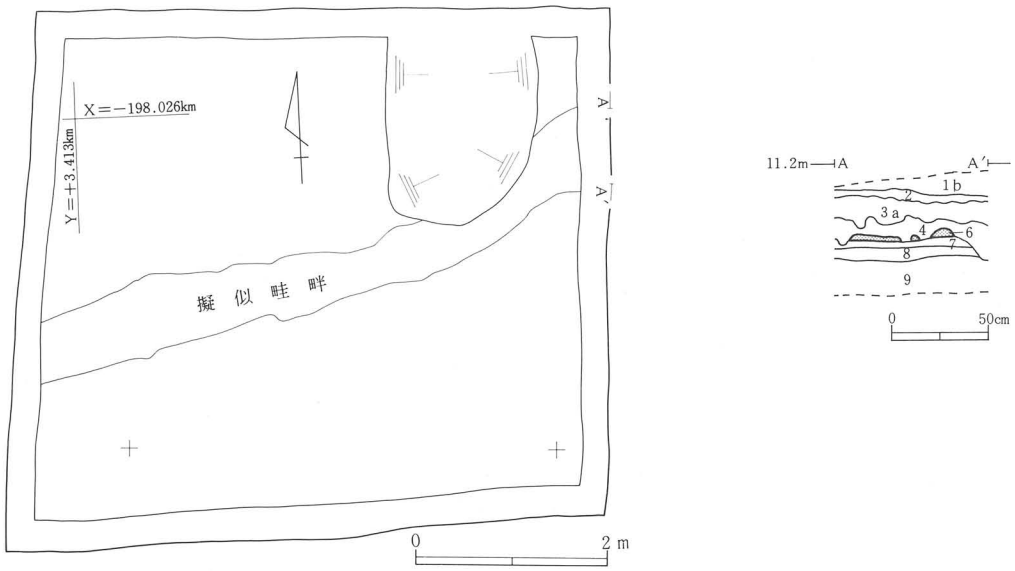


第104図　４層水田跡平面・断面図

No.	挿図番号	図版番号	出土遺構・層位	種　別	材　質	素材形状	長　さ	幅・直径	先端加工	表面加工
1	―――	―――	４層水田跡	杭	針	分割材	55.0cm	6.0cm	複数方向	な　し
2	第105図１	写真68－１	４層水田跡	杭	針・柾目	板状の分割材	48.0cm	8.0cm	複数方向	な　し
3	第105図２	写真68－２	４層水田跡	杭	針	分割材	63.5cm	7.8cm	複数方向	な　し
4	―――	―――	４層水田跡	杭	針・柾目	板状の分割材	73.5cm	5.7cm	複数方向	な　し
5	―――	―――	４層水田跡	杭	針	分割材	22.5cm	3.6cm	複数方向	な　し
6	―――	―――	４層水田跡	杭	？	分割材	9.3cm	3.2cm	不　明	な　し
7	―――	―――	４層水田跡	杭	？	２分割材	21.5cm	2.9cm	２？方向	
8	―――	―――	４層水田跡	杭	針・柾目	板状の分割材	16.5cm	4.0cm	複数方向	な　し



第105図　出　土　遺　物



第106図　５層水田跡平面・断面図

(2)　５層上面

５層水田跡（第106図）

５層上面で畦畔は検出されなかった。しかし、６層上面で擬似畦畔Ｂ（斎野：1987）が検出された。６層が明確な自然堆積層であることより、５層が水田跡であったことが予測できる。擬似畦畔はＮ－72°－Ｅ方向で、幅は60cm 前後である。耕作土は、上部が４層水田跡によって削平されているが、残存厚平均は10cm 前後である。下面は凹凸が顕著で、鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は10.90m 前後で、４層水田跡同様、南東方向の下り傾斜を示すものと思われる。出土遺物はない。

４．遺構の所属年代とまとめ

１．検出遺構としては、４・５層水田跡がある。また、水田跡の可能性のある層としては、基本層２・3a 層が上げられる。これらの所属年代であるが、時期決定資料を欠くが、隣接２次調査区（田中：1984）との層位の対応より（４層＝２次３層、５層＝２次４Ａ層）、年代は以下のとおりである。５層水田跡 ― 平安時代　４層水田跡 ― 中世　3a・２層 ― 中世以降

２．４層水田跡耕作土上面の窪は、堆積土の状況より水の影響によるものとも考えられる。これの西側に接する畦畔上には、杭の集中箇所（杭４～７）が見られる。これらよりこの畦畔上に水口等の水利施設が取り付いた可能性もある。

３．２次調査7b 層は、弥生時代天王山式期の水田跡の可能性が指摘された。しかし、当調査区では、６層下に水田耕作土の可能性のある層は、認められなかった。

第３章　プラント・オパール分析

古環境研究所

１．試料

富沢・山口・泉崎浦遺跡における埋蔵水田跡の探査を目的として、プラント・オパール分析を行った。試料は、遺跡の調査担当者によって容量50cm³の採土管を用いて採取され、当研究所に送られてきたものである。

２．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

(1)　試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定

(2)　試料土約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02g）

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

(3)　電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)　超音波による分散（150W・26KHz・15分間）

(5)　沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

(6)　封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

(7)　検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。また、この値に試料の仮比重と換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの種実重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの稲籾生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は1.03である。

３．結果および考察

イネのプラント・オパールの検出状況を第107・108図に示す。この結果をもとに検討を行い、稲作の可能性を４段階に区分して第４表に示した。このうち、◎印はイネのプラント・オパー

ル密度が10、000個/g 以上と極めて高い値であることから、稲作の可能性が特に高いと判断されるところ、○印およそ5,000～10,000個/g と高い値であることから、稲作の可能性が高いと判断されるところ、△印およそ1,000～5,000個/g と比較的低い値であることから、稲作の可能性はあるものの、上層などからの混入の危険性も考えられるところ、▲印は1、000個/g 未満と微量であることから、稲作の可能性は考えにくいところである。以下に、各遺跡ごとに検討結果を述べる。

(1) 富沢遺跡第36次調査では、畦畔が検出された 7 層をはじめ、5a 層、6 層、8 層、および11層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。また、5b 層および 9 層でも稲作の可能性があると判断された。

(2) 富沢遺跡第37次調査では、畦畔が検出された4a 層をはじめ、1 層、2a 層、3 層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。

(3) 富沢遺跡第40次調査では、水田耕作土が検出された21層で稲作が行われた可能性があると判断された。

(4) 富沢遺跡第41次調査では、稲作の可能性がある土層は認められなかった。

(5) 富沢遺跡第42次調査では、7 層および8a 層で稲作が行われた可能性があると判断された。

(6) 富沢遺跡第44次調査では、6 層、7 層および13層で稲作の可能性があると判断された。

(7) 富沢遺跡第46次調査では、畦畔が検出された11a 層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。また、畦畔が検出された10d 層でも稲作の可能性があると判断された。

(8) 富沢遺跡第48次調査では、擬似畦畔が検出された11層、および10層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。

(9) 泉崎浦遺跡第 4 次調査では、5 層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。また、6 層および10a 層でも稲作の可能性があると判断された。

(10) 山口遺跡第 5 次調査では、畦畔が検出された $4a_1$ 層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。

(11) 山口遺跡第 6 次調査では、1 層、2 層、3 層、4 層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。また、畦畔が検出された 6 層では稲作の可能性があると判断された。

(12) 山口遺跡第 8 次調査では、擬似畦畔が検出された 5 層で稲作が行われた可能性が高いと判断された。また、畦畔が検出された 4 層、および 6 層では稲作の可能性があると判断された。

つぎに、稲作の可能性が認められた各層について、そこで生産された稲籾の総量（単位：t/10a）を算出した。また、当時の稲籾の年間生産量を面積10a あたり100kg とし、稲わらがすべて水田内に還元されたと仮定して、各層で稲作が営まれた期間を推定した。これらの結果をまとめて第 5 表に示す。

第４表　富沢・山口・泉崎浦遺跡の各層位における稲作の可能性

※イネのプラント・オパールが検出された層位のみ表示

＜記号説明＞

◎…稲作の可能性特に高い　　○…稲作の可能性高い

△…稲作の可能性有り　　▲…稲作の可能性考えにくい

A…畦畔検出　　B…擬似畦畔検出

C…水田耕作土のみ検出（隣接調査区で畦畔検出）

遺跡名	層位	判定	備考（発掘結果）
富沢36次	5 a	○	中世？以降
	5 b	△	中世？以降
	6	○	中世？以降
	7	○	A、中世？
	8	○	平安～中世？
	9	△	平安～中世？
	10 a	▲	平安以前
	10 d	▲	平安以前
	11	○	平安以前
	12	▲	平安以前
富沢37次	1	◎	現代
	2 a	○	近世
	3	◎	中世～近世
	4 a	○	A、中世
	5	▲	平安以前
富沢40次	15	▲	弥生
	18	▲	弥生
	19	▲	弥生
	21	△	C、弥生
富沢41次	3	▲	不明
富沢42次	7	△	平安以前
	8 a	△	平安以前

遺跡名	層位	判定	備考（発掘結果）
富沢44次	6	△	平安
	7	△	平安以前
	11	▲	平安以前
	13	△	平安以前
富沢46次	10 d	△	A、弥生
	11 a	○	A、弥生
富沢48次	10	◎	弥生～平安
	11	○	B、弥生
泉崎浦４次	5	○	平安以前
	6	△	平安以前
	10 a	△	平安以前
山口５次	$4a_1$	○	A、不明
	5	▲	不明
山口６次	1	◎	現代
	2	◎	古墳後期以降
	3	◎	古墳後期以降
	4	◎	古墳後期以降
	5	▲	古墳後期以降
	6	△	A、古墳後期
	8	▲	古墳後期以前
山口８次	4	△	A、中世
	5	○	B、平安
	6	△	平安以前

第5表　稲作の可能性が認められた各層における稲籾生産総量および稲作期間の推定値

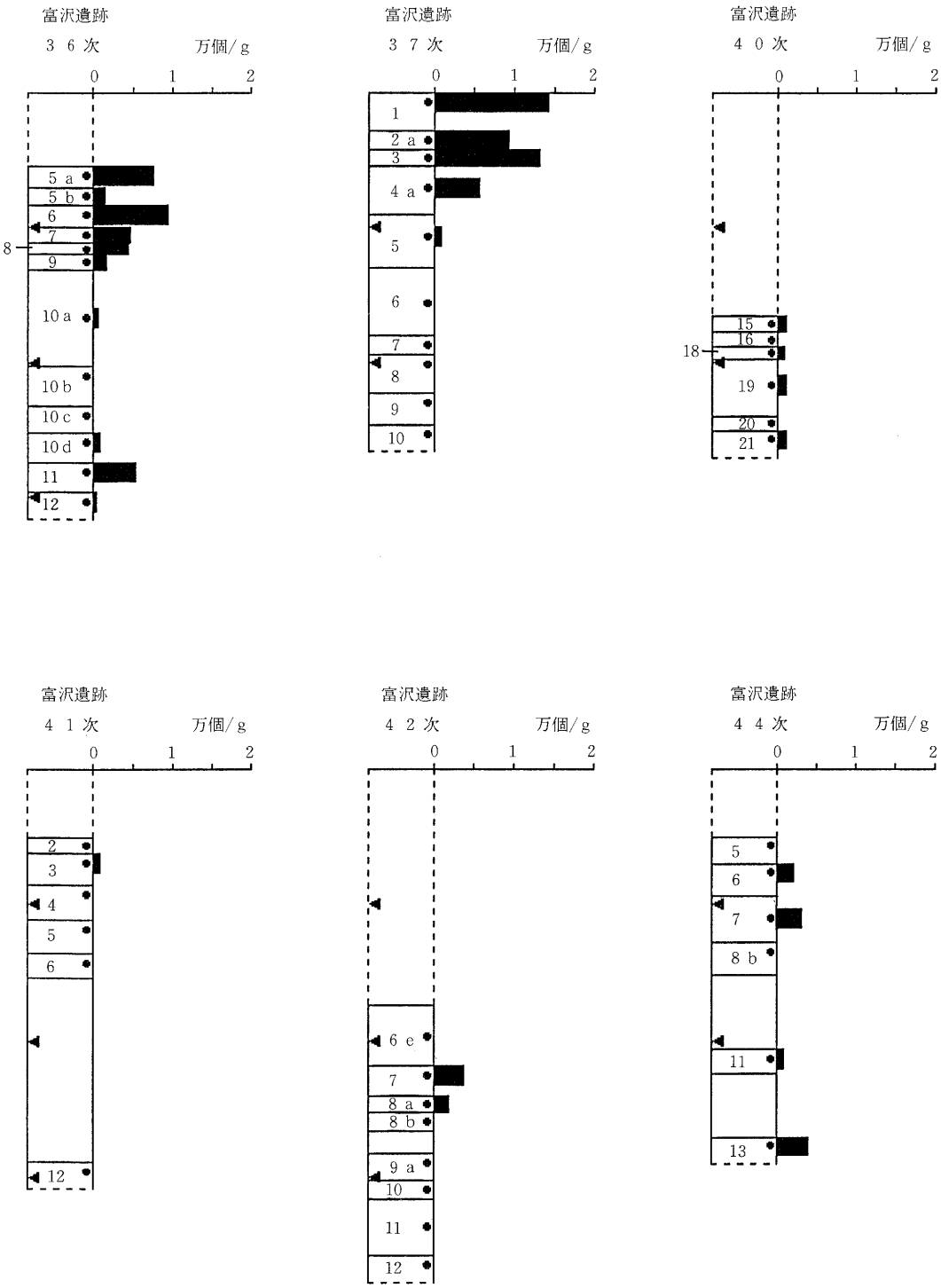
遺跡名	層位	生産量 (t/10a)	期間 (年間)	遺跡名	層位	生産量 (t/10a)	期間 (年間)
富沢36次	5 a	7.8	78	富沢46次	10 d	0.6	6
	5 b	1.1	11		11 a	2.4	24
	6	8.5	85	富沢48次	10	2.8	28
	7	2.7	27		11	1.5	15
	8	1.8	18	泉崎浦4次	5	2.3	23
	9	1.1	11		6	2.0	20
	11	3.4	34		10 a	1.7	17
富沢37次	1	25.5	255	山口5次	$4a_1$	3.6	36
	2 a	8.5	85	山口6次	1	48.6	486
	3	7.8	78		2	25.6	256
	4 a	7.4	74		3	26.8	268
富沢40次	21	0.3	3		4	44.0	440
富沢42次	7	2.5	25		6	1.8	18
	8 a	0.9	9	山口8次	4	3.8	38
富沢44次	6	2.4	24		5	3.5	35
	7	5.1	51		6	1.5	15
	13	6.6	66				

参考文献

藤原宏志　1976　プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学、9：15-29.

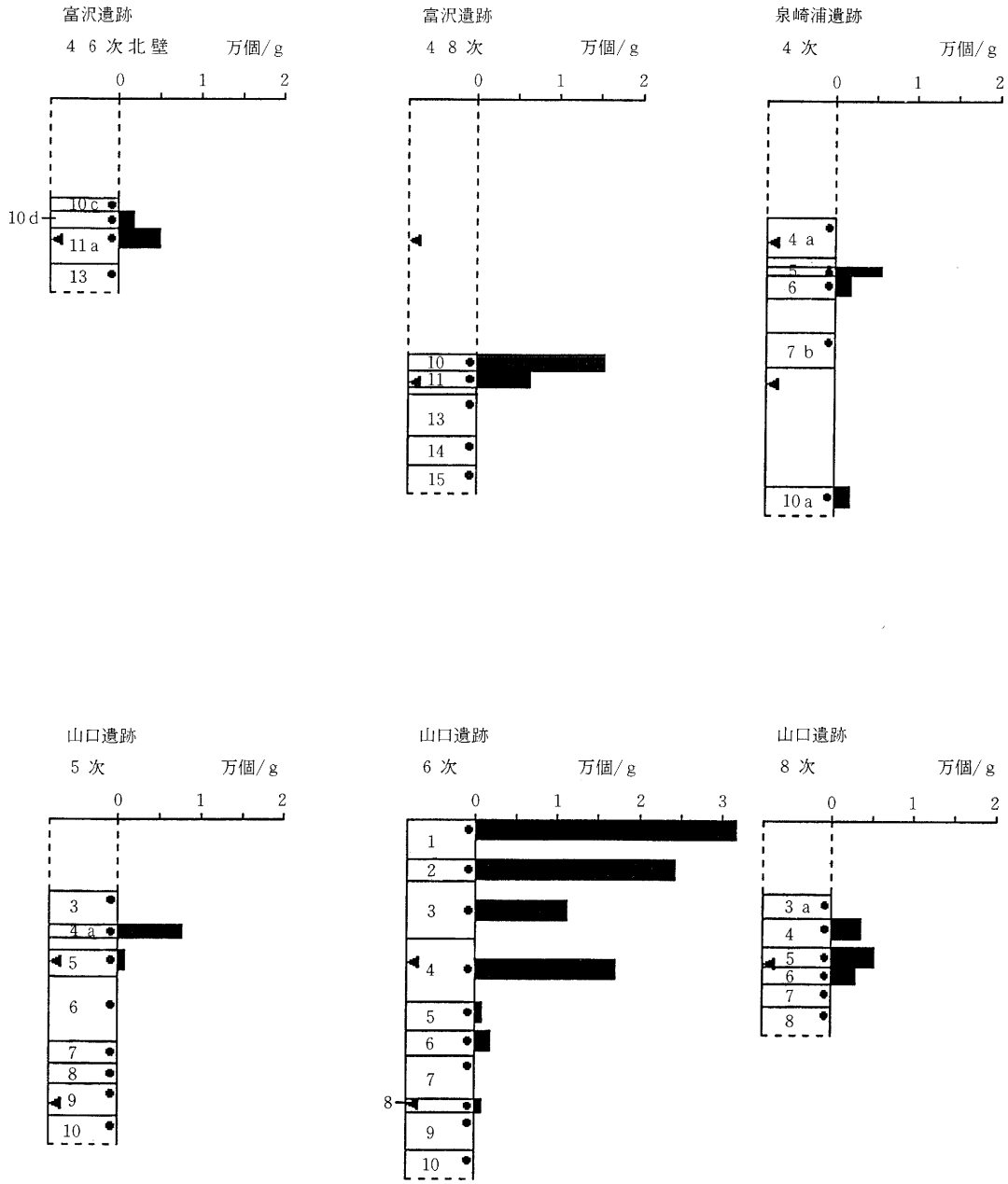
藤原宏志　1979　プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定－．考古学と自然科学、12：29-41.

藤原宏志・杉山真二　1984　プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学、17：73-85.



第107図　イネのプラント・オパールの検出状況（1）

（注）◀印は50cmのスケール，●印は試料採取箇所



第108図　イネのプラント・オパールの検出状況 (2)

第4章　ま　と　め

本書に掲載したのは富沢遺跡13地点（第36～48次調査）、泉崎浦遺跡１地点（第４次調査）、山口遺跡４地点（第５～８次調査）の計18地点で、この結果全地点において水田跡を中心とする遺構が検出された。検出された水田跡は水田跡の可能性がある層を含めるとのべ83面を数えるが、明確な形で検出されたのは18面である。そのうち時期がある程度限定できたのが、弥生時代７面（３期）、古墳時代１面、平安時代３面（１～３期）、平安時代～中世１面、中世３面（１～３期）である。

調査次数の増加に伴って近接する地点の調査例も多くなり、それによって各時期の水田の様相もある程度明らかになってきた。ここでは遺跡内における遺構の広がりが把握でき、第２章であまり触れることが出来なかった遺構を中心に、時期別に述べることとする。

１．縄文時代

(1)　富沢遺跡の中央からやや東側に位置する第28次調査区では、縄文時代早期後葉の生活面（第34層）が検出されているが（佐藤：1988）、第38・46次調査区では、この層は認められたものの層厚が薄く不安定な層で遺物も出土しなかった。このことから、第28次調査で認められた生活面はごく狭い範囲に限られることが推定される。

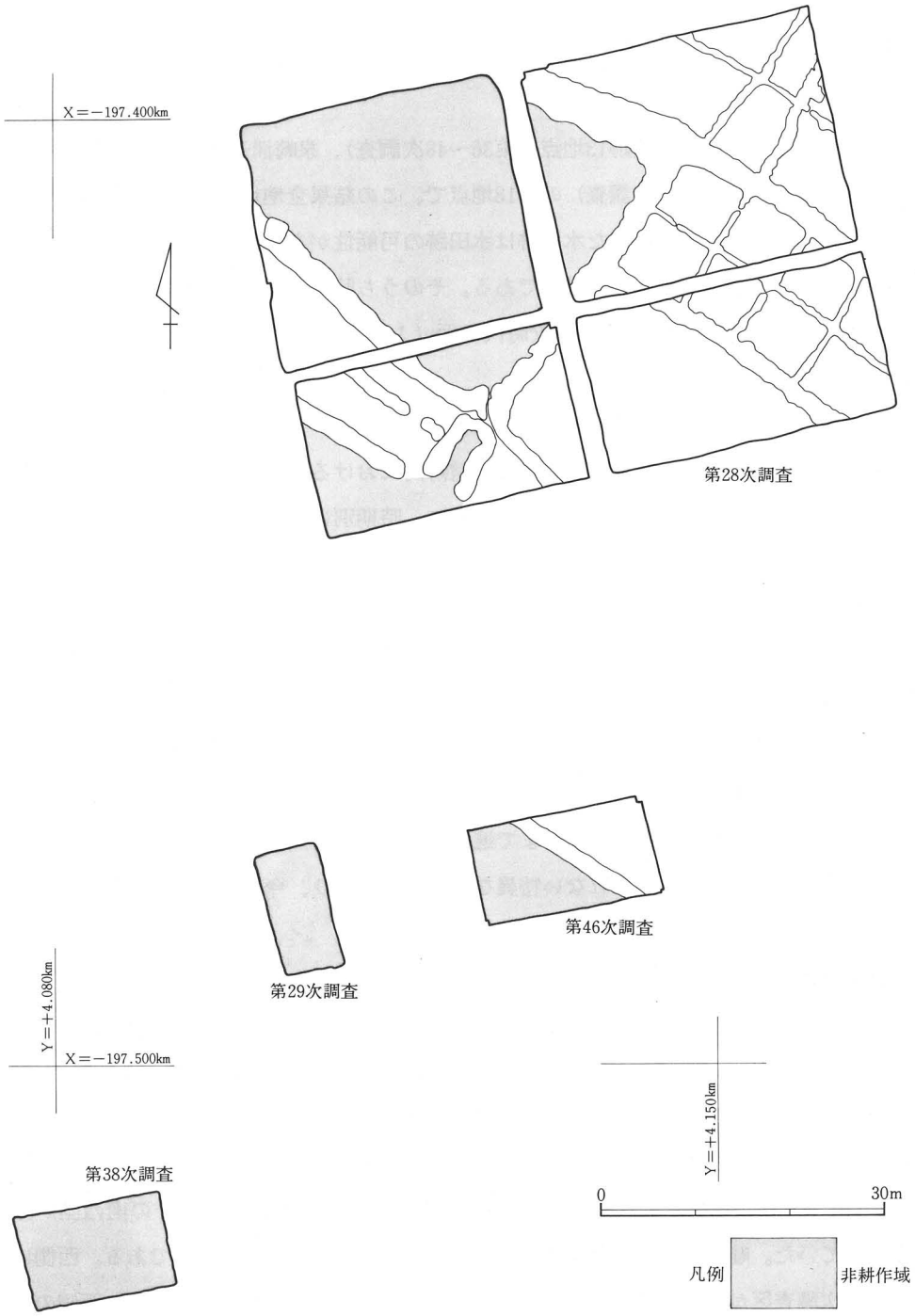
(2)　富沢遺跡第38次調査では、これまで遺物の出土例が皆無であった泥炭質粘土層から縄文土器が出土した。遺構も検出されない特異な出土状況であり、今後の調査の課題となろう。

２．弥生時代

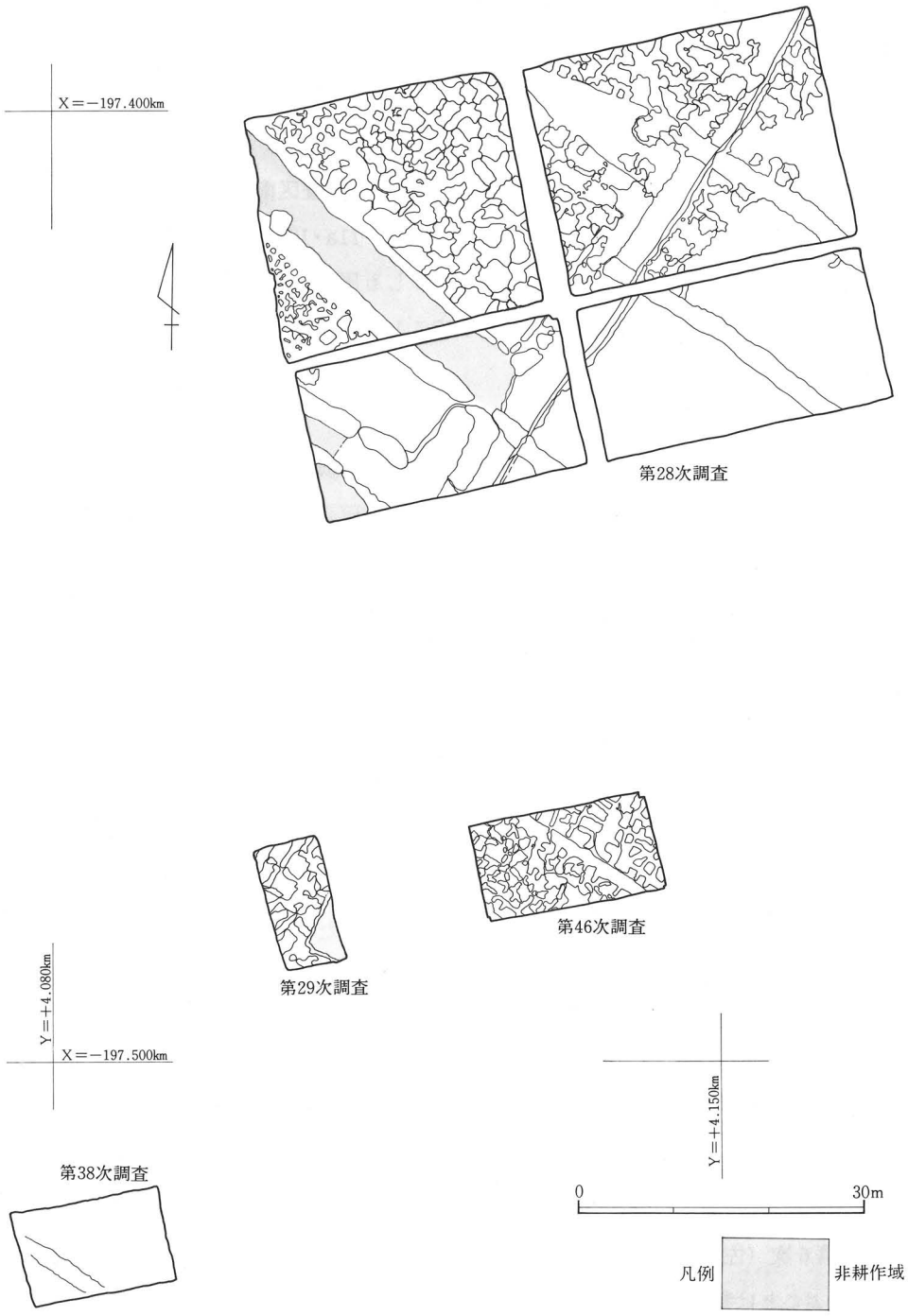
富沢遺跡の中央からやや東側の地域（第５・７・13・16・17・28・29次調査区）では、これまで弥生時代桝形囲式期から十三塚式期にかけて５期（第28次調査9a・10b・10d・11a・11c層）にわたる水田の変遷が確認されていた（佐藤：1988）。今回の第38・46次調査区はこの南から南西側に位置し、9a・10d・11a層の各水田跡の広がりが確認された。

(1)　11a層水田跡（桝形囲式期）は第46次調査区で大畦畔が検出され、その南西側が非耕作域となっていた。畦畔の方向は第28次調査区で検出されたものとほぼ同じである。西側に位置する第29次調査区が非耕作域であることは以前に確認されていたが、今回さらに西側の第38次調査区も同様に非耕作域であることが明らかになったことから、この時期の水田域は第46次調査区の北東側にのみ広がることが再確認されたことになる。（第109図）

(2)　10d水田跡（桝形囲式期以降、十三塚式期以前）は第38次調査区では、以前は非耕作域で



第109図　富沢遺跡第28・29・38・46次調査区11ａ層水田跡



第110図　富沢遺跡第28・29・38・46次調査区10ｄ層水田跡

あったところに大畦畔が造られ、第46次調査区では11a層の大畦畔を踏襲、または新たに大畦畔と小畦畔が設けられている。水田域や大畦畔の11a層からの変遷、区画方法は第28次調査結果とほぼ同じである。また、水田域が11a層の段階よりも大幅に拡大することも第28・29次調査結果をうらづけることとなった。

(3) 9a層水田跡（十三塚式期）の耕作域は、第46次調査区南東コーナーで認められたのみで、第38次調査区では全域が非耕作域となっていた。11a・10d層の大畦畔が踏襲されないことは以前の調査結果と同様であるが、耕作域は必ずしも周辺全域に及ばず、第28次調査区で認められたような非耕作域が他の地点にも存在することが確認された。

3．古墳時代

山口遺跡第6次調査では栗囲式の土器を伴う水田跡が検出された。この時期の水田跡は第24次調査（工藤：1988）・第30次調査（太田他：1988）で確認されているが、遺跡内の検出数が少ないため水田域の広がりなどはまだ不明な点が多い。

泉崎浦遺跡では、以前の調査（吉岡：1983、主浜：1988）によって住居跡や遺物包含層が検出されているが、今回の第5次調査では確認できなかった。

4．平安時代

(1) 富沢遺跡北西部の第47次調査区では、ほぼ真北方向の大畦畔が検出された。時期は灰白色火山灰（白鳥：1980）降下以降と推定される。灰白色火山灰降下前後の時期（10世紀前半頃）の水田跡については条里型土地割との関連が考えられているが（平間：1988）、その坪境の大畦畔は灰白色火山灰降下以降も踏襲される場合が多い。したがって、第47次調査で検出された大畦畔も灰白色火山灰降下前後の時期には既に存在していた可能性が高く、条里型土地割における坪境の畦畔に相当するものであることが考えられる。

(2) 富沢遺跡北西部ではこれまで調査例が少なく、北西の丘陵からこの付近に張り出す微高地上の状況は不明であった。今回の富沢遺跡第36・42・45・48次調査、及び泉崎浦遺跡第4次調査は微高地上やその周辺の調査であったが、富沢遺跡第42次調査を除いて水田耕作土は認められず、平安時代の面は砂層となっていた。これまでの周辺部の調査｛富沢遺跡第2次（吉岡：1983）、第6次（佐藤：1983）、第19・20・21次（渡辺：1986）｝によって、微高地の縁辺まで水田域が及ぶことは判明していたが、今回の調査結果によれば、微高地上は水田としては利用されず、比較的広範囲に非耕作域が広がっていた可能性が高い。一方、集落については、古墳時代の住居跡が確認されるので（吉岡：1983）平安時代の住居の存在も予想されるが、まだ未検出である。山口遺跡の自然堤防上ではこの時期の集落が確認されているが（田中他：1976）、こ

の付近のように土砂の供給が激しい場所における土地利用の状況についてはまだ不明確な点も多く、今後の調査の課題となろう。

5．中　　世

富沢遺跡東端の第40次調査では、建物跡は検出されなかったものの、居館跡に係わる溝跡が検出された。第15次調査では2時期の変遷としてとらえていたが、今回の調査によって3時期にわたることが層位的に確認された。

6．近世以降

近世以降の水田跡については、時期が確定できる遺構がなかった。

富沢遺跡第36次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
2　層							1									
3　層					2											
7層水田跡				1			1									
9　層			1													
計			1	1	2		2									

富沢遺跡第37次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
2 a 層			2	1		1	2									
2 b 層			1			1				1					1	
2 c 層						2										
4 a 層水田跡				1		2	1	1			1	8			2	
4 b 層			1													
5 a 層					1				1	1						
6　層														1	31	
計			4	2	1	6	3	1	1	2	1	8		1	34	

富沢遺跡第38次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
2　層			3		3	2	25									
3　層	1								1							
10d層水田跡														48	15	
19 c 層	1														1	
SD1			1								1	16				
SD2																
計	2		4		3	2	25		1		1	16		48	16	

第6表　富沢遺跡第36～38次調査出土遺物集計表

富沢遺跡第39次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
1 層						1	10	1								
2 層			1		1	2	2			1	2	9				
3 a 層水出跡		1	1	3		3				1		14			1	
3 b 層		4														
4 a 層水田跡		3								4		1		2	1	
4 b 層														1		
SK1、2層							1									
攪 乱		2	1							1						
計		10	3	3	1	6	13	1		7	2	24		3	2	

富沢遺跡第40次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
4 層			4		21	1	11	3	1							
5 層						1										
6 層			5	1		1										
7 層			4		7											
9 層					4											
18 層		1								2			2	2	1	
SD1覆土			1	1	2		2								1	
SD1底面					2		1			1						
SD3・4			1		2	1										
SD5			2													
計		1	17	2	17	4	14	3	1	3			2	2	2	

富沢遺跡第41次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
2 層			1													
SD1底面					1							4				
計			1		1							4				

富沢遺跡第42次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
1 層							3									
3 b 層			1			1							1			
4 層水田跡						1										
8 b 層										1						
計			1			2	3			1			1			

第7表　富沢遺跡第39～42次調査出土遺物集計表

富沢遺跡第43次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
20 a 層															100	
20 b 層															16	
21 層															407	
22 層														9	13	
25 層														1	3	
SD2	9															
計	9													10	539	

富沢遺跡第44次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
2 層					1		2									
3 層			1		2	1	2									
4 層			2			6										
5 層			40			3										
攪乱			3													
計			46		3	10	4									

富沢遺跡第46次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
1 層			8		4	2	88	11		1	8					3
3 層		1	4	2	2		1		1							
4 層		1	1	1	1											
9 a 層水田跡														3		
10 a 層															7	
10 c 層										1						
11 a 層水田跡										1						
計		2	13	3	7	2	89	11	1	3	8			3	7	3

富沢遺跡第47次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
2 層							1									
3 層							2									
4 層水田跡			4	11		6									1	
5 層			3	5											1	
7 層		1														
8 層										3						
計		1	7	16		6	3			3					2	

第8表　富沢遺跡第43～47次調査出土遺物集計表

富沢遺跡第48次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
2 層				1	1											
3 層			1													
4 層			1													
11層水田跡		2														
計		2	2	1	1											

泉崎浦遺跡第4次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	素焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
1 層								1								
5 層												1				
11 層														1		
S D 2			1				5	3				1				
計			1				5	4				2		1		

山口遺跡第5次調査

遺構・層位	縄文土器 or 弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
4 a 層水田跡	2														
11 層									3						
計	2								3						

山口遺跡第6次調査

遺跡・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
1 層			2				2	2	1							
2 層			6		19											
3 層			6		13		1								2	
5層下部			1													
計			15		32		3	2	1						2	

山口遺跡第7次調査

遺構・層位	縄文土器 or 弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
6 層	2														
計	2														

第9表　富沢遺跡第48次・泉崎浦遺跡第5次・山口遺跡第5～7次調査出土遺物集計表

山口遺跡第8次調査

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	その他素焼土器	須恵器	陶器磁器	瓦	土製品	石器石製品	金属製品	杭	木製品	樹木	種子	その他
4 層水田跡				3	1	3									1	
計				3	1	3									1	

第10表　山口遺跡第8次調査出土遺物集計表

引用・参考文献

荒井　格　1984　「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III』仙台市文化財調査報告書第69集　仙台市教育委員会

太田昭夫他　1988　『富沢遺跡第30次調査現地説明会資料』仙台市教育委員会

金森安孝　1984　「富沢水田遺跡」『年報5』仙台市文化財調査報告書第66集　仙台市教育委員会

金森安孝　1984　「富沢水田遺跡・下ノ内浦地区」『仙台平野の遺跡群III』仙台市文化財報告書第65集　仙台市教育委員会

金森安孝他　1987　『富沢遺跡 — 東北地方建設局長町宿舎建設工事に伴う発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第104集　仙台市教育委員会

工藤哲司他　1984　『富沢水田遺跡 — 病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書』仙台市文化財報告書第67集　仙台市教育委員会

工藤哲司・太田昭夫　1988　『富沢遺跡 — 24次調査　富沢中学校地区発掘調査報告書』仙台市文化財報告書第113集　仙台市教育委員会

経済企画庁　1967　『地形・表層地質・土じょう　仙台』

斎野裕彦・荒井　格　1983　「鳥居原遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II』仙台市文化財報告書第56集　仙台市教育委員会

斎野裕彦　1984　「富沢水田遺跡・鳥居原地区」『仙台平野の遺跡群III』仙台市文化財報告書第65集　仙台市教育委員会

斎野裕彦　1985　「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV』仙台市文化財報告書第82集　仙台市教育委員会

斎野裕彦他　1987　『富沢 — 富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財報告書第98集　仙台市教育委員会

佐藤　隆　1983　「泉崎浦遺跡」『年報4』仙台市文化財報告書第57集　仙台市教育委員会

佐藤甲二　1987　『富沢遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市文化財報告書第114集　仙台市教育委員会

佐藤　洋他　1981　『山口遺跡 — 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第33集　仙台市教育委員会

佐藤　洋　1988　『富沢遺跡 — 第34次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第118集　仙台市教育委員会

渋谷孝雄　1980　「泉崎浦遺跡試掘調査報告」『年報1』仙台市文化財調査報告書第23集　仙台市教育委員会

主浜光朗　1988　『富沢遺跡 — 第33次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第117集　仙台市教育委員会

主浜光朗　1988　『泉崎浦遺跡 — 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第119集　仙台市教育委員会

白鳥良一　1980　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城調査研究所

高橋勝也　1983　「中谷地遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II』仙台市文化財調査報告書第56集　仙台市教育委員会

田中則和他　1984　『山口遺跡II』仙台市文化財調査報告書第61集　仙台市教育委員会

田中則和　1985　「富沢水田遺跡」『仙台平野の遺跡群IV』仙台市文化財調査報告書第75集　仙台市教育委員会

田中則和　1985　「山口遺跡」『仙台平野の遺跡群IV』仙台市文化財調査報告書第75集　仙台市教育委員会

豊島正幸　1987　「富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷」『富沢 — 富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集　仙台市教育委員会

平間亮輔　1988　「平安時代の条里型土地割について」『日本における稲作農耕の起源と展開 — 日本考古学協会設立40周年記念シンポジューム・資料集』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会

松本清一　1987　「富沢遺跡」『仙台平野の遺跡群VI』仙台市文化財調査報告書第97集　仙台市教育委員会

真山　悟他　1988　『富沢遺跡 — 泉崎前地区』宮城県文化財報告書第129集　宮城県教育委員会

宮崎　明　1988　「富沢遺跡(1)第31次調査・(2)第32次調査」『年報9』仙台市文化財調査報告書第122集　仙台市教育委員会

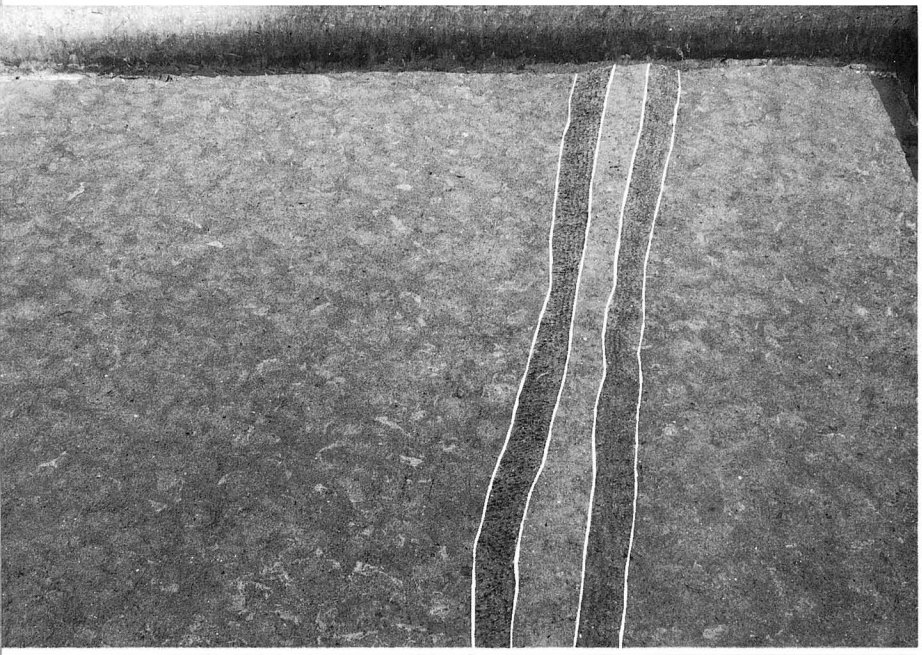
吉岡恭平　1982　「山口遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I』仙台市文化財調査報告書第40集　仙台市教育委員会

吉岡恭平　1983　「泉崎浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II』仙台市文化財調査報告書第56集　仙台市教育委員会
吉岡恭平　1983　「泉崎浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II』仙台市文化財調査報告書第56集　仙台市教育委員会
吉岡恭平　1986　「富沢水田遺跡鳥居原地区」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報V』　仙台市文化財調査報告書第89集　仙台市教育委員会
渡辺　誠　1986　「富沢水田遺跡」『年報７』仙台市文化財調査報告書第94集　仙台市教育委員会
渡辺　誠　1986　「富沢水田遺跡」『仙台平野の遺跡群V』仙台市文化財調査報告書第87集　仙台市教育委員会
渡部弘美　1987　「富沢遺跡発掘調査」『年報８』仙台市文化財調査報告書第107集　仙台市教育委員会

調査参加者

相沢史子	青山諒子	赤井沢サダ子	赤川千広	浅野ヤシ子
浅見シゲ	浅理健一	厚海宗裕	安達八千代	阿部淳
阿部いしよ	阿部すえ子	阿部清太郎	阿部美代寿	阿部洋子
阿部よね子	飯坂正弘	壱岐豊子	石垣絹子	石垣英子
板橋幸子	板橋静江	板橋スエノ	板橋孝子	板橋のり子
板橋みい子	板橋洋子	入間川きみ	岩井レイ子	植野美登子
山内昌広	遠藤いな子	遠藤金蔵	遠藤タイ子	遠藤照子
太田兼也	太田とくよ	大友勇	大友フミ子	大沼みさほ
小川良子	小田島智恵子	鬼沢悦子	小沼ちえ子	加賀美要子
加島みえ子	柏倉セツ子	工藤光昭	熊谷久美子	郡山和彦
小林斎美	小林三佳	今野淑子	斎藤とき子	斎藤八代枝
佐久間長子	佐々木光江	佐藤光一	佐藤さつえ	佐藤祥子
佐藤ちよし	佐藤とみ子	佐藤宗男	佐藤衛	佐藤みよ
佐藤善	佐野たみえ	庄司けき子	庄司武夫	白鳥修
須賀栄子	菅井キノエ	菅井君子	菅井きみ子	菅井清子
菅井ちよの	菅井美枝子	菅田みき子	菅田わくり	菅埜和美
菅ノ又三千代	菅谷裕子	鈴木いし	鈴木かつ子	鈴木幸子
鈴木つや子	鈴木景	鈴木よしえ	関谷栄子	高橋たづよ
高橋とみ子	高橋広子	高橋裕美	高橋良子	武田芳子
竹森光子	戸田泰史	永野泰治	西原聡美	蓮沼英子
蓮沼秀子	早川裕子	早坂みつえ	原田由美子	針生昭三
日野かつの	平間由広	藤原ミサ	布田敦	舟山佳代子
星愛子	洞口秋子	本郷孝治	真壁孝行	松浦喜加子
松川有美	松木慎一	松田稔	三浦市子	三浦えみ子
三浦きよの	三浦フミエ	宮嶋都	村上篤	村上令子
村田佳子	森節子	森剛男	守谷恵子	諸沢裕樹
山田貞子	山田千代子	山田やす子	吉田八重子	我妻美代子
渡辺イチ子	渡辺幸子	渡辺久子	渡部麗子	

写　真　図　版



富沢遺跡第36次調査
写真１
７層水田跡（西より）

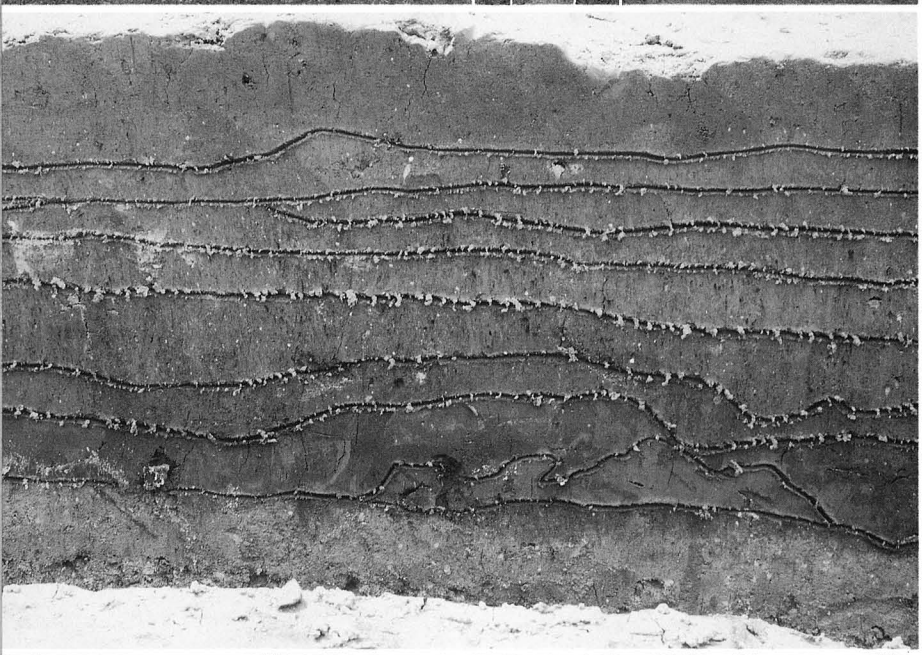


写真２
７層水田跡
畦畔断面（東壁）

富沢遺跡第37次調査
写真３
４ａ層水田跡（畦畔１・２）
（南より）

写真４
４ａ層水田跡
（畦畔３・ＳＤ１）
（北より）

写真５
４ａ層水田跡（畦畔４）
（南より）

富沢遺跡第38次調査
写真６
10ｄ層水田跡
（東より）

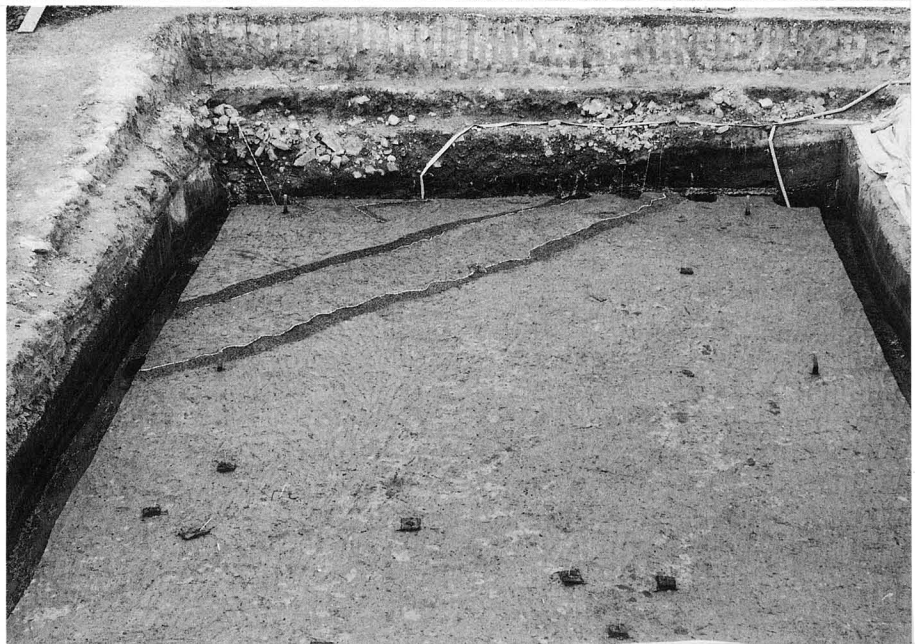


写真 7
大畦畔中の木片出土状況
（西より）

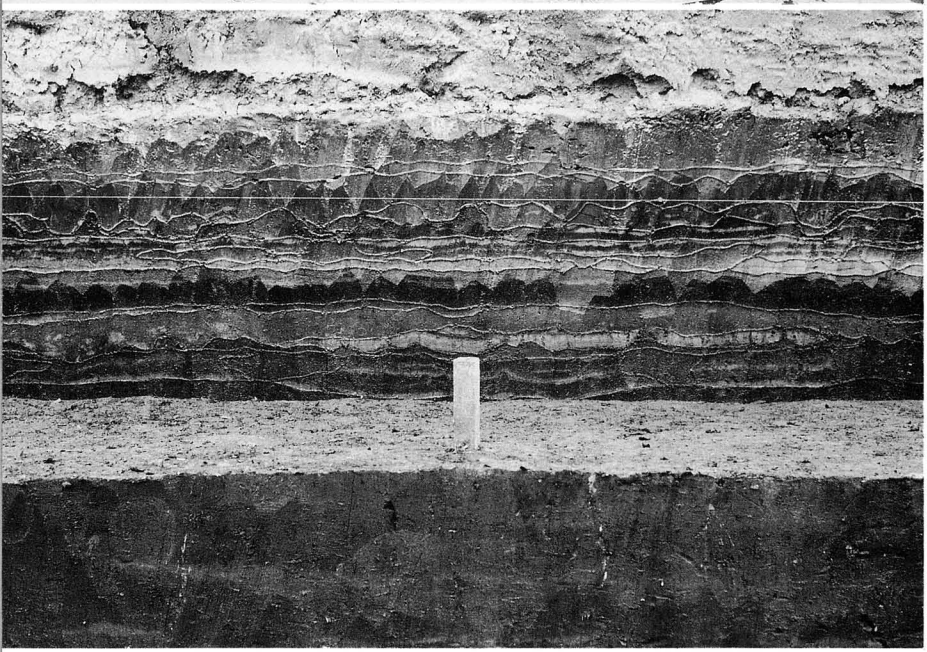


写真 8
10ｄ層水田跡大畦畔断面
（南壁）

写真 9
19ｃ層土器出土状況

富沢遺跡第39次調査
写真10
3 a 層水田跡
（北より）

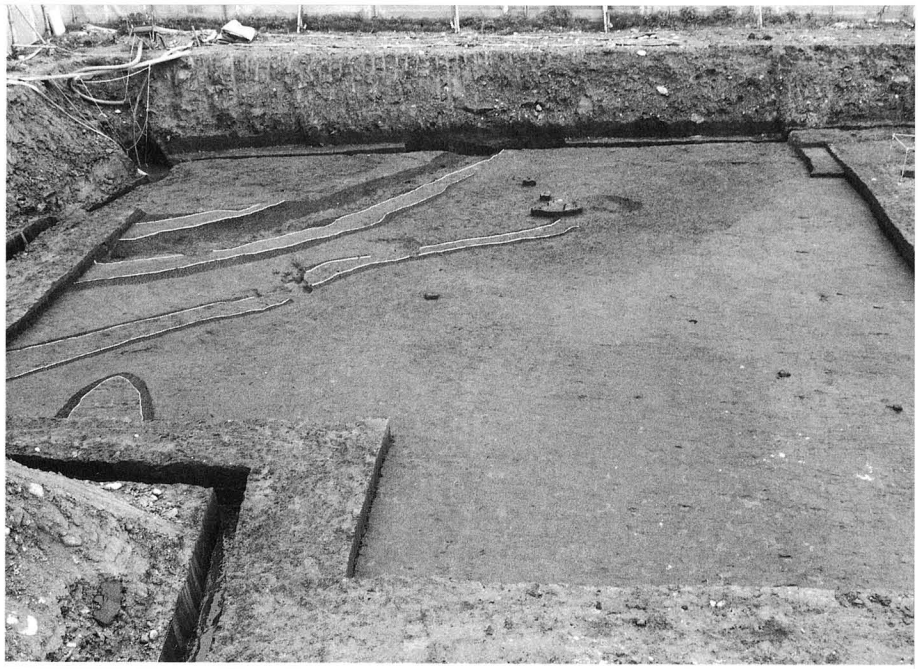
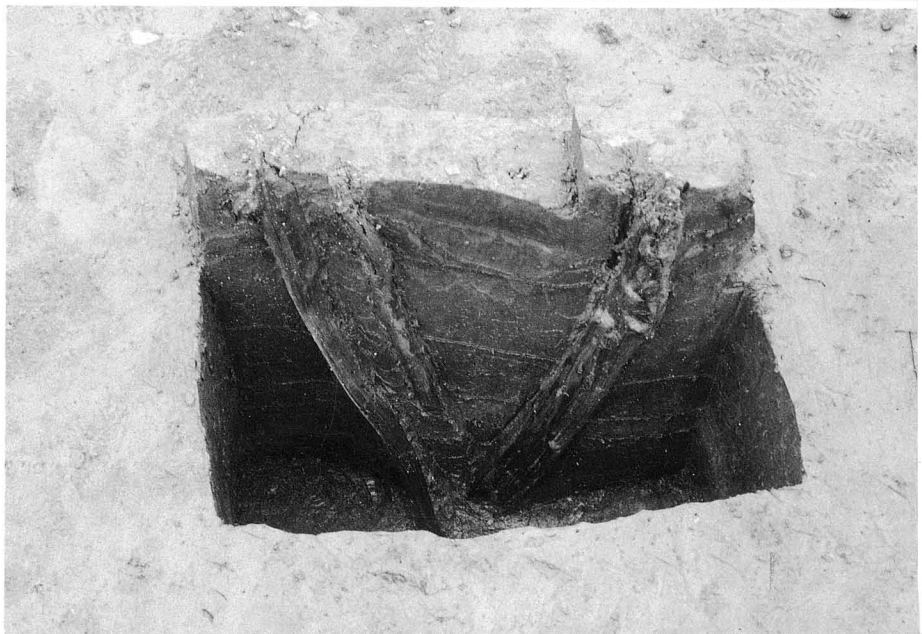


写真11
3 a 層出土杭（No.20）

写真12
3 a 層出土杭（No.13～15）



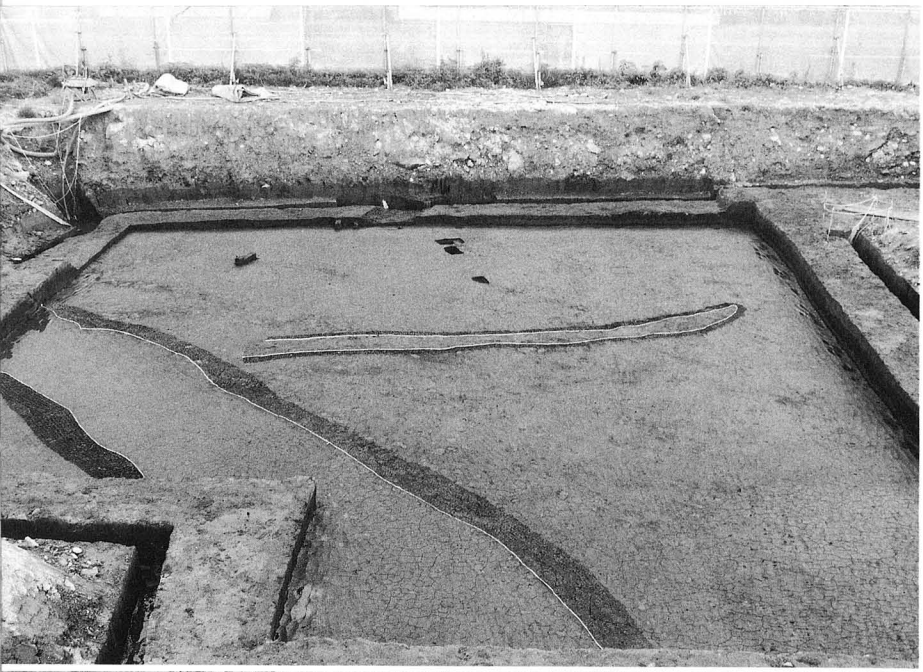


写真13
4 a 層水田跡
（北より）

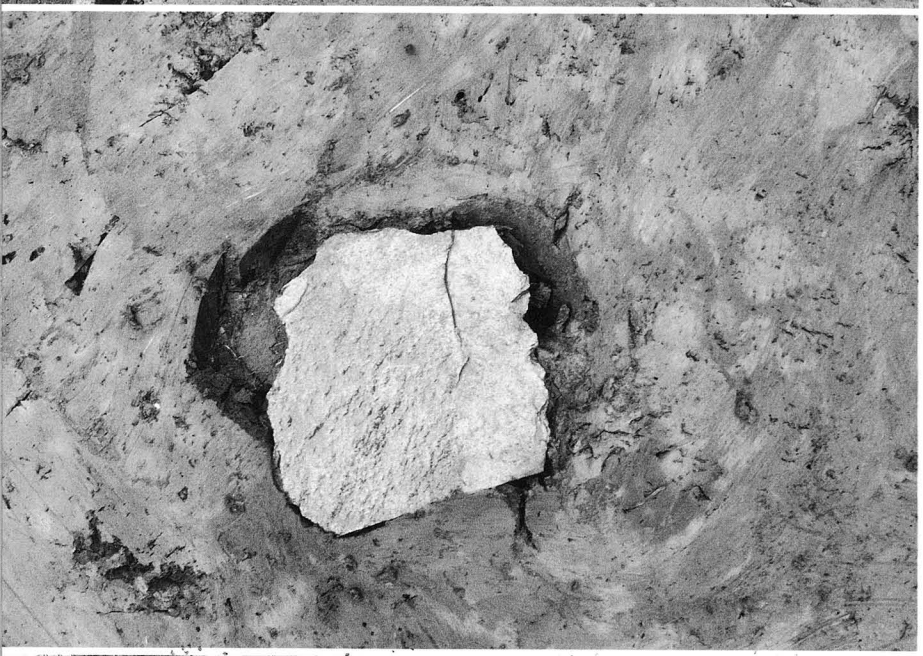


写真14
4 a 層水田跡
石器出土状況

富沢遺跡第40次調査
写真15
4 層上面遺構（ＳＤ１・２）
（東より）

写真16
5層上面遺構（ＳＤ３～５）
（東より）

写真17
6層上面遺構（ＳＤ６～９）
（東より）

富沢遺跡第41次調査
写真18
4層上面遺構（ＳＤ１）
（南より）

富沢遺跡第42次調査
写真19
4層水田跡
（北より）

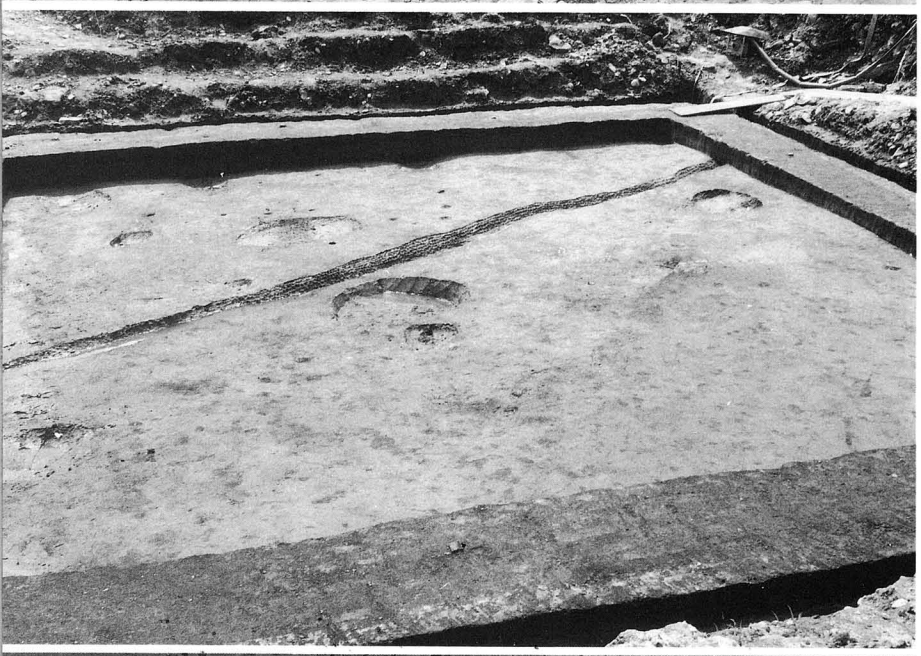


写真20
6ａ層上面遺構
（ＳＤ１・ＳＫ１～７）
（北より）

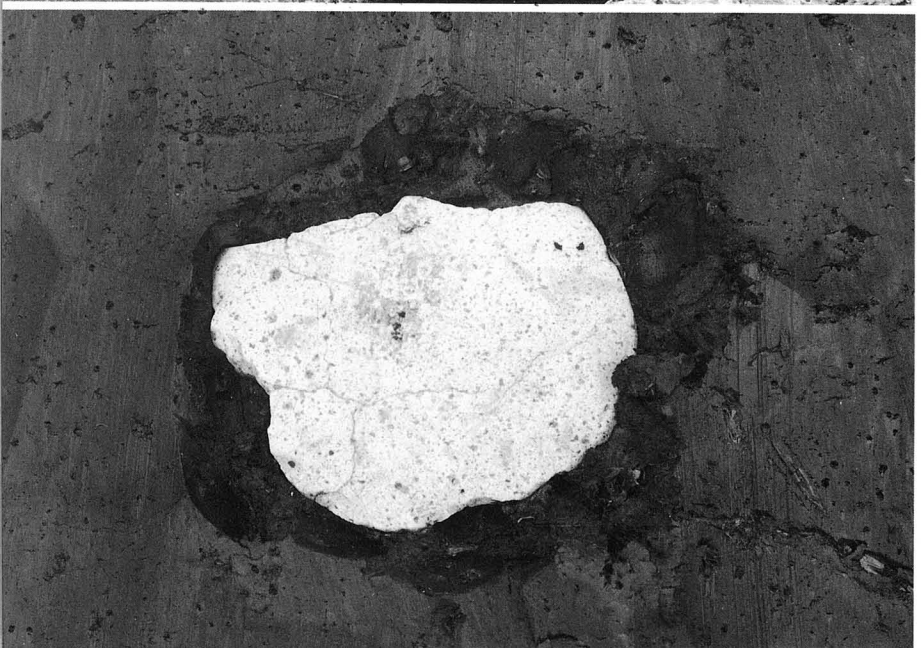
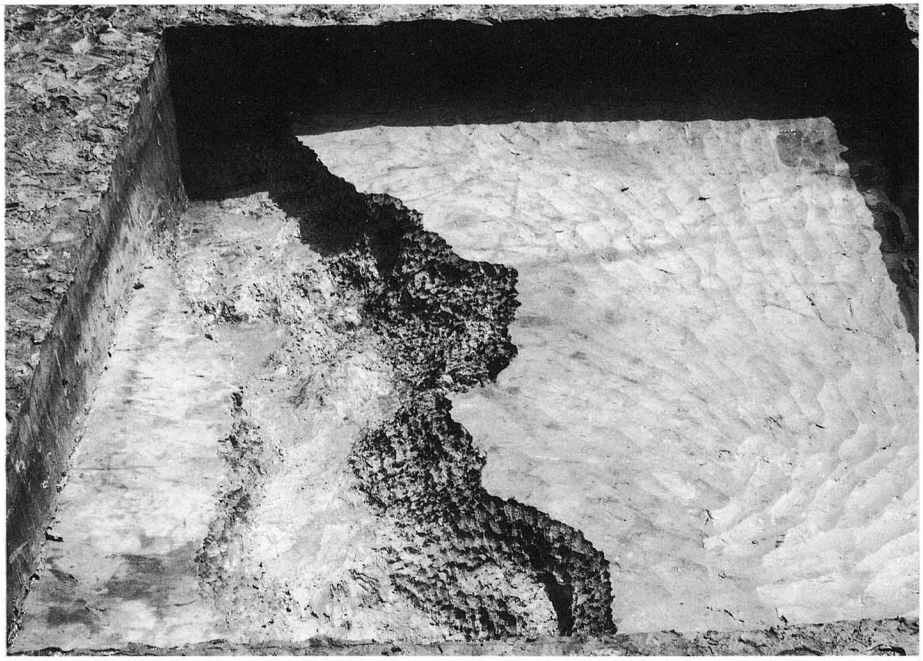


写真21
11層上面石製品出土状況

写真22
12層上面遺構（ＳＤ３）
（西より）



富沢遺跡第43次調査
写真23
19層～22層断面

写真24
22層上面樹木出土状況（1）

写真25
22層上面樹木出土状況（2）
（南より）

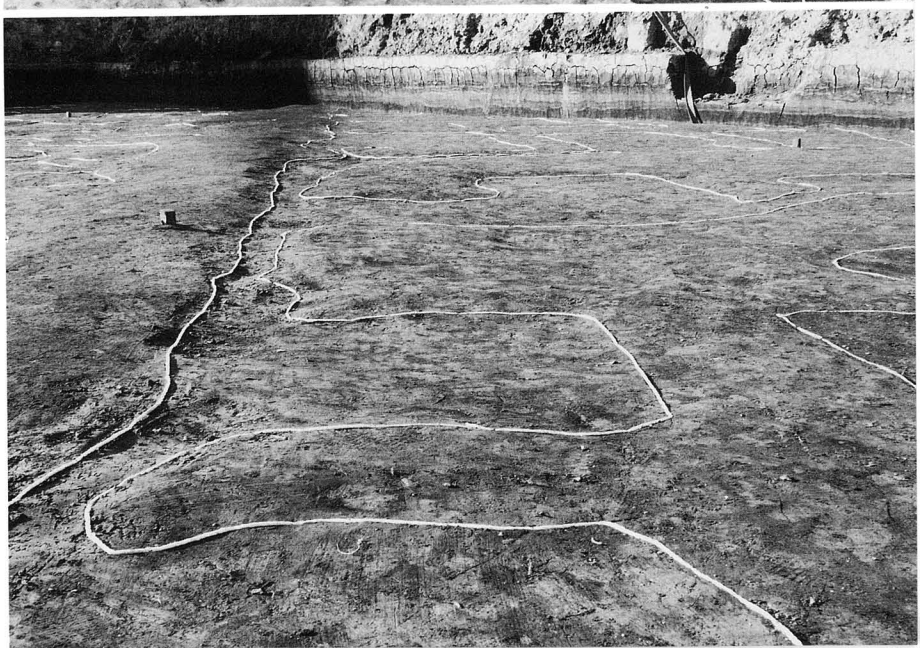
富沢遺跡第44次調査
写真26
6層上面遺構（ＳＫ１）
（北より）

富沢遺跡第46次調査
写真27
10ａ層水田跡（1）
（東より）

写真28
10ｄ層水田跡（2）
（西より）

写真29
10ｄ層水田跡（3）
（北西より）

写真30
10ｄ層水田跡（4）
（南東より）



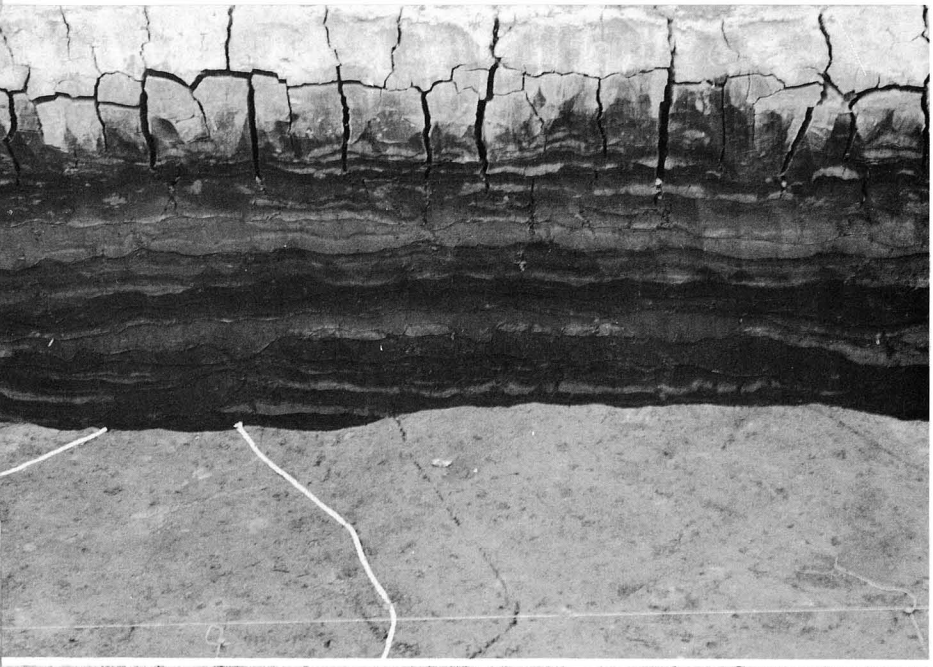


写真31
10ｄ層水田跡
大畦畔断面（北壁）

写真32
10ｄ層水田跡
大畦畔断面（西壁）

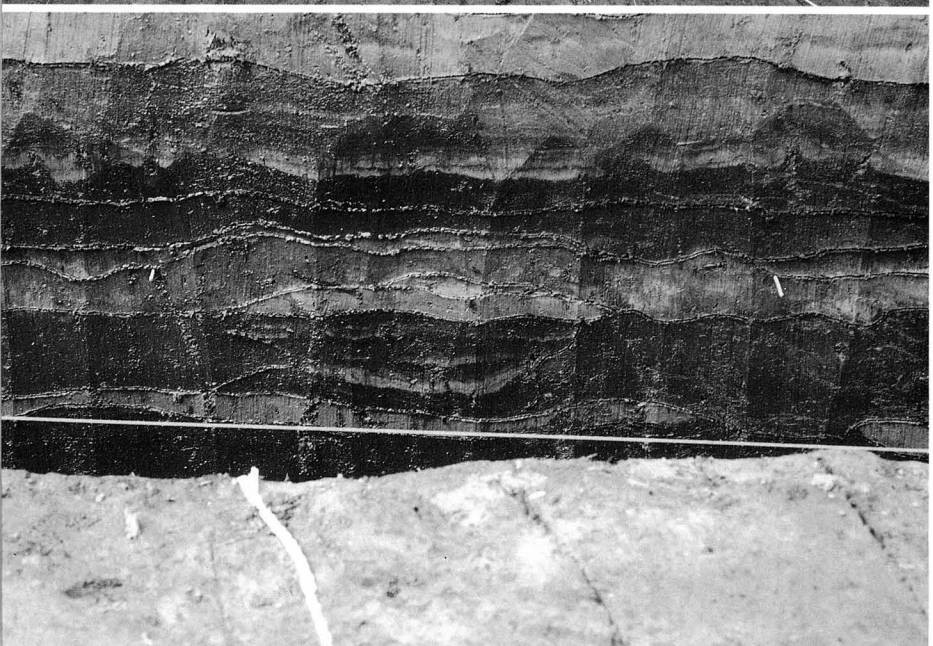


写真33
10ｄ層水田跡
畦畔断面（西壁）

写真34
11ａ層水田跡
（東より）

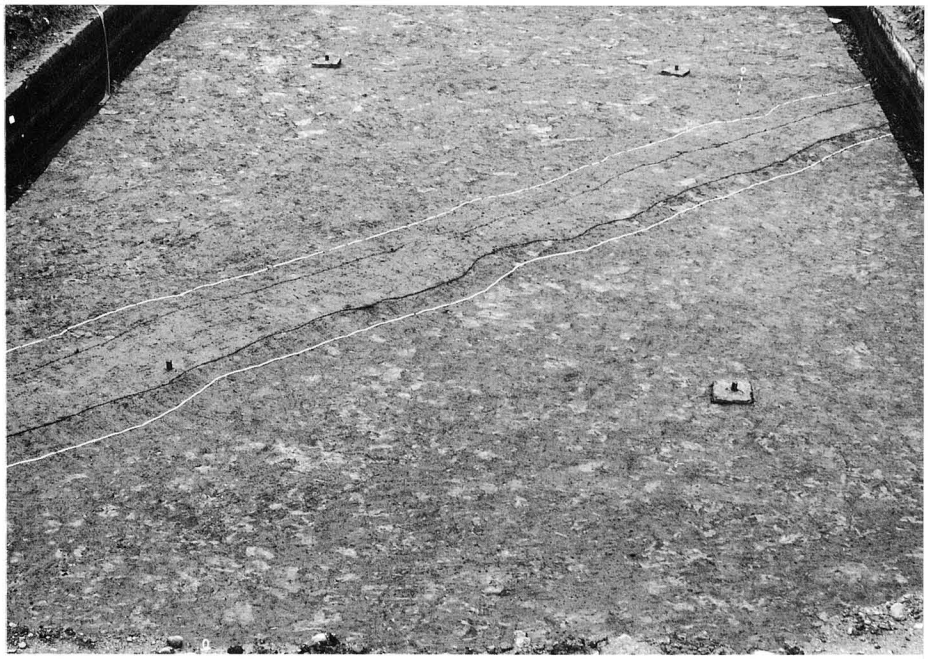
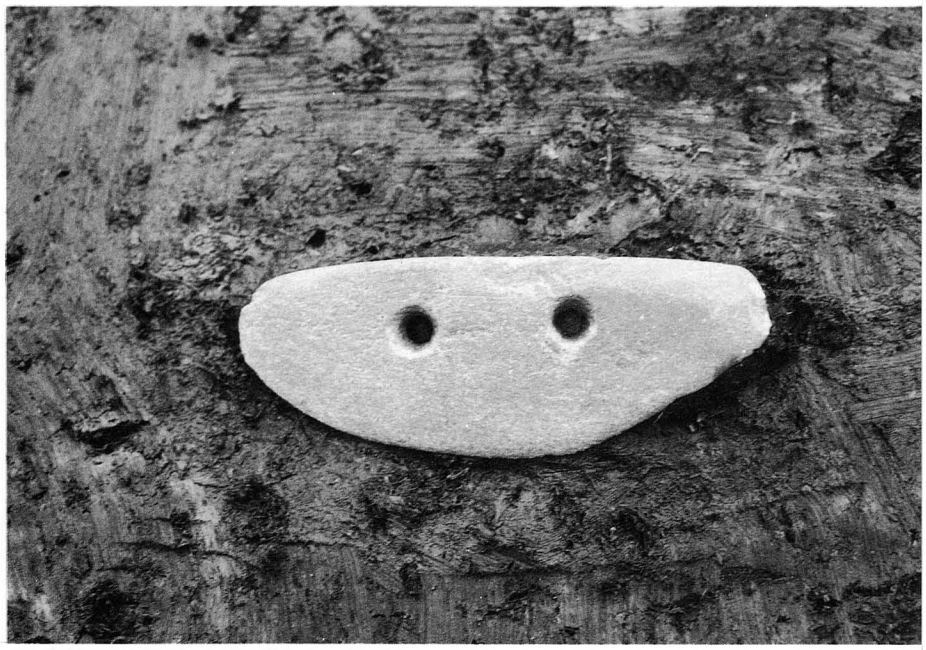


写真35
11ａ層水田跡
石器出土状況



富沢遺跡第47次調査
写真36
４層水田跡
（西より）

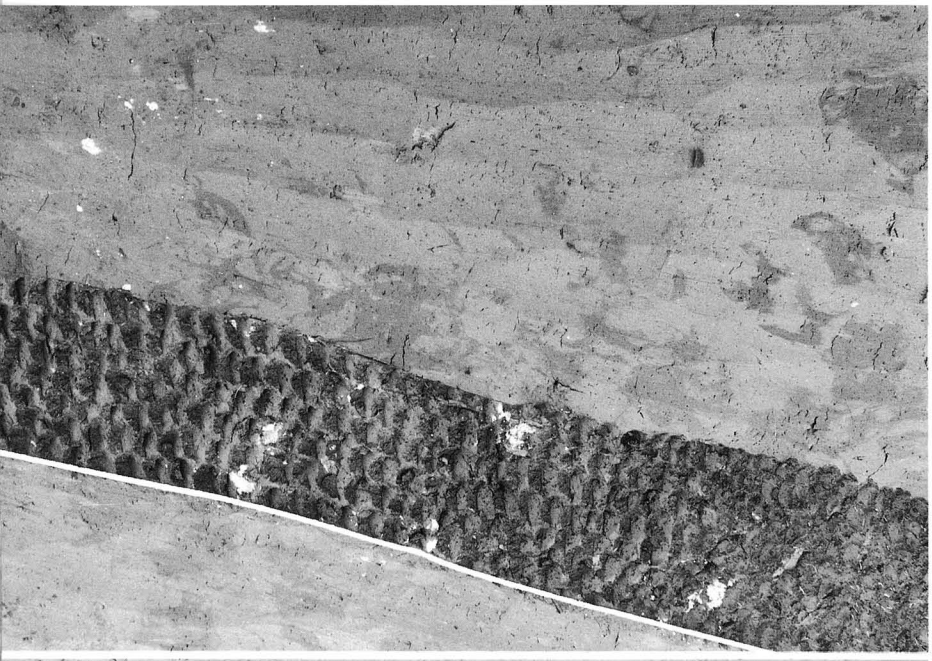
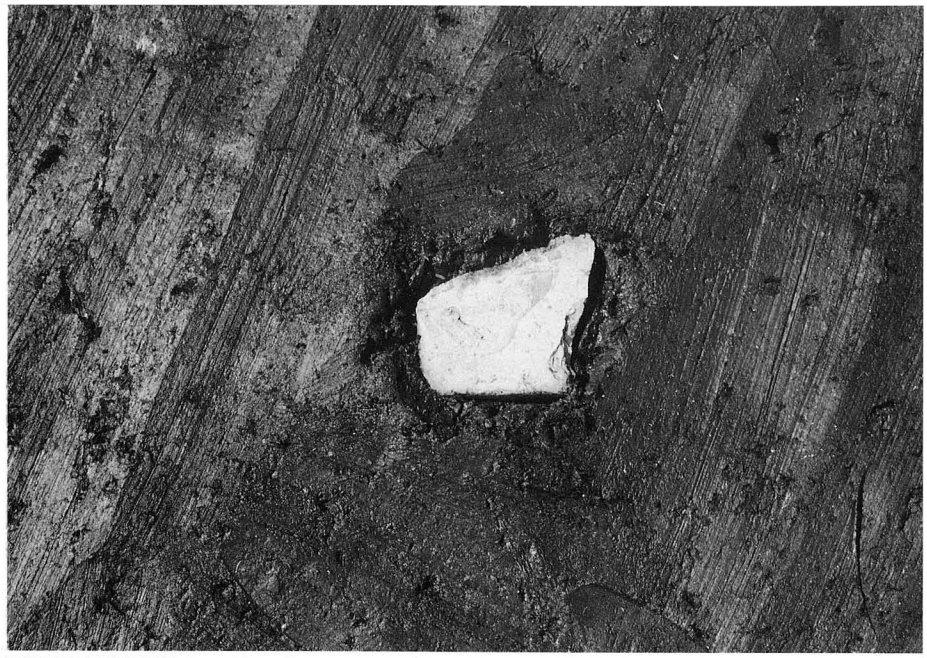


写真37
4層水田跡大畦畔上の
灰白色火山灰検出状況

写真38
4層水田跡土器出土状況

写真39
8層上面遺構（ＳＤ１）
（東より）

写真40
8層石器出土状況



富沢遺跡第48次調査
写真41
8ａ層水田跡擬似畦畔
確認状況（西より）

写真42
11層石器出土状況

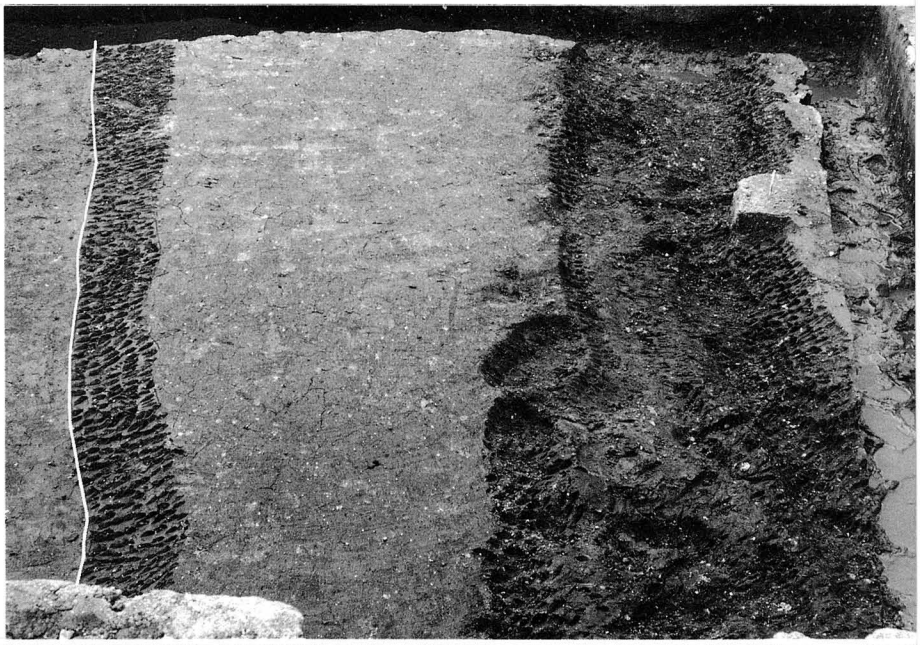
写真43
調査区全景
（南より）

泉崎浦遺跡第４次調査
写真44
ＳＤ１・２断面（東壁）

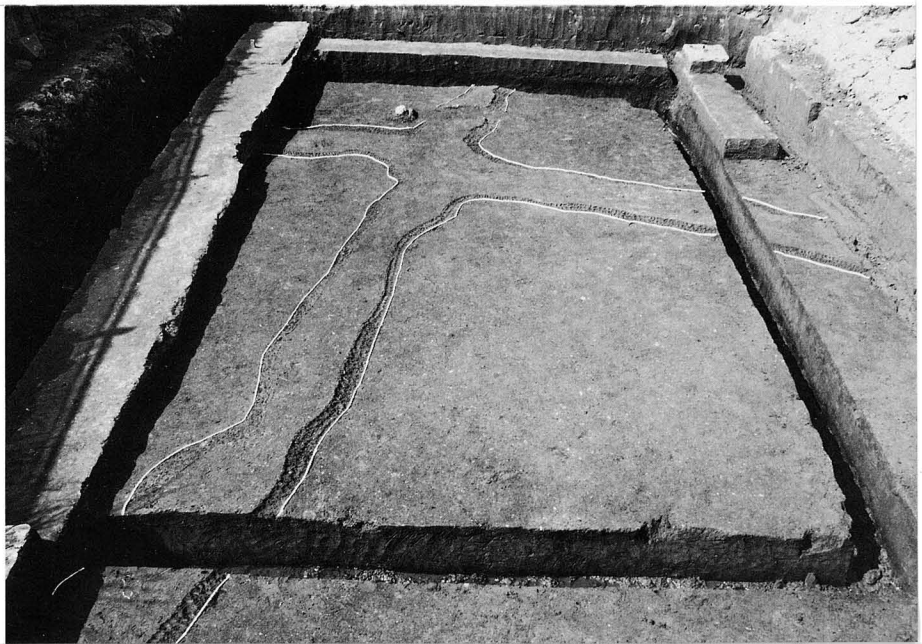
写真45
10層上面遺構（ＳＤ３）
（南東より）

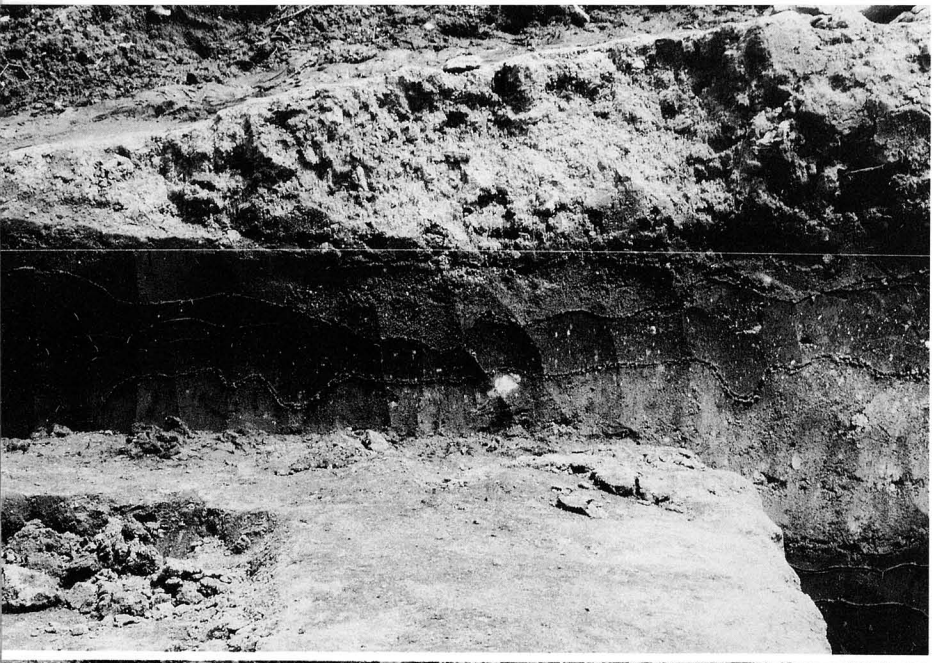
山口遺跡第５次調査
写真46
４ａ層水田跡
畦畔・ＳＤ２確認状況
（東より）

写真47
４ａ層水田跡
畦畔・ＳＤ２検出状況
（東より）



山口遺跡第６次調査
写真48
６層水田跡
（南より）





山口遺跡第７次調査
写真49
ＳＤ２断面（東壁）

山口遺跡第８次調査
写真50
４層水田跡
（南より）

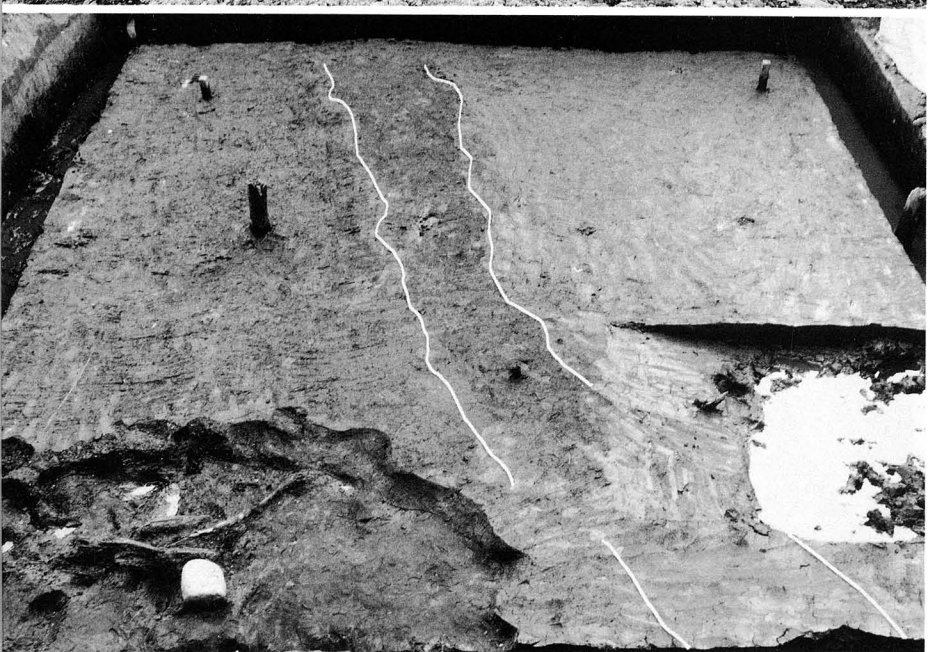


写真51
５層水田跡擬似畦畔
確認状況（東より）

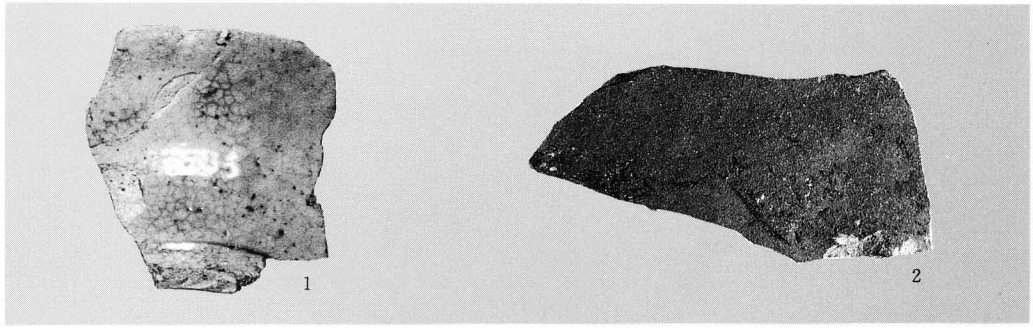


写真52　富沢遺跡第36次調査出土遺物

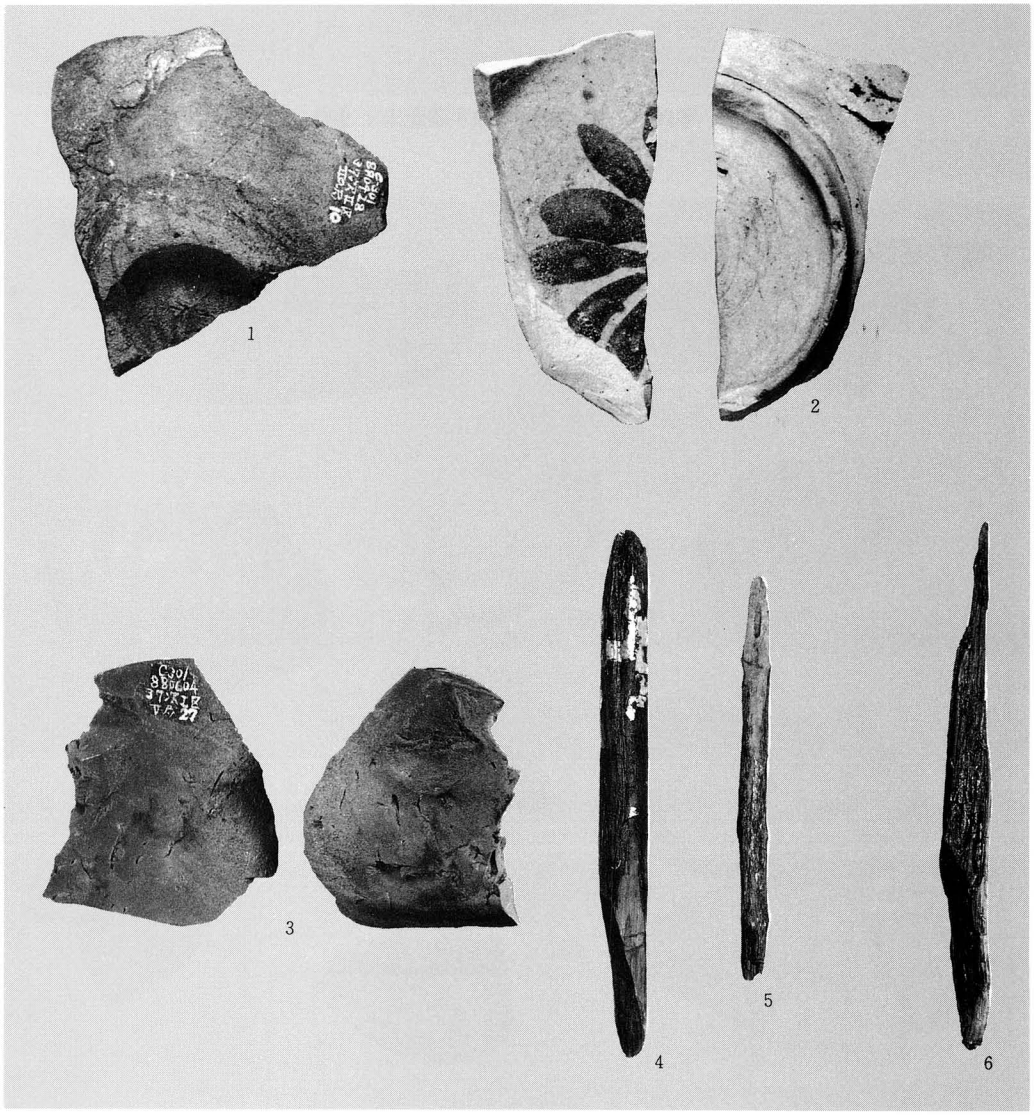


写真53　富沢遺跡第37次調査出土遺物

写真54　富沢遺跡第38次調査出土遺物

写真55　富沢遺跡第39次調査出土遺物（1）

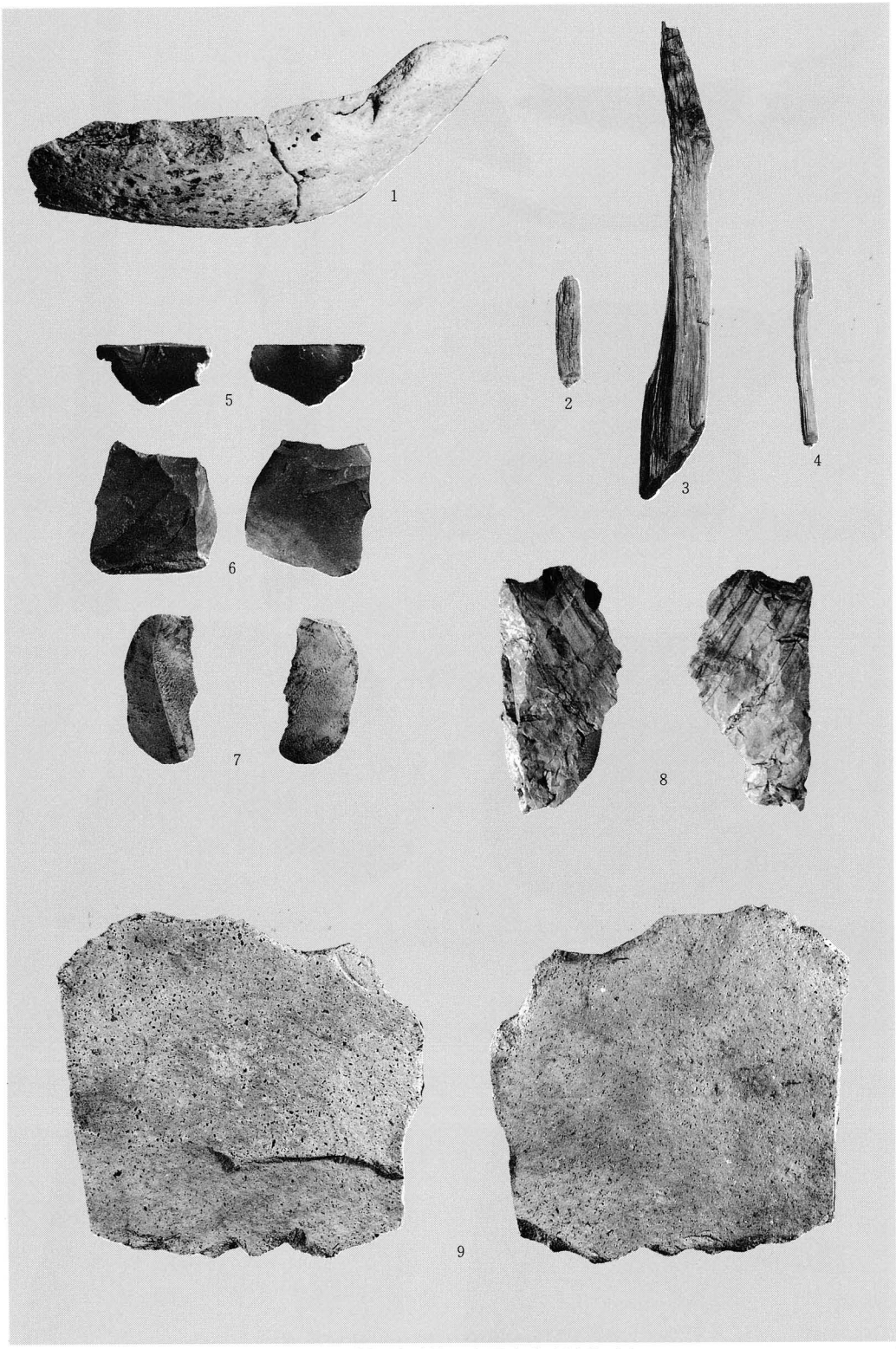


写真56　富沢遺跡第39次調査出土遺物（2）

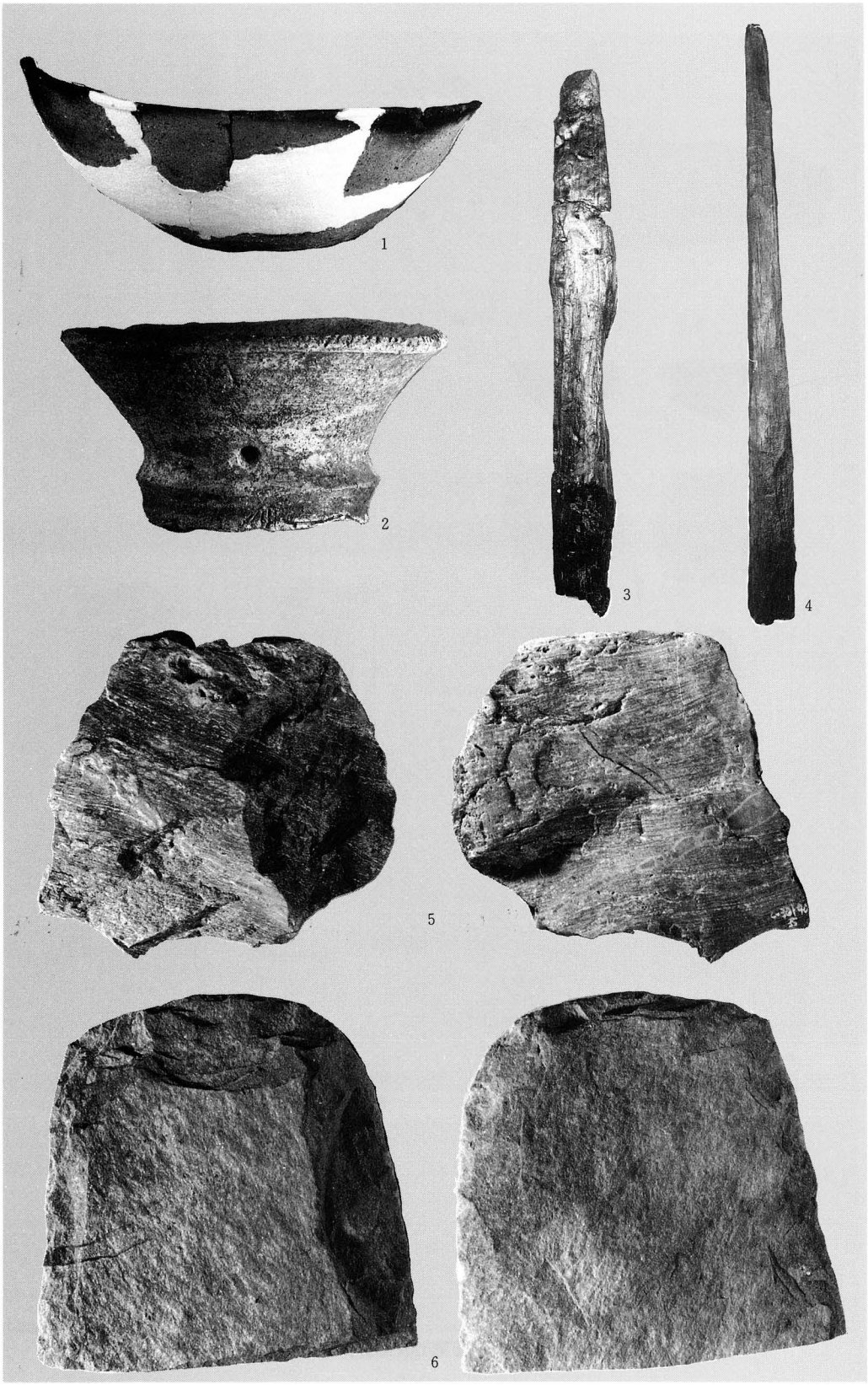


写真57　富沢遺跡第40次調査出土遺物

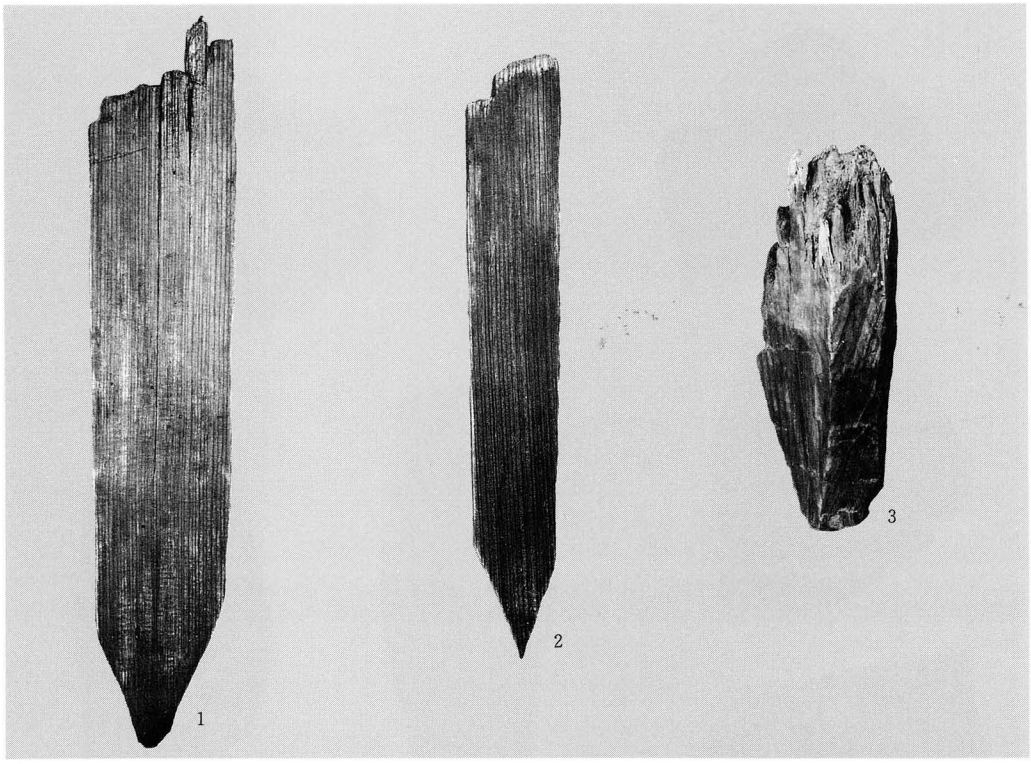


写真58　富沢遺跡第41次調査出土遺物

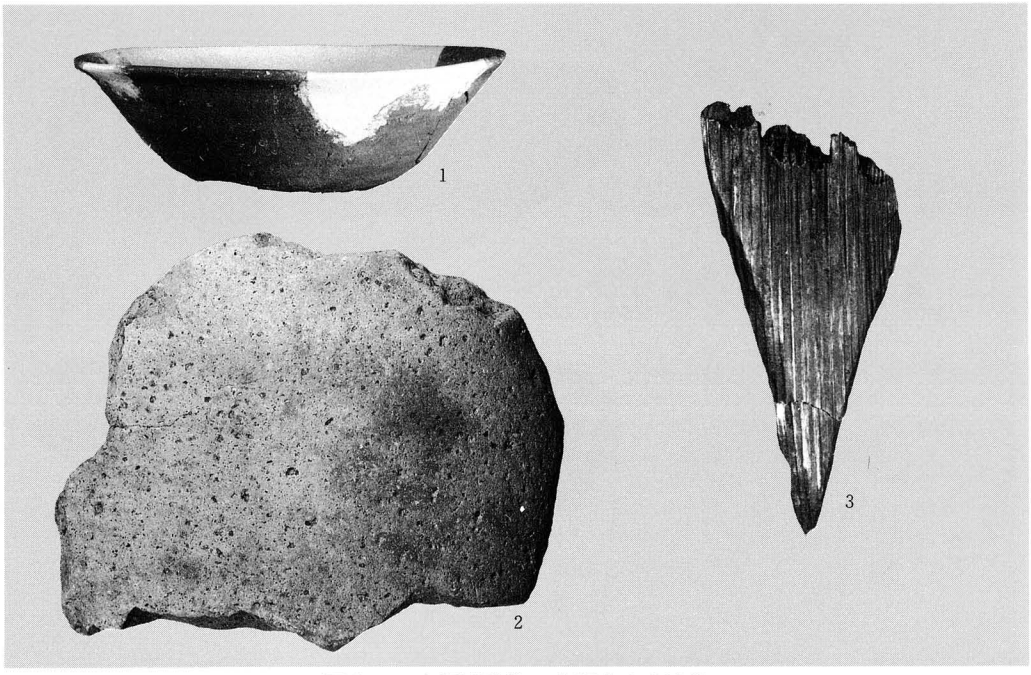


写真59　富沢遺跡第42次調査出土遺物

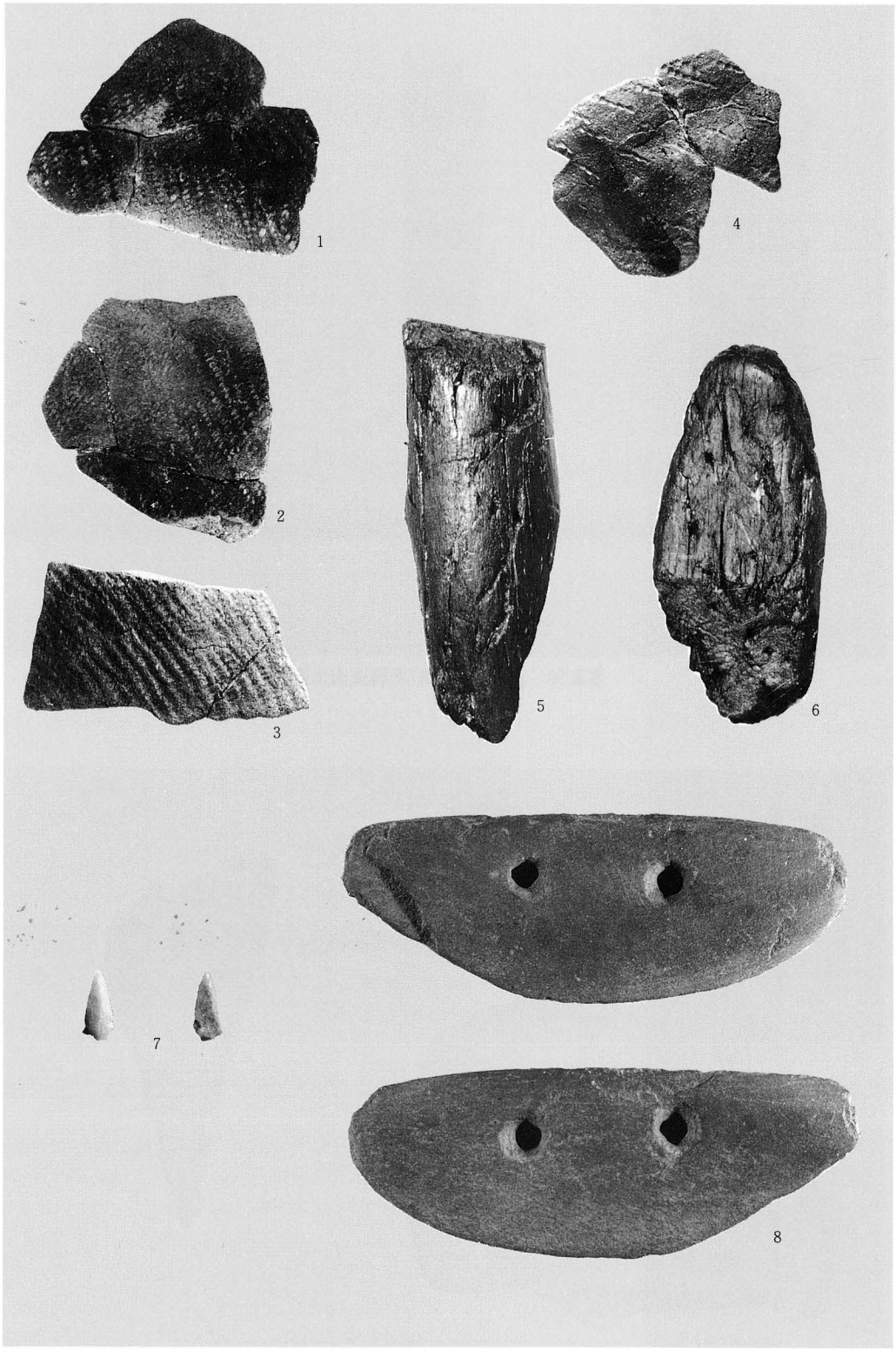


写真60　富沢遺跡第46次調査出土遺物

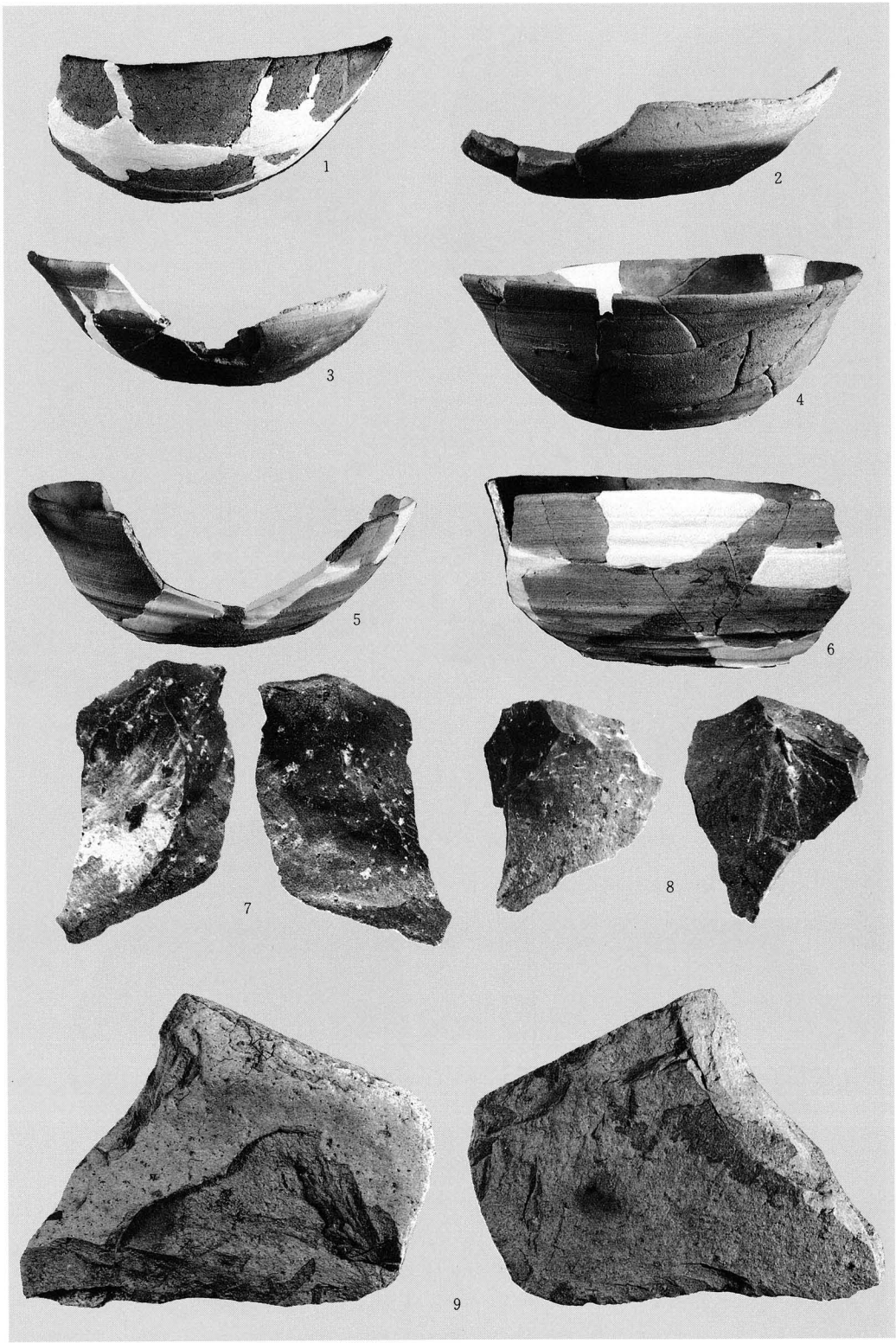


写真61　富沢遺跡第47次調査出土遺物

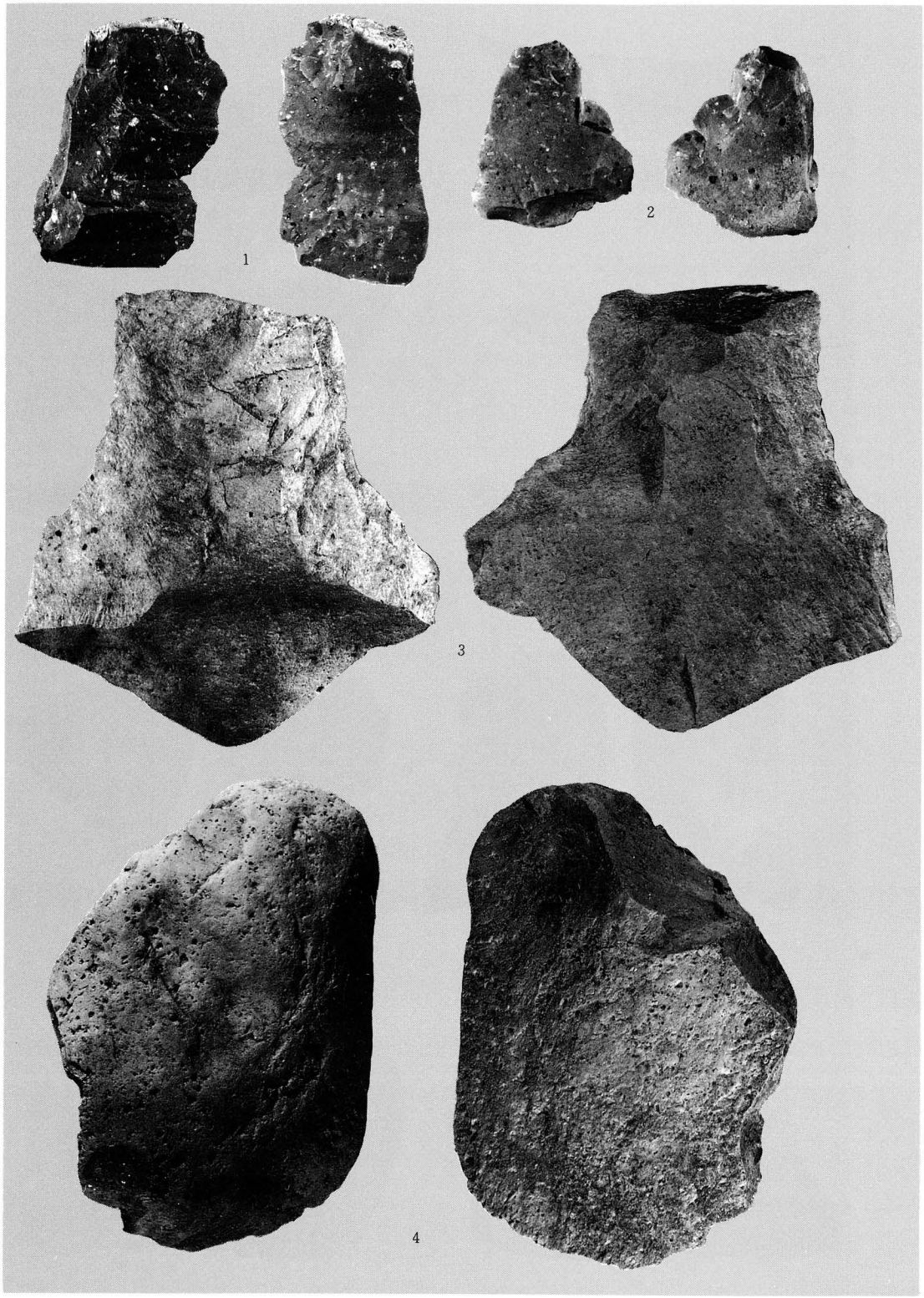


写真62　富沢遺跡第48次調査出土遺物（1）

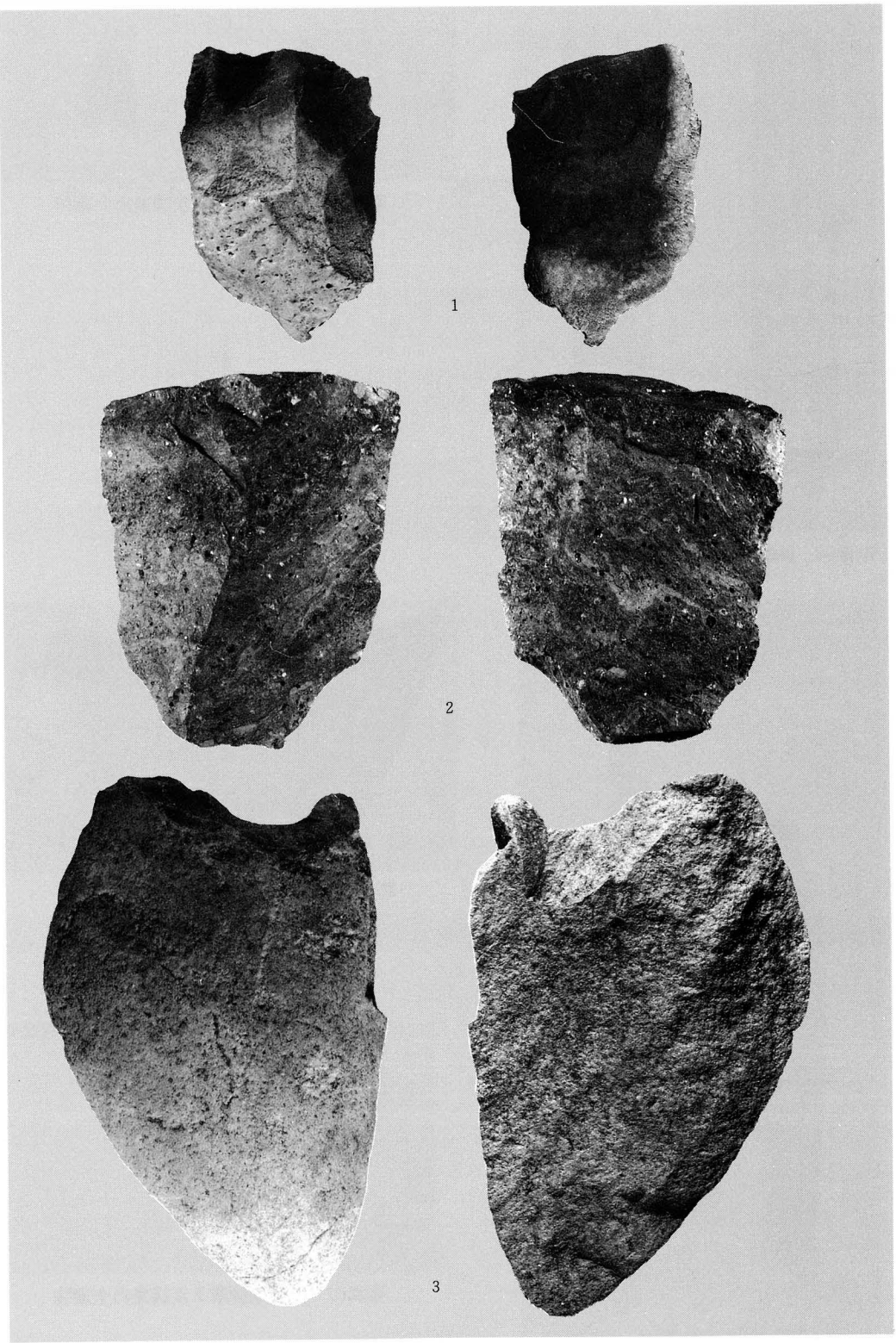


写真63　富沢遺跡第48次調査出土遺物（2）

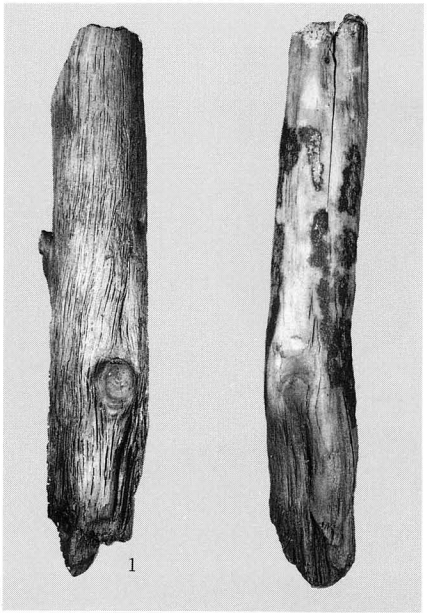


写真64　泉崎浦遺跡第 4 次調査出土遺物

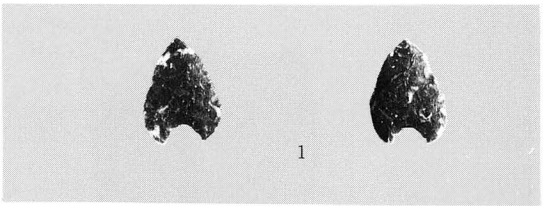


写真65　山口遺跡第 5 次調査出土遺物

写真66　山口遺跡第 6 次調査出土遺物

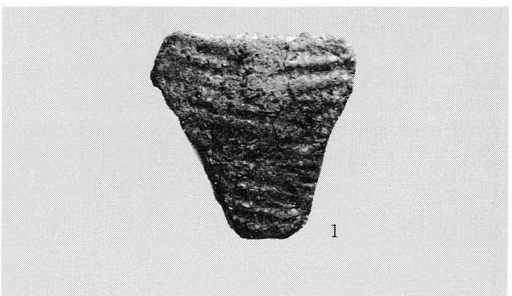


写真67　山口遺跡第 7 次調査出土遺物

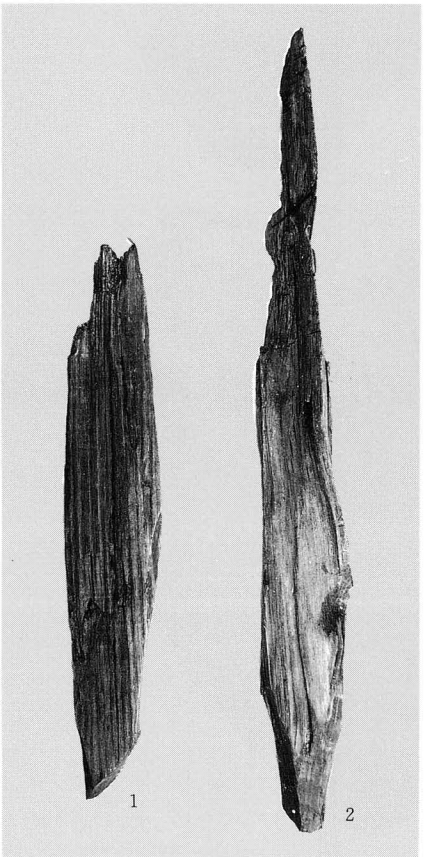
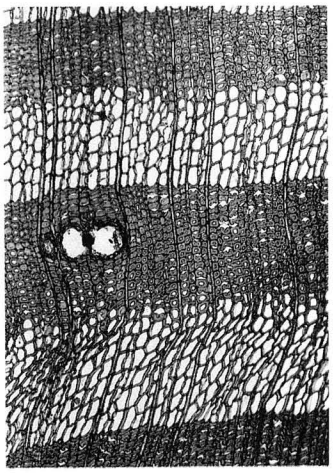
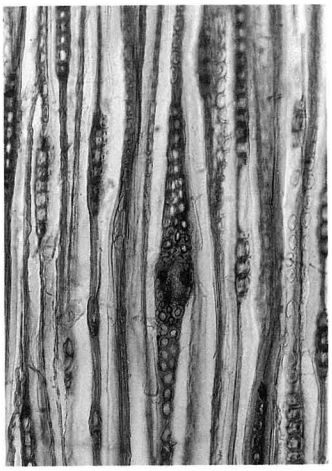
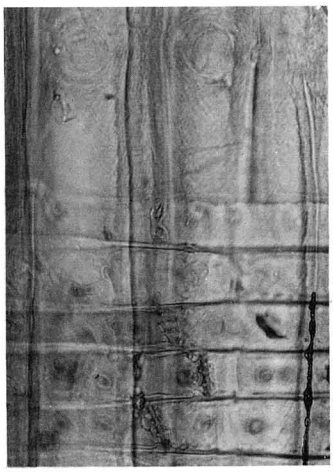
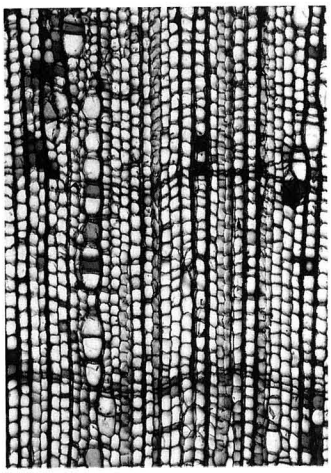
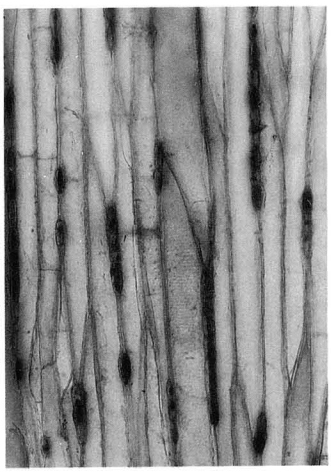
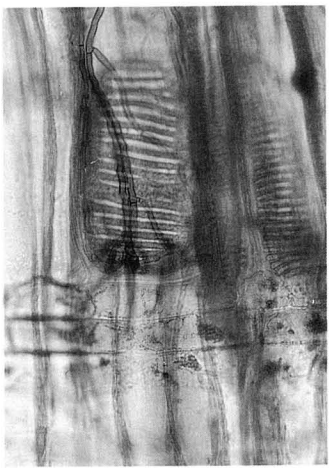


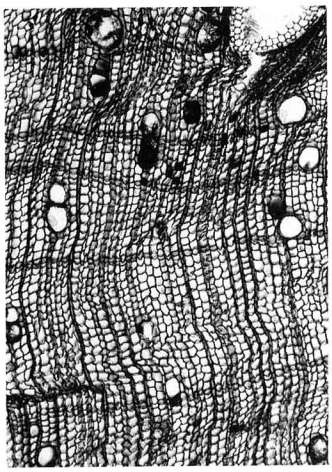
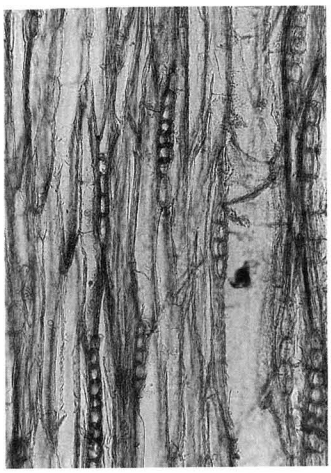
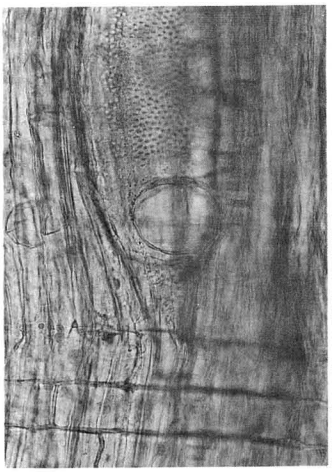
写真68　山口遺跡第 8 次調査出土遺物

1 a.カラマツ属　（MYG—94）横断面×40.　1 b.同 接線断面×100.　1 c.同 放射断面×400.

2 a.ハンノキ節　根材(MYG—85) 横断面×40.　2 b.同 接線断面×100.　2 c.同 放射断面×200.

3 a.トネリコ属　根材(MYG—93) 横断面×40.　3 b.同 接線断面×100.　3 c.同 放射断面×200.

写真69　富沢遺跡第43次調査出土樹木顕微鏡写真

仙台市文化財調査報告書第128集
富沢・泉崎浦・山口遺跡
――富沢遺跡第36～48次・泉崎浦遺跡第４次・
山口遺跡第５～８次発掘調査報告書――
１９８９年３月
発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町３－７－１
仙台市教育委員会文化財課

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24―24 電話(263)1166